女子文壇

第二巻第九號

明治三十九年七月一日發行(毎月一回)
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



百合花



重松せい子女史筆

每號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二巻第九號目次

第二十一回年度報告

○貸借對照表

借方

負債に屬する分

一株金	一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一諸積立金	二二三、一六八・二〇〇
一預金及保信金	二六、四八六・五八六
一支拂手形及未拂金	一、〇六八、〇三六・二七九
一非常特別税金	一一二、五一七・二一〇
一前季繰越金	二四、五四三・八三三
一當半季利益金	一七七、二五七・〇一七
合計	二、六三二、〇〇九・一二五

貸方

資産に屬する分

一不動産、器械及什器	一、二一九、四二七・五三三
一石炭需用品及備品在高	四一、〇九四・五六四
一原料、仕掛物及屑物在高	六六一、四八七・六一八
一製品及製品送荷在高	五七、八七九・六九〇
一約定濟製品在高	二九七、〇七四・九八〇
一得意先、未收入金及假拂金	二九六、三九二・七七〇
一職工貸金	八、二九九・六五〇
一銀行當座預金及現金	五〇、三五二・三二〇
合計	二、六三二、〇〇九・一二五

○利益金處分

一金十七萬七千二百五十七圓〇一錢七厘　當半季利益金
一金二萬四千五百四十三圓八十三錢三厘　前季繰越利益金
計金二十萬一千八百圓八十五錢也
內
金五萬圓也　器械及建物代償却
金一萬圓也　法定準備金
金一萬圓也　役員賞與金
金六萬圓也（一株に付金三圓即年一割二分）　株主配當金
金五萬圓也（一株に付金二圓五十錢即年一割）　株主特別配當金
金二萬一千八百圓八十五錢也　次季へ繰越金

右之通り候也

明治三十九年六月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛
專務取締役　端善次郎
取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助
監査役　人見新助
監査役　金子良吉

女子文壇の廣告によりて御注文の節は其旨御書添を乞ふ

村井弦齋夫婦大に助力せらる

本號 忽三版

婦人世界

實用專一

六月三日發行 毎月一回 第六號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共九拾錢 一年分一圓七拾五錢

口繪

◎伏見若宮妃殿下最近尊影◎
◎ナポレオンの家庭(珍品)◎
◎愛國婦人會第五回總會光景◎
◎名流最近の新婚寫眞(三組)◎
◎名媛の筆跡◎滿洲の美人◎

彩色石版

徒然(つれづれ)……中澤弘光
庭の若葉 川面義雄

繪手本

紫陽花… 跡見花蹊
春日の神鹿 中澤弘光

婦人の日常生活法 村井弦齋

▲容色は如何に整ふべきか
▲髪の油は何を用ふべきか
▲髪は如何に洗ふべきか
▲白粉は如何に用ふべきか
▲顔は如何に剃るべきか
▲心は如何に洗ふべきか
▲朝飯は如何に支度すべきか
▲菓子は如何に用ふべきか
▲朝の飲料は何を用ふべきか
▲髪は如何に梳るべきか
▲櫛は如何に用ふべきか
▲フケは如何に取るべきか
▲白粉は何を用ふべきか
▲婦人の美は如何に保つべきか
▲朝飯前は如何に過すべきか
▲朝飯には何が宜きか
▲何の食物が皮膚の色を白くするか
▲牛乳は如何に飲むべきか

右は村井弦齋氏が全國婦人の為に心血を灑いで起草されたる實用的大文字

◎娘の結婚に就き母親の心得
◎田尻博士の家庭◎嫁入道具
◎家庭用器具の新形 理學博士 鶴田賢次
◎寡婦の鑑 小川房子刀自
◎小兒の病氣を知る法 ドクトル 加藤照麿
◎弦齋夫人苺料理談 天麩羅 葛煮 ケーキ菓子
◎婦人と指輪◎蚊と衛生…
◎子宮内膜炎の話 伊庭醫學士
◎苺の話 恩田農學士◎豆腐の話 牧農學士◎女子と躰育 井口あぐり◎襁褓乾燥器◎小説◎流行の夏衣◎讀者文藝

發兌元 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社(電話新橋八七四番) 各地賣捌書店

(甲の三)

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

東京春陽堂新刊廣告

幸田露伴氏著
天うつ浪 第貳
鰭崎英朋氏畫 ● 實價八十錢 郵税金八錢 郵券代用一割増

我文壇の大作たる「天うつ浪」の第二は出でたり、心機の妙人情の微、奇趣横佚せる、巻を重ねて重に汪洋海の如し（美裝三百頁）

天うつ浪第一 實價七十五錢 郵税八錢

●秘密小説●
雪蕾氏譯
かくれ簑
村上天流氏畫前編實價四十五錢 ● 郵税金六錢 郵券代用一割増

●革命的趣味を有する人は讀むべし
▲星と菫に醉ふ人は讀むべからず
●義氣を養はんとする人は讀むべし
▲肝ッ玉の小さき人は讀むべからず
●俠骨を磨かんとする人は讀むべし
▲腦味噌の乏しき人は讀むべからず

廣津柳浪氏著
校訂 河内屋
英朋氏畫松洲氏裝 ● 實價四十錢郵税四錢 郵券代用一割増

妖艶の色更に富麗にして玉姿の清癯愈よ慘なり、柳浪氏の河内屋は明治文學の珍品也、玆に新裝特に意を凝らし綠陰樹下の清讀を待つ

森鷗外氏著
改訂 水沫集
● 洋裝美本大冊 ● 實價一圓五十錢小包十五錢 郵券代用一割増

鷗外博士の「水沫集」は品切の爲め久しく高需に背きたりしが今回特に同氏が通閲を乞ひ改訂をも加へられたり本書の發行は大方讀者の渇望を醫すべきを疑はず

日本橋區

春陽堂發兌

（振替貯金口座壹六壹七番）



上州赤城山小沼の景　（三宅克己先生筆）

大日本女學會

●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に戴き鍋島侯爵夫人會長として會務を統監す●小學卒業後進んで高等女學校に入學し難き事情ある女子達は本會の通信教授に依て家庭に居ながら必須の學科を修められよ●本會發行の講義録は高等女學校の科目よりも一層多數の諸學科を網羅し第一流の名家を擇びて講義を囑托せるものなり●本會は高等簡易の兩科を設け女子素養の程度に應ぜしむ月謝は高等科四拾錢簡易科二十錢とす目下入會に都合よし會則は葉書か電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事敎育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌なて
して

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○習字（坂正臣）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下入會の好時機

東京市麹町區下二番町三七　大日本女學會　電話番町一三三〇

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

新刊 **裁縫手藝科用書** 發賣

讀みて 習へよ

小學校高等女學校 實業補習學校 裁縫科補習教科書

及家庭婦女の嗜好に適應す

（東京女子手藝教育會編）

袋物手藝教科書

附圖切形

本書は袋物の秘傳を公にしたるものにして其敎材の如きは勉めて初學者の學び易きものを撰びたり。元來裁縫に堪能なる素人の此技を能くするあるも秘訣に依らざるを以て遂に素人拔けせざるは當に然るべき所なり若し夫れ此缺を補ふは只此書に據るのみ。學校に於ける裁縫科或は手工科の敎職にあるものは勿論生徒又素人と雖も一本を座右に供へば大いに得る所あるべし

全壹冊 定價金四十錢
二十七種 袋入定價金三十錢
送料不要 郵券壹割増

高等女學校用 造花手藝教科書

附圖切形

本書は在來の造花法の複雜を避け極めて簡單に如何なる花にても造り得る方法を說きたる書にして卷首には美麗なる着色畫を挿み造花圖案を添へ又染色圖見本幷に器具圖を入れ其造り方染方組立方は最も平易に說明したれば何人にも了解し得らるべし又附圖には花の瓣葉蕚等の切形を最も正しき風致ある形を得る樣におしたるを以て素人と雖も容易く製作し得らる又應用として花簪製作法室內裝飾法を記述せり而して其程度は高等女學校手藝敎科に適應し凡そ一ヶ月間に結了の目的とせり家庭に於いて夫人淑女方の粧飾娛樂に供せば實益と興味とを併せ得られんことを疑はず

全壹冊 定價金五十錢
二十葉一組 定價金貳拾五錢
送料不要 郵券壹割増

賣捌所 全國書店

發行所 東京市通旅籠町十一番地 學海指針社 電話一四三

市內賣捌所 神田東京堂 赤阪赤心社

三宅克己先生筆

水彩寫生畫帖

第壹輯（夏の富士・冬の夕暮）正價金貳拾錢 郵稅金四錢
第貳輯（甲州川口の湖・郊外）正價金貳拾貳錢 郵稅金四錢
第參輯（國府津附近の秋・江の島）正價金貳拾貳錢 郵稅金四錢

春の若湖に夢のごとく浮び出たる江の島、夏雲に裾まどはせて、若紫に匂ふあえかなる富士の立姿、龍田姫がみけしの裾にとや、錦かざれる國府津の秋の小田、あるは雪降り止みし夕空瑠璃の如くすみ渡れる郊外のいさゝ小川なんどのうるはしき自然の姿は名だゝる先生の御筆に入りて始めて靈あるものとなりぬ。いひがたき筆の韻と、たとしへなき其の氣品とは人をしてすゞろ幽緲の境地に誘はずんば止まざらんとす。餘す所はたゞ賢明なる諸兄姉の淸鑒に俟つのみ。

發行所 東京本郷區湯島切通坂町三十九 櫻井香雲堂

特約發賣所

東京神田區表神保町 東京堂
東京日本橋通三丁目 金櫻堂
東京神田錦町二丁目 勉強堂
東京本郷區本富士町 日本堂
東京淺草區三好町 大川屋
東京本郷弓町二丁目 文錦堂
東京本郷區妻戀町 便利堂
東京本郷四丁目 靑年堂

東宮侍講 本居豐頴先生閱
文學士 大町桂月先生序
國文學專攷 小森松風君編纂
（全一冊中判美本 正價金四十五錢 郵稅四錢）

古今名家 短文軌範

新刊出來

短文軌範（記事▲紀行文▲說話▲詞辭▲評論▲圖讃▲序▲消息文▲春▲夏▲秋▲冬▲天象▲地儀▲人事▲敎訓▲言行▲動物▲植物▲雜文）

類語篇

〔春の部〕新年 梅附鶯 春景 楊柳 櫻 春 曙 春夜 春雨 春色 春雜
〔夏の部〕初夏 時鳥 夏景 五月雨 螢 夏 雜
〔秋の部〕初秋 秋曉 秋夕 月 蟲 秋草 紅葉 秋景 秋感 暮秋 秋雜
〔冬の部〕初冬 冬夜 冬景 雪 冬雜
〔雜の部〕眺望 山水 海濱 社寺 園地 旅 行 別離 悲哀 戀愛 旅情 敎訓 盛衰 治亂 美人

附錄（日光山離宮三十勝記（漢文）（和文）三島 本居豐 小森松風 合、沒 東京名所記……本居若水 ○短文一束……小森松風）

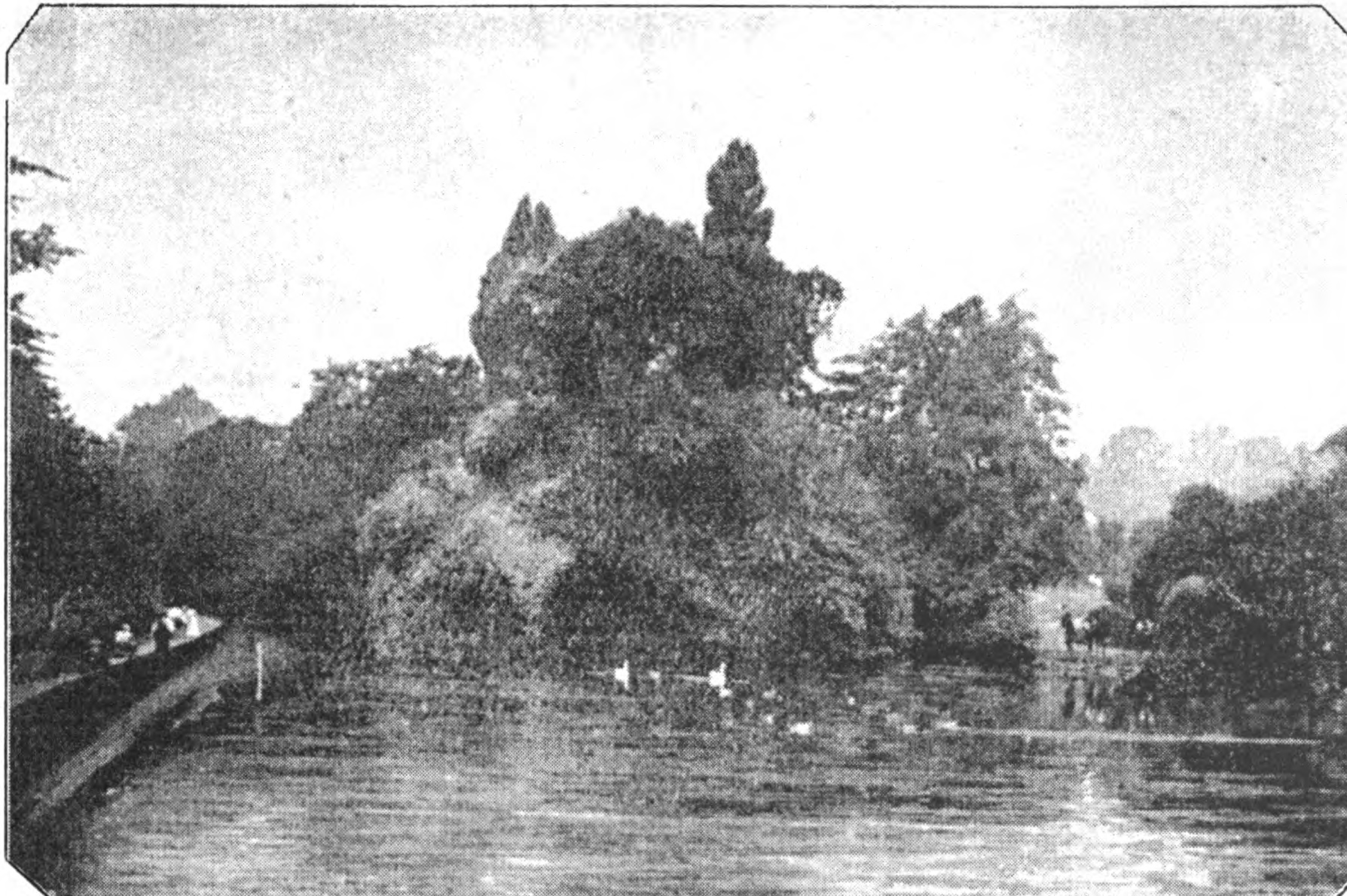
大町桂月君序文
長谷川天溪君閱
立野天風君編

改訂四版

立志訓

洋裝美本 正價二拾錢 郵稅二錢

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目二十三番地 文光堂



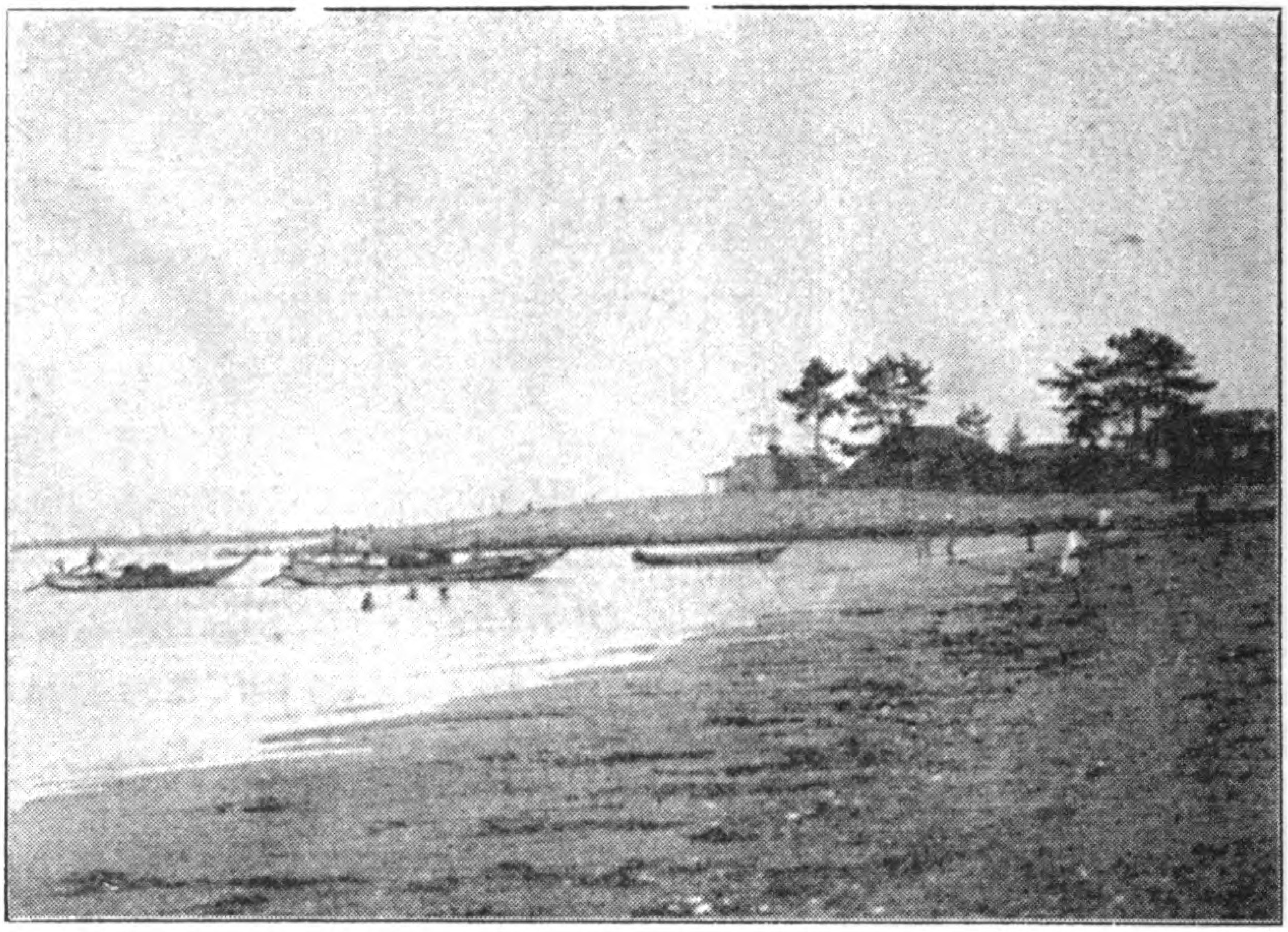
英國ノツチンガハムの植物園



（所在本郷區龍岡町）

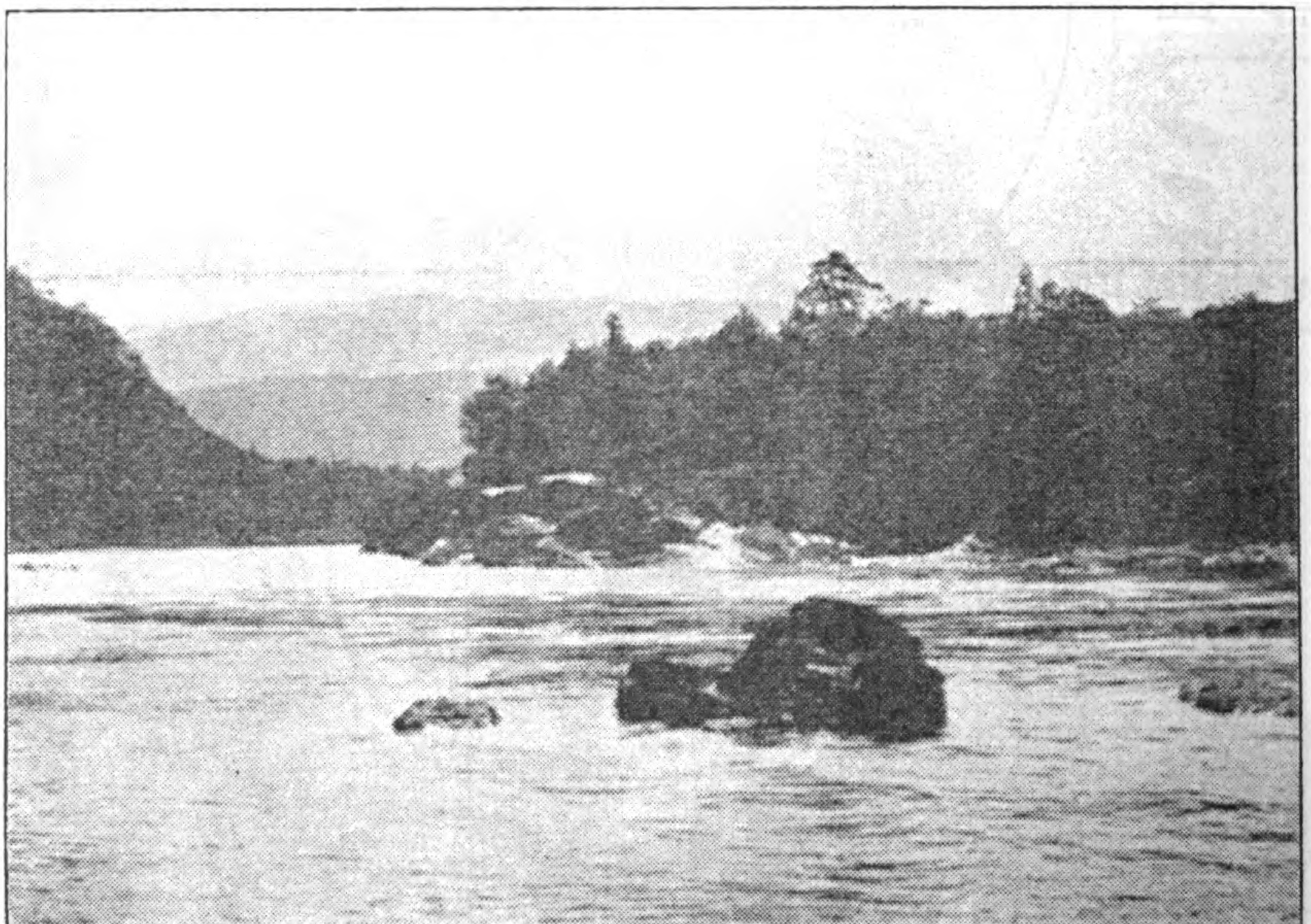
日本女學校專攻科第一回卒業生並職員　（明治三十九年）

伊勢贄崎浦



（三重縣　竹村操君寄贈）

信濃千曲川



（長野縣　川口智嘉子君寄贈）

讀友面影

「伊勢」濱土きみ子君



「群馬」櫻井操子君
府世島富天子君



「大坂」長尾香子君





「信濃」唐澤松子君　林靜枝君「」清水信子君

「近江」西村悅子君



「甲斐」木内くに子君



「京都」岩淵國子君



元華族女學校々長　學習院女學部長　從四位　男爵細川潤次郎君序文
下田歌子女史題歌
十剣大神流師範乾尊軒　山邊春正先生著

新案

女式棒術圖解

木版四十八圖挿入
定價四十錢
郵税四錢

棒は最も簡便なる護身器にして、其棒術は實用的の武藝なり、然るに近時此術の稍や世人に忘られんとするを慨し、斯道の大家山邊先生多年苦心の結果、女子體操術に組織し、一時は薙刀體操、鎖鎌、鎗術、居合術、美容術の總てを兼習する法を新案工夫し、曩に御來朝の英國コンノート殿下、我が皇太子殿下の御前試合にて大名譽を博せられ、嘗て華族女學校及び日本體育會教育會等に於て之を試み非常なる賞讃を得、實に此棒術はか弱き女子と雖も匆卒の際いつにても得易きのみならず、傘にまれ杖にまれ代用すべきものいくらもあり、女子護身の爲に極めて便利なると云ふを俟たず、幾多同好者の請により之を一部の書として發行す、文章平易に圖解の精密なる何人にても一讀に其眞義を悟り得べき珍書にして、今や女子體育問題喧しき時に當り既に女學校體操教科書に加へられんとす、本書は一び出づ以て江湖の希望を充し得たりといふべし、苟も戰勝國女子を以て任ずるもの請ふ速に購讀あれ

發行所　東京銀座大通南金六町新橋際　書籍錦繪繪はがき　木田金盛堂

大賣捌　東海堂、東京堂、前川、北隆館、旭堂、至誠堂

各國帝室及王家御用

ネッスレス ミルクフウド



歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ
小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ
○最モ盛カンニ藥舖洋酒食料品店ニ販賣ス

（丙の二）

◉會員大募集目下入會の最好機なり

新學期開始

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に一ヶ年間に高等女學校程度の敎育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を毎號附錄とします

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ敎育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主として丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です

▲本會講義錄は右に述べし通り最も完全したものでありますが會費は極めて少額で都合一ヶ月の遊學費で優に全期を終る事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評　米國の通信敎授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全科程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義は總べて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲本會規則書▼

端書にて申込あれば直に郵送す可し

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會





新派を學べ

新派と謂ひ、舊派と謂ふ事は全躰の思想界を通じて流れて居る二大潮流のやうですが、舊派の勢ひは次第に衰へ、新派の世の中になるのは勿論の事です。今の新派と稱するものも何時かは舊くなるので、所謂新派の作家は何時も時代の風調に先んじて、舊くならないやうにと新しい道を拓いて行きます。青年の男女が新派に傾くのは誠に自然の數で、然もあるべき筈です。若し青年にして新派の空氣を吸はなかつたなら、何時も他の後ばかり逐ふやうになつて、頭角を表はす時がありません。玆に謂ふ新派は形式の事よりも、思想に重きを置いて言ふので、形式許り極端に新派を眞似ると輕浮になります、寧ろ形式は舊派でも思想の健全な方が取る處があると言ふ譯になるのです、新舊兩派の最も分り易いのは和歌でせうが、是とても自然に新しい空氣は全躰の歌に含まれるやうになつて居りますが、全く舊派の歌許り讀み且作つて居たならば到底時勢に伴ふ事は出來ません、是非新派歌人の作を讀み、研究し、試作して見ねばなりません。新派の人でも修養の爲には古來の和歌を深く研究して居る事は勿論です、讀むべき歌としては新古を問ひませんが、作るべき詩歌は新派に學ぶ處が無くてはならないと思ひます。

女子の登山

夏期登山の氣風は逐年奬勵せられるやうですが、女子の登山も亦近年行はれかけて居る事で、女子富士登山の如き、今年も之を目論んで居る人があると云ひます。昔は女人禁制の山があつたり、女子は汚れたものとして、六根清淨の境に登る事を忌まれた結果、自然女子の登山と云ふ事は念頭に置かれなかつたやうですが、體育も發達し、女子の本分も認められた今日、夏期登山は休暇中の最も好い避暑法だらうと思ひます、登山の功能などは今更こと〴〵しく述る必要はありますまい。

讀書の時間

秋夜讀書と云ふ事は古くから言ひますが、讀書は秋に限らぬ、冬でも夏でも時間さへあれば讀書して宜しいが、殊に夏の晝、樹蔭の讀書は爽快に感じます。夕方の讀書も宜しいが只餘り暗くなるまで字を見て居る事は、眼の衛生上恐るべき害がありますから、注意しないと不可ません。

美文と實用文

美文と實用文は全く別のものですが、年少の時分は實用文を書く機會が少いから、自然文章と云ふと粧飾が多くなつて、實用の場合にも穴が多くなります、用事ばかりの消息文に餘り粧飾の多いのは、却つて間違を生じ易く用事を足さない事があります、成るべく美文と實用文とは初めから區別して、書き熟れるがよろしい。

花を愛せよ

昔から花を愛する者に惡人も無ければ、小人もない、花を愛すると云ふ事は乃ち善でもあり又美でもある。時や夏、草花の多く咲く時は今です、諸孃よ、花を愛したまへ、少くとも花を愛する心を養ひ給へ、文藝の上にも、人格の上にも、花は諸孃の爲に美と善とを捧げます。

文壇抄

▲新たに出る雜誌よりも、在つた雜誌の廢刊する方が多くなつて來ました、自然淘汰の結果好いものは殘ります▲薄田泣菫君の『白羊宮』は金尾文淵堂から出版されました箱入の美本で全文四號活字を用ゐて居ます詩の態は變つて來て居ますが寧ろ『暮笛集』『行く春』時代の作の方が胸に深く觸れるやうです▲中村春雨君は六月五日亞米利加丸で米國へ渡航しました滯在は三ヶ年の見込でボストン大學へ入るのです▲富山房の『帝國畫報』は『花聟花嫁』と云ふ增刊を出しました中には十數年前の花聟花嫁も澤山あります▲夏期講習會は餘り利益の無いものです例へ女學生でも夏期は旅行した方が宜しいのでせう▲山岳會と云ふものが出來ました機關雜誌に『山岳』が發刊されて居ます。

國文評釋

文學士　中内蝶二

土佐日記（三の續）

家にいたりて、門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も、あれにたるなりけり。中垣こそはあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預かれるなり。されば、たよりごとに、物も絶えず得させたり。こよひかゝることゝ、こわだかに、ものいはせず。いとはつらく見ゆれど、心ざしはせんとす。

《釋義》家にいたりて云々　いよ／＼我家に着きて、門を入るに、恰かも月明かなる夜なれば、邸内の有樣までことによく見ゆとなり○聞きしよりもまさりて云々　土佐にて聞きたるにもまさりて、言葉にかけて云ひやうもなきまで、ひどく破損したるものかなとなり○家を預けたりつる云々　家を預けたる人が、充分に心をつけて、修繕など加へなば、かくまでは破損はすまじきに、其人の心もまた此家の如くに荒れはてゝ、信切の心がなくなりし故ならんとなり○中垣こそはあれ云々　此家を預かりたる人と云ふは、貫之と隣同士にて、垣一重の隔てこそあれ、さながら一つ家に住みたるも同じやうに接近したれば、留守をする便宜もよければ、自分の方より望みて、預かりくれたる人なりとなり○たよりごとに云々　土佐國より便ある度毎に、絶えず修覆の料も贈りて遣はしたりとなり○こよひかゝることゝ云々　人々打腹立ちて憤れど、今宵左樣の事を喧しく罵りて、隣の人に聞かるゝも厭なれば、自から制して、高聲には物言ふことを止めたりとなり○いとはつらく見ゆれど云々　其人の爲方、實は

面憎くおもへど、それ相當の禮はせんと思ふなりとの義。

〔評論〕　久しく邊土にありて、今幸ひに九重の都の舊棲に還る。しかも、かへりて來て見れば、邸園荒廢して見る影もなし。貫之が憤慨いかばかりぞや。『人の心もあれにたるなりけり』の一句、よく京人が輕薄を罵りつくせりと云ふべし。而して『こゝろざしはせんとす』の一句は、よく貫之が、高尚なる人格と、寛裕なる度量とをあらはせるものなり。

さて池めいてくぼまり、水つける所あり。ほとりに松もありき。五とせ六とせのうちに、千年や過ぎにけん。片枝はなくなりにけり。今おひたるぞまじれる。おほかた、みな荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく、戀しきがうちに、この家にて生れし女子の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。

〔釋義〕　池めいて云々　池の如くに凹まりて水の溜りたる所ありとの義にて、その實は、昔眞の池なりしも、太く荒れ果てたれば、水草など生ひて、池ともつかぬやうになりたりと故さらに強くきかせたるなり○ほとりに松もありき云々　其あたりには松もありしが、土佐へ行きて僅かに五年か六年も經たざる其間に、はやくも千歲も過ぎたりと見えて、其松の片枝はなくなりたりとなり○今おひたるぞまじれる　古き松の片枝はなくなりて、却りて新しく生ひたる小松が交れりとなり○おほかたみな荒れにたれば云々　庭は一躰に、垣根も崩れ、草も生ひ茂り、見るもの大方は皆荒れ果てたるにぞ、何れもあはれに悲しきさまなりと云ひ合へりとなり○思ひ出でぬことなく云々　かく荒果てたるさまを見るにつけても、昔の事の何くれとなく思ひ出だされ、戀しきが中にも、此家にて生れたる女の子の、土佐にて失せて、諸共に歸らぬ悲しさは、ものに譬ふるかたもなしとなり。

〔評論〕　『さて池めいて云々』の描寫法、うちつけに荒れたる狀を示さゞる處に最も妙味あり。『松ありき云々』の文字も、それと云はねど、預り主が松の

枝を伐りたる事をほのめかしたる處、いと巧みなり。『今生ひたるぞまじれる』の一句、小松を出だして、下の我子を思ひ出でんための伏線、用意周到と云ふべし。

舟人も、みな子抱きてのゝしる。かゝるうちに、なほ悲しみに堪へずして、ひそかに、心知れる人に、いへりける歌、

うまれしもかへらぬものをわが宿に
　小松のあるを見るが悲しき

とぞいへる。なほあかずやあらん、またかくなん。

見し人を松の千とせに見ましかば
　遠くかなしきわかれせましや

〔釋義〕舟人もみな子抱きて云々　土佐の國より諸共に乘りて歸りし屬官等も、皆子を抱きて喜び騒げる樣を見るにつけても、なほ悲しさ堪へがたくとの義○うまれしも云々　此歌の大意は、こゝにて生れたる我子さへ歸らぬものを、却て此庭に小松の生出てたるを見るが悲しとなり○なほあかずやあらん　一首の歌だけにては、まだ悲しさが盡ぬと見えとの義○見し人を云々　此歌の大意は、亡き人となりたる我女を、この庭に生出でたる千歳の松の如くに、いつまでも永く見て居たならば、かく遠くかなしきわかれはすまじきものをとなり。

〔評論〕この一節、貫之が胸裡にこらへ／＼し悲しさを、あからさまに、人目も耻ぢず、書きあらはしたるもの、蓋し此日記も最早終を結ぶべき時となりたればなるべし。

忘れがたく、くち惜しき事、おほかれど、えつくさず。とまれ、かくまれ、とくやりてん。

〔釋義〕忘れがたく云々　此外にも、なほ忘れがたき事、口惜しき事、數多けれど、書き盡すことを得ずとなり○とまれかくまれ云々　それは兎に角斯かるいたづら書きを、他人に見られんも耻かしければ、疾く破りて捨てんとなり。

〔評論〕土佐日記の一篇。茲にて筆を擱けり。凡そその日／＼の晴雨を始めて、途中の風光や、人情風

俗や、描寫一として宜しきにかなはざるはなく、殊に其主眼とする亡兒の愛、折に觸れ物につけてあらはれざるはなく、悲哀の中に諧謔あり、諧謔の中に悲哀あり、我國日記文の好模範として、永く文章家の間に賞美せらるゝも、まことに宜なりと云ふべし。（なはり）

遠鳴

文學士　尾上柴舟

しづけき夜はの大海や
愛のひかりのやはらかに
月こそ白うてらしたれ

くらさもまじるやさしさや
眠に半手とられし
をとめのまみのそれのごと

あらいづくにか風の立つ
潮のうなりのほのきこゆ
たゞ空耳かとばかりに

底ひをくゞる大魚の
はるかの沖に過ぐるごと
遠きながらももの凄う

聞け／＼月はさゝやくよ
「かゝる波なき海に居て
はるけき磯を君しるや

眞珠のあまた積みのせて
南の海の荒磯を
出でにし舟をわれは見し

夕はなるゝ磯の上
よろこぶ歌をわれ聞きし
迎ふる人をしのびつゝ

されど舞踏の數終へて
君が夥伴のいねし時
海あらゝかになり初めぬ

ひとしきかげに照らせども
風の心をとりえねば
あらぶるものをいかにせむ

思へ今しも大波に
火かげ帆のかげ人のかげ
みだれて破れてたゞよふを

眞珠は海にかへるべし
かへらぬ人を待つ人を
涙の海にしづめつゝ」

詩文の材料に就て

小[illegible]松風

詩文を作る上には、斯う云ふ事も、多少皆さんの御參考に成うかと存じまして、聊か申上る事に致ました。さて詩文を作るに當つて、先づ誰も苦しむものは、善い材料の得られない事であります。而して、其の材料の中には種類がありまして、この材料は美文に書いたがよいとか、これは普通文の方が適して居るとか、或は又、新體詩に詠んだ方がよいとか、又は俳句に讀んで見ようとか、否これは短歌の方がよからうとか、そこは皆さんの御考へ次第で、何れにでもなるのであります。

さて斯ふ云ふ種類の材料は、日常吾人の行動に附き纏つて居ることを忘れてはなりません。たとへば一寸、家を出て道を歩くにしましても、春ならば、花咲き、鳥歌ひ、夏ならば、綠葉そよぎ、螢飛ぶ、なほ秋は紅葉狩、冬は雪見、と云ふ樣に、常に吾人は、造化の神から、四季折々の詩文の材料を與へられて居るのであります、獨り是のみならず、自身の心掛次第で、日々新しき材料は、間斷なく修得せらるゝ事は、自然お分りになるでありませう。今日は何處の音樂會に臨んだとか、明日は何處の繪畫展覽會に趣くとか云ふのも、同じく詩文の材料に逢ひに行くのであります、けれども、是等を見聞する人に於て、その心掛がなかつたならば、唯平凡に見たり、聞いたりして、歸るばかりであります。折角の良材に接しながら、それを捕へ得ずして、空しく歸ると云ふは、實に口惜しい次第ではあ

りませんか。又人の對話を聞いて居る間にも、幾多の材料が續出するのであります。殊にその對話が、自から言文一致體の立派なる文章になつて居る事や、或は小説の好材料なる場合が、往々あるものです。

茲に一人の女學生があつて、毎日電車で通學するとしたならば、即ち車中の觀察を筆にして、「電車日記」とも云ふべきものが書けませう。或はまた、運動のため、早朝に起きて、遠方から通學する學生であれば、「途上雜感」も出來るに相違ない。その他、新聞を讀んでも、雜誌を繙いても、繪葉書を見ても、山水の美景に對しても、詩文の材料は、幾らも得らるゝのであります。併し乍ら、茲に注意すべきことは、材料の撰擇であります。

凡そ如何なる美術に於ても、その調和の宜しきを得ない物ならば、更に賞讃する價値はないのであります。調和とは、一の中心點があつて、全體の詩趣が、この一ケ所に集り居るものを云ふのであります。即ち吾々が實景に對して、歌文を物せんとするに當つて、先づ孰れの點に筆を着くべきかと云ふことに、何時も茫然自失するのであります。併し乍ら、靜かに思ひをめぐらせば、此中には、必ず一段勝れたる美點があるに相違ない、吾々はそれを見出すのに苦しむのであります、假令見出したにしても、又それを筆にすることが中々難いのであります、さり乍ら、これは恰も彼の熟練なる寫眞師が、風景に對する時は、直ちにその絶美なる中心點を發見して、巧妙に撮影する如く、熟練なる作者はこの境に臨んで綽々餘裕あり、徐に先づ最美なる部分に着眼し、更にその詩材の特優なる一點を觀破し而して後、想を構へ、字句を練り、茲に始めて、詩となり、文となるのであります、所が初學者にありては、眼前に幾多の材料を控へて居り乍ら、さて歌に詠まう、俳句に作らう、と云ふ場合になると、容易に言ひ現はすことが出來ない。一篇の文章、一首の歌でも、そんなに造作なく出來るものではありません。これは尤もなことで、一世の文章家、或は歌人と云はれる程の先輩でも、實に一方ならぬ苦心をせらるゝのでありますから、況んや、吾々後進に於てをやです。とは云へ、右申述べたやうな事柄に注意をすれば、自然とその妙域に達するは、疑ない事でありますから、勉めて怠らぬ樣にしてもらひたいです。

次は讀書に依りて、材料を得ることです。それは古今の名文名歌に接する毎に、先づ自身がそれ等の名家に

成つたつもりて、その歌文の意と、自分の意と同化する位までに、熟讀玩味し、それを先輩の賜物として、それ等の名作を飜譯するのてあります。飜譯には勿論、演繹法、歸納法があつて、それには直譯もあれば、意譯もありますが、成るべくは意譯に苦しむが自身の爲めてあります。そして、文章は和歌に譯し、和歌は俳句に作り代へ、或は長文をいくつかの短文に取り替るとか云ふ風に、一種の細工仕事もやつて見ることが必要てあります。

次には、旅行によつて材料を得ることてあります。汽車は幾多の客を乘せて走る。其中には、軍人、官吏、文士、繪師、商人、農夫、漁民等、各種の人が乘つて居ますので、恰も函に積められたる一小社會でありまして、肩摩並膝、相語る人々は、これ皆、百里二百里と離れた異鄕の客でありますから、その間には隨分面白い話を聞くことが出來て、新智識を增し、從て又詩文の好材料を求むる事が出來るのてあります。そして旅行は、實に名勝舊跡以外に、却つて神工鬼作の好風景、好材料を得ることが往々あるものてす。

以上あれやこれや、思ふに任せて申述べましたので、素より秩序も立つて居りませんが、要するに詩文の材料は、自然、人事を文學的に觀察し、その美的面、詩的面のみを觀るのてありますから、常に高尚、優美、明確の三點に注意して、凡ての事物を精細に觀察することが肝要てあります。

二十世紀の女子文壇上に、一層の光彩を放たれんとする諸孃よ、希くは、此觀察の修養、熟練に、多大の注意を拂はれんことを。

文士の家庭

湖月

一　竹越三叉氏の家庭

余が瞥見したる家庭に、政治家もあれば文學家もあり、小間物屋もあれば味噌屋もある、けれども余は其中て兎も角も余の感じた家庭を、一二紹介しませう。

氏は政治家としてまた文學者として有名な方である、してその家庭は府下東大久保の大分閑靜なところに建られてある、家は煉瓦造で純然たる西洋館である、余が訪問した時は、霜月の初旬て丁度萬木の葉が枯れ落

ちて、秋の哀を示して居るころであつた、氏の家の周圍は萬木幷立して居るから、そのころはその木の葉が落ちて玄關前からそこら一面に散り敷いて歩けばがさがさするので、氣もちはよかつた、しかも余が訪問したときは天氣快晴で、秋の風も强くは吹かなかつた、余は氏の名聲はかねてより知つては居つたがまだ氏に會つて一言交えたことがなかつた。それ位であるから氏の邸宅を知らぬのは無論の事である、東大久保に往つて或人に尋ねたら番地もいはぬが竹越さんはこれからこう行くと煉瓦造で直ぐわかると敎へられて往つて見ると成程その通りで大なる煉瓦造の家が嶄然と建つてある、名札もなければ別に外塀もあるでない、けれども余はこれに相違ないと心に極めて、その家の玄關へ登つた、登つて見ると玄關の戶は固く閉されてある、それから呼鈴でもないかと見ると、呼鈴は見えない、どうして、客の來ことを家の內に通ずるものかと思つてとも角も二三變、たのみますと大聲で叫んで見たが、一向に音沙汰がない、まさか玄關の戶を叩くわけにも參らぬ、すると誰れが敎ふるとなけれど己が頭の上にぶらさがつた唐金の金盥のやうなものがさがつて見えた、さてはこれが、呼び鈴の變を勉めるんだなと思つたが、初めての事であるからそれを叩くのがきまりがわるい、且つ氏の邸宅の細道を往來する人達が四五人まで立つて見て居る、なぜ立て居るかと思ふたが、よく考へて見ると余がその金盥を叩くところを見んとてであつた、なんとなくきまりがわるいけれどそを叩かねばならぬやうになつた、それから叩いた、初めての事だからそつと叩いた、けれどもその金盥が馬鹿に大きな響を發した、なんとなくわが身がぞく〳〵するやうに感じた、するとまもなく、女中が出てくる、余が名刺を通ずる、二階へ案內せらる、主人に會釋する、茶をもつてくる、話が始まる、煙草を吸ふ、訪問したる用件が終る、餘話にわたる、時に室の四方を見廻すと額が澤山ある、その額は山水寫生あり、偉人英雄の肖像がある、それて氏の如何なる人なるかは餘程わかる、それはそれとして、余がその室に這入つた時は恰も午後三時半ごろで小學校の生徒が歸つて居るころであつた、氏の令孃の今丁度歸つて來つて父君の側に居つて讀本やら算術などのおさらひをなして居つたのである、風呂敷包を一つの椅子において父君の前で何にやかやと讀みまた敎へられて居つたところである、余はそこに往つたから、令孃がおさらひはしばし休息とな

つた、してその令嬢が御茶を酌んで下から二階まで持てくるところを見て余は頗る感に打たれた、家庭のしつけ方は大切なことゝ感じた。

二　饗庭篁村氏の家庭

余が氏を訪問すること前後四五回である、中には、大掃除の時に出くわして早速逃げて隅田川に空氣を吸ひ直したこともあつた。氏の家庭は向島小梅町にある隅田川の邊といへば邊といつてもよい、吾妻橋を渡つてサツポロビール會社を右に見て、德川の邸を後にして間もなく右に降るゝところがある、それを五丁ばかり往くと先生の邸に到るので、その庭園の幽靜閑雅なることは無風流のわれ／＼でさへ終日歸るをわすれる程である、先生は當世小說家の泰斗である、しかもその趣味は世間普通の所謂文學家とは大分趣を異にしてをる、氏は元來は江戸兒のちやき／＼である、酒は飲めども煙草は吸はない、料理ものに趣味を持つて居ることは恐らくは他にあるまい、奥樣の話を聞くと、宅では魚屋のはいした刺身などは、ナマ臭いといつて召し上がりませんといひました、それのみならず、先生の書いたものゝ中にも、さやうの趣味を有して居ることが見られる、だから、大町桂月氏は篁村氏は餓鬼のやうだとまで評したことがある、成程食物に一向頓着せぬ人から見れば、餓鬼のやうにも見えやうが、しかしそれは人間の趣味であつて、われと人との趣味の相違である、それから、氏の好きな植物は竹である、竹は大分御自分の好む所であるらしい、されど不思議なことには、竹は先生の庭園に一二本は見えるがさう見えない、しかもその竹が竹を好む人としては培養のしかたがあまりに粗末である、青竹のつまらぬのを二三本庭園の隅に植えられてある。さうして竹を好きだと仰しやるが不思議といはなければならぬ、動物では猫であるといつて居ります、猫は大分好いて居る、一體江戸兒といふものは、猫を好くのは、不思議である、聞くところによれば、わが輩は猫であるといふのを書かれた漱石先生も江戸兒だといつて居る、江戸で生れた文士は皆さやうに猫を好くものであらうか、不思議である、饗庭先生などは夜でも晝でも猫を御自己の側から離さず抱いて居るといつて居ります。なるほど猫を抱いて撮つた寫眞は幾十枚となくある處を以て見てもたしかに猫好きであることがわかる、猶先生の好きなものは、芝居は勿論、音樂殊に能と來たら一度もかゝさ

ず雨が降らうが雪が降らうが、あるときは必ず江戸川の觀世舞臺まで御出なさるさうだ、して能を見るとに趣味を持たぬ人は芝居を見ても芝居のよしあしを知ることが出來んといふのが先生の持論である、余は先達て尋ねた時も丁度觀世のおめ能だとて御出なしたと奥樣が話なされた、ついでだから先生の奥樣のことも一寸話しておきませう、奥樣は秋田の人で九つになるとき江戸へ來つたので、今では秋田で生れたやうなところが、どこにもない、昔し小學校時代に味ふた雪の事も忘れて居る位で純然たる江戸そだちの奥樣である、令息令嬢がある、兄は早稻田に妹は女學校卒業して今内に家政をとられて居る、文學者の系統を延いたと見て、息子も息女もやはり文學好きで困ると奥樣がいはれて居つた、午飯を頂いて奥樣の案内でその庭園を散歩して見たが、實に諸樹萬草のある廣い庭でわが輩は歸るを忘れるやうであつた、その庭の中に大なる池がある周廻一里とまではないが、せめてその半分はある、底の深かさもわからぬ、鯉が白、黒、赤、が手を打けば浮いてくる、わが輩はその鯉に野心をもつた、子供のをりかゝる鯉を釣り上げた愉快を今饗庭先生の池に於て浮び出された、奥樣これを釣るから、許して頂戴と願つた、すると奥樣が、いはれた、魚など釣るなんてそんな、野暮なことおよしなさい、且つ汝が釣ると子供達が皆眞似をしだしていけませんと斷はられてがつかりした、どうにかして、一疋釣り上げたいと思つたが、自分の池でもなし、且つわが身も今は子供ではなしさう／＼頑是ないとは出來ないで釣り上げたいと思ふ野心が自然消滅してこんどはその鯉の遊泳するのを眺めて居つた、廣い池に鯉の大なるのが浮きつ沈みつして居るさまを見ては、歸ることも忘れてしまうのだ。

食後夜話集（三）

矢田挿雲

四、三人の皇子

昔、英蘭の王樣に勝利者維利亞矛と云はれた方が有りまして、此の方は三人の皇子を御持ちてした。
或る日の事、王樣は深き物思ひに沈んで最も悲しげに見えましたからお側に居た一賢人が何事ですかとお尋ねを致しますと、

「私は私の死んだ後三人の子が如何な事を爲るかと思ふて考え込んで居るのぢや、ナゼと云ふに私の子供等は餘程强く又餘程賢く無いと云ふと到底私が軍で勝つて取つた所の國々を持ち堪えて行く譯には行かん、私が死んだ後は、どの子を王樣にしやうと思ふて困つて居る」

と申されました、賢人は、

「王樣よ、若し三人の皇子が夫れ〴〵どんな物をお好きで有るかゞ判りさへすれば私は何の方が王樣に成られるで有らうかと云ふ事を考えて差上げませう、まア二三の問答を致せば直に鑑定の附く事です」

と申上げますと王樣も大變之に賛成をして、

「夫れは好い思附だ、子供が來たら早速適當の問題を出して試驗をして貰ひ度い」

そこで二人は倚ほ彼是と手筈を相談し三人の皇子を一人づゝ呼んで同じ試驗を受させる事に定めました。

先づ第一の皇子が這入つて來ました、此の皇子は丈が高いので韈泣かせと仇名の有る魯鳩と云ふ頑固者でした、賢人は、

「皇子よ、若し神樣が貴方をば鳥に生れ變らせたなら貴方は何鳥に生りたいと思ひますか」

と尋ねますと、魯鳩は鷹に生り度いと答へました、次に父君と同名で而して大層父君のお氣に入りて有る小維利亞矛が這入つて來ました、此の皇子の顏は眞ん丸てニコ〳〵して其の髮の毛が赭いので赭毛と云ふ仇名を持つて居ます、賢人は又、

「皇子よ、神樣が若し貴方を人間の代りに鳥に生れ變らせ玉ふならば、貴方はどんな鳥に生りたいと思ひますか」

と問ますと皇子は、

「私は鷲に生りたいと思ふョ、何故ッて云ふに鷲はどの鳥よりも强いし豪勢だ、鷲は鳥中での王樣だから子」

と答へました、最後に一番年下の片理が沈着な思慮深い顏をして靜かな步調で這入つて參りました、賢人は又以前と同じ問を發しました。

「僕は椋鳥に生りたいと思ふ子、椋鳥は第一禮儀作法の正しい鳥であるし親切だから誰でも椋鳥を嫌ひはしない、夫れから椋鳥に限つて自分の近邊から盜んだり奪つたりしないから：……」

是で試驗も濟み皇子達は皆な歸られました後で王樣と賢人とは暫く色々な事を話し合ひましたが遂に賢人は

「判りました、魯鳩皇子は大膽で而して派手好の方に成られませう、大事業も成されやうし名も揚げられませうが併し最後には敵に負けて牢死を成さる事てしやう。

夫れから第二の皇子維利亞矛殿下は矢張り鷲の樣に大膽で强く成られませう、但し殘酷な事を成さるので人に恐がられ嫌はれ終には耻かしい死に方を成さいます。

一番年下の片理君は悧口で謹み深く而うして穩かな事がお好きてせう、此の方は敵から軍を仕掛けられた時の外は決して軍を成さらぬてせう、此の方は家族の人々からは可愛がられ世間からは廣く尊敬を受けます、而うして大きな財產を積んで安全に死なれる事てせう」

と斯く判斷を致しました、果して斯樣な判斷が中るて御座いませうか？

* * * * * * * * * * *

其の後數多の年數を經て三人の皇子は夫れ〳〵大人に成りました、王樣も年を老られて愈々死ぬると云ふ間際に當つて又た三人の中誰を自分の後繼にしやうかとお考えに成りました、折柄先年賢人が判斷した事を思ひ起し魯鳩には佛蘭西の土地を與へ小維利亞矛には英蘭の王位を與へ、片理には少しも土地を與へずして金の小箱を與へる事に決心しました。

然るに結果は先きに賢人が豫言した所と寸分違ひません、擻泣かせの魯鳩は殺伐でズボラなものですから父君から頂いた丈けの土地を悉皆無なして了ひ俘囚人と成つて遂に牢獄の中でノタレ死を致しました。

赭毛の維利亞矛は非常に壓制で殘酷で其人民から恐がられ厭がられまして不德義な世を送り果ては森の中で獸狩りをして居た時、自分の家來に殺されました。見事な學生と云ふ仇名を附けられて居た所の片理皇子は只だ金の小箱を父君から頂いた計りで有りましたけれど次第々々に英蘭の王樣に成り遂には父君が佛蘭西あたりに持つて居られた凡ての土地の大支配者とまて成りました。

丸窓

菅野眞澄

富士見ゆる丸窓明けて四年ぶり
稍筆を取りし梅日和かな

○
病まだ癒えずと聞きし君いかゞ
あまりいまはし明方の夢

○
この儘に月の光りのくもらなむ
君に添ひ行く我身まばゆき

○
打つれて彼岸詣での村少女
繪日傘かすむ菜の花の道

○
散る花を直衣に受けて佇める
人美くしき細殿の月

○
さりともと思ひ定めて見まはせば
昨日にかはる此世なりけり

○
今更に千度悔ゆとも君あらず
只此罪は神にいのらむ

○
春三月なほ降る雪にうづもれて
飢に泣くとふみちのくの村

○
大鳥毛小鳥毛立てゝ登城けむ
おもかげうかぶ大門の松

○
つらかりし昔の春よ今いづら
二人かたらふ紅梅の窓

○
君にとの望も消えてふる郷を
又たちいづる夕ぐれの雨

○
人はいざ兎まれ角まれわれは只
心のかぎり人につくさむ

○
いつかわれ御不興解けて手馴しゝ
この笛吹かむおぼろ夜の月

○
小羊のねぶれる牧場蝶舞ひて
春日うら〳〵草の香かをる

○
桃の窓鞠唄うたふいもうとが
安きこゝろの羨まれつゝ

○
中島に桃咲くいけの春日和
又筆おきて鯉に餌をやる

○
うぶすなのみ祭はてゝかへり行く
人にぎはしきおぼろ夜の村

○
宮人が花見車をいそがせて
かへる嵯峨野の夕ぐれの雨

○
其折の君が一言とこしへに
胸のうれひをなぐさむるかな

○
雨はれて薄日にほへる柳原
雫にぬれてつばめ低く飛ぶ

○
母上のうしろに添ひて村はづれ
むかへし人のおもはゆげなる



注意（必ず精讀を望む）

▲圖畫手本。　本號より每號圖畫手本として表紙の裏へ名家の洋畫と日本畫を交る〳〵掲載致します、本號には女子美術學校教師重松せい子女史の洋畫を入れました、次號には日本畫を出す事になって居ります。

▲新歌謠。　豫て募集いたしました新歌謠は本號から披露する事になりました、何うか御覧の上どし〳〵新作をお寄せ下さい。

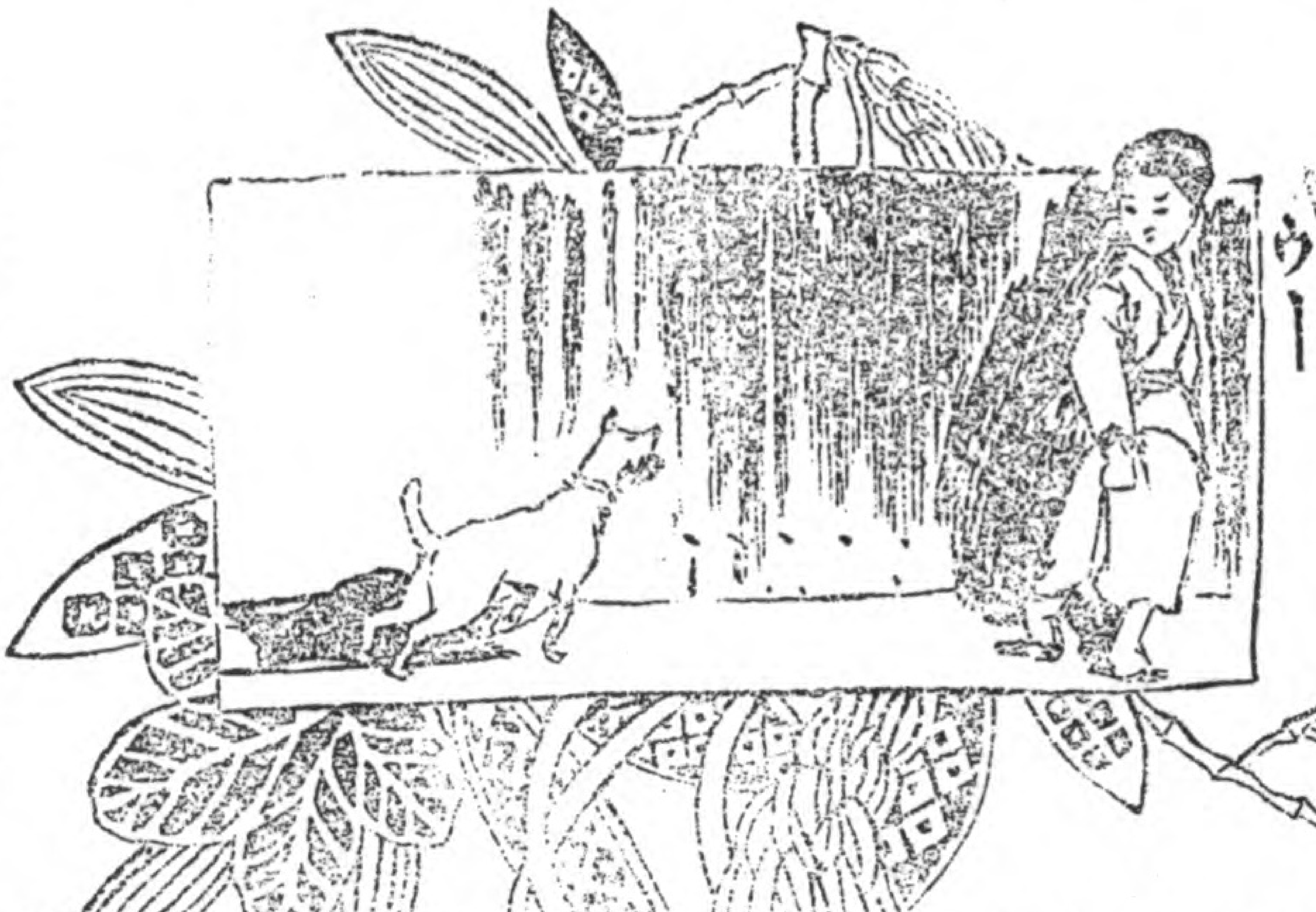
▲新笑話。　來號より發表する筈なりしも應募澤山なるゆゑ繰上げて本號より發表いたしました。之れ亦面白い笑話（實際あった滑稽談なども最も宜し）一口噺の類ひなどし〳〵御投書を願ひます。

▲寫眞の寄贈を望む。　『誌友おもかげ』は每號出して居りますが口畫に限りがあっても出來るだけ多く載せたいと思ひますから御遠慮なくお出し下さい、御都合で寫眞はお返し申します、又風景其他口畫の材料になるやうな寫眞の御寄贈も願ひます、本社は欣んで其秀拔なるものを紙上に掲出いたします。

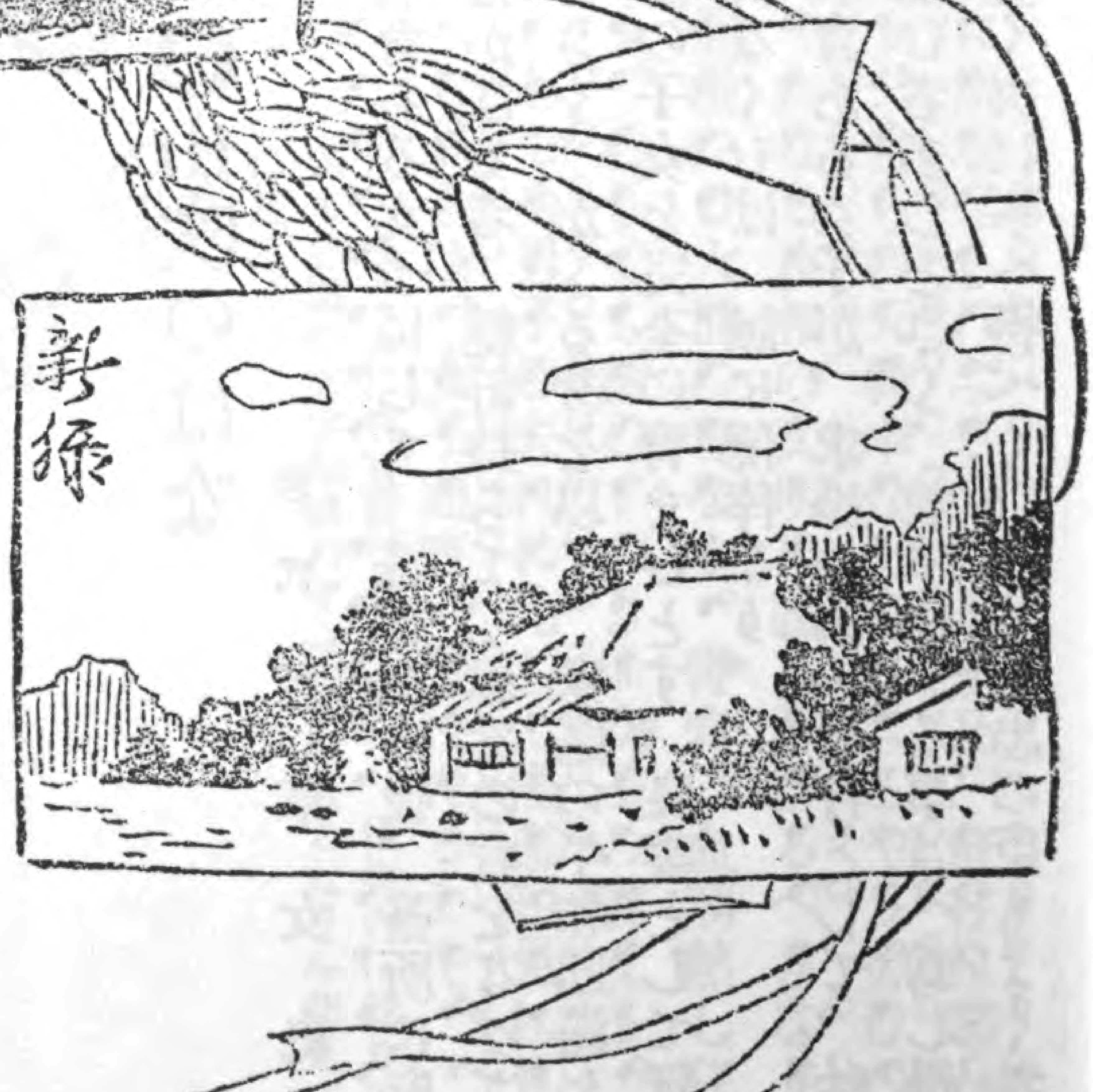
○購讀の便利法　本社は今回から愛讀諸孃が本社出版の書籍、雜誌を購讀さるゝに便利なる送金法を設けましたから一層賑々しく御申込を願ます、詳しくは此處に挿入しある『郵便振替貯金』の用紙を御覧下さい、若し用紙が御入用の節は「はがき」にて御申込次第何枚にても直ぐ御送り致します。

古洞先生選　懸賞圖畫　（其七）









○かみゆひ（特別第三賞）
日本橋區南茅場町一六、升本方　田川よね子

○ヴー（天賞）
神戸市二ノ宮町四ノ六六　德永みね子

○驛路の黄昏（地賞）
陸中國一ノ關大町五九五　阿部とみ子

○新緑（人賞）
福岡縣浮羽郡浮羽村浮羽　古賀つね子

文學士　沼波瓊音先生選

論文

特別寄書

○自然美

駿河國駿東郡片濱村西間門　古山秋子

嗚呼、自然は大なる慰藉者なり、大なる教訓者なり、大なる指導者なり、不平も煩悶も不快も、之に接すれば悉く解くべし、人間の能力を疑ふを罷めよ、萬有の眞相を云々するを休めよ、人間の極致は自然美と同化するにあり、故に我等は常に自然と接し、その崇高、その偉大、その精美、その神靈に觸れて、人間界の俗を離れ、須臾だも、之と同化するの機會を作るべし、我等が自然美と同化する刹那は、是れ形骸を離るゝ時なり、壓制、競爭、憎惡、猜疑、虚僞あらゆる人間界の不德を離るゝ時なり、故に自然美と接する時はこれと同化するを要す我を忘れ時を忘れ心解け、形釋け、萬化と冥合するを要す、松島やあゝ松島や松島やは、此の刹那の聲ならずや、我を覺え、時を知りて自然美と接するは、寧ろ接せざるに優れりと雖も、其效力は實は甚だ乏し、我等は自然美と同化する刹那毎に自ら淸くなるを覺ゆ、斯る刹那の屢々なるは我等を淸むるの機會多きなり、その同化にして永遠に繼續する時は、是れ人間の極致なり、善美合一の時なり。

（評）一種の宗教とも謂つべし、余が常に念うてなほ言ひ得ざりし旨のこの文に遺憾なく披瀝せられたるを見て愉快に堪へず 詩を作る爲にのみ詩を作る爲にのみ自然を觀る人は小さい哉。

天

○山吹のはな

岩代　若草女史

今の教育ある女子にして、嫁ぎたる後、臺所に庖刀取りて泣かざる者、縫針持ちて、思案の首をなげざる者尠しときく。かゝる身を以て、家庭の平和圓滿を計り、最愛の子女を完全に育まむとす。良妻として賢母として悔なくむば、誠に僥倖なり。

今の教育ある女子が、求婚の第一要件として、姑のなきを望む者多しときく。親に仕ふる事さへ爲し得ぬ身の、克く夫に事へ得べくむば、不忠の臣もよく孝子

たるを得べく、不義の齎も亦よく節操の人たるを得べし、恐るべきかな。

今の教育ある女子、平素口に菫の薔薇のと數ふる者比々皆然りときく。大根牛蒡の事など、嘸ぞや詳しからむ？きゝたきは麥飯の炊方、格好の副食物、さては香の物の切り方など、是非に見度ものなり。

今の教育ある女子間に、リボン結びや栞編の交換贈與流行すときく。草花野菜の種子など、代へては如何のものにや、絹栞多く持てるを學友間に誇る男の君のおはすと聞しともありき。

七重八重、八重山吹の花こそ美はしくは咲け、實の一つだになき現今女學隆盛の前途は、寒心すべきものなからずや。元祿風の、奈良朝の、菫の戀のと浮身をやつす一半を、今少しく實務修養の方面に轉換せしめざる可らず。元より文藝の道趣味の養成は聖代の祥事として大に奬勵すべきものなりとはいへ、偏すれば即ち、弊風の生ずるもの、長所は亦即ち短所なり。各自心して、徒らに輕跳浮薄なる世の風潮に渦巻せられざる覺悟を堅め、既往に鑑み、將來を慮り、自らの天職本分を忘れざるやう努むべきなり、華やかなる皮相の文明に謬られざるべきなり。

時や花爛漫たる人世の春なり。青春の血潮熱し狂するの秋なり。心しても猶心すべきは女子の春なり。況してや男子の夫れに比して淺慮短見に且熱し易きは、女子通有の特性たるをや。

(評) まことに質實親切なる論なり 慨慨内に餘りてしかも惡罵の文字を陳れず 論者の人となりを想見するに足る。

踊　僧　（賞外）　加賀鶴來町　波佐谷碧子



地

○財

播磨　にしき

財の貴きは財其物の貴きにあらずして、これを以て、必要なる事業を起し得るがためなり、善良なる道に使用し得るがためなり、財を有するもこれを使用する法を知らず或は知ると雖も實行し能はざらんか、財の貴き所以何くにかある、それ財を積み財を貯ふるは手段なり、決して究竟の目的たるべからざるなり、然るに世間往々其本末を誤り汲々としてたゞこれを積むことを知りて更

にこれを有益なる事業のために抛つことを知らざるものあり、巨萬の富を有しながら可憐なる孤兒のために一錢を惠むことをせざるものあり、誤れるも甚しといふべし、然れども現時の社會に於ては財は個人的はた國家的に一大勢力たるは爭ふ可らざる事實なれば勤と儉とを以て營々黽勉一代にして富を作れるものは稍貴ぶべきに近し、されどおのれ其功に與らずして父祖の財を續ぎたる者、みづからは衣往に美を盡し酒色に饜き、しかも人に對するや傲然また冷酷飢に泣く老媼に一椀の殘飯を施すなく寒に叫ぶ貧兒に一枚の着古しを取らすことなきものあり、其心事の醜汚や惡むべし、而して其世と事を談ずるに當りてや父祖のなせる財を笠に著て正義を壓迫し我情を貫徹し以て世の福利を沒却する者あり、茲に至りては財もまた厭ふべき哉。

（評）かゝる理は我も知れりといふ者は多からむ多くは口のみなり眞に心に會得せる者の尠きは多數世人の性行に徴して明なり。

人

○死の聲を聞く

函館區旭町二百四十番屋敷　小野さゝふね

今朝傳染病室の六つになる可愛らしき少女逝くと。凡ての病室より病室へと傳へらるゝ聲、あゝ病める人々に近くのぞむ死の影！

われは茲に始めて死の聲のいと壯嚴なる響を聞く。

苦悶とは何ぞや

未だわれに來らざる凡ての苦悶は、光輝を放て或は希望と仰がれ、或は快樂と見え又は滿足と思はるゝなり。而て如何なる快樂も將た如何なる滿足も、我れに來れる瞬間の現在には悉く苦痛也、煩悶也、克くこれに堪ふるを之を奮闘と云ふ。かくして奮闘の過ぎ去りたる影を、追想する時は必ず、ほゝ笑みを見出すなり。

我が愛

われは眞率ならざるの人を愛する能はず、故にわれは人の矛盾を敢て責めざるなり。

われはわれを愛する凡ての人を愛す、されどわれを愛せざる人を悉く愛する能はず。わが愛は主の如く未だ大ならず、然も我を惡み呪ふ人を悉く惡まざる也。愛憎は相對の語なり、彼れを愛すと云ふも之を憎むと云ふも悟なき迷なり、人は此絆を脱して、始めて神の愛を知る。

たかぶり

自惚と虛榮心と僞善とに滿さるゝ時、我は自己の品性の最も神に近けるを思ふなり。

（評）好教訓、好警告。

秀逸

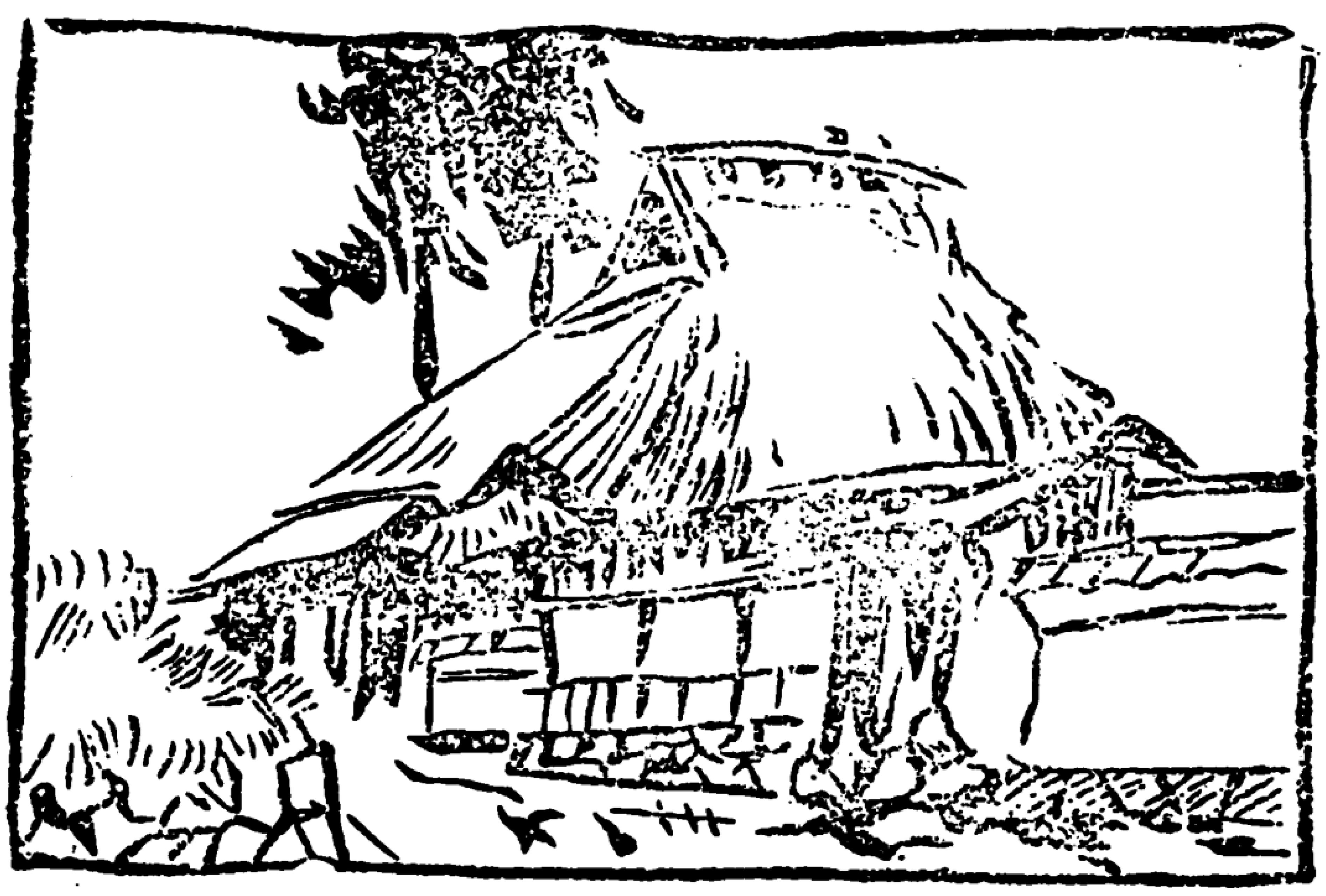
○大哲學者と大詩人

千葉　桂花女史

宗教もしくは哲學の美妙なる理窟の骨に、美しき詞の肉つけたるもの即ち詩也、詩の内容を叩けば宗教の聲あり、哲學の響あり、耶蘇教の如き高尚なる宗教を信ずる人民にして始めて高尚なる詩あり、狐を拜み狐を拜み鰐を拜む様な野蠻人に、高尚の詩あるべき筈なし、詩人はまた哲學者と双生兒の觀あり、ベーコンと時を同じうしてセーキスピア出て、ルーテルの如き大宗教家もしくはカント以下の大哲學者出でたる獨逸にして、始めてゲーテ、シルレルあり、我國未だ大哲學者出でず、況むや大詩人をや、この二三年來大詩人出でよと大呼する者多けれども、大哲學者出でよとの聲は聞かず、而して大哲學者は、大詩人の先驅をなすものなるを知らずや、筆をと命じて硯も共に持ち來らしむるは順當なり、硯と云ひて筆をも持ち來らしむるは順當に非ず、大詩人の出でむことを望まば、先づ大哲學者出でよと呼ぶべし、大哲學者を産出し得るの能力ある國民にして始めて能く大詩人を産出することを得べければなり。

（評）僩ある啓示なり。

春の日中（賞外）　東部紋屋町　濱部郁公女



○貧者

長門　高田沖子

貧者は富者の候補者なり、富者は貧者の候補者なり、困難の位置にある者は安樂の種蒔をなしつゝある者なり。榮華の位置にある者は、自ら身の滅するの域に至る礎を作りつゝある者なり。然れば富者は貧者を出し、貧者に富者を生ず、然かして富者には愚者多く、貧者に智者多し、然して貧者には建設者多く、富者の破産は常なり、然して富者には虚傲者多く、貧者には英傑多し、それ其の權力は王者を壓し、其の祿有は天下に半ばするの平氏は、宗盛を出して亡び、一土民彌助の貧族は、豐太閤を出して、覇を東亞に輝したるに非ずや、是れを西地に求めんか？彼の大統領リンコルンは其の始め奴僕より身を立てたるに非らざるか？宗教大改革者ル

ーテルは乞食をせしに非らざるか？

然れど妾は、貧者なる者が能く富を成し英傑となる、と斷言する者に非ず、只、貧なる者は、自ら己れの境遇に安ぜず精意精勵、奮鬪一番以てよく富をなし英傑たるを得るなり、若し貧なるに滿足し、愚を以て足れりとし、放逸を喜樂なりとする時は、何ぞよく富を作り、國家の良材たるを得んや。

彼れ豐太閤は、松下の門下に奴するの恥を忍びたるに非ずや、リンコルンも又然り、即ち貧者なる名稱が、成功を作るに非ずして、之れに伴ふ不平より起る、勇氣と勤勉とによりて成功の玉を得可きなり。

然れば貧者よ、汝自ら失念する勿れ、汝等程幸ある希望ある、位置にある者又他にあらざる可し。

妾等は、富者と生れて自滅せんより、むしろ貧者となつて困まんかな。

（評）富者驕りて貧者となりその貧者勤めて富者となる是れ人の一代若くは數代にわたりて起る輪廻なり。

○小學教員

志摩　小林敏江

見渡せば近眼者流の世の中なり、思ひ廻せば臆病者流の世の中なり、遠き元氣の基礎を慮からざる是れ近眼者流に非ずや、虛き一時の毀譽をのみ顧る是れ臆病者流に非ずや、あゝ讃む可きかな小學教員、榮の冠は汝の頭上に在らずして將た誰れにかあらんや、天下其の名を知らず、天下其行を知らず、雪に青々たれば松も詩人の詩となり、霜に紅なれば楓も歌人の歌となる、然れども汝平生の血涙は天下知るもの稀なり、汝の手は只だ優しき小兒の涙を拂ふのみなり、されど其手の力は一國の汚穢を洗濯するの勢力なり、汝の舌は只だ無邪氣の童兒を喜ばすのみなり、されど其舌の辯は一國の元氣を鼓舞するの雄辯なり、中學は榮え大學は繁昌し、一國は富强なり、是れ一つに汝の手、汝の舌、汝の血涙の致す處なり、而して一國を擧げて俗物世界となすも汝の手にあり、小學教員の職分も亦重大なりと云ふ可し、此職分と此の希望とを有して血涙を流すの小學教員は幸福なるかな、亦た此の職分と希望の爲めに毀譽を顧みず、國家百年を慮る此の小學教員を有する國民は幸福なる哉、其國民は富强なり、其國民は繁昌なり、其國民は愛國の精神を有する國民なり、其國民は自由の元氣を有する國民なり。

（評）近來小學教員優遇の道の講ぜられつゝあるは喜ぶべきの現象なり。

○愛の光

京都　三島吉子

暗黑の被幕に被はれし下界も、一片又一片と、明光に逐ひ去られて曉となり、鷄雀歌ふ頃には、太陽は限なき蒼空を旅路として、地平線を離れぬ、その光は、四海を統ぶる王の、紫色輝く室にも、雨露を凌ぎ兼ぬる草廬の屋根にも、同じく注ぎて、森に野に谷に村に、暗黑の萬象は、光明の萬物と化しぬ。

その光の愛すべきに、鏡の如き海上に走れる舟の帆と檣とに閃ける、あるは永遠に溶けざる、高山の霽の上に、又は緑草しげき野原に横へ、天女の様して歌へる少女の　金髪を照せるなど、げに日光は愛の塊にして愛の天使也、天使の行く處雲の上に、海の中に、慰安と突進とを與ふ。

異雀も共に起き出でゝ、その業を勵み、日くれて一家團欒、食を共にし、鐘聲を聞きて、神の懐に抱かれつゝ一夜の休息を楽しむ人の、夢よりさめて眺むる曉光は、人の元氣を恢復する靈藥にして、新なる甲胄いかめしく、戰場に馬を馳せしむるに足る、絶間なく放つ、光の内に、人生の意義は存し、之を眞に享受する者は始めて人生を解したる者と云ふ可く、輝々たる其光に限なき趣味と、長の快樂と満ち満てり、されどその瞬間にも、その目を閉ぢて、永に此光に離れ行き彼の世に旅出する人もある可し。

されば世の人よ、朝に曉光を、眺め得る人は、正に幸福の出を歌ひ、逆卷く波を押切つて、希望の岸に至るべし、折しも、東山に表れし曙光は、破窓よりこの天使を机上に送りぬ、あゝ妾も、其力を胸にして、學の庭に出て行かん哉。

◎朝日と朝月

静岡　たかこ

一夜中不平と不満とにてまんぢりともせず疲れきりし頭を靜に上げて前の障子を開けば、彼方には纎く背々とせし野原此方には匂へる垣根の櫻純白なる庭の椿の二つ三つこぼれ落ちたり。

ふと見上ぐれば朝の空は淸く晴れ渡りて靑々と其處に一つの白雲なく黑影なし。唯見ゆる、東には赫々として昇れる日影西には悄々として傾ける月影。嗚呼この對照、人は知らず吾は見ん一つはこれ企望の光満々たるもの他はこれ失望の淵に沈淪せるもの、一つは勇氣勃々として將に戰場に赴かんとするの士、他は破れて傷負へる敗軍の士、一つは世に迎へらるゝもの、他は世に捨てらるゝもの、と。

其の光り耀ける企望の舟に乘つて浮世の浪を濟ぎ分けつゝ進む世の人々は皆朝の日影よ。世には捨てられ人には見はなされて淋しき田舍に佗住みせる我の身は見る人もなくて傾き行く朝の月影よ。

日はやうやう高うなりぬ 其の赫ける面は 暖くして嬉しげに いと樂しげに月はやうやう傾きぬ其淋しき面は瘦せて色あせていよゝ悲しげに。

◎學生墮落の原因

淺草　井上ますを

一口に云ひ盡すことは出來んが、師弟の關係の親密てないのも、確に其の一因だらう、尤も幾百の生徒を教ふるに幾十の教員て、而も教授時間の少ない現時の學校制度ては、無論昔の寺子屋時代のやうな親密を期することは出來まい、けれども先生方が眞情から愛育して下さる御精神なら、放課後や休暇の日に於て、山に登り水を渉りて逍遙散策する場合に又は膝を一堂に交へて談笑する際等に於て、之が親交を計る餘裕がないてもなからう。

さうして下さつたなら孱弱い女心にも、一倍の力を得て自から勵み勇んて、悪風に誘はれ聞くも忌々しき墮落の淵なんかに陷る事はあるまい。

どうか先生方！神聖なる教場を以て、學問の切賣り場所とお思なく、熱心に、誠實に、之が薫陶の任に當られん事を、父兄にかはりて希ひます。

◎女子と文學

岡山　渡邊ふさ子

文は思想の花にして、女子は人生の華なり、何人かこれを否定する、女子は情に活けるものなり、文は情によつて活けり、之何人か否定する、情によつて活けるの女子情によつて活けるの文をなす難きに非ず、のみならず花華相擁したらんか爛漫たる美を呈するや必せり、見よ、古來女子の文に於けるの活動を、遠くは五十鈴姫皇后、神功皇后の御詠は載せて古事記にあり日本紀中又女子の文見るべきもの數多し、萬葉集女子の作家中の秀俊たる、額田女王、坂上郎女を首め十中三を占む、和歌に小野の小町あり、降て王朝文學の二大明星との稱ある、結構精妙巧みに人情を穿ち思想の妙をつくせる源氏物語の筆者紫式部、世態萬狀、奇想は天より落ち幽想高遠の妙を得たる枕草紙の筆者淸少納言あり、和泉式部母子あり、赤染衛門あり、淨瑠璃の祖たる小野通女あり、俳句に名を得たる園女、捨女、智月等あり。

思へ我が國の文學は人生の華たる女子の力によりて一段の装飾を加へられたり、明治の文學に一枝を手向けて、後世に歌はしむるは、そも何人ぞ、何人かその責に任ずべきぞ。

河井醉茗先生選

新體詩

天

○霞のうた

能登輪島町河井一ノ九四　池野白百合

一重は花のいきかそも、
春姫いますす野のほとり、
佛のくにのけはひして、
雲かの花になびきては、
げに限りなき嬌樂の、
菫の野べになびきては、
圓らの山を彩りて、
神話に似たる薄月夜、
閨に熟睡の金衣公子の、
柔肌白ろき姫神の、
あゝ行く春の山の峡、
ちさき恨をのこしつゝ、
昔の彩を名殘りせど、
水に映れる落月と、
繪のごと松の立ならぶ、
彩りたるや濃紫。
柳の糸に睦びては、
蝶や生むらむ紫の一。
渺とゆるゝ朝ぼらけ、
名殘りは遠き南の、
夢の如くに霞んだり。
梅の林をめぐりなば、
一夜ちひさき夢に得し、
懐のごと思ひせむ。
ふれなば香ふ柔葉に、
空しく果つる山吹に、
薄紫や東の間の、
晨のかぜにきえてゆく哉。

才華煥發、霞のごとく花のごとく眼もあやに、くるめく心地のする詩です（醉茗）

○天の浮橋

鳥取市西町百九十一　西村とみ子

天の男神とあらがねの、
風の使ひをしるべにて、
男神は聲もたからかに、
傳へし戀はいにしへの、
姫はしづかに應ふらく、
戀はむかしの儘なれど、
さらば再び八千とせの、
み手を放ちて別れます、
里も野やまも鷄の音に、
天のうき橋なか絶えて、
地にあれましゝ姫神と、
立せたまへり橋の上に。
やよひめ神よ人の世に、
わが代の儘に殘れるや。
いなとよ男神今の世の、
人にむかしの戀ぞなき。
後に會はんとま玉なす、
男神はそらに姫は地に。
よるの衣のとれゆけば、
よこ雲なびくあけの空。

似た着想もあつたやうに思ひますが是ほど印象の明瞭なものには接しませんでした、句々措く工合もしつかりとして、少しもたるみなく、優に作家の域に入つて居ます、感服しました（醉茗）

地

○雲雀

相模高座郡相原村小山　霧生かめ子

「おぞや百鳥土にうたふ」と、世にもすねたる雲雀男は、
繪筆榮ある園を蹴て、
むらさきにほふ階の、
雲の百千をのり越えて、
聲高らかに歌誦せば、
瑞雲の扉は音もなう、
靜にひらけ、常色の、
花にかざれる詩神の、
玉の冠の金光に、
仰ぐをゆるさぬ眩ゆきに、
ぬかづく雲雀土におち來る。

雲雀の揚るは希望なり、雲雀の落るは現實なり(醉茗)

人

○初ごひ

尾張國知多郡龜崎町　井口とよ子

むねの底よりわきそめて、自づからなる此おもひ、

かゝる思ひにつみあらば、自然のものにつみあらむ、
自づからさく花にさへ、自づからなく鳥にさへ。

花の咲く、鳥の鳴く、何れか戀にあらざらむ(醉茗)

秀逸

○眼しひの友に

筑前　菅落花子

堅く恃めるまことには
シロアムの池にあらねども
清く湧きつるま清水を
掬ひあげなむ術もあれ

晨の光夕づく日
綠、紅、オレンジの
天の色こそ知りまさね
なほいやませる光明の

心の眼開けたる
聖や宮に立つ主の
靈の海に注ぎ入る
白日の影を仰ぐとも

瞳はとはに若からん
ま白き衣あほぐべく
高き理想の輝きは
得やは知るへき數ならず

浮きたる望斷ちたれば
怖るゝ勿れいづこにも
唯杖のみの安からむ
道はまた直ぐに開けたり。

詩は慰藉なりとは全くてす、天下の盲、此詩を得て心眼を開くてせう（酔茗）

○島守

麹町　藤田霜子

都を西に三千里、
瓔珞それか七彩の、
紅の小貝に歌のせて、
翌る日龍宮の紋つけし、
詩人再び島になく、
曉、艫の脊にのせて、
眞珠夜光珠珊瑚樹や
虹の島もる詩人あり
朝を汐に流せしが
女乘物來りけり
島の小人の噂して
海の底へと沈みしてふ

先づ奇想てせう（酔茗）

○暮靄

豐前　百留むら子

夕べの靄の御とばりに
流れ流るゝさゝ川の
あゝうるはしの姫神が
そのおん前に額づきて
ほのかにさすや月影の
薄き微光のゆらぎては
すがたは淡き花の野を
調はたかき樂を賦す。
神秘の曲を誦するとき
聞くらん時のそれの如。
流るゝ水に綾を織り
わが胸崇高く神に入る。
玄想ふかくたどづめば
白衣つけたるみつかひの
月、靄、水もみな白く
いま降りたゝす忠あり。
はなの香つゝむ夕靄は
御手に抱くと美の神が
げにもはかなき人の子を
垂れにし愛の帷なるらむ。

幽玄の境、美の神を見るやうに想はれるも、全く作者が同感の力てせう（酔茗）

○曙光

淺草　大沼さゆり

朝なるみ聲なれや
天地の寂を打ち破り
開けりな天の岩戸を
見よひんがしは紅さして
黑ずむ森の草も木も
ひくよわが魂を、あゝ曙。
沈默の里になく鳥は
金風さつとふき起し
露にはかほる黃金の色
夢の俤ゆら／＼流れて

夢のおもかげのゆら／＼流れたるは美くし快し（酔茗）

○暮雲

長野　天紋女史

戀とよ名とよわづらひに
胸抱きて倚る小柱や
うたゝ寂の間の榮見じと
潮と迫る哀愁の
夕べの雲は流れたり。
人こもり居の春七日

一夜嵐に花散れば
うれひて還る峰の雲。
今初夏の空驅りて
落暉にもゆる二百尺
大いなる哉たなぞこに
ひゞくよ鐘は乘りながら。

たとへば『居れ』高呼びて
巨人大地を走り去る
革命の府に金冠の
王者笑まひて立ちしごと。

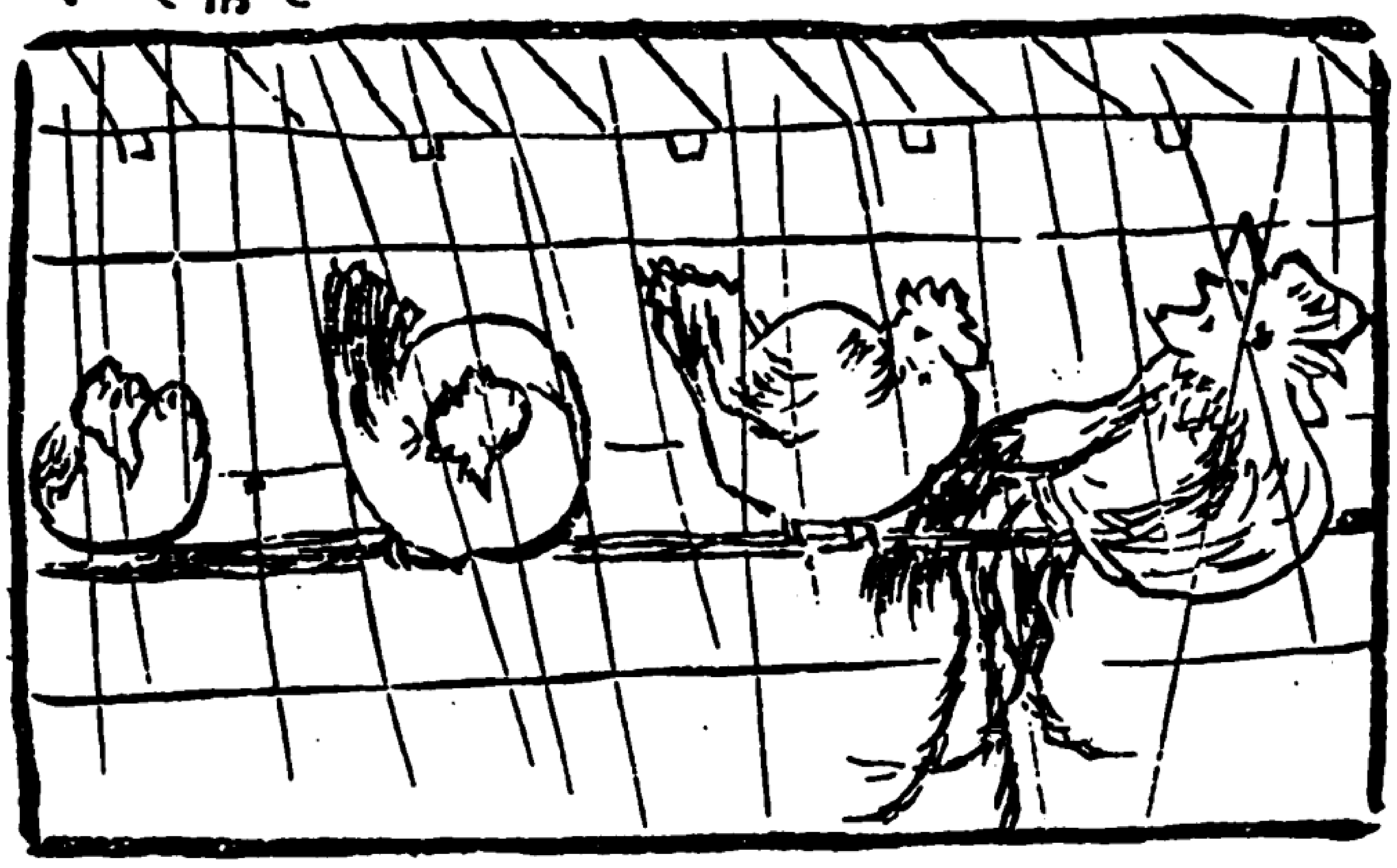
かいあげやらぬ髮の毛に
雲悲しみてくづるゝを
こは南歐の緣なす
牧場守る子の額に落つ。

女史はいつもきびしい字を使ひますが、餘りわざとらしくならないやうに御注意なさい、詩は眞情を貴ぶ、必ずしも大きな形容や奇拔な比喩を以て人を驚かすを手柄としません、但此作のみに就いて言ふのではありません、一般の作者に（醉茗）

○雨雲の賦

熊本　湖畔

瑞枝瑞葉に衣ふれて
しとゞに露のしたゝりを
美しと結ぶ右手の袖、
口づけ笑みのやさ姫を
風津男速きかいま見に、
天つ女多に私語て
七日七夜の呪火や、
袖は眞白の葉となりて



春雨（賞外）　千葉縣瑞穗　秋葉ふみ子

姫がみ肌にひたつきつ、
小暗き谷に降りゆく。
病葉墜つる谷陰の、
烏黑なるくらやみに
眞白葉抱くくづ折の、
なよび胸乳にふと燃えし
炎にかざす眞白葉や、
ゆらぐ煙と現じきて
姫の支配に小野木原、
海を疾波り山かけり
永遠を奇しかる雨雲となりぬ。

雨雲、不思議なる雨雲よ、詩人の胸には斯る雲も湧くのです（醉茗）

○森林の賦

筑後　小松秀子

綠にほこる巨楠の、
空に聳えしその英姿
崇高き森を表示して、
天の權威にせまりたる
獨りすさみの彷徨に、
怪鳥の羽ばたき音凄く
森の心靈をうごかせば、
そゞろ罪の子おのゝくや
無言の想に佇めば、
胸の息吹はおのづから
森の小琴にそとふれて、
絃の美妙に雲滅るゝ

たくみが彫む木々のあや、　幾千劫にもの古りて
くまどる愛の森殿に、　神斧太古の香はみち〳〵ぬ

英詩の意譯とありました(醉茗)

○夕の雲　　死怨女

淺手深手を身に負ひて、　紫紅の毒血こん〳〵と、
荒らゝ鰭ふる大鰐の、　赤裸に拏ふり上げて、
筋肉逞ましき土人と、　挑み狂ふに似たる哉。
國内統御んと夜の女神が、　今門出の輿にとて、
さゝべり金に五彩の、　舞衣着けて美はし女が、
金鈴持つ手しとやかに、　舞ふにも似たる姿哉。
一日「戰」の國ひろく、　倦じ給ひし太陽の、
金殿やがてとざゝれつ、　女神「平和」をもたらして、
世は渾沌と寂び行けば、　爭、舞樂かくて止む。

大鰐の比喩は大膽ながらも拙の言ひ得ない處な歌にした手柄はあります(醉茗)

○野梅集　　鳥取　米原かほる

御簾おろしたる奥殿の、　燈火淡ふ夜は更けて
小雨にまじる琴の音に、　花こそみだれ繚亂と。
(春の夜)
笠に花ちる讃岐路や、　春眞言の大寺に
むいづる姿優なるが、　御和讚低う誦しながら
櫻々にいてひけり。
(さぬき路)
薄霞月夜のさまよひや、　薄紅かほる貝がらに
うたをしるして小聲にて、　見ませとばかりうつむきし
うなじをまきてやゝしばし、　ふるひ奇しきよ君が腕。
(君が腕)
銀燭はゆる高どのに、　春のうたげの興更けて
舞姫まふと今立てば、　十七花のはぢらひや
妙に薫ずる衣の香に、　燈火ゆるふゆらめきぬ。
(春の宴)
我姉京の流れ君、　十とせ別れて今日きては
はにかみなりにむかひけり　ちゝ母あらぬみなしごの
我はまひ袖かざすべき　身と生れけり京の町。
(舞袖)

舞姫式とも謂ふべき一種の調子、此頃の流行ですが、凡て此の通りでは人眞似に終るばかり(醉茗)

○小鳥と草花　　茨城　波滿子

空の小鳥はうたひけり。　野邊の和魂萠え出てゝ、
露の蓐の起臥に、　思もなくて花飾り、
羊追ふ子に親みて、　平和に馴るゝ小草こそ、
羨ましさのきはみなれ。　野邊の小草はうたひけり。
み空の精のぬけ出てゝ、　雲の帳に朝夕の、

楽しさ滿てる翅張り、
絶えず捧ぐる小鳥こそ、
天の扉に讃頌を、
羨しさのきはみなれ。

小草、能くうたへり（醉茗）

○夢

横濱　吉川霞峰子

銀水流る音淸き、
緋桃の陰の若草に、
花の衣をぬぎすてゝ、
熟睡にふける春の神。
夢のまなかに羽の黑き、
毒蝶神の懷の、
寶さぐりて飛び去るや、
奇しふも花の亂れ散る。
覺めて悲しき女の神は、
珠を取られて世の常の
少女とこそはなりにけり。

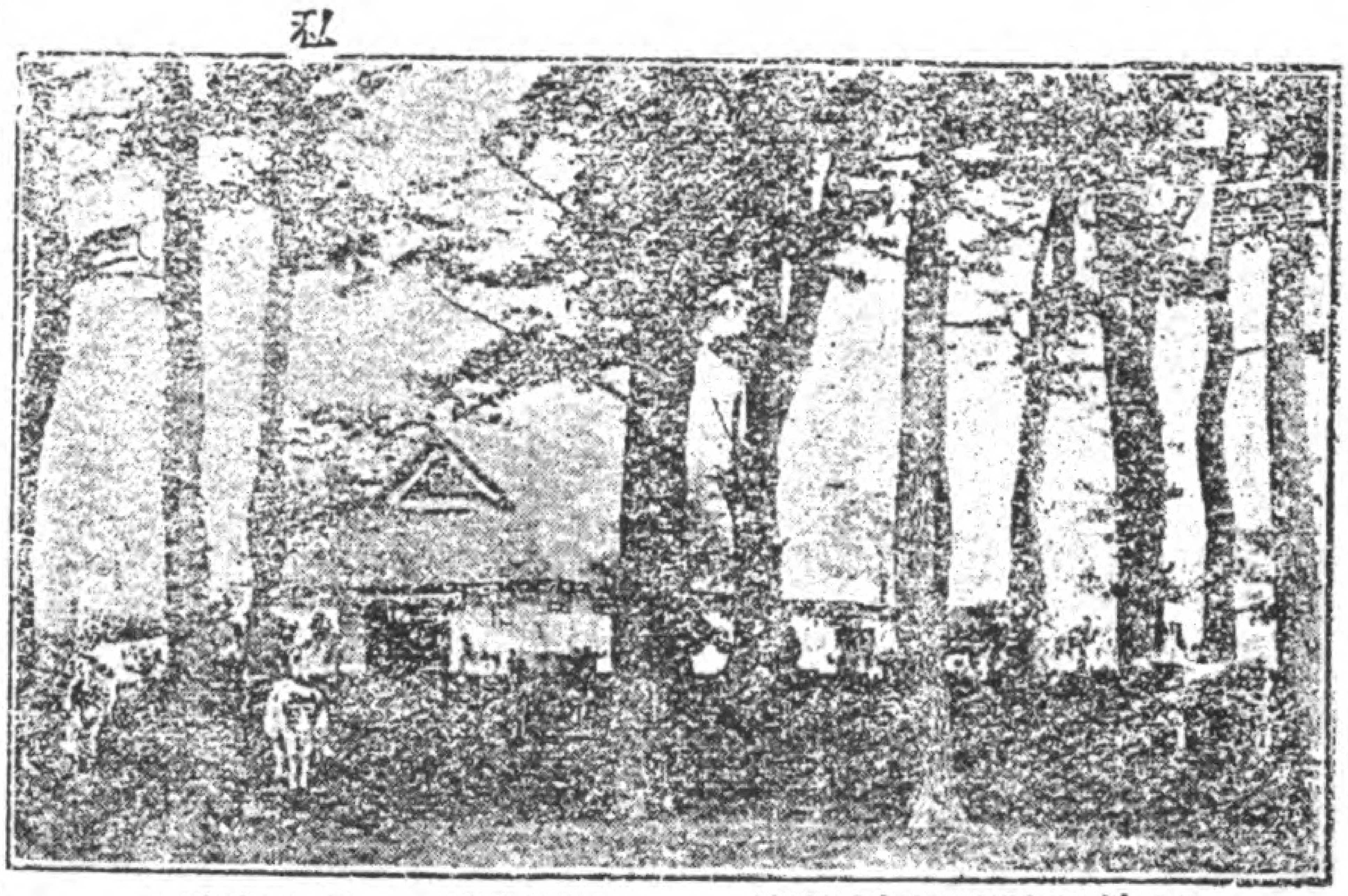
黑き胡蝶は晶子さんの短詩にもありましたが、私もいつか詩にしたいと思ふて居ます（醉茗）

○朝の月

吳　增野玉枝

夜をおごりのきわみぞと、
よそほひこらす月姫が、
臙脂のかほり淸いかな。
白銀樓としたふ子の、
思ひをいよゝつのらせて、
御空にたかう澄める月。
時の小車夜をのせて、
今胸をさす日の光。
紅筆なげて卷捨てゝ、
西宮深く遠去れば
我世はかなむ女詩人の、
それにも似たる朝の月。

朝の月に對する想像は斯うもあるでせうか。月としては面白い處を捉えました（醉茗）



下總三里塚御料牧場　（大沼せつ子君寄贈）

○子守唄

函館　堺とも子

「坊やはいゝ子だ寢んねしな、
坊やのお守はどこ行つた」。
聲もやさしく歌ひつゝ、
夕顏垣を行くは誰ぞ。
ほつれし髮をはら〳〵と、
夕すゞ風に任せつゝ、
泣く子いたはり打ち仰ぐ、
空にはかゝる三日の月。
「あれのゝさんが」と指させば、
負はれし兒も聲をとめ、
共にゆびざす小さき月。
撫子持ちし手を更へて、
細道ぬけて踏切に、
いてゝさまよふ女房の、
乳房眞白に月さして、
聲もかすかに子守唄。

女性の作品として隱れない一つでせう、深くは無いが愛すべき趣を具へて居ます（醉茗）

○夏の海　　徳島　小川なみ子

夏日磯邊の逍遙ひに　袖笠かざし沖見れば
海に美々しき雲染えて　身には涼しき濤の音
胡蝶に似たる帆の影も　夢の狹霧にうすれつゝ
こなた聞ゆる舟うたも　波間々々に遠ざかる
眞砂に松の影おちて　潮香をしむる濱嵐。
洋をめぐりし潮漚に　行衞は夢と莫告藻の
藻の香涼しく尾を曳きて、かなた泛べる島、山も
さながら寫す繪卷物　雄々しく翔ける白鳥の
脊らに强き日を浴びて　磯打つ濤をかすめ行く。

帆影を胡蝶と見たのは初めてです、詩は全體にさえ〴〵しませんが（醉茗）

○夏の夕　　羽前　豐　子

たち花薫る夕風の、　あまり凉しくふくからに、
銀河ほとりと出てゆきて、　ひと葉の舟に掉さしぬ。
み空にうごく夕雲の、　五彩ほのかに匂ひつゝ、
水に光を沈めては、　黄金玉よる波の面。
うき雲遠く消えゆきて、　ゆかりの色のにひ星の、
すゞしきまみを開くとき、　仰げば空に啓示あり。
またも吹きくる夕風に、　茂れる葦の葉末より、
玉と亂れて飛ぶ螢、　天つ星にも似たるかな。
見渡すかぎり露おきて、　やさしく淸き月影に、
みどりにけぶる夜の光、　眠るが如く見ゆるかな。
萬籟とはに音やみて、　うれしや我はたゞ一人、
自然の母のふところに、　ミューズの神の歌を聞く。

夏の夕、詩神の外にも、今少し夏の夕に親しい神が、ありさうです（醉茗）

○草笛　　岩代　さわ子

春の惠みは光をあびて、　野の若草のもゆるか如く
心の底ひより「戀」は生るゝ、　牧場しづけくはや昏がれて
君はひな歌我れ草笛に、　二人興ずる夕星のかげ
只とこしへの意のひゞき、　唯長への情のしらべと

稀に見る姿の高さ、別に是と際立ちて句も見當りませんが、全體に氣品が高い（醉茗）

○夕の磯　　尾張　瑞華女

白き海ばら波なぎて、　夕風凉し夏の磯、
豁紫の横雲は、　天女綾羅の舞衣か。
かなたの空を花やかに、　ゆらぎ〳〵て流るゝは、
天女その日の繪を終へて、　筆を投げたるしたゝりぞ。
かなたかすけき細雲を、　解けたる絹の緒と見て、
島を翔ける夕鷗は、　極彩色の繪卷物。
藻汐煙りの末とほく、　吹く夕風に消えゆけば、
眞砂路三里月すみて、　船うたしるき夕凪の海。

○春　曙　　豐前　みさを子

夜すがら花を守りけむ、
露にや宿るあけぼのゝ、
紫匂ふ横ぐもの、
横にながれて消えて行く、
花の蕾はほころびて、
鳥口ごとは胡をほぎ、
あゝ平和のこのあした、
「草もなからん地の上に」

○花 徑

花の香滿ゆる春の野を、
みどりの髮を振り分けて、
日は麗かに衣そめて、
戯れつ縺れる其姿は、
それようばらの蕾かも、
胡蝶も花とまがふなる、

○床の花

行く春を、
うらぶれし身ぞさみしけれ、
君が挿したる床の花、
紅色艶けき芍藥花、
もの皆黙す我がほとり
何とはなしに慕はしき、
人をもしたふ心かも。

○夏草集

雲

空ゆく雲よ何故に、

聖き星影地に落ちて、
その光明こそ貴けれ、
春の息吹になびきつゝ、
下にかすめる野や山や、
草は野澤に角ぐまむ、
人新しき生命享く、
光榮よ希望よ歡樂よ、
神の界も遠からじ。

越前 松原清子

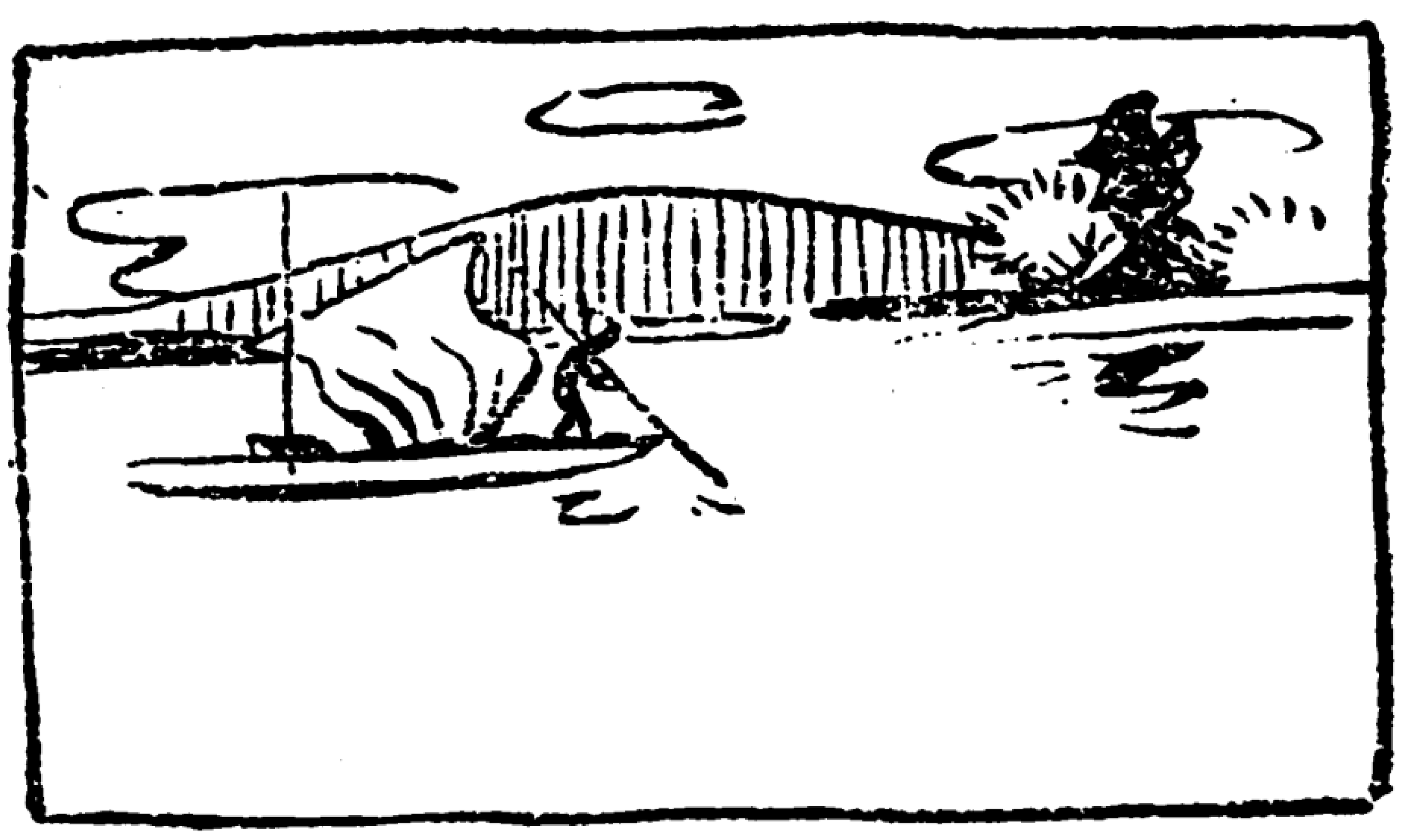
十とせに伸びぬ少女子が、
いづこを果と通ふらむ。
行手を蝶のさへぎりに、
春の天使といづれぞや。
紅もゆるくちびるを、
少女の夢や神ぞ饒らめ。

伊勢 吉田仲子

侘び音になく五月雨や、
二句に吸するきのふけふ、
紫凉し杜若、
露染立てゝ生々と
慰め神のみすがたか
花を戀ぬる心こそ

巖手 夏井ちゑ子

さばかり遠くいつも〳〵



朝（賞外） 京都五條坂 田村のり子

我世はなれし久方の、

稲妻

冷風渉る夏の夜の、
空に閃めく稲妻や、

戀

千年の雲につゝまれて、
心澄ませし山人も、

○詛ひの神

夕顔の香に醉ひて、
光をあすに契りつゝ、
霞める野辺に若菜つみ、
あはれ萎まむ今ははや、
君が奥津城とめ來れば、
ゆかしき影にほゝ笑みて、
あゝ明らけき愛神の、
暗きに入りし君が身の

○深山に入りて

緑樹のあたりとりかこむ、
こゞしき岩根雜草に、
老幹しん〳〵聳ちて、
あたり聲なく寂として、
はざまにむせぶ碧流の、
ひゞくひみつを誰かしる、
あはれ幾百星霜の、

○紫陽花

夢の行方を逐はむとて、
露に染みたるうつゝなを

空のみ戀ひて風に乘る。

寝覺ぞ惜しき手枕に
君が寝顔の美しき。

我世を外に安らけく
あはれにごるよ戀故に。

牛込 大部たか子

ぬる夜の夢のやすかれば、
思ひを秘めて君は逝きぬ、
燃えてし胸の戀の花、
情の水も涸れはてゝ、
み空に赤き新星の、
ほころびそめぬ白き花、
あつき情を外に見て、
詛の神をいかにせむ。

長野 飯塚ぎを子

谿谷深さ幾十尋、
路羊腸といと細し、
太古のかげの崇き哉、
姿みえざる怪鳥なく、
落ちてあわだつ谷の底、
神風さゝやく「莊嚴」と、
一種の靈氣人を魅す。

岩代 服部貞子

小篠に頭き紫の、
寂しきさけびの人たちぬ。

おどろ／＼の髮五尺、
紫陽花さして嫣々と笑む、
あやに亂るゝ黒髮に、
可笑し手振りに微笑みて、
遠寺鐘の野響きに、
袖のはふりにさゆらぎて
眞胸あらはに乳白く
露のまゝなる一枝を、
さらばとかざし與ふれば、
「夫は彼れに」と明星を指す。
身をひるがへす狂ひ女の、
あな亂れたり七變花。

○朝顔

神戸しげ子

狹き郷人さかしげに、
宵々のゆめも幸なき、
去り乍ら殘るえにしか、
あした夕そをぞすさみに、
やがてもの色や何なる、
朝々の人のなぐさめ、
物うさのこゝに幾月、
この宿や疾とく去らん。
二葉なる苗のころより、
育くみし垣のあさがほ。
培ひしぬしはあらずも、
かならずぞよき色に咲け。

○夕雲の歌

赤阪ふさ子

化粧の料と月宮に、
散りしと見せて櫻花、
運ぶか急ぐ雲のさま、
そのまゝ浮きしか櫻色、

○松島

岩代芳江子

あれ君とめぐります
朝ぼらけゆくふれの
かすらかにいもせ島
見かへれば戀が島
のろ船はあさ潮に
春の旅松島に
ほの見ゆる五大堂
そらになく鷗きこゆ
みさほ濃き松しげる
漂ふてまた漂ふ。

○山

下野新井學子

莊嚴の靈迸る、
高きに登り千めば、
新鬼の聲と高なりて、
朝暾しき嶺ぢて、
若葉どよもす淸風は、
青海原に通ふ哉。

浮世をわびて隱者ぶり、
煩らふ弱き詩人の、
金輪際に根を持てる、
詩の女神の微笑に、
天の扉に彫りつけて、
人もや生れむ嗚呼かくて、
空飛ぶ鳩の行方にも
狹斜を寫す筆狹きて、
山の麓に埋みなば、
花の香充ちて鳥唱ひ、
永久に絶えせぬ美き詩の、
聖く優しきうまし國。

○春夕

岩代松山薔薇

紫の雲ながく垂れて、
霞は野火の末に遮り、
眞杉の木立、朱塗りの鐘樓、
鳩、破れ堂の屋根を辭して、
今野より歸る駄馬、
さても流れに沿ふて行く我れ、
燃えいづる草を踏んて、
芳香四圍にたゞひ風は靜かに、
今無心の歌を春にまれぱや、
野川のあたり烟起りぬ、
夕暮れ殘る歌は雲雀か、
幽妙寂びある、聲音趣味、
星影淡く水に映れり、
ともしもれづる藁屋三つ四つ、
忍も非じ惡も非じ身は輕し、
色わかぬ花に坐さんか、
願くば夢に入らむ、あゝ紫微宮、
ゆるせ口誦む古歌は五百章、

○つきかげ

筑後花園まさを

朧ろ月夜を花蔭に、
ひらくに難き胸の扉や。
顔見らるゝを羞らひて、
君もこなたを向き玉ふ。
にぎる柔手はあたゝかき、
はなやぎ頰にもゆるかな。
語らむ戀はもゆれども、
かたへを向けば生憎に、
香のめぐりあひ、漲りに

○夕

讃岐東原靈子

鐘聲湖水の中に落ちて
汀に寄する邊紅し
群れ鶏裙に臨いて
夕日斜に野寺に懸り
牧童一人叢に踞るゝ

牛追ふ轍の音跡に殘して
靜けき夜神の秘密洩く
詩人の胸に光宿りぬ
清き夕よ靜けき夕よ
とこしなへならば我契りなむ

星影三ッ四ッ木の間ゝ洩れて
汝が俤とこしなへなれ

福岡　吉岡千里子

○むすめ

紅梅薫る春の宵
玉の膚もあらはにて
曙染の振袖の
金糸の襟につゝまれし
眼さがしく小鏡に
唇あたゝかき京紅の
燭にかふる朧ろ月
一曲唄へと强られて

衣桁の陰に身をよせつ
化粧こらすも誰がため
覔きに堪へぬ幼な振り
弱胸にも思ひ、ひそめるか
小き姿、うつしては
艶めく晴の装ひや
紅梅かほる今宵なば
すれて躁ろゝ宴の興

紀伊　有本登美枝

○白百合

流れはとはに濁らじの、
白百合花のうつくしう、
深き啓示のこもるやと、
胸に迫りぬゆかし香や、

岩の清水に顔洗ふ、
神女の髪をさらすごと。
泉に耳を傾けば、
花の精かとたふとみぬ。

千葉　田村澄子

○眞清水

炎苛利き日の皇子が、
もだへの血汐洗ひては、
溢れて清き巖が根や。
慰藉の栞永久に
玻璃の御柱寶玉の床
夕榮ある姿哉。
山の女神のうま乳と
溢ゆる色は白銀の、
夏なほ寒き思哉。

光の征矢に傷きし
癒ゆるに早き靈藥の
嫦娥の宮居の影ゆれて
眞珠白玉飾りなす
垂れて流れて眞清水の
旅に靈めるさゝめきに

越後　中村淑子

○曉

萬籟の聲をひそめたる、
永遠の影ほの見せて、
越路の山に明星は、
御空に曉やがて動くや、
天津乙女が衣の如き、
聖なる光に輝きそめて、
そこに希望の光あり、

闇の黒幕の影もなう
つきぬ恨を靈に止め
いよゝ薄れて消ゆるなる
東の宮殿に讃歌は高く
五彩の帷はあや美はしう
若き血汐の燃ゆる時
そこに平和の光榮あり。

上野　正木梅野子

○春　野

櫻花ちるおぼろ夜を
春野小草にたゞずめば
川のせゝらぎゆるうして

月の光にあこがれて
さながら夢ぞたゞよへる
やわらぎの氣は野にみちぬ

常陸　はくえ子

○天の宮

月影しろき望の夜、
天野の宮にたてまつる、
遠き旅路に疲れたる、
喚叫は誰が子あつまれる、
過ぎし世我か誤まてる、
春花咲きて君逝ける、

使子の御手にともなはれ、
歌もはづかし我身なり。
銀河の岸に聲あはれ、
容貌美ましき君やつれ。
若き血潮のくるひなれ、
夢か今宵の花嵐。

滋賀　辰井琴子

○暴風賦

嵐神風馬に鞭打てば、
アルプス山に太息して、
(日の神恐れて雲に入り。
今こそわが世これ見よと、
喬木は折れ大廈仆れ、

髮逆立てゝ狂ひ立ち、
罪の世呪ふ凶の音。
砂漠は喜び砂捲きぬ)。
太平洋に瀟怒り、
猛獸、男女地に伏しぬ。

文學士
沼波瓊音先生選

叙事文

天

○里の夕

豊前國中津町片端　百留むら子

野寺の鐘水を渡りて、永かりし春の日も、鎮守の森より暮れそめぬ。百戸に足らぬ村なれど、竈の煙にぎやかに立ちのぼりて、外に働く脊子や愛子の、晝の疲勞を慰むべき準備のとり〳〵なるに、霞にむせぶ小川の橋のかなたには、誰が家の斑犬ぞ、尾をふりたてゝ、主人の歸りを待ち顔に見ゆ。

一軒茶屋と云へば、隣り村まで其名のきこえし茶店の前を、鍬かつぎたる男、さては鎌さげたる女、三人四人づゝうち連れて、夕暮のわかれを告げつゝ歸りし後は、暮色蒼然として、夕づゝの光り寂しげにかゞやけるのみ。

折柄草笛の音かすかに聞こえて、菫咲く野の細道を、牛追ひ歸る十八才ばかりの少年あり、門の柱によりて待ち設けたる茶店の娘に目禮して、靜かにすぎ行く後姿を、をとめは慕はしげにうち眺めしが、道はやがて左に折れて菜の花畠の間に入りぬ、牛の脊のみやうやう見えて、少年は首より上をあらはすばかりなるを、少女はなほも見うしなはじと、足つまだてゝ伸び上り心もそなたに飛び行くほどに、闇はいつしか豊後町にひろがりて、少年が面影も、菜の花畠も、はては少女が姿まで、夜の帳につゝまれはてつ、牛の聲眠たげに聞こえぬ。

（評）この少年少女の關係を花袋の筆にて說きてほし。

地

○たそがれ時

下谷區上根岸百廿五　太田秋津子

兄樣何所へ入らしつたんだらう。散歩に行つて來ると仰有つたけれど大分遲いわ……竹下さんが待つていらつしやるのに……とん〳〵梯を輕く登つて、二階の手欄に倚り外を眺めた。

夕暮の氣はあたりに迫つて、もう室の内は薄暗い。角の寫眞屋の柳の下に、子供が四五人遊んで居る。おや、あの赤ん坊背負つてるのは波原さん所の光ちやんだわ。昨日姉樣が亡くなられたと云ふのに、まあほんとに子供は罪が無いこと、あゝやつて遊んで居るのだもの。點燈夫が梯を肩に掛けて來た、福原さんと折部さん所のを點けて行く、魚やが岡持さげて通る跡から印半纏着た職人が四人許り過ぎる。それと行違ひに、銀行員らしい、髮を奇麗に分けてチックで固め付けた

氣障な洋服が、小脇に包を抱へてステッキ振り〳〵靴を鳴らして行く。がら〳〵と格子戸の開く音がしたので見ると、お隣りの御主人が出たのだ、軈て影は横町に隠れて了ふ。ほんとに兄樣は遲い事、早く歸ていらつしやれば能いのに……。車夫が何か鼻唄を歌ひ乍ら空俥を引いて行つた後、暫人通りが途絶えた。寫眞屋の門の電燈が何時の間にかついて、もう子供は一人も居ない。下てハーモニカが聞え出した。きつと竹下さん、一人て待遠しい物だから……。赤く塗つた車の、パン製造元淸風堂と書いたのを小僧が引いて來たが、右の手を懷へ入れ何か出して口へ頬張つた。人が見て居ると知らないで……オホヽヽヽ餘りをかしいので笑つたのが知れたと見え、慌てゝがらがら引いて行つて了つた。段々あたりは暗くなつてあちこち蝙蝠が低く舞ひ飛ぶ。あゝ、あれは兄樣に違ひない、さうだわ、兄樣だわ、手で差招くとお目に這入つたと見え、笑ひ乍ら遣つて入らつしやる。お母樣、兄樣やつと歸て居らしつてよと梯馳下りると、ハーモニカの音がぱつたりやむ。がらり格子が開いて文さん誰か來たのと兄樣のお聲。

（評）　根岸の晩景視るが如し。

（又曰）　この類の寫生文に圏點を附するは却て趣を損するものなれば避けたり。

○病後の一日

筑前國遠賀郡芦屋町　濱中たか子

櫻の梢稍々色づきし頃假初のやうにして、いたつきの身となりしより早くも二十日あまり、「今日は空も好く晴れたり、招魂祭にて花車など多く出來たり起き出てはと母上の言せらるゝまゝに久々にて湯使ひ髮など曲げ直せば常になく心すが〳〵しう覺ゆるまゝに行春の景色をなど思ひつゝ布子に羽織のふさはしからぬ扮裝にて門へと出てつ。元祿美人なる古武士なるさては看護婦お娘などとり〳〵の衣裝して西へ東へ心々空に行きかふ中をつと脫けて裏道へと出れば、折柄來かゝる「凱旋の美少年」と題せる大やかなる桃の側にいたいけなる武裝せる桃太郎の立てるを曳きて六つ七つの男の兒少女錦の陣羽織に己かじゝ犬猿雉子などの冠打被りたるが凡そ三十人がほど「桃から生れた桃太郎」を可愛らしき聲張り上げつゝ歌ひ來れる、いみじくも出來たるかなと見つる程に何處よりともなく姉ちやんと呼ぶ音の聞ゆるに打ち見やれば叔母君の季の子なるが乳母に助けられつゝ振り向けるなり、花ちやん綺麗だねえと言へば嬉し氣に嫣然として過ぎ行く、此處をつと横ぎりて一丁計り直に法倫寺にと着きぬ。境内の老櫻二株、今年はよく咲きたりと言へど今は殘りなく散り失せて若葉の梢のみぞ凉しげに繁り行く、

さても恨多きや花の盛りを垂れ籠めて暮せし身には、せめて名殘の一葩なりともと思ひしを、聊か疲勞を覺えしまゝ僧坊の方に長老を音訪へば、例の快活なる面貌もてよくこそと請じ入られぬ。いたくも痩せられたる哉、それに芍藥も數多咲き出たるを見給はずやなど言はる。無慾にして學殖深く持戒堅固なる、檀家の衆の田舍寺には惜しきものよと賞め稱へらるゝも道理ぞかし山寺閑庭白日靜とも言ふべしや訪來る人のなきまゝに法話閑談などに悠々時を移して歸途には芍藥を家土産になむ。

（評）花車と僧坊と自らコントラストをなして妙なり。

秀逸

○四季の花

和泉　辻林みどり子

春は櫻いみじう咲き滿ちたるいと美し、とりわけ八重櫻は目ざましき色なり、又山櫻の山の端白く霞たなびけるが如く見ゆるもよし。枝おもげなる櫻のもとに菫の匂へる、ちら〳〵と舞ひちる花に蝶のもつれあへるいづれをかしからぬかは。櫻ちる頃梨の花咲く、白くさみしくて病める人の如し、梨花一枝雨を帶びたるなんどいへどあいなし。藤の花森なんどに紫の幕かけたらんやうにていとゆかし、紫の色に匂へる藤の門などいへること思ひ出てらる。此頃山吹のしなやかにわらふ、八重山吹の枝重げなる、一重山吹のしほらしきとりどりをかしう思はる。

夏は來ぬ。卯の花籬に雪のつもりたらんやうなるよひやみなんど郭公一聲きかまほしき心地す、圓山のわたり卯の花白う見えたるなんどいへりし如く、まことゆかしき花なり。おなじ頃花橘葉かげしげき中に白く見ゆる、夕月夜などそよ吹く風にかをるも亦ゆかし。端午の花、菖蒲、燕子花、杜鵑花なんど一束屋根高にあげたる、見るさへ夏めく心地す。五月雨は糸櫻しめりてかをる春雨と異りて又一入のゆかしさあり、殊に軒のあやめの打しめりて色ふかきなど、こよなう淸しく覺ゆ。桐の花遠く見るに唐めきてをかし、風など來らばと思ほへど、手に取れば香いとにくさげなり。月日うつりて水無月の朝には、朝顏開きて、露しと〳〵と濃紅の色輝ける、いとすが〳〵し。夕ぐれ垣根の凌霄花色よく咲きたる上に螢の火をともせる、夕がほの月に匂へる、涼しげなり。

文月のつごもり、葉月のついたち頃、山行けば、くさぐさの秋草いとしげし、尾花に藤袴の愛てたうからまりて吹く風になびけるさまあはれなり。桔梗、かるかやなどの咲きたる山かげ、白百合の淸らかに匂へる、

け高し。女郎花、うしろめだげになまめきたる、葛の花のさみしう咲きたる、あいなし。賤が家の井戸のまはり、生がきにむくげを植ゑめぐらしたる、いと風情あり。秋のみやびしものは夏より咲く、蓮、河骨、野菊、撫子、萩の花などの如し。夏の夜水雞のたゝく音をこよなう哀に覺えしが、今尾花のかげより、きり〳〵すのなくも悲し、まして遠山に雁がねの竿になりて落ち行く、いとゞさみし。

やう〳〵冬になりぬれば、色よかりし蔦紅葉は凩にはら〳〵と散る。女郎花なんど萩にまじりて枯れたるも哀なり。水仙、梅もどきなんど咲き初めて、年くれ、新玉の初日となりて、みやまには雪のまだ消えざるに都は野邊に若菜つむ頃となれば、草の戸に、梅のやう〳〵ほころびて鶯も閑かになき來ぬ。御たらしのうすらひ溶けそむれば鳥居のあたり柳の芽をふきそむるも美しや。

（評）よく枕草紙の體を得たり。

○夜あけ

千葉　金高ぶん子

今三時をうつた月は西におちて藍のやうな空には金砂子ちらしたやうに星がきらめいて居る唯黒く見ゆる森の上に光つて居るのは宵の明星だらう北斗星は野の末の方に柄杓をかけた樣に落ちかゝつてゐるすべて風の音もないやがて白い光りがすき見でもするやうに東の空にちらりとあらはれたと思ふとそのあたりの空の色がだん〳〵あけて星の光がかすかになつて行く、そここゝに雞の聲がして野山もだん〳〵白みわたり今まで只黒く見えた森や松や杉の見分がつく、山かげの人家なども分つて來る青白い空に赤みがさしてくると星は皆かくれてしまう棚引く雲が金色のへりをつけたと思ふや否や紅のやうな光が天地左右へ輝き渡つて赤々と太陽が出る山も里も照り渡つて雞の聲が賑ひそこゝに烟がたつ原の末の方では早草刈の歌も聞えるこれは六月の初め妾が姉さんにつれられて東京見物に行かうとして朝早く起きた時の景色である。

（評）巧を弄せずして自然に妙味あり末段の書方氣に入りたり

お花見（賞外）　長門萩　小國敏子



○物乾の夕景

伊豫　ゑき女

西向きの障子にうつゝて居た夕日の影も、次第々々にうすれて來たので、夜露の降りぬ間に、ほし物を入れ

ようと、物乾に立つた。
春とは云ひながら、夕暮の風は尙うす寒う、限りもなう瓦屋根のつゞいて居るあなた、うすオレンジ色の空の中には、西山の頂が僅か計りそびえて居る。屋根と屋根との間には、枯木の梢と、かまどの煙突が、林のやうに立つて居る計り、去年實つた隣りの柿の實の、枯れたまゝ形を枝にとゞめて居るのも、何となうあはれに、金比羅宮のしるしの御旗は鼠色に染みて、淋しく夕風になぶられて居る。
すべて空の縁を除いた外は物皆黒色、一つの目にとまるべき色もないのに、背中合せの家のせまき園生に、金龍の花今を盛りと咲きみだれ、紅の桃の花今をさかりに笑み綻びて、恰も彼の家の園生一つに、春の心をしめたるがやう。
身にせまる冷氣をも知らずして、乾物片手に佇たゞずめば、オレンヂ色は次第にうすれて、其上側はうすばら色もて彩られた。やがて其所にきらめきそめし、夕づゝの影一つ、恰もばら色の薄絹を透して、遠き〳〵無限の境にある光明を望むかのやう、今や一羽のからすはねぐらをさして城山へ向つた。俄かに起る母の呼聲に驚かされて我にかへれば、右手の乾物は早しつとりとぬれて居る。雲なき空を仰げば、光あきらけき一輪の月、思へば我身は月光を浴びつゝ今物乾の階段を下りつゝあるのである。美はしき隣りの園生見かへれば、金龍の花はあるかなきかにうす色見せて、紅の桃の花はもはや見えない。
（評）詩趣は手近き所にもあるものなり。

○初夏

滋賀　辰井ふみ子

○

春は過ぎぬと言ひ顔に苗代渡る涼風の、櫻の若葉吹きしより、見渡す限り野山は一様に緑の衣を飾りて、いとさわやかに、今朝着更へたる初單衣の八ッ口もながう打ちなびきて、苔靑き庭石によればゆらりと散りし若楓の露、襟を濕ほして心地よさ言はん方なし。

○

曙染の色少し褪せたれど、戀しきわが春の小袖疊めばふと袂を洩れしすみれ一莖、……まだゆかりの色もそのまゝに。
さてもなづかしのすみれや、瑠璃の水流るゝ里川の邊彼の君の摘みて給ひし、おゝそれなるよ。
われは此思出多きすみれを紅唐紙に包みてとき色のリボンもて結びつ、そゞろ心に水莖とりて只春がたみとのみ。

やがて手箱に秘めぬ。

（評）美しき情景。

○ベンチの半時間

死怨女

上野動物園の前邊り、瞬きする青白い電燈の光りにパッと照らされて居る夜櫻の下、兄樣と並んでベンチに腰かけて居ると、向ふから二人連の書生『立派だね、どうしても櫻は夜に限るな』『ウン殊に夜は女が居ないから』『ハヽヽヽ、又始まつた、向ふは氣にもしないのに自今許りジロ〳〵見られる積りだから可笑しいぢやないか、鏡と相談して見給へ鏡と、其の顏ぢや女人禁制の張り札より確かだ』『イヤ君、顏の事ぢやないよ、女は總べて感情に支配される物だから、それて僕は好かないと云ふんだよ』『大哲學者に好かれない奴は無困るだらうよ』、二間許り前を、一人はジロ〳〵と此方を一人は花を見上げ乍ら並んで通つた『どうだい意氣だらう』『何が』かすかに聞こえた、後は聞こえない、二人の影は闇の木の間へ。何だか面白かつたから『兄樣何でせう』『矢張り人間さ』『そりや知つてますわ』『それぢや聞く必要もなからう』、兄樣は澄まして居らつしやる『だつて……本當どこの生徒なんでせう』『ハヽ……そんなに氣にかゝるかい、それぢや追かけて行つて、ちよいと物を御尋ね申しまする、とやるが可いさ』『厭だわ兄樣そんなに……』、不圖後に大きな聲がするので振り向いて見ると土方らしいのが三四人『畜生ッやつてやーがらー』、妾はぞつとしたが見たいから矢張り見て居た『青白い奴がこつちを向いてるぞ、ヘン人の戀路の邪魔する奴はか』『犬にくはれて死んぢまへーヘッヘッヘーだ』と他の一人、もう怖くなつて兄樣の傍にひたと寄つた。

夜は滅多に出ない女の身の、强かる可き夜景の印象は却て人のそれよりも弱かつた。

（評）この人確に才筆なり。

○ひきぞめ

名古屋　宮脇俊子

ふと目が覺めると、居た筈の兄さんが傍に居ない、見ると枕元のその着物までがないので、譯も無うわッと泣き出す。と『何てすねえまあ、大きななりして祭禮だッてのに……』と阿母さんに叱られて。

ちやんともう、宜い、よそ行のは簞笥の前に疊んだまんまて出てるけども、早いまだ可けないッて着せちや呉れないし、手水をッて仰有る母さんの手を振拂つて駈け出す戸外の、

可い天氣！

嬉しいな、と見遣る東を二丁程、折柄の、朝日にパッ

とテカ〳〵金の御幣の、四本の柱の横に光つて……。飛んでも行かうと思つたけども、また！　然う、さうだわ、なぜ僕、女なんかに生れたらう、兄さんは……あゝ兄さんは今既うあの山車に乘つてるのに……女だつて、昨日なんかァ……兄さん迄が乘せちや呉れない。

けども、だけども……矢張何だか嬉しくつて、朝の御飯も匆々に濟だが、山車はまだ曳かない。いゝ可い、幕は龜だの蛇だの虎だのゝ、可恐い樣な結構なのに變つたけれど、そして既う、獅や木偶は飾つたのか、見えない樣に赤や青や、五色の綺麗な天幕を張り切たそれの、裾——下の方が朝風に……。

待遠しくつて〳〵……九時に成た、而ると嬉しい！あら、美ちやんがお下げに結て……今度のちびちやん母ちやん三人連で『弓ちやん！今日は、』

兄さんはいつか、揃ひの浴衣と着變てうちを飛出すし。お鮓つけての阿母さんに强請して、僕も同なじお下げに結つて、着物をいゝのと變へてる時、どーンと打ち出す太鼓の響！何うしたつてぢッとしとれないもんだから、眞個に帶お締ないのに、駈け出す、そとの、賑合ッたら、笛の音……太皷の響。えんやアえんやと楫取の。あゝ、動き出す、嬉しいな！。

（評）斯る風俗物は會話を方言にしたる方一層趣あるべし。
（又曰）余も幼時名古屋に在りて正月よりも「おまつり」を樂しみにせし一人、この文を讀んで思ひ出づること多し。

○招魂祭

靜岡　福井みち子

さても去る四月八日、此の小笠郡掛川町舊御殿場に於て招魂祭が開かれた、當日小笠郡の軍人は言ふに及ばず、遺族村長など遠きは早朝より詰めかけた、私は此日掛川に少し用事があつて八時頃から只一人出かけて行つた、天氣風なくして一天白く曇り、所々の櫻は滿開で靜かな日であつた、行く道々一本筋二本或は三本筋や太筋、軍曹も騎兵も輸卒も打交りて軍人の群をなし、其間には親族知己の引もきらず道一ぱいの人であつた、掛川に入れば軒の兩側には各戸國旗を掲げ軒下に造花提燈紙の旗一面に飾りつけ、所々にはおそろしく長き竹或は竿の上に旗をあげ、三方四方へ二段に綱を引いて紙の旗提燈を付けたのが町々にあつて、舊御殿場には大旗小旗吹流しや、大アーチ小アーチなど皆飾りを凝らしてまるで花が咲いたやう、朝から花煙はドン〳〵上つて居ります。私は用を濟ましておばさんへ寄つて色々お話を聞けば『今朝九時半から始まつて午後二時迄は招待狀のない人は入れないので兵士の御馳走は三千六百人前の御仕度て、ビール、日本酒、そば、うどん、煮込、鮓、おてん、だんご、御菓子、茶、

蜜柑、などあるので私の息子は煮込を一軒で皆引受けたので昨夜は私も一寸も眠りませんでした午後二時からは誰でも入れるから色々見れますよ、藝者躍り、柔術、劍術、素人角力などがあります、今日は日曜ですから一日遊んで居らつしやい、おやもう十一時だ子、何か御馳走しませうと、ごもく飯に田螺と葱のヌタでよんでくれた、妾は伯母樣の御深切を喜んで戴きさて伯母さんと一緒に御殿の入口迄行つて見たが大さうな人ごみで動かれず、さながらかなへのわく如く、通りの兩側には板店が一ぱい、小綠門を幾つかくゞつて橋ぎはの大綠門の所迄來ると査公が二人番して居てたゞの人は入れないのです、妾等は失望して又晩來ようと此所から歸りました、すると法多觀音樣へ參詣に行つた朋友が四五人午後一時過町で一緒になつたので妾が喜びは言ふまでもない、をばさんに厚く禮を述べて妾はお友だちと一緒になつた、いつしか時は過ぎて二時頃小雨が降つて來たが人は町中一ぱい何かまはぬとあちこち遊び步き、御殿場へ入らうとしたが人だらけて這入れぬから西の中學校の方から行きましたこちらも又人ごみだがおしわけ／＼漸う／＼會場へ入つて見れば、多くの兵隊樣がお酒に醉つて、それに見物人の老若男女が入亂れて居るので騷々しい事此上もない、兵士の御馳走は所々に店を張つて切符と引かへである角力も見ました、柔術も劍術も見ました、所々には紀念碑の大きなのが廻りは飾りて取まいて屹立して居ります、終りに藝者の躍りを見ました幕が開くと上段に七名の女子が三味線をひき唄をうたひ、次段の右から七名、左から七名の藝娘が緋縮緬の紋付に大きな帶を背負ひ島田に結ひお化粧をして舞臺に揃うて躍りました雨が大分降つて來たのでお友だちを促し、家に歸るべく、急いで町へ出ました、町中はまだ人だらけでした。



（木村あさ子君寄贈）

（評）この地方の風俗見ゆるやうなり。

○里居日記

丹波　なみ子

一

昨夜の雨に厠の横の緋桃は散つてしまつた。もう吾が家の花も是れでつきたのかと思ふと何だかものさみしい。まして病の身をやてある。

今日は誠に好い天氣だ、薬がなくなつたので、散歩がてら醫師の許へ行く。僅かに二町たらずであるが、病の身にしては中々大運動である。前代相傳と云ふたふれかゝつた衡門をくゞると、柳の老樹がある。若々しい芽をふいて居る柳は誠に氣がすが〳〵しくなるが、丁度其の樹の元に、自分位な年輩の青ざめた顔色の人が居たやはり同じ樣に病に苦しむ人だらうと思ふと何だかあはれなまたなつかしいやうな氣がして幾度か言葉をかけようと思つたが遂にえかけなかつた。

内へ入ると隣の松藏爺が居るので、誰れかわるいのかと聞くと『ワッチが此の間からハア寢とるのでがすよ』と云ふ。これはまた眞赤な顔色である。

漸く薬を貰つて歸る。日はほがら〳〵、どこかで鶯の啼くのが聞える。

二

今日は非常に氣もちが好い、朝から叔母樣の宅を訪ふ。我家から一町『松圓山圓城寺』と刻まれたまだ新しい御影石の立石から右に折れて半丁程、黑塗の板塀に、葉櫻の梢をみせた家が叔母樣の宅なのである。『おや從姉さん御病氣は？』つて仰へてくれたのが從妹の靜子さん。此の聲に此年三つになつた花ちやんが奧からかけて來た。叔母さんは留守との事。

午後、靜子さんと花ちやんを連れて裏の山へ登つた。筍の生えてる藪を通りぬけて、新墾の畑を一つ越えるとそこは小高い山なのだ。日あたりの好い所に腰を下ろした。花ちやんを連れてきて居るので中々油斷は出來ない。白雲の湧く南の空を見てると、『あれ！』と言つて花ちやんが腰にしがみつくので、驚いてふりかへると、小さな蛇が今茶の木の中へ隱れた。

父塚に畑打つてた人が中飯に歸つて來るので、はや其の頃かと、自分たちも歸つた。叔母さんは歸つて居なすつた。

夜、歸るときに叔母さんに、まだ蕾であるが緋牡丹を一枝戴いた。花ちやんがアチにもアチにもとせがんで居たが貰つたか知ら。

（評）一種の筆致あり。

○そゞろあるき（春）

岩代　松山薔薇

ブック片手に、我等はいま畑と畑とではさまれてゐる畷道を通り左側の松林にと身をかくした、幾百となく立並ぶ松蔭の間を遠ち近ちと坐ろに足を辿らせつゝいつのまにか身は林をはなれて居つた、見上ぐれば峨々たる半田山頂には、未だ春の光の至らぬか？處斑ら

に白雪は依然として猶ほ冬の景色を守つてゐる、それから歩を轉じてうねうね曲た坂道を下り、大樹の松が五六本形よく自然に生ひ茂つて居る、愛宕神社の見晴しへと出た、もう全く春の景色で一望千里とまでには行きませんが、まづ思ふまゝ、信達の平野は見らるゝもし是が十五夜の月の晩でもあつたらどんなに奥床かしい景色であらうかと思はれる、フトみればいつのまにか、我等は共に腰を社前の大石の上にかけて居つた『丁度よく此の石が』とはやさしき君の言の葉なのである、げにや、この大石は神が此の優美に艶麗なる平和の景色を、共に腰を下してながめよと與へて下すつたのであらうか、すぐ足許には、菫よ、蒲公英よ、山吹よと、色々の草花がいづれおとらぬ色に、咲き競うて居る、又麓には、棑桃白桃の花が人待ち顔に手まねする風情、とても我々の拙ない筆にては、なかなか、記す事ができないのである『おゝ』ぽかぽかとなまぬるい風は、一筋のおくれ毛をなでゝ、はた、やさしき友のリボンを訪れて、はては向ふに立てる若草に平和の春をさゝやいた、あゝ、その時はもう、自分等は塵の浮世をぬけだして、百千の花匂ふ天國の花園にても來たかの樣な心地がした。

（評）美しき夢見る心地す。

○筆のすさび

鳥取　米原かほる

逝く春を小庭さびしき晝の雨。○窓細目にあけしまゝ夢に入るあて人、よみさしのふみは何ぞ、時々風に吹かれて挿繪をどる。かなりやの聲細うして牡丹くづるゝしきりなり。○

朧夜を水に近うて梨の花白う簾に月もけぶる夜なり、はら〳〵とこぼるゝ花の窓にわかきやさしき人の草紙のはしにわざとならずしてそめしは何の歌、人も白し花も白し月も白し水も白し。○

葉びさしいと朽ちて南椽の楓若葉の緑深し。小寺の晝を白衣の御僧赤き机によりて寫經し給ふ、鐘樓のあたり白鳩むれて日はあたゝかなり。○

櫻亂るゝ夕なり。蹴鞠すとて西と東に正しく陣取つたるわかきやさしき公達。東の陣より出でゝ宙を飛びし鞠は院の櫻にふれて西の陣は時ならぬ花吹雪。兩陣輿に入つてさんざめく。

○

桃もちりぬ櫻もちりぬ。

惜しめども〳〵春は我世をさりゆく、流れゆく水底も流れゆく春の名殘と匂うてか岸の邊の山吹のいともやつれて黄金たゞよふ夕なり。

あて人乘せし渡し舟の一つ、美しき波間をぬひて進みゆく。

○

椽に近う小ごめ櫻の眞白に咲けり。

端居して春の日影斜にうけて睦ぶ二人、若き血潮のあざやかに通ふ玉の腕にからむ繻絆の桃色も艶たる姉の君、やさ頰にかゝる縺れ毛かきあげつゝ白きをはづる紙の手に巧に鶴を折ります、稚兒まげの妹君は膝に手をおきおとなしう見入る。

妹の君姉にならひ美濃紙のしては折れどあはれ鶴はならず。

春日斜に籠のかなりや一聲なける頃辛く成りし折鶴にこゞめざくらのこぼれたり。

（評）悉く畫なり。

○大觀兵式

赤坂　森ふさ子

奉迎の喇叭の澄み渡りたる空高う消え果てし今、群衆は咳の音もなく靜まりぬ、聖上には若葉の影明きあたりなる玉座に徐々つき給へば幾萬の頭は一樣に下りぬ、嚴かなる蹄音のひゞき來るにつと面上ぐれば肅々と鎭まりて御親閲に接したる紅帽はいつしか動き初めたるなり、二百三高地に鴨綠江に幾多敵軍を驚かせし其足なみよ今こゝに嚴なるひゞきと化して其とゝのへる樣は恰も立ち並ぶ竹の林を望むが如く嬉しとも嬉しき光景に、聖上の大御心や如何ならんと遙かに仰ぎまつれば恰も靜かに廻り來れる軍旗の今し御前近う過るにかしこくも御目は屹とそゝがれぬ、あゝ　切れ切れなる其旗旒實に幾多の忠魂か宿る、やがて馬蹄の音勇しく聞え初むれば早や勇士の乘馬隊は徐々と活動の鞭打ちて現れぬ、夜もすがら置きにし露は高う上りし日影に消えて高原の地今や蹴立つる砂塵に綠樹遠くへだつれば勇士が乘馬の其前後には黑き烟りを卷き上げて遠く望めばさか卷く浪を蹴破り行くかと疑はしめ近く來れば砲彈の地にくだけて黑烟の湧き上るかとばかり其壯觀絶語、かしこくも貴き御姿を望みまつれば姿勢を正して屹立し給へる御胸のあたり金色の燦爛たるに今や上りつめし日の光に反射してために塵を拂ひ地上もまばゆく光り輝きつ、間斷なく湧き崩るゝ歡呼の聲に又もぱつと卷き上ぐる砂塵に御影はやう〳〵朧になりて遠く雲井の奥に退き給へるかとうたがはれ其神々しさ云はん方なし、一定の佩劍の音馬蹄の響は時々群衆を驚かして紅帽の影は現れては消え失せ消え入りては現れつこゝに一場の大活動寫眞を現出せしかとばかり

歡呼の聲を打ち枯しつゝ醉へるが如き陪觀の人々は我にもあらで夢心地となりぬ。

（評）今少し筆を練り給へ。

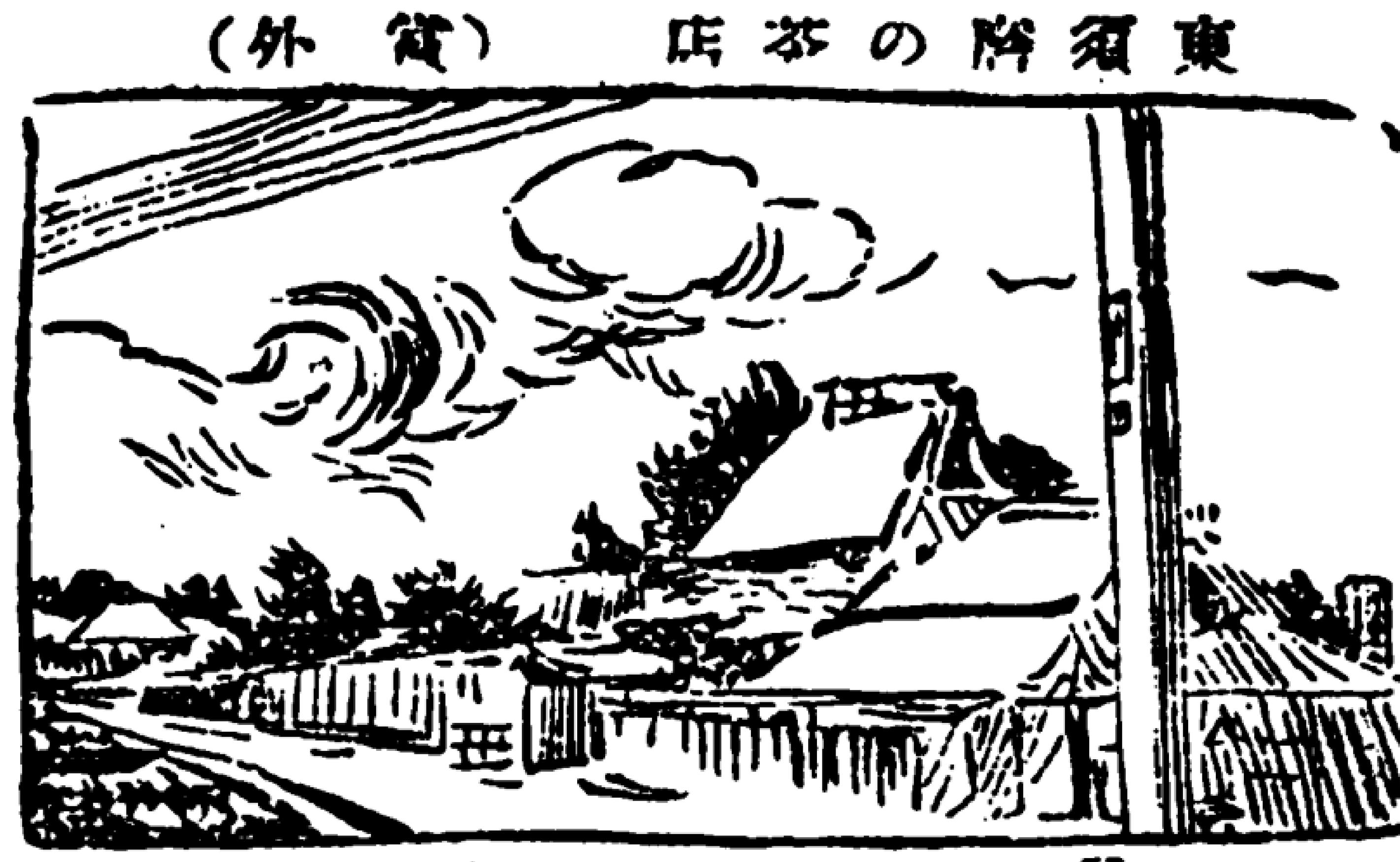
○奈良の夕べ

大坂　越智滿壽美

磨ける鏡のぺたらむ如き猿澤の池のほとり柳の許にて暫時イみ、一叢繁れる木立の中に、そゝり立つ五重の塔の、あかき夕陽をまともに受けて、鐸鈴のきらくと輝ける樣など、飽かず眺めつゝ、右に廻りて彼の五十三ある石段をのぼりぬ。

見渡せば右手の方に近く、こんもりと㑒伽山の綠の木々に、夕暮の色は靉きて遠く春日、三笠の山々、うつすらと薄衣もて覆ひたらむ如くにて、振り返れば日はいつしか西の彼方に入りて、夏の夕暮の華やかに、深紅はオレンヂにオレンヂは頓て薄紫に、宇宙の大なる豫言者がその美しき裳をひろげたるかと、我を忘れて見入りしが、促されて又靜に歩を運びぬ。刻一刻に夜の色は、この靜穩なる公園を包みて去らむとし、花の松の下をくゞりて、師範學校の前まで出でし頃は、早やも向ふなる博物館はおぼろに白う夢のごとく。

東須磨の茶店　（賞外）



神戸草出川　藤原ふじす

春日神社へ詣づなる本道をよぎりて、南の方古りたる松、杉なんどの一きは繁れる小山の上に出づ、草葉における露しとゞにて、足駄うがてるに尚、濡れ添ひて心地惡しきばかり、七日の月は早や中空高くさし昇りてあり、松の梢にかゝりて靜に弱きそが光りを我らが上へと投げかけぬ。こゑひくゝ四季の月など誦しつゝ、友にも別れて一人家路にいそぎぬ。

（評）蒼潤の趣あり。

○魚屋と車夫

靜岡　たか子

窓を開けば下を流るゝいさゝ小川の水音低く、細けれども淸ければスイスイと泳ぎ行くメダカの群までかぞへられ、蛙なき水雞なくやゝ廣き早苗田を隔てゝ彼方には一間程の細道あり。暮れ行く春を惜みてや今朝まで降りつゞきし細雨しばし晴れて、遠の峯近き山半は雲に蔽はれつゝ見渡す廣野の深綠いとゞ心地よし。

ガラガラと喋しき音して賑しき笑聲の聞ゆるにふと見れば前の細道を二人の人の歩み行く。一人は眩き程ま白きシャツ半股引に草鞋がけ細長き丈夫げなる足して空の人力車ひき居り。今一人は紺の半天を裏返し肩當

の出でたるを着ていと輕げに魚荷をかつぎぬ。魚屋は丈低く丸き方なるに一人の高く細々とせし先づをかし。小田の蛙も耳おほふらん大聲して語りつ笑ひつありしが二人はふと止りぬ。何すらん、面白きものや見出せし可愛き花や目に入りし、訝しみつゝ見てあれば二人は例の笑をつゞけつゝつと動きぬ。あはれをかしあなたへがたや。魚屋は車を、車夫は魚荷を。我が笑ひ居るを二人は知らじ、石に當りて强き音のするを氣にしてや地を見つゝ、あぶなげに魚屋の行けば、調子惡しくゆり動く荷の前綱をおさへ後綱を握りて身振りをかしく車夫の歩む　やうやう車の音のかすかになり行きてやがて彼方の森かげにかくれぬ。風さと吹きてかざしの白バラほろほろと美しき花びらを水にうかべぬ。

(評)　輕妙。

○樂しき我家

信濃　露月女

冬の樣な、寒い冷い時でさへ、溫い樂しい情が此小さい藁家から、もれ溢れて居た我家、梅もほころび初め鶯の聲も時々は、聞える此頃、どうして樂しくない事が有らう、父樣は今、お湯から上つて入被つて、赤黑く湯氣のホカホカたつ胸を半露して、極、風流な床の前に座つて半開の梅の枝ぶりを直して居られる、母樣は赤兒に乳房を含ませ乍ら嬉し相に、其顏を覗き込んで入被る、湯殿には弟や妹が未殘つて居るらしい、キイキイさわぐ聲ヂャブヂャブお湯をかけ合ふ音がよく聞える、次の間には早大きな卓がすゑられて、姉樣のお手料理のお芋が人待顏である、兄樣は湯殿へ弟等を迎へに行かれた、少したつと御勝手の姉樣も、父樣も母樣も、兄さんもはては弟妹等も皆卓に集つて來た、父樣が、「御飯は誰しも惡くないと見えて其時だけは、皆よつて來るわいハヽヽヽ」と仰つたのを始めとして、皆が一日中の面白かつた事、嬉しかつた事を、さも愉快げに語り合ふのであつた、やがて夕飯は終へた。大分永い間食べて居たものと見え、襷をはづした時は早八時であつた。母樣は之から明日の朝のお菜の用意をなさる、針仕事を遊す姉樣、皆に本を讀んで上げる役の妾も、共に明るい洋燈の許へさしよつた、兄樣は、土間へおりて鞋を作られるのである。「寢る程樂は無かりけりかな」と二階へ上つて入被る父樣の後をついて行く弟「浮世の馬鹿は起きて働けかな」思はず一度に、どつと笑ひ出した、偏人と云はる兄樣迄笑はれた、私共の仕事の邪魔をして居た妹は理も分らぬに一番高く笑つた、妾は弟の言葉より却つて此方が可笑かつたのである、アヽ樂いのは我家。

(評)　名を得るは易し利を得るは易し、家庭の樂みを得るは甚だ難きものなるな。

和歌

佐々木信綱先生選

天 苦舟

安房國佐久間村　代子女史

只一つ入江にとまる苫舟の
　ともしびふけて蘆の花ちる

〔評〕嘗て南清に旅行せし折蘆花澤わたりに夜泊せしおもかげも浮びてなつかしき歌。

地 ○

千葉縣印旛郡成田町上町　長谷川はる子

菜の花やよき朝あけを眞白なる
　小鳥むれとぶ江の南かな

〔評〕柳のかげの藁屋にたゝずめる少女もあるべし。

人 ○

上毛碓氷郡東横野村　磯貝すゑ子

花戀ひてうせし胡蝶を歌反古と
　共にうづめぬ葉櫻のかげ

〔評〕詩人が苦心の作と共に埋められて胡蝶の靈も地下にほゝゑみてあらん。

秀逸

○ 萩の露硯にうけて書きて見ん
　かざりしられぬ秋の憐れを
豐前　服部秋子

○ 鳶二つ輪にまふ見えてあけ方の
　空おもしろし川ぞひの道
美濃　傍島芳翠

○ 智恩院櫻吹雪を紫衣の僧
　白衣の僧と經ずして行く
陸中　黑澤美江子

○ 雨すぎし庭の櫻の花のつゆを
　硯にうけて春の歌かく
茨城　中西芳子

○ 緋牡丹に春雨細き朝の窓
芝　秋山月子

花賣る少女聲うら若き　伊勢　世古口靜子

○

葉櫻に人もとひ來ぬ山寺の
清水湧くほとり藤の花咲く　福井　野坂まさを

○

耕してかへる夕を月いてぬ
栗の花散る川ぞひの道　大阪　文子

春夜

朧夜を忍びの牛車過ゆきて
花吹雪する大原の里　香川　松永しげ子

○

花咲けど君は居まさず我一人
物思ひ居れば笛の音ぞする　福島　村岡やお子

○

かなしみを笑にかくして故郷の
君と別れし磯のまつ原　柳河　名無草

○

野に立ちて雲に思ひを馳せし夕
ふと我が胸の希望啓けぬ　麴町　千鳥

○

歌反古に君が名我が名書つけて
ひとりほゝゑむ春雨の窓　鳥取　米原かほる

○

歌心歌にはならぬ春の日を
眠さそひて桃の雨ふる　薩摩　福山よし子

○

人しれぬ思抱きて散る花の
木の下蔭にひとり泣かな　武藏　木村泉舟

○

南禪寺夕雨霞むさくら散る
ひとりはをしき蛇の目傘　茨城　小泉波滿子

○

舟二つつなぎ合せて人はあらず
磯の夕ぐれ夕雨のふる　熊本　中村つね子

○

なやみある胸を抱てたゞ一人
とぼそによれば春の雨ふる　淺草　大沼さゆり

○

淋しさを語るこの世に友なくて
またも訪ひきぬ君が奥津城　磐城　橋本滿津子

○

悲みを笑にかくして故郷の
兄と別れし夕月夜かな　伊豆　ため子

○

いかにせん折て手向くる雛もなし
かたぶく軒の白もゝの花　豐前　はつよ

○

何となく淚ぐまるゝ夕暮を

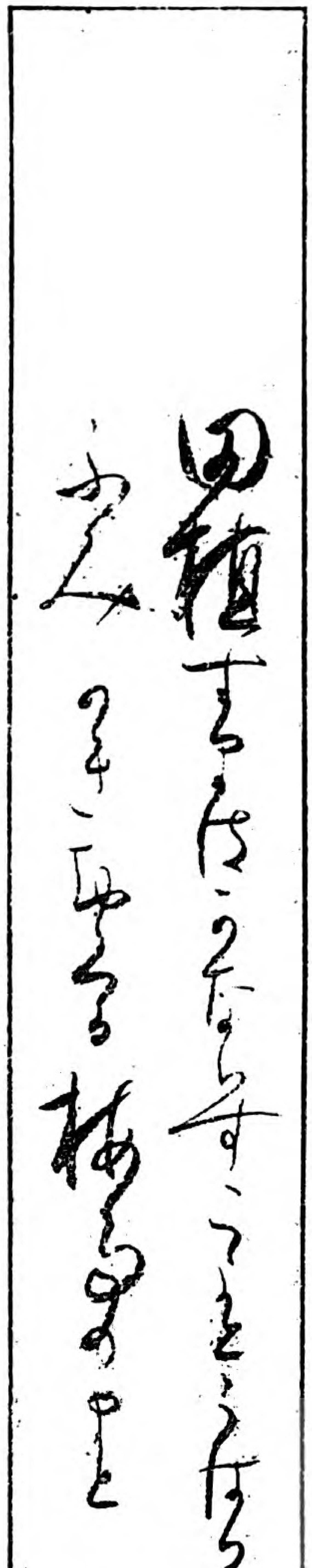
とぼそによれば桃の花散る
上總 梅溪女史

○枝と枝かはす櫻の青葉かげ
掛茶屋小さく川に臨める
大阪 島田須受子

○父ゆきて姉又ゆきて母ゆきて花賣るわれの影うつす朝
山口 渡邊靜子

○すみれ咲く野邊の小川の春日和さゝ舟流す人愛らしき
大分 森てつ子

岩上勇子筆



○あけぼのゝ重野の百合の露わけて戀しらぬ少女の歌面白き
神田 大澤隆子

○快よき朝の風にゆれ〳〵て露の香高し窓の若竹
羽前 五十嵐豊子

○たちばなの涼しき風にあたらんと立てる門にほとゝぎす鳴く
新潟 夢野小百合

○若うして病む身に落つる木れんの花の香淋し春雨の條
長崎 不二田品子

○春雨は菅笠被たるおさな娘の友仙袖をぬらしつゝ降る
備後 龍川爲子

螢

草原のダイヤモンドは古しえの車胤となりて夜を照す哉
千葉 高梨須美子

藤棚

藤棚を水にうつして見る時は下から上にさがるなりけり
安房 川名雲外女

○うつゝなる胡蝶の夢のあと追ひて吾れ荒小田の野守とならん
岡山 紫陽子

○ほとゝぎす雲の彼方に忍び來て雲よりもらす初音なるらむ
徳島 和多志津江

○詩の神の右手を騁して遙視る夫れにも似たる富士の朝日よ
千葉 平賀むち子

○稀に來る夜半も悲しき松風絶えずや苔の下聞くらむ
和泉 涙江子

○咲き續く菜の花畑末見えず廣き野原の鐘霞むなり
佐渡 谷川桂月

水鶏

槇の戸をたゝく水鶏に目はさめぬ月は端山の松にかゝりて
磐城 村岡花月

○今日に五日京の妹の文は來ず暮れ行く鐘に花散る夕
下總 はな子

○若竹に夕立すぎし宵の月仰ぎて古りし琴をかなでぬ
肥前 上瀧紫雲女

鶯

ふる雪に梅の花笠さしかざし春告け渡る鶯の聲
筑紫 千代子

ほとゝぎす

まてしばしともにたづれん時鳥ゆきにし春はわれも戀しき
美作 性金紫女史

○十畝つゞく菜の畑小道黄昏て旅の粧裝の人急ぎゆく

○　常陸　石田あき子
亡き姉のうつしゑ抱きて泣く夜半を軒端に細う春の雨ふる

野遊　茨城　野菊女史
春の野にすみれつばなとあこがれて暮るも知らて遊ぶけふかな

述懐　東京芝　野水江
たらちねの母の手づからぬひきせしこのわたいれをいつかわすれむ

○　豐前　百留むら子
里一つ見えぬ山路の蟄下り楠の木立に杜鵑なく

○　横濱　吉川霞峰子
暮れて行く春を惜しむと戸に立ちて風の行方へ眺めやるかな

惜春　山梨　井伊松子
見まかひし雲だにのこせしなとへの風よさくらはよしさそふとも

春風　美濃　芳美
花の香をのせて吹きくる春の風笛吹きすさび野に立つ我に

○　上總　桐谷牧子
はしゐして夕の富士見るよきこゝ地こつよき心地病癒えなむ

○　岐阜　田中悦子
日は落ちて秋風さむき夕まぐれ雁なきわたる磯の村里

○　姫路　三木喜代子
迷ひ子の泣きつ　辿る春の野を暫し忘れて蝶と飛び交ふ

○　上總　田村よし子
血にしるす誓文寒き新月や筑紫磯濱今旡むとす

○　本所　山田すみれ
咲きしより見るは少なき櫻花うつろふこゝろ人にしらせよ

○　岡山　小野央草
春雨に櫻の蕋散る寂し夜に我故郷思ふ寄宿舎の窓

○　○乃信子
いをねぬる夢覺まさじと緣先の猫のあしもとやをら通りぬ

○　岡山　永原多計子
我か友はとつ國さして漕ぎ出てぬ波のまに〳〵見えつかくれつ

○　豐前　岡本敏子
曉の鐘の音迷う霞に消えて散る花淡紅し古廟道

○　陸中　黒澤美津子
草鞋ときて櫻にのぼれば夕月の若葉をわたる風の涼しき

○　鹿兒島　淸水みつ子
獨りの身にしむ春や父亡くて母君ひとり鍬かつぎます

○　兵庫　城谷濱子
少女等がふし面白く早苗取る聲も忙しき夕暮の空

○　越前　井田文子
梅散るや世は寂として雨細う聖人默す春の宵哉

○　羽後　前田ひさ子
なつ山の青葉がくれのおそざくら何をたのみにひとり咲くらむ

○　千葉　八木昌雄
夕燒の空も何時しか靜まれば東の山に月出てにけり

杜鵑　品川　小林のぶ子
水淸く山美しき此の里は夕べ夕べに杜鵑なく

○　尾張　梅原うら子
百千鳥さへづる庭にさく花は梅か櫻かはたまた桃か

○　福岡　さかゑ
橘のかをれるやどをおとづれば若き乙女のいてゝむかふる

○　安藝　千鳥
ほゝゑみてうつしゑ眺むる窓の下夕日なゝめに櫻花ちる

○　山口　河津たれ子
鍬の柄につかれし腕をやすめつゝ豐けき垂穗見るぞうれしき

○　四多摩　坂風濱子
夕暮に空の模樣をながめつゝ險しき道を急ぐ杣人

○　阿波　すみれ女史
床の上に塵にまみれし花瓶の待てど花挿す君あらずして

暮春　澁谷　芳子
春行きぬ樂しき春は暮れ行きぬ思出多きさみだれの音

○　京都　大澤白葉女史
色褪せし法衣纏へる旅僧の日浴びて眠る菜の花畑

春宵　　靜岡　植田文江

何となう心ときめきて夢うつゝそと窓おせば桃の花ちる

○　下總　長谷川しん子

待ちわびし櫻淡く香りけり心してふれ春の夜の雨

○　土屋　初海棠女史

花なりきまことか花の露なりき島田の髪のいとが姿の

○　千葉　田村謙子

昔うけし人の情に娘賣りてむくゆる秋をうれしと泣きぬ

○　廣島　曽川秀子

瓢手にかへる翁の宿きけばうき世をへだつ花の白雲

暮春　　下野　菊地いち子

ゆく春を惜しとてやなくほとゝぎすなごりはおなじ人のながめも

惜春　　栃木　兒島とく子

待詫びし我にはいとゞ梓弓春のいまはのしのばるゝかな

時鳥　　埼玉　中村紫香子

鳴く聲にそと窓おせば影みえて月もる青葉夜露にうるはし

○　紀伊　紫薫子

大空に笛の音ひゞき頂きの神の御庭に花散りしくも

夜明（賞外）　本郷龍岡町　橋本いく子

○　相摸　ゆたか

行き暮れて宿りの露のつれなさにみやびの眞似の花宿りかな

○　死怨女

岩か根の燃ゆる淵の濃緑に燃ゆるつゝぢの影あざやけき

○　靜岡　佐藤かつ子

君と二人摘ひし清水木葉散りて汀に秋の草深う吹く

○　神奈川　吉田ちゑ子

行く船は眠れる島にかくろひて百里の波間月あはく見ゆ

○　水戸　芳江

慈母ならぬ繼母の仕打を若き娘が葉がくれに泣く聲も低くしや

○　丹波　なみ子

歌もなく唯心なやむ春の宵朧ろゝがごと櫻こぼれぬ

○　西宮　中西ゑみ子

後より我名呼ばるゝ思ひしてかへりみ見ればたそがれの川

○　上總　翠葉女

若葉かげ文字新しきおくつきにしきみ手向けてたゞ涙かな

○　新潟　渡邊ふじ子

見るかげぞなき裏庭の海棠に夕さびしき秋の雨ふる

○　四谷　秋野しらぎく

便りきくよすかなき身は白雲の消え行く方ぞたゞなつかしき

春雨　　豊前　みさを子

櫻もちめせの少女の聲たえて葉かげ静かに春雨のふる

○　堺　[illegible]兒壽惠子

背戸に立ちて牛の子を呼ぶ夕づく日車井の屋根に梨子の花散る

○　京都　植木きく子

かたみなる母の小袖を抱きよせて又もかなしむ春の夕ぐれ

○　下總　三橋浪子

我が園の梅の一枝ほゝ笑みてやみぬる母の心慰む

○　奈良　藤田そめ子

瓢折る京のはづれの寺長屋夕しづかに芥子の花散る

○　弘前　佐久子

美しきすみれの床に君と縱し夢覺め方の胸さわがしき

○　日本橋　栗山紫柳子

なさせこの御經をまつるこの夕べみだれみだれてちぎれ雲とぶ

○　麹町區　村田琴柱

したゝらん緑や雨後の若葉山五重の塔に鳩のむれ飛ぶ



○　横濱　岡田まつ子

元禄の長袖着たる舞姫が袖のそよぎに花ちりみだる
○　長門　長井閑子

木魚の音絶えだえに戸をもれて軒端寂しく桃の花散る
○　紀伊　有本登美枝

月か花か戀つ戀れつ二十年を君われに泣きわれ君に泣く
○　茨城　川並義子

草川の橋の袂のひとつ家なびく柳に春の聲あり
○　新潟　中林ひで子

うなゐ子がままことすなる軒の端に山吹さきて日はたけにけり
○　高知　春野ゆき子

山百合に露の香こもる朝月夜京へゆく子か牧の笛吹く
○　京橋　陽子

文机に歌おもひつゝうたゝねのさむれば淡し櫻間の月
○　三河　中島いそ子

行く春やうらみもふかき六波羅に何處ともなくつゞみ遠音
○　五月雨　千葉　伊藤つよし

花は根に媚は里にかげうせて空しき野茶屋たゞ五月雨
○　伊豆　田舍娘

菅笠の並びて見ゆる小山田に田植の聲も豐なりけり
○　麻布　冷花女史

緋牡丹の花に繪筆をとる君の小袖に染む花の下風
○　新竹　茨城　前原琴子

夏きぬと重ねしころもぬぎすてゝはたえ涼しき新竹のいろ
○　長野　中島さつ子

露すらも重げに見ゆるはちす葉の上に宿れる夏の夜の月
○　墓參　豐後　玉露女

春雨に傘さしそへて亡き君の墓の御前に花たむけつる
○　伊勢　川端柳子

雨にぬれし庭の白藤そと折りて君は簪にしぬ我詩にしぬ
○　伊勢　世古口靜子

睦まじく心よせあふ池なれや水に蓮岸に藤なみ
○　神奈川　清水はな子

駒にのりて歌誦しながら逍遙ひぬ花の嵯峨野の春の朧夜
○　夕顔　德島　齋藤菊子

ゆあみして月まつほとの垣根より光りそむるは夕がほの花
○　松山　長能日出子

たびまくらねられぬ窓の戸をおせば月にばら〳〵花ちりみだる
○　筑後　蓆子

春風はいとやはらかに花ゆすり胡蝶が夢を破りたるかな
○　早苗　下總　兼坂秀嶺

賤の女が小笠かたふけふる雨に裾ぬらしてとる早苗かな
○　麻布　加藤延子

朝ぐもり御園の池の下行水藻の花は白く緋鯉ひ餌を食む
○　死別　熊本　八並喜美

如何ばかり今日の別れの惜からむ散らぬ花咲く此の世なりせば
○　妹に逢ひて　下總　霞浦女夫

君に逢ひて袖にあふれし嬉しさを歌にや詠まむ文やつゝうむ
○　京橋　梅浦星香

吹きすさむ声の脊葉の蘆笛に春の七浦月朧ろなり
○　杉本とし子

夕暮に海べに出て見渡せば戀しさあまる故郷の山
○　黄昏　淺草　小野寺はな子

黄昏れて野の徑かへる牛飼のかすみて見ゆる二日月かな
○　福井　野坂まさを

かきあぐる髮のみだれに小櫛折れぬ牡丹くづるゝ曙の窓
○　上毛　松月女

靜夜のねやのふし戸に身をよせて朧ながらも雁の行方を
○　明石　みどり

二十日月若き理想をはかなみつ追懐に泣きぬ葉櫻かげに
○　埼玉　牧野八重子

日の本の魂に曇りのなかりせば外國までもてらさゞらめや

○ 岩手　蔭森子

さらでだに思ひみだるゝ此の夕鐘の音低う春雨ふり出でぬ

○ 西備　池田ばいう

春風に帆船して行く南海潮くれなゐに珊瑚島見ゆ

○ 長門　長井閑子

泣き泣きて涙つきなば君と吾そぼ降る雨に濡れても見むか

○ 滋賀　辰井琴子

誰れかくる氣配するなり春の宵すゞろ心に花窓おしぬ

○ 牛込　阿部勝子

廣澤の池の浮草はびこりて夏來る頃と知られけるかな

○ 栃木　寺内みわ子

さしいづるさむき夕月川沿の草原一里秋風ぞふく

○ 慈善音樂會　熊本　逝く春

同胞を救はむためのこの集ひ物の音長う小雨そぼふる

○ 宮崎　ふみ子

いづれとも鐘に心はなけれ共たもとをぬらす入あひのかれ

○ 群馬　吉田きみ子

美しう藤の花さく掛茶屋の門にとまりし自轉車の人

○ 大阪　森山たの子

小夜更けて春雨後の月おぼろ社の方にふゑの音ぞする

○ 春雨　熊本　齋藤松月

窓押せば糸より細き春雨の青葉うつなり妾は淋しき

○ 橫濱　中込淡子

霧りゆくすゑいかならん思草摘み初るだに袖の露けき

○ 秋田　黑丸登美子

見るたびにかなしくもあるか亡夫の背に有る子みてさめ〴〵と泣く

○ 福岡　柳たれ子

仇名草いかなる人の植ゑおきてかゝる浮世に散るを見るらん

○ 橫濱　岡田まつ子

故郷に歸る心のうれしさは世の人常に同しかるらん

○ 神戸　輝月女

われのみかみ山のおくにはかくれて春におくるゝ花もありけり

○ 讃岐　香川節女

笛の音はかすみに消えて朧夜の風暖かに櫻花散る

○ 京都　山川すみれ

すゞかぜにたもとふかせてもろともにほたる追ひにし友ぞ戀しき

○ 陸前　靜香

思はじと思へばいよゝ思はるゝ思ひ出多き我ふるさとを

○ 奈良　稻葉千代子

ふるさとの母は如何にと思しに折から文の來る嬉しさ

○ 長野　島垣永子

月見ればいよ〳〵戀し四とせ前君と別れし時を思ひて

○ 春の夕日　岩代　松山薔薇

若楓すき間たえまの葉毎よりもるゝ夕日の彩美しき

○ 岡山　ます子

都にと友の歸るを見おくりて神にぞ祈るつゝがなかれと

○ 兵庫　菅森紫水

旅の日記病とばかりけふ七日泪もろさの春の雨ふる

○ 鹿児島　前田みつぎ

張り裂けん我が胸のみか情實に迫られ嫁けと仰す心も

○ 本郷　朝井松子

白妙の雪の上なる月人の桂の枝を君手折りませ

○ 赤阪　森ふさ子

腰元がとび石つたふ雪洞にうつりて榮ゆる霧島の花

○ 燕　丹後　竹村こま子

朝まだきふるすを出でゝ燕は梅の梢に鳴きくらすなり

○ 兵庫　初音

つく〴〵とおもひ暮して亡き父が手植のやなぎ見るぞかなしき

○ 品川　小林のぶ子

櫻散る春の夕べに笛すみて寸戸の村に月斜なり

○ 芝　新野蕗枝

嬉しくもかなしくみゆるうつしゑは去りにし友のかたみなりけり

○ 無名子
人たへぬ我が花園はたそがれて水のかゞみに浮ぶ花舟

春海 鹿児島 尾の上庭子
騒ぎにし西の仇浪静まりてめてたき御代の春の海もせ

○ 茨城 青柳愛子
都なる友に送らん一束の春の名殘りのこのすみれ花

○ 陸中 阿部とみ子
琵琶の湖五月雨降りて朝ぼらけ唐崎遠く三井の鐘なる

○ 水戸 松島由利子
青柳のいとゞ昔を忍ぶかな去年のまゝなる夜半の春雨

螢 埼玉 四分一しげ子
小春日につみてはすてし若草の花や螢と なりにけらしな

○ 伊豆 上原ゆき子
おくやまに細道わけて草かりになく鶯に夢さまされむ

○ 大阪 島田ひろ子
見る度びに幼なき昔偲ばるゝ金絲まばゆき友禪の袖

○ 福岡 河内美代子
名だ聞けば知らずといひて微笑ぬ友禪こそて顔に覆ひて

○ 深川 古琴女史
それと見し夢路の君はかげもなしうつしゑ抱きよゝと泣き入る

雲雀 横濱 星望女史
空かくる翼は伸びず籠の中になげく雲雀の聲ぞ戀しき

○ 茨城 秋山隆子
たへがたき思ひ秘めたるこの胸を斯くぞと君につぐる日のなき

藤花 安房 忍足笛音子
咲き誇る紫色の藤花にあそぶ胡蝶の姿なつかし

○ 美濃 木村あさ子
人やいざ菫の花を野に摘みて送る思ひを誰か知るらむ

○ 福岡 獅子鹿初代
御手のべて歎結びます姫君の振分髪に花散りかゝる

○ 磐城 村岡花月
大空に光ことなる星二つ歌なきわれになにの啓示ぞ

藤 播磨 植木初江
みぎはなる松にかゝりてさくふぢの清き流れにかげをうつして

水邊柳 攝津 小北春枝子
もえいづる柳の糸に引れてや魚もよりくる春の川づら

○ 伊豆 加藤溪流女
美しう木犀かほる朧月夜君待つ宵の樂くもある哉

○ 群馬 正木ゆり子
青葉しげる岡の邊を風もなく白きましろき雲たゞのぼる

○ 上總 鈴木文子
落葉かく子等は歸りて古社松の葉がくれ閑古鳥なく

○ 弘前 佐野てる子
罪多き胸を抱きて亡き母のみ墓にたてば花ちりかゝる

○ 奈良 白藤女史
野のわたし乗る人もなく日は落ちて雉子なくなり夏草かげに

春雨 伊勢 六田榮花
木經の音もいつしか靜まりて山寺淋しく春雨ぞふる

○ 芝區 岡田すい子
朧月夜卯の花垣のかくれ家に憂きこと語る歌人あはれ

○ 尾張 渡邊かせき子
磯の屋に世をうらぶれて島を守る戀せぬ我に憂きこともなき

○ 下谷 慶子女史
かきならす琴も侘びしきうさはらし戀捨てし身は思ふこともなき

○ 鳥取 米原かほる
梨の花春の夕を散りすぎぬ人なつかしの歌そむる子に

○ 千葉 石原とき子
風にちる花の一ひら手にうけて浙てふりゆく我身をぞ思ふ

○ 茨城 鈴木たい子
青柳なふく春風になぶられて糸とみだるゝわがこゝろかな

暮春 武藏 青柳彌生子
徑二町わか葉の色に染められて人美しやくれ方の春

○　佐世保　白菫

はなぞめの衣はすてゝ友もなく故郷の月を戀しくぞおもふ

○思婦　攝津　紫菊女史

病むとしもなきに枕の重うして恨みは長きのきの雨かな

○　小倉　白石光枝

花に月に歌ひし袖を分つ共又逢ふまでは君さきくあれ

○　濵田　三明糸子

緋桃さく野邊には三里行きくれて此宵こもる花の下宿

○　岩代　服部貞子

嵯峨野路に侍女と二人の玉杖やかつぎの人の歩みはかどらぬ

○　佐世保　きわ子

五ヶ村の善男善女小傘さして寺門に集ふ雨の涅槃會

納涼　神戸　柳溪子

鳴く蟬の聲もしぐれてうす墨の夕すゞしき夏のしたかぜ

○　兵庫　菅森定子

しばしとてすがるをなどか君が母花をみすつる雁をおひけむ

夏夕　久留米　中島きよの

青柳のわかばのこずゑふく風のうらなつかしき夏のゆふぐれ

○　下野　鵜見なみ子

舟子の唄高うひゞきてたそがれぬ川ぞひ一里まばらなるむら

○　横濵　花舟子

生ひ茂るからたちのあたり指して昔を語る人もありけり

○　宮城　洋月なみ子

野歸りにやさしきすみれつみて來ぬ誰に送らん君まさずして

○　陸前　青柳糸子

散る花に思をのせて流しやる流の末は君在す里

○　信濃　露月女

十五夜の月は雲間に見えずなりぬ吾は歎きし人生もかくやと

○　山田　小林敏江

散る花は又來む春に咲きぬるに吾が身はあはれ何時花の咲く

○　三重　すみれ女

勝どきに平和なりしみ祝とこゝも祭りの八幡村々

○　薩摩　かな子

亡き母がめでにし櫻手向くればまゝしき人の心たがへて

○　富山　中土義子

日の匂ひそらみつ山の高根よりはれうちなへて匂つなきわたる

行春　大津　よつ子

行く春を惜しと思はゞ花散りし梅の梢に泣きて止めよ

○　埼玉　山口邦子

五月雨のふるもいとはて咲く菖蒲清き姿を水にうつして

○　三河　岩瀨錦子

若公達が駒乘り寄せし葉櫻に琴の音絶えて御簾降されぬ

○　靜岡　たか子

物おもひよるおばしまをふく風にふと見あぐれば夕月のかげ

○　熊本　湖畔

菊もかれぬ紅葉もちりぬ友も逝きぬ我世人の世秋ふかきころ

蝶　丸龜　しげ子

ちら〳〵と散り來る花に戯むれてあそぶ胡蝶のおもしろの世や

○　茨城　中西歌子

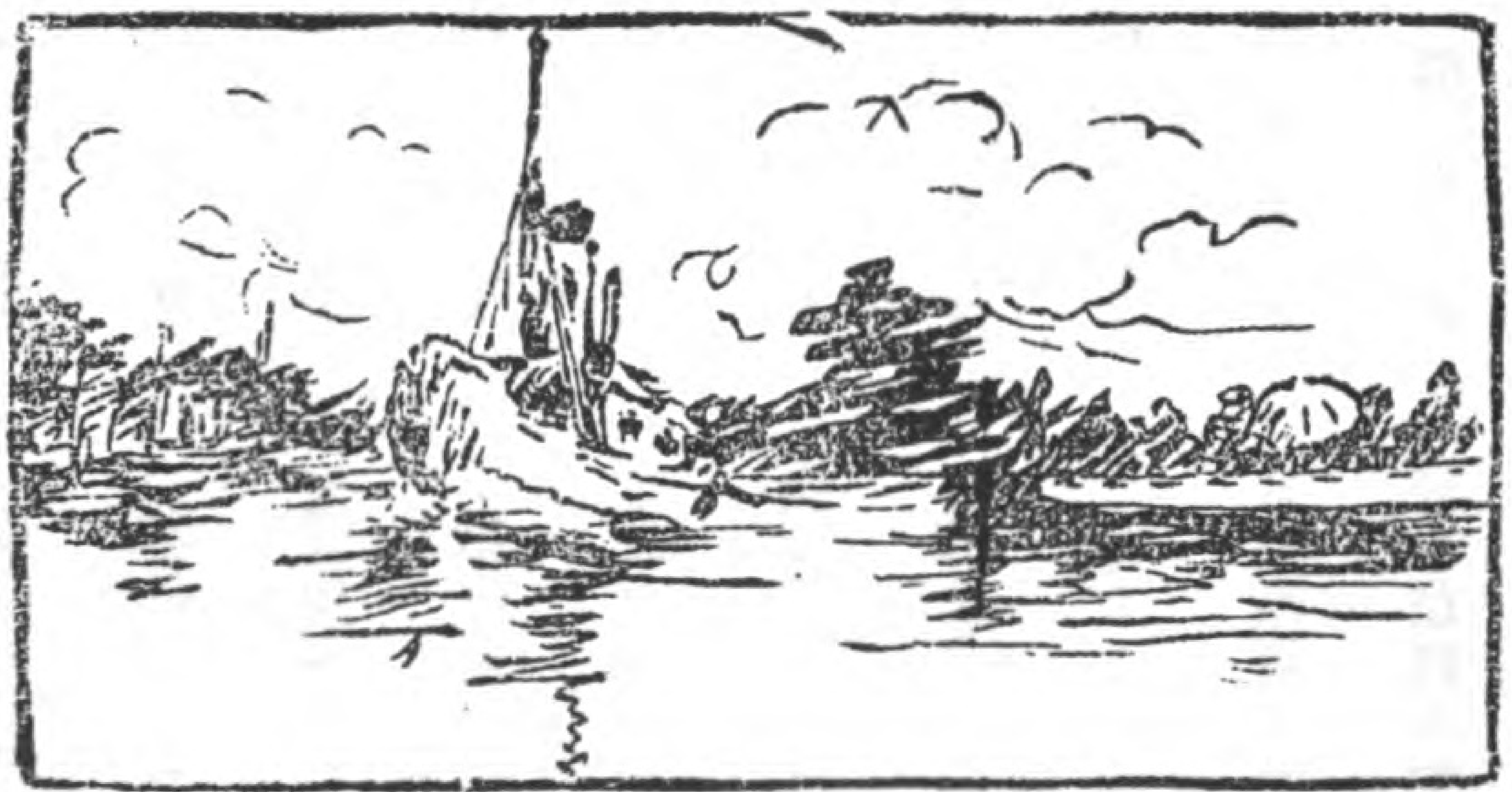
春の野や夢のなごりの朝ぎりにたえ〴〵ひゞく小唄凉しき

○　岡山　衣笠貞子

夕月にひとりたゞずむ少女子は野良をかへりの母や待らん

○　豐多摩　太田とめ子

葉櫻の吉野淋しく黃昏れてそぼ降る雨に春暮れにけり



曳船　（賞外）　日本橋數寄屋町　林しげ子

川　越後　大塚雅子
こぞわけし山の谷川この春も花をうかべてわれをまつらん
○　愛知　山田夢烟
山かげに見る人もなしおそ櫻折りてかざさん春のかたみに
○　埼玉　すみれ
夕空は月一ぱいにかゞやきてはちすにうけし水晶の玉
○　京都　はつしほ
何の世かこの麥畑に寺ありし語りて聞かせ古き瓦よ
○　德島　木戸玉緒
心地よく見ろや靑田の靑景色古柳の枝に眠る月影
○　岩代　みどり子
はてしなき大海原の浮船は運命につるゝ人とこそ知れ
○　新潟　中林ひで子
賤の女が機織る音もをさまりて垣根靜に桃の花ちる
○　備前　松本おちば
櫻ちる森の小陰に入りましぬ馬を下りて公達のむれ
○　下總　大崎範女
蠟燭の短き緣とおぼせよと其の夜の花のさても悲しき
○　筑前　花田くら子
溫泉の宿の春やゝ更けて夕ぐれを庭の若葉に雨少うふる
○　南多摩　山村とき子
夕日かげさすや淋しき里川に山吹ちりて春ぞ流るゝ
○　尾張　長司はる子
小羊の笛の音きゝて走り來る綠滴る雨乞の原
○　紀伊　紫蘭女史
幼子のなく音もとみにやみにけり日の丸かける御旗手にして
招魂祭　對馬　重富白露
露はらふ嵐に散りし山櫻薫は世々に匂ふなりけり
○　長野　田村愛子
親はしき友見送りて歸る夕時雨ふるなり常磐城の川
○　姫路　稲戸ゆき子
何すれぞ詩は成らざる興そゞろゆらぎながらの栞の花小みち
○　北海道　ぴはり子
枕べの小さき燈火かきあげて文みる夜半に春雨の降る
○　美濃　木村竹雨子
五月雨に寂しくなれば靑柳の下のみ池に鳴く蛙かな
○　上毛　新井菊子
ゆくりなく櫻小路を若嫁の戰語りに花ぞ散りける
○　大坂　岡うしほ子
流れゆるき汀にうつる柳影哀れ落葉に活濡くだけぬ
○　越後　水野りそ子
黑垣のなかは床しき白牡丹奧に少女の笑ひ聲する
○　白鷺里　文子
伯母がやに伯母と寢れたる三年ぶり昔がたりに春の夜ふけぬ
○　筑前　上原うた子
兄君に幸おほかれと祈るなり務めはげめよ大君のため
春雨　但馬　八百子
牛追の影も朧にたてこめて春雨細く降りくらすかな
○　宮崎　日高はる子
聞く人の心もひろし島の聲野邊にほゝ笑む花ものどかに
夏月　德島　齋藤菊子
そよと吹く軒端の風に吳竹のひまもる月の影ぞ涼しき
○　橫濱　吉川霞峰子
東へ虹は流れて玻璃窓の雨の白玉いまだ消へざる
○　兵庫　ふみ子
早苗採る少女はいつかたそがれて夕月うすく郭公啼く
○　淺草　井上いそ子
ともゝゝに酌みし潮來の船の宿や火影も消えて棹の歌する
○　米澤　樋口季春
あかし潟うら浪とほくあめはれて月になりゆくまつのむらだち
○　奈良　岡田しづ子
桑山寺音無川の水鏡ともに寫せし影ぞ戀しき

下野 杉山愛子
○
風となり君が寢窓を音ずれむ北風寒むく吹きまくる夜は
紀伊 岸みどり子
○
此の思ひ空とぶかりになるを得ば戀ひしき君に屆かんものを
信濃 薄井君枝子
○
露あみて朝野に匂ふ白百合をしばし眺むる花賣り少女
甲斐 渡邊みつ子
野梅
鶯の音にさそわれて出て見れば折らで過うき野路の梅が枝
千葉 秋葉英子
○
若鮎つる子等が遊びの筏船の行くへ長閑けき春の川面
三河 志津子
暮春
櫻散り菜種はこぼれゆく春のそゞろ悲しき夕ぐれの窓
常陸 渓香女史
○
天の野に七彩にほふ夕雲やはてなき海に紅たゞよはす
牛込 大部たか子
春暁
雛子鳴く麥生に月の影落ちてほの〴〵しらむ春の山畑
播磨 暁雨女史
○
花がすみ櫻の村のちかきかなピアノの音は闇にひゞきぬ
上毛 紅梅女史
○
朝日かげさす海原の浪たえてのどかに霞む島の船
徳島 坂野白露
○
五月雨の軒の雨だれ音絶えてかすかに聞ゆ入相の鐘
常陸 前原琴江
○
みめぐみに漏るやからもやすくにの御前に君を仰ぐかしこさ
堺 歡見かすみ
○
足洗ふ賤が野良歌ゆるうして鐘のひゞきに梨子の花散る
安藝 箕岡ちと子
○
桃の散る夕淋しき春雨に湯の宿日記只一人かく
岡山 渡邊ふさ子
○
春の野に若菜つみてる少女子のリボンに蝶の戯れてけり
能登 千田星葩女
○

奥殿に琴の音絶えしおばしまに銀瓶に咲く牡丹花散りぬ
紀伊 小林雲子
○
君なくばいかでこの世にながらはむ君故に笑む莟ばらの花
和歌山 橘瓊江
○
うらぶれて花の木陰に月を見る花のゑまひの樂しきかな
上野 大沼奈美子
春夕
宵々に姫が琴の音涼しうて神も下らん卯の花月夜
安房 川名泉子
春草
日は落ちて高峯照せども山影の煙もかすかに春の夕暮
京都 無名子
○
かさにきし落葉を半ばぬぎすてゝかすみの衣にかゆる若くさ
廣島 すみれ
○
日は暮れて蛙の聲もさわがしく牛追ひかへる春の夕ぐれ
紀伊 とし子
○
山高く水は清けき此の春を樂しく送る花の下陰
播磨 富原愛子
蕨
草刈りてしばし憩らふ道のべに清う匂へる白ゆりの花
千葉 鈴木すけ子
○
一つかの初もえ蕨としごとに折りもたがへぬ賤が山つと
千葉 秋葉ふみ子
○
音せねば降ともしらぬ春雨にぬれてぞかへる夜半のから猫
下毛 銀鈴子
新樹
山かげの清水こぼるゝ巌の端に涼しくそよぐ白百合の花
澁谷 雅芳
○
わが庭の若葉の深くなりてより友のやかたも見えずなりけり
高崎 松野操子
○
とだえにし君がたよりのなか〳〵に心にかゝる春の夕暮
越前 佐野よしを
○
花かげに團居し遊ぶ少女子のかざしにかほる野邊の春風
筑後 小松秀子
○
垂れ込めて獨り佗む身は語らはむ友もなくして暗に消ゆるか

○　磐城　佐久間ちよ子
夕立の降り立て後のほとゝぎす姿あやしき夜半の一聲
戰死者　田村画川正子
しきしまの花は嵐に散りしとも匂ひを君が袖に殘して
○　筑後　梧桐靈子
わかゝりきあゝわかゝりき二九の春散り行く花に泪ぐみしわれ
○　近江　始子
尼寺の夕淋しく花散りて讀經の聲のうら若きかな
○　赤阪　森ふさ子
橘一つ昼にこめたりあしの葉のゆらぐまに〳〵白き衣見ゆ
○　津　新免くみ子
卯の花の眞白に咲ける垣根には雛に餌をやる媼ありけり
○　三重　山田ひさ子
五月雨の止みし今日しも洗ひ衣竿に干すとて青梅散らしぬ
牡丹　香川　合田まが子
三つ二つ今朝さきそめし緋牡丹を手折りてとひつゆかし師の君
山里　上毛　金子落葉
山櫻埋れながらも嬉しきは訪ふ友のうぐひすの聲
○　薩摩　萩原さだ子
佛壇のともしびほそう夜はふけて門守る犬の聲のみたかき
○　仙臺　二葉
いつわりの多きこの世とかこちつゝ月に泣きけり春の夕ぐれ
○　武藏　登代子
病の床より側を見つむれば鏡にうつる我がやせ顔よ
○　仙臺　南もり子
塗骨の障子にあかき宵の灯やしぐれてふけぬ連翹の雨
○　陸中　若生なか子
母病みて藥取りにと走る道袖おもたげに春雨のふる
鏡　長崎　伊東りう子
なき母のかたみの鏡うつし見てあはれものうき夕暮の空
○　名古屋　宮脇俊子

破芭蕉のさだめにも似んはかなさと旅に病む身は夕雨の窓
○　三重　山本富士子
青葉しげみ猶なほくらき木曾みちを佛をがみに老をたすけ行く
○　茨城　萩の舎雫子
爪たつる坂にわらじのひもきれて思ひ出多き旅の夕暮
○　小石川　吉田斐子
恨めしと見かへる蝶よゆるしませ病める母にと摘む花なれば
○　德島　住友登喜子
手枕の花の小窓の月かげもおぼろに見ゆるかの君が家
夏曉　靜岡　萩子
岩に立ちて興津の濱の朝ぼらけ夢よりさむる伊豆を見るかな
○　筑前　加來秀野
すがの日の長き春日を葉櫻のながめにあきし昨日今日哉
○　北豐島　高橋一二三子
鐘の音もおぼろに暮る大伽藍月影うすう櫻ちる哉
○　久世ひで子
五月雨のやむ時もなくふるさとのやけ野にまとふ袖ぞつゆけき
○　京都　岩淵國子
水青く山眞白なる嵯峨の春二日遊びてまだ名殘惜し
○　美濃　野村能子
たがわざや野川にゆろう藁草今日の遊びの家づとにせん
○　下總　春湖女史
夕立に納涼の人のかげ絶えて夕べ淋しく山鳩のなく
○　越中　よし子
うらぶれて里に歸れば友はあらず都も鄙もわれにつれなき
○　うた子
沈みゆく夕日を追ひてそと行かむこひしき西の母在す國へ
○　秋田　黒丸登美子
文机に重されおきたる書のみは見苦しからぬ住かなりけり
○　白露
折にふれ我が古里のしのばれて幾夜えもねずあかつきの鐘

文學士 沼波瓊音先生選

抒情文

天

○青葉若葉

熊本 湖畔

夏殿に炎帝の女官が御衣おりまつる梭の音にやう〳〵さめて萠えたかのやうな。藍の雲碧の御空の其色が淡い夕月の光に溶けて曉闇の其ひまを木々の梢に浸みたかのやうな。そしてゆすぶれば綠酒たゞちに滴りさうな青葉若葉！そこには一の浮塵もなく太古のまゝのしづけさである。

樅の林の下陰をそゞろありきの夕ぐれに綠枝の冠双手にさゝげたなよび姿の天人をふとかいま見てあこがれたといふのではないけれ共、目をいからせた老翁が「乙女子よ、綠の夏を讃美せよ」というた時私の心が爛たる春に通うて居たのでいきまきあらく青葉の笞ふり上げられあな恐ろしと夢さめた怖ぢの心の囚つてそれからといふのではないけれども、雨に風に心をどらせて三日の花をながめるよりは降る毎に吹く毎に色香いやます青葉の方が只何となくなつかしい。殊に雲重なりて月影淡き夜姿は後園に露にきらめく木立を訪うた。

やがての終焉に名なし小草の花さへもないいづれかの國で冷たいむくろを若葉に包んで人里とほい森陰に静かに埋られたのではあるまいか、あゝもし然ならばちさい塔の上を覆うてくれる枝の露が朝毎夜毎浸みてかろく包んだ葉も枯れずまた包まれたむくろも朽ちず代々安らかに居てほしい。

小峯の杉並木の方から流れてきた尺八の音にからくも自覺に立歸つてそと見上げた梢から只はら〳〵とこぼれた青玉(さふあいあ)！吁之は何處の地に浸て行くのであらうか

（評）夜の青葉は時を忘れしめ處を忘れしめ幽想に耽らしむこの文よくその感を寫せり。

地

○夜汐路

赤坂區檜町一四 森ふさ子

ぬば玉のやみの中に横たはる松の根元をさぐりて腰打かけたるは疲れを覺えしにや我と我がなせることすら覺えもなし、千尋の底よりや寄せ來たるらん、どう〳〵と岸も破るゝばかりの波の音、潮はけぶりて薄衣の肩も重たう、常ならば月影さやかに磯邊の松ヶ枝を砂に敷く靜けき宵すら浪に面をそむけて走れるを、更け行

く此宵は月影とぢて星の姿一つ見えで空も水も暗黑の底に沈めるが如きに風さへ荒びて波怒る物凄き夜ならずや、漁師町の彼方に遙かに幽かなる光の臙きしがそもいつかみな消え果てぬ、我はなほ荒れ狂ふ浪の飛沫に打たれて去らんとはせず、何故に去らんとはせざる？あゝ世に唯一人の弟は今し此夜汐路の何處を走れるか、五つ時の前大望を抱きて年少の弟は世に出でゝ初めてなる旅路をこの浪荒き水上にたゞよひ行きしよ、亡きかぞいろの御名を擧げんとの言葉に醉ひし姉弟は底知れぬ悲みのうちにもやがて東ち吹く風に送られて花の香をもたらして歸る彼を此所に迎へて再び異なる涙に砂打ちしめらせんときをと男心ふり立てゝ遂に大洋をへだてゝ西と東にはなれん身とはなりぬあゝ今し彼はいづこを行くならん故國の山の影も次第に見えずなり行かむ今彼が胸如何ならん。

（評）洋畫に描きたし。

人　○尊き影

紀伊　ひばりの舍

夕陽は今し枯れ果たる野末に落ちぬ。彩雲は西天に棚引き、浮きつ沈みつ。

野寺の入相の鐘、くもり勝ちに響けば、晩鴉は美しき入日の光を浴びつゝ、鎭守の祉にぞ急ぐなる。寒けき夕風は、黑く熟れる蕎麥の實を搖がせぬ。輕く囁く、いさゝ川のほとり、箒の如く立ち並べる、榛の木のもとを、鍬を肩にして歸る野夫あり、後ろよりは、鎌を持ちて從ふ妻あり。

今しも二人は立止まり、夫は帽を脇にかいはさみ、妻は冠れる手拭取りつゝ、西に向つて恭しく頭を垂れ合掌して、神を念じ居れり。

嗚呼。げに其の影こそよにも尊きものなれ。

彼等の胸には、露ほどの邪氣だも宿らざるなり。

祈禱も果てゝ、顏を上ぐれば、程遠き小川の傍なる、賤が伏屋の折戸の隙よりは朧げなる燈火漏れぬ。

終日きしる水車のかたへに、子を守る娘の點ぜしなるべし。

彼等は見るより一入歩調を早めぬ。

折しも伏屋の戸は開きて、燈の光りは小川の面に動きぬ。やがて聞ゆる乳求むる稚兒の泣聲。

妻はたまらて小走りに物待ち顏なる娘の方に寄り、溫かき懷ろに可愛ゆき稚子を抱きて、甘き乳房をふくませつ。

やがて尊き彼等の影は、伏屋の中に入りぬ。

荒野を渡る夜風は、如何に寒けく、伏屋の戸を叩くも、

彼等の溫かき團居は、長へに幸ならん。

（評）ミレーの晩鐘の圖の如し。

秀逸

○墓標に語る

伊豫　栗の花

月は今し林端に上りぬ、一道の幽光に寺内幾百の墓標悽し、彼所につゝじの花美はしき邊り默々と立つ新塚一つ、ォ、我が相愛の友よ、汝れが長き〳〵遺書藏めて今此所にあり、涙も出でぬ哀痛は我が膓を斷ち、我が胸を裂く、異性なればとて何に憚るものぞ、煩悶を呼んで自ら死にし汝が胸は餘りに狹かりき、死は易く生は難し、死して煩悶を免れんより生きて煩悶に勝たんには、遮莫、我れ咎め得じ。墓標の汝れよ、今は人なき夜半なり、相抱いて月下に泣かずや、容せ詩弟よ、我れは汝が心の嬉しさをぞ知らざりき、我が爲めに死にし汝が煩悶の一語を今世に殘さで怨みと立ちし墓標の詩弟よ、多謝す、汝れと我れと、如何に宿緣深き者ぞ、刄を取つて自ら害せんは易けれど、死して汝れと相笑まんは嬉しかれど、死後の汚名を如何にせん、老い給へる父母の命に從ひて我れは他に嫁せんとす、赦せ汝れよ、親の爲めには我れ何事も忍ぶ、富貴權勢我れ何者ぞ、榮達や地位や嘲笑ふべきのみ、唯不孝の兒たらざらんが爲め命に從うて滿足せん、如何に卑むべき滿足ならずや、如何に苦しき滿足ならずや、血の溫き限り、涙の盡きざる限り、我れ汝れを懸ひて泣かん、滿腔の熱血を絞つて汝れが冥福を祈り參らせん、光りある雙眸縮りたる口再び見る能はず、靈あらば墓標よ、汝れよ、もの云はずや、月は今し雲間に入りぬ寺内寂として暗し。

（評）誠の披瀝を尊しとす。

○わが心

千葉　高梨須美子

女の學問は無用なる事なり彼村長の孃や隣りの雪坊が好き手本兎角女は家鄕に在つて働くが良しとて父は妾を學校へも遣らず唯一度の旅も許されず山に樵り田に耕し昨は縫今は錠と此年まで母が裁縫ひの隙々に敎へくるゝのみにて物の書など手にせし事なければ何も知

らざる身は行末の生計に不自由ならむせめて女一通りの行儀作法の道修めたし父に語らず母に秘して都遊へ若し路頭に彷徨ふ事のあらば何の面さげて戻るべきまゝよ茲ばかりに日は照らじ一番汽車は人も悟らじ明朝こそと野良より歸れば水入らずの一家團欒父は獨酌の機嫌よく今日太郎作が和殿は良き娘を持つた容貌は好し親に孝行彼甲斐性善き働振り此村に二人とないと譽めたぞよ他人てさへ斯うだもの己や婆が老躰の疲も忘れて稼ぐも可愛の汝に早く三國一の婿殿迎へて初孫の顔見たさだと笑ひて德利ふり給ふ時の母の顏和氣靄々たる瑞氣滿々たる此家庭王侯將相の姫君逹にも劣らじあゝはづかしやと我の空想全く消え覺えず滿身に冷汗をながしぬ斯く迄思ひ居らるゝに一人天外に去らうとまで決せし妾の心は鬼か蛇か。

(評)　學問は「高尚なる道樂」なることを忘るべからず。

○所思

山梨　井伊松子

最も果敢なき葉末に結ぶ露の玉の上にも、稻妻の麗はしき光はしばし宿れるものを、人の命の半ばをすぎて行く末みじかしなど〻、吾ながらわが身を棄てゝ、學ぶべき道も學ばず、磨くべき心の玉をも磨かず宿るべき光りをも宿さず、闇より闇に迷ひ入るは愚なる極みにこそ、一と日たりとも道を照す光を得なば是なん一日の知者なる、いかでいかで、露の命の末短しとて心の玉をも磨かず、宿りて道を照すなる、うるはしき光をも捨てゝ烏羽玉の闇路より闇路に迷ひ入りて終るべしやは。

學ぶこと、一日なれば、一日の
心の闇は、霽れぬべきなり

(評)　最高の希望。

○ありしまゝを

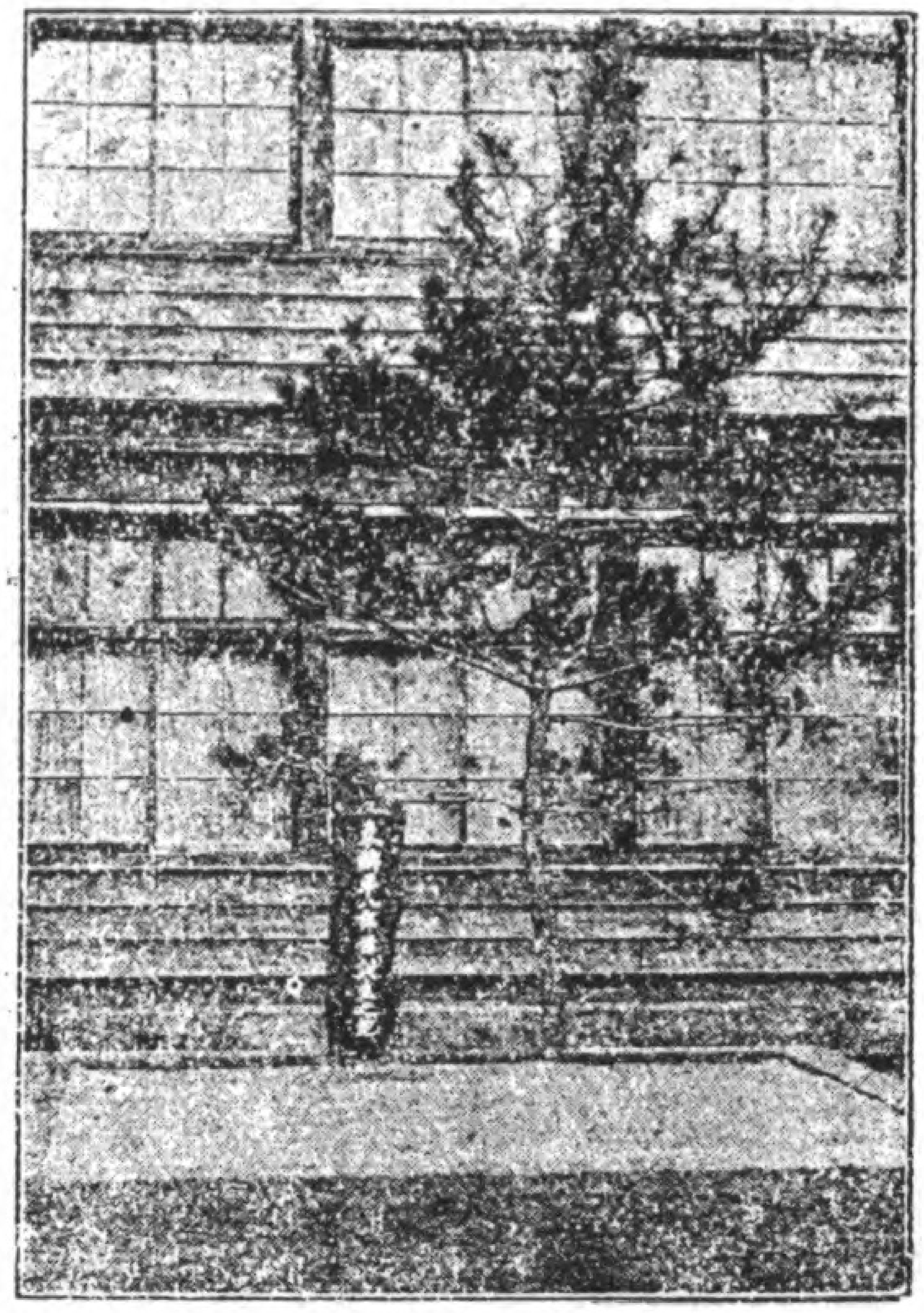
千葉　秋葉英

師の君こたび夏の休みに、御故郷へ歸らせ給ふよし、よべ「明日の朝、本納より六時の汽車にて」と、おこせ給ひぬ。暫しの御別れにはあれど、道のりも速からぬ事、見送り參らせむと、姉上と二人して行く。晴れよと祈りしかひもなくあたりは霧こめて、一つ二つ雨の顏をうちたるいと心許なし。甲が溜井の蓮も、今を見頃と聞きつれど、もしおくれなば心つくしもあだとならむ、歸り路にこそとて、見返りがちにいそぎつ。なほ早しと思ひしに停車場には、人みち〳〵たり。大方は師の君と同じ志なるべし。多くの人の間を分けて、尋ね求むれどもそれぞと思ふ影も見えず。さては未だなるよと、門のほとりに佇みて待つ。

車のひゞきする毎にさし覗けど何れも知らぬ人のみなる口惜しさ、時計の針を仰ぎ見ればもはや六時に十分あますのみ、今來給はずばおくれ給はんと心も心ならず、切符求めて、やすらへる人々を見まはす折しもやう〳〵君は來ましぬ。心いらてばたゞ一禮なしたる許り、さきくとも云ひ得ぬ中、列車に乘り給ふ。あまりの本意なさに、改札口のかたへより見送り參らせむとすれど、君ののり給ひしは前の方なれば心に任せず。ふと我が前なる列車を見れば、二人計りの小女の窓によりかゝり、手巾顏にあてゝ、涙にむせべるが、其の下には友にやあらむ、五六人、ひとしく涙にくれ居りぬ。如何なる別れとも知らねど、故郷を出でし折の事さへ、忍ばれて、よそごとならず、悲しう、哀れにおぼゆるに、堪へかねて、姉上を顧れば、同じ心にか、涙ぐみておはす。あはれ同じ列車ながら、中には久々にて戀しき故郷へと、勇ましく出で立たせ給ふもあり。心ならずもやみがたき事より、涙の袖をわかつもあり。げにも世はさまざまなりけりと、思ひまはす折から、汽車は一聲の滊笛と共に動きそめぬ。かくてあるべきにあらねば、姉上を促して、停車場を出でつ。小雨なほやまず、霧いよ〳〵深し。

（評）全然女性的にてよろし。

東郷大將誕生之地（鹿兒島高等女學校內）



（長瀬ひで子君寄贈）

○妾は？

福島　若草女史

妾は名もなき山家の賤の女、朝に夕べに鋤鍬とりて野邊に山邊に草かり柴こる身、筆執りて尊き文の林に分出でむなど、をこがましき業にはあれど、折節の月の宵、花の木蔭、さては流れの畔に簑うちしきて憩ふ暇の折々に、見る此誌の面白く、時には賤の女相應の思想など書きつらねたるを、われも人の眞似して投書など試むれど、元より名をあげむ、譽を得むの仇心にもあらず。されば殊更に名をつゝみて匿名など、世の流行に眞似たらむ如きも、さら〳〵さる心ありてとにはあらず。都に物まなびしたまふ兄君、此頃の文壇わけて女子の方面には、世にも卑しき振舞ありとて其內幕など詳しく書つらねて、知らせ越し給へるをみて、そゞろに驚かるゝこと

のみなりければ、愚に拙き妾の身などには萬に一つもあるまじくは思へど、彼の名のみの女の君の惡戯に弄ばれむは口惜し、身の恥なり、恐ろしの世の中に、明かして要なき名、秘して害なき名の、何とて事々しう飾り誇らむ。かくて妾は覆面のまゝにて出でなむと心定めぬ。

若し僥倖にして、拙き賤の緒だまき、誌上に出づる折もありて、情ある誠の諸姉のお目に止まるふしもあらば、會津の深山木の中に立交りて、リボンといふもの如何なるものなるやも知らず、星は晴れたる空に夜輝くもの、菫は野に咲く雑草の味も香もなき物よと、踏みにじりて、露も心にとめぬ荒くれ女の、筆の運びも怪しう物せるものと一笑に附し去り給ひてよ。

早やも春の夜いたく更けぬ。翌日は未明より麥野に出づべき忙はしの身、いざさらば、鷄の鳴くまで一夜を一時に、夢だに見ずして、おゝ!!ねむらまし。

フと燈火かき消せば、月あり、障子に映る梅の小枝の影も靜かに。

（評）行文實に流暢なり。

○孤兒を思ふ

宮城　綾子

春雨霏々として閑窓しめやかなるの時、遠き岡山にある孤兒を思ひやりぬ。噫此の悲惨なる凶作さへなかりせば、汝等住み慣れし故郷に鞠育せらるべきものを。孤兒とは云へど、名のみにて兩親の揃ひたるものなれど、いづれも朝夕の糧さへ腹を肥す能はざるの幼兒、孤兒にまさりてひとしほ別はつらくて哀に見えたり。若し月を眺めて飲み、花に唱ひて喰ふ幸ある花の都の富家に生れしならば、美衣飽食し、暖かき母の膝下に暮さんものを、あゝ田舎の貧家に育ちし汝等の不幸や、誰か一掬の涙からむ。

思ひ起す妾か隣の兄弟の門立を送りしとを、兄は僅に十一、弟は漸く九ツ、未だ旅の何物、まして他郷のあるべうとは夢にも思はざる可憐兒、珍らしげに草鞋はき、惠まれし新らしき衣を纒ひて、首を下げて、何時母は子の長じて無事なる顏を見、子は其の老いませる母を拜するや計られぬ幾百里の彼方に行く別れを告ぐるいぢらしき、聽て妾に彼の母『めしさへ食はせることあてきりやあ何んて、も外さやりますべいさ』とてはら／＼と泣きぬ、妾は聞くに堪へて胸つとせまりぬ。兄弟は欣々として、母の此の熱き思ひを知らで、岡山の何處なるや、前途の如何なるやを知らで、あゝ罪無き哉。無邪氣なる哉。あゝ此の兄弟の母のみならで、妾が小町より出づる五六十人の幼兒の母の心の中や如何に。と當時のことゝも思ひやりて涙の出づるを禁ずる能ざりき。

あゝ今や幼き靈よ、いかに日を過しつゝありや。あるは故郷のなつかしき母に抱かるゝ夢を、あるは故郷の山河に草摘み、魚漁る夢を、はるけき孤兒院の中に小さき思を繙きて、母を戀する時もあらん。寶玉の如き眼より罪も汚れも無き涙を流す時もあるべし。院内樂み多しと雖も、故郷の粥を食し、蔬を噛み、父母に撫育せらるゝには劣るべし。あゝ不運なる哉幼き靈よ。

（評）文なほ工夫を要すれども熱烈なる同情の迸發せるを取る。

○遊學の門出

信濃　川口ちか子

用意も既に調ひたれば、車の來るを待つ、母君は御手づから縫はせ給ひつる、守袋をとうてたまひて、こは常に身に付けて、夢な放ちたまひそ、昨日もくれ〴〵言ひつる如く、不養生なる事はすまじき事ぞと、萬づにつけて示し給へば、乳母は眼のほとり赤うして、名殘惜しふの君子樣よ、今一度御顏見せ給へ、必ず來ん夏は御歸省遊ばせや、此の乳母は年こそ老いたれ、其れ迄は死なでお待ち申さむとて泣く、その言葉は吾身にとりては、いと嬉しくも又悲しく聲より言葉より、先立つもの涙なり、されどそを見せては、なまじひ乳母を泣かしむる種と思へば、しひて作り笑ひを裝ふものから、猶悲しさに堪兼て、われ知らずはら〳〵と涙をおとしぬ、乳母はそを見て堪へずやあるらし、袖咬みしめては歔欷きするを、母君は氣色ばみてなどかはさめゝしき君子に取りては、目出度門出なるをとたしなめたまふ、み聲はさすがにうるみにたり。

彼の地に往きたまはゞ、先づ水に心せられよ殊の外惡しとこそ聞きつればとて、何くれとなく心づけ給ふ母君の御言葉、いと嬉しけれど物悲し。



遺族（賞外）　伊賀小田村　上野みつ子

やがて車も來りぬ、いざとて立ち出づ、あはれ懷しきは此の書齋なる哉、七才の春學の庭に通ひ初めしより此方こゝを吾が住處とせりし物を、今は別れよと思へば、そゞろ涙ぐましうてぞ覺えしが、玄關のあたりには近き唯彼の君たち在して只御身を心してよ、母上の事は露心にかけ給ひぞとの給ふ聲に勵まされ、いざとて車に打乘れば傍の弟は堪えかねてけむ、袖にすがりて泣く、乳母は歔欷きつゝ恙なくと言ひもあへず、顏をうちおほふ、たゆたひがちなるを、女々し

の、ものよと嘲り笑はるゝ人もあるべし、猶さりげなり忍びてらふる苦しさ何にかたとへむ、かくて車夫は走り後を顧れば母君は此方を眺めておはす、弟も乳母も、しきりに白きものを振りつゝありしが、やがてぞやうやう見えずなりにし、雲の行きかひ心もなく風あらく袖をはらふ。

（評）實況を書き給ひしものか。

○あゝ樂し

肥前　花　章　女

一度我平戸に遊ぶものは一人として、其紅山の勝をたたへざるものなしうるはしき山、のどけき水、白き砂青き松、これ、我等平戸の人士が常に世に誇るところなり。而して、これら非情の山川草木は、一々われらに面白き過去の歷史を語れり。知らずや、現今、我が國と、最親交ある英國と最初の貿易港をなしたるは、實に、今日の我平戸町なりとは。わが家は町を距る、數町、一むら茂る林の中にあり。もとより、紅塵萬丈などいふ都の樣は、なけれど、四時の眺はなかなかに都には讓らじ。春の花、秋の月とり〳〵にうれしけれどことにめでたしと思ふは、庭の前數步の地に植ゑられたる梨の樹なりとす。こは父君の、我等が幼き頃手づから植ゑ給へるものにして、我等姉妹の七人あればとて、特に七株とせられたるものなり。さてそは深きみこころばへのこもれるならめ。夏季の休假となりて遊學せる一人の姊、さては嫁げる姉さへ來りて、にぎはしき家はいよ〳〵賑はしうなりぬ。此時にあたり數顆の梨が、いかに此人々に賞せられ愛せられしよ。晝の暑もあとなく消えて、夕風涼しく梨の葉にそよ〴〵とき、妹等がその下に吊せる、ハンモックにもたれつゝ唱歌などする樣の愛らしさよ。世に樂しき事は多かるべけれど、親、はらからの、すこやかにして睦ましき程樂しきはなし。家の內睦ましからずば百萬の富もなにかせむ、王公の位もなににかせむ、身躰健かならずば之はた何にかせむ。あはれかばかり美しき景と、かばかり趣味ある歷史とを有するわが平戸の地に人となりたるわれは、父母姉妹の愛と天地自然の美とをほしいまゝに味ふべきなり

（評）都住居の羨ましくもあらず。

○白梅一輪

岩手　滿　山　圓　子

春の夕陽あかく、山の端に沈まんとして、其半ばを殘し、燦たる彩光まぶしく、あたゝかに野路を、おほへり、梅樹二三株笑みて立てり、芳香浮動馥郁として、四邊に滿ちぬ。

夕榮背負ひ、この形なき帷を、無心に分け來る、紅顏の

少女二人、學び屋の歸へり路ならん、緑の髮はリボンと共に、後になれ、袴はゆかりの色に匂へり、彼女等は徐に梅樹に近きぬ、而して一女は白う細き、腕さしのべて、低き小枝の二輪をつまみぬ、これ公德にそむきしものか？ 罪惡とせむべきものか？、あらず、あらず、彼が心には此罪たるべきを、償ふにあまりあるものあり、彼はその一輪を友にわかちて、さゝやき笑めり、其うるはしき笑みのうちには、何をか含める、潔き交のとはにかはらず、共に通ひし路芝の、思出にもとて、愛讀の書にしかとおさるゝならん、其うつくしさ梅にもおとらじ、そがゆかしさは、彼浮動する芳香よりも勝るべし。かくて二女はまた、絕えず快く、語り去りぬ、芳香めぐりて、後を追らんやう。西山の麓黑ずみ、東山の頂、金色に輝き、人家の烟たち騰りて夕暮の、忙はしさを報じぬ。

（評）理窟には首肯し難けれど。



五月雨（賞外）　府下南多摩　山村とき子

○あゝ吾身

思子

夜はいたく更けて今しも消えんとせる燈火淋しく吾面を照すをりしもおこるこがらしさても物凄き夜なるかな、賴み甲斐なき世の中に杖とも柱とも賴みし母君は遂に返らぬ旅路に出でましぬ吾は只泣きぬひた泣きに、海山深きみなさけの萬分の一だに返し得ず早くも別るゝ事の悲しさよ、父にておはし給ひし君は吾身が此世に生れ來て程なくみまかり給ひしと其お顏だに思ほえず呼べど答えぬなき魂は今や何處にいますやらされどいともやさしき母君のみ惠みにやう／＼乙女になりけるが今又母は哀れなる吾を殘して父君の跡をぞ追ひ給ひぬ、あゝ是がどうして泣かずに居られよう天も我身を見捨てしかさても果敢なき此身よな一人淋しき孤し子の何をたよりて長らへん、つきぬ恨みに亂れてはああ吾れも父君母君の後を追はばやと幾そ度思ひ走らせしぞされどそは餘りに腑甲斐なかりきいかに歎き悲しめばとて父母の歸り來給ふにあらず、たとへ女の身なりとて勉めて止まざれば未來に光明を得られぬ事はよもあるまじ日頃手なれし吾業をたゆまず勉めはげみつゝ暇だにあらば學びの道をいそしみてなき父上母上の追善をでそ吾身のつとめとはせめ淚を

呑みて起たんかな。

（評）なだらかなり。

○螢

豊前　みさを子

一

いと重たげに垂れこめし夜の帷はゆらゝに落ちて、小さう可愛げなる明星のあまた度またゝきしつゝ、西のみ空へしづみ果つれば、さ霧のみ衣ぬぎがてに、今大山祇のみ夢はさめぬ。

あゝいかに雄々しく凛々しき其姿よ。

二

萱野の姫はふと仰ぎ見ぬ、身は寝くたれの黒髪ながら、溶けなむばかりの頬の美はしさは、さながら玉かと怪しまるゝ迄、うす紅ほのかに香ひ出でたる、薔薇の蕾にもたとふべき其口元の愛らしさよ。

三

あはれ戀てふ胸の思は、たゞ人の世の事のみかは、やさしき姫は化粧ならして、大山祇のみ膝近う、何となくうら耻しげにうつぶしつゝ、もの言はんとてや口籠りがちに…………

四

まどかなる月に浮雲のかゝるならひ、嬉しき幸には計らぬねたみの有と知らずや、二人が中の初戀を、そと垣間見て罔象の神はあな憎きふるまひかなと、只一筋の小川とて、ふたりが中をばとはにさきぬ。

五

懐しとすり寄る萱野姫、おいと手まねく大山祇、雨のあした風の夜頃、片時忘れぬなつかしさも、にくや小川にへだてられて、相見るばかりの心苦しさ如何に。

六

見ずや川波に青玉の影を亂してとび交ふ幾百の螢火を！

そは二神が燃ゆる胸より成り出でし虫なりしぞ。

（評）着想美し（又曰）なほ二三活物を試みて想を錬り給へ。

○雲のながれ

陸奥　しらゆき子

折戸のそばの白梅に、くつきりとかゝつた十三夜の月を、全じ薄墨色のちぎれ雲が横ぎつて長う……。冷い窓の柱にもたれながらこれを仰いだ私は何ともいひ知らぬ懐しさが、胸一ぱいにみちたのであつた。

「…………わが住む空の方より雲ながれ候はば、それこそ、故里とほくはなれて、津輕の海のあなた、淋しき濱の片ほとりに、君戀ふるわが心の、みだれし影よと思し召せ…………」

さつき讀んだお手紙のそれよ。おゝあの雲は……。誰に語らふでもないこの、思ひに得たへぬ胸を兩手でおさへながら、ぢつと雲の行末をながめやつた。

すらりとした撫肩に、彼の濃紫の曙染なのを、振袖に召して、銀色まばゆい舞扇を、小手にかざした君さんの姿を、そつと斜めにしたまゝに、ようも似た彼の雲のさま!!!

夢路でも辿るかのやう、果てしない思ひの翼は、だんだん廣がつて、魂は彼の中に憧れ入るのであつた。折からの烈しい北風に、犇々とよせてくる村雲は、いとど友こひしさを切ならしむるので…………。

あゝ君さん!!! 今頃は何をして御出でだらう? こんな晩に私のことなぞを思ひ出しなすつて、彼の涙もろい方……大森濱の浪の音をどんなにか聞いていらつしやるだらう。「……世に頼りなき身の、たゞ君をのみ……」御手紙ごとに此のかなしい涙のおん跡! 私はいつも泣かされる。あゝ去年までは、御互ひに幸多き身よと、ほゝゑんで居たのが、しばしの間に斯うも變るとは、如何に運命のわざとは云へ、あまりに情なくて、恨めしいやうな氣もする……。

月はいつしか雲におぼはれて、梅の香はしきりに高く、濕つた袖のほとりをさまようた。おゝ北よりよする雲よ、せめては玆にとゞまつて、わが思ひをもきけ、胸にたえせぬ愁ありと。何をか語らんとするに、さながら似たる其のいろ! 其のさま!! 涙含むがごと………● 月はふたゝび冴えなかつた

（評） 作りたる所見ゆるを惜む。

○このよろこび

靜岡　たか子

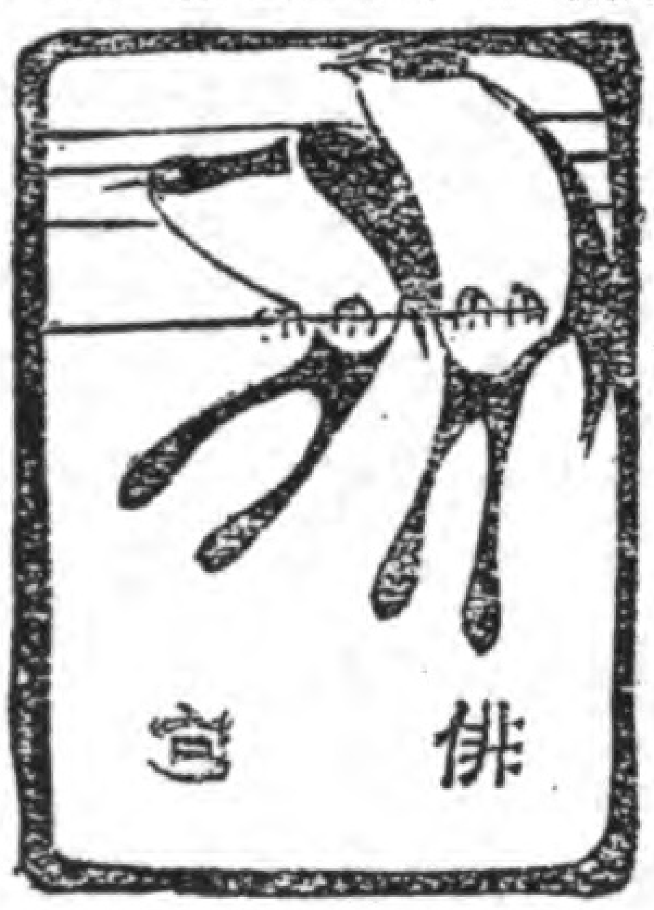
久しく病の床に苦しまれし我祖父君の、今年櫻咲く頃より日一日に快ようなり給ひしが、今日六月一日は恰も御誕生に當れば、此日を期して賑はしき床上げの式は行はれぬ。知人親戚の數々集まりて或は唐歌うたひ或は大和歌うたひ祖父君をかこみて笑ひさゞめく。常にはあまり好み給はぬ酒なども父君は過し給ひけん赤き顔して何やら大聲に語り給ふ。外の方の賑がしきに行きて見れば祖母君母君などの往來の人々をとらへて赤飯のふるまひとよ。おさげの少女の恥しげに持ちつゝかへるあれば鼻二つたらしたるうなゐのとるよりすぐ口に持ちて行くもあり。翁媼も腰をのべつゝ集ひ來るあり。脊に子おへる女に祖母君の「脊のお子にも」と云へば女いたく笑ひて「先日生れたばかりです」と云ひつゝ行くも又一しほの賑かなりき。茶の間の方を見れば、出入りの男女、八百屋、魚屋、大工、左官、車夫等、或るは羽織を着、あるは袴さへつけて座れるいとをかし。小夜ふけぬ人は早や歸りつくしてければ久しぶりにて家内五人燈火をかこんで笑ひつ語りつしぬ。母君、何か詠まずや靜子よと仰すればしばし案じて「今日のこのよろこびの千代かけて八千代をかけてかはらずもがなと」うめき出せば、祖父君祖母君父母君どつと笑ひ給ふ、これも又時にとりての笑ひ草よ。

○夏期講習會

▲近來歐米にて盛に行はるゝ夏期會合に倣ひて基督教女子青年會が催したる夏期講習會は七月十四日より全二十日まで一週間青山女學院の新緑濃かなる處に會合し知名の講師を聘して課業を受くる外音樂遠足遊戯等の娯樂もあり且學び且樂むと云ふ主義にて講習料寄宿費等も至つて經濟に計らふとのことなれば斯道を研究せんとする諸姉のためには最もよき會合なる可し。

▲神田區錦町三ノ十一日本音樂協會の催にかゝる夏期講習會は音樂科教員及音樂學校入學志望者の爲めに八月一日より向ふ三週間音樂學校内に開かれ唱歌、ピアノ、オルガン、ヴァイオリンの各科に分ちて何れも懇切に教授するよしなり。

巖谷小波先生選



特別第一賞

おばしまや谷をへだてゝ百合白し　岩手縣一關八幡小路　黑澤美津子

〔評〕一誦已に俗塵を洗ふの心地す、三讀正に仙境に遊ぶの想あり。

特別第二賞

菜の花や馬車に後れし人通　武藏　花舟子

〔評〕田園のスケッチ、躍として眞を寫す。

特別第三賞

葉柳や舟のねむさも十三里　下總成田　渡邊かつ子

〔評〕十三里の舟中、幾年の齡や延べん。

天

花桐の雨となりけり地久節　奈良市押上町二三　藤田藤子方　西湖女史

〔評〕名句。

地

山百合や徑盡きて溫泉の湧く所　本郷區湯島天神町三ノ三　平野きみ子

〔評〕佳句。

人

蕗の葉に蚊のかくれなく晝の雨　神奈川　琴子

〔評〕秀句。

秀逸

廢宮の欄に群居る羽蟻哉　千葉　梅溪女史
蜻蛉や領地あらそふ石の上　大阪　笹井英子
長安に佛骨迎ふ日永かな　常陸　きよ子
吾病で夏ぐさ繁る小庭かな　山田　小林敏江
朧夜のたき物かほる小路かな　上總　梶まさ子
亡き妹が聖書のなかの菫かな　失名
五月雨て櫻御門の閉しけり　橫濱　吉川霞峰子
春の水古き都を流れけり　筑後　井形星葉子
牛小屋に移る日脚や桃の花　堺　鷺見壽惠子
初螢闇の綾瀨を縫にけり　常陸　酒葉つれ子
馬喰の暇ないそぐ若葉かな　備前　松本もと子
年々や古雛かざる草の宿　伊勢　紫女史
春の夜や手綱もとらぬ戻り馬　千葉　大崎文江子

遠音ごす桶屋の槌も日永哉　相摸　小林英子
衣かへて出てんとすれば友來る　神奈川　高梨歌子
桃咲きて里をまはるや小商人　豐後　後藤波子
卯の花の垣根をのぞく女かな　茨城　小泉波紹子
巡禮の足あと小さく春暮る　武藏　青柳彌生子
濱寺の晝寂として桃の散る　日本橋　栗山紫柳子
結ぶ手に山影動く淸水かな　奈良　祇園女
もみ裏の袖くゞりたる燕かな　弘前　みどり子
徒に棹さす舟や夏の月　伊豆　上原ゆき子
竿頭の銀扇に散るさくらかな　伊勢　中四梅廼子
道問へば皆立揃ふ田植哉　橫濱　華舟子
黄昏や薔薇匂ふ野に星一つ　秋田　黒丸登美子
打つ水に砂のまぶるゝあつさかな　赤坂　大川久子
朧夜を憩いとめたる噂かな　兵庫　菅森紫水
妹が碑に去歳の菫咲きにけり　淺草　小野寺はな子
苺つむ山路に淡し晝の月　福岡　植田星花
桃咲くや起せば祟る石佛　京都　大澤幸子
薄暗き社殿の裏や老椿　丹波　なみ子
牧童の羊と共に晝寢哉　廣島　曾川秀子
白がれの趾をこぼるゝいちご哉　千葉　圓子
春山や主より先きに犬の鈴　安藝　うもれ木
行春を遊女の多き御寺かな　埼玉　季園
巡禮の人出も多し桃日和　岩代　松山薔薇
山道や新酒とかきし古障子　南總　關よし子
花の日を雨閉しけり古局　北海道　江刺家つや子
歌日記かく夜蛙の頻りなり　常陸　うめ子
きり晴るゝ湖を隣の花野かな　富山　小林芳枝子
カーテンのゆらぎ凉しき青葉かな　靜岡　梅澤高子
菖蒲太刀はいて姉がり行子哉　北豐島　高橋一二三子
春雨や小梅へ通ふ渡し船　千葉　秋葉ふみ子
さ蕨や石黒々と燒けし山　上野　楓女史

青嵐すだれまく手の美しさ　岩代　しつの女
山徑の噂して行く若葉哉　下總　長谷川しん子
山一つ廻りて町の幟かな　羽後　前田ひさ子
青葉若葉城の天主のそびえたり　陸中　みえ子
天狗棲む鞍馬の松に時雨かな　豐前　岡本敏子
何處やらに水の音して木下闇　肥前　武末光月
日に疎き背戸の小庭や落椿　千葉　伊藤つよし
今一度お茶いれかへてほとゝぎす　三河　中島いそ子
春雨や瓦の下で鳴く雀　安房　みや子
化粧間や衣をそよぐ春の風　石狩　芳子
青麥の風を見て行く馬上かな　越後　藤原粟子
寺借りて佛事する日や遅櫻　埼玉　さく子
わがかげを子に歩行かせる暑さ哉　青山　よし子
蘭を學ぶ妹の部屋の牡丹かな　豐橋　菅沼みのる
稲妻や闇に顔出す鬼瓦　仁川　本庄俊子
五月雨やとび石かくす草の丈　栃木　松本いづみ
御靈屋のなかばゝ見えて櫻哉　大分　片岡末子
時鳥座禪の眼開きけり　近江　岸本かつ子
よし切や川の向の水車小屋　深川　山下みの子
梅雨の宿繪葉書ぬれて屆きけり　愛媛　亞松壺子
大牡丹小さき庭を飾りけり　岩代　佐瀬ふぢ子
羽蟻飛ぶ廣野の果ての祠かな　芝　本田喜子
貝拾ふ手もとを吹くや春の風　常陸　川並花子
葉櫻の蔭や所の人ばかり　下總　三橋涙子
青麥の風見る裏の二階かな　越後　渡邊まさを
桃の花雛の小袖にこぼれけり　大和　榮山利子
花散りて人なき寺や晝の雨　信濃　乳深優子
海棠の花に淸女が濡衣　大分　稻葉淸子
初がつをなかばを分つ隣哉　上毛　和田末子
雉子鳴くや宇治は茶所山のかげ　三重　ひさ子
猿蟹の木の實拾ふて植にけり　明石　玉島せき子

文學士沼波瓊音先生選

消息文

天

○姉ちやんも泣いてるよ

丹波　なみ子

静ちやん、唯今手紙をうけとりました。姉ちやんは泣いたよ。いつも騒ぎまはつてる静ちやんがこんな事かくのかと思ふと姉ちやんはたまらなくなつた。ほんとに前の阿母さんが居てくれたらねあゝ静ちやんも悲しいでせう。けどね静ちやん悲しいのは静ちやんばかりぢやない、姉ちやんも毎日泣いてるのよ。他人のうちはね、うちでお母さんに叱られてるよかもつともつと辛いよ。サーベル所ぢやない、草履一足買つて貰ふ事も出來ないのよ。だけど姉ちやんは辛抱して居る積りです。静ちやんも悲しいだらうけど、どうか辛抱しておくれね。これからは決して、サーベル買つてくれなどとねだるでないよ。戰爭ごつこで大將になれなくても大きく成て大將にほんとの大將になればいゝでせう。いつも腕白ばかりしてるとほんとの大將にはなれない。いつもおとなしくしてね、お父さんや、お母さんの言はれる事をよくきくのですよ、さうすれば、大きくなつてエライ軍人にもなれるし、またお父さんもお母さんも可愛がつて下さるよ。決してお母さんはいやだなんて言ふんぢやないよ。

それから、静ちやんは此の頃勉强して居ますか。勉强する事を怠つてはならないよ、姉ちやんも勤がすんだ後では勉强するのよ、人が寢靜まつて、犬の遠ぼえや按摩さんの笛が遠くに聞えるころ、それは〳〵神棚の燈よりまだ小さい火の豆ランプの下で、勉强するのよ。そして其のときはいつも静ちやんの事を思はんときはない。ほんとに雁の鳴いてわたる夜などは、もうたまらなくなつて、静ちやん所へにげて行かうかとも思ふよ、けど姉ちやんは辛抱して居ます、でね静ちやんも第一に身を大切にしてね、つらい事も辛抱しておくれ、姉ちやんはたのむよ。

（山口直子様の『僕悲しいよ』を讀みて堪へ難く）

（評）深き同情、强き教戒、姉たる人の態度はよろしく斯くの如くなるべし、この文作りたるものとは思はれず選者も泣かされたり。

地

○知人に下女の傭入れを賴む

明石　みどり

御出の節何時もをかしき話に、御前樣微笑ませては、

「ほんに面白き者よ、人は悲しつらしと云ふ世に一と申され候下女の花こと、最早年頃似合しき緣ありたればと里なる親共より一週間程前手紙參り候まゝ、久しく遣ひなれたる者、今日では臺所のこと大方はまかせても、差支なきまでになり、子供も花や花やとよく懷き、氣立も優しきもの、手ばなすはをしまれ候へども彼の身にとりては一生の大事、に芽出度ことに候まゝ、乞ふまゝに昨日夕方、里に歸し遣はし候、

何とやら別るゝとは嫌なもの、子供など、別けても彼の腕白の清、歸らんとて風呂敷包持つ手に、すがりて「歸るのは嫌々」と、駄々をこねて困らせ申候、追々暑さに打向ひ候折柄、洗濯物なども多く何かといそがしき今日此頃、一日もなくては不自由なもの、先達御出の時哀れなり、誰か召使ふ人もあらばと話され候ひし、彼の孝行娘お秋とやら、御話の御様子にては、小學校ばかりは終へ候よし、假名書の献立表には困り申すまじく、心様も優しとか、御話承り候折、用も多き故小間使として召抱へたしとまで思ひ候もの、未だ何處へも參らで家に居候はゞ、何とか御話し下さるまじく候や。當家の樣子は御前樣御存じの筈、給金などのことは一應御話し下されて後御相談申すべく候、御心安立に斯る事まで御迷惑とは存じながら御頼み申上候、時候不順の折柄皆樣御風召さぬ樣御子達にもてゝろそへ玉へ。

誠玉屋（貸外）　武蔵八王子　乙幡秀江

（評）一葉の書簡文を讀むが如し。



人

○兄上様の御裁判を願ふ

芝區二本榎町　小野綠子

春の海の様に平和な家庭に近頃時ならぬ風波が起りましたから事情を述べて兄様の御裁判を仰ぎます、夫は外でもありません。村の名物とて人に持囃されて居る家の大松をねいお爺さんが農作物の害をするから伐り倒して賣つて其金で大勅祭に參詣旁東京見物に出掛ると申出されたが事の始りであります、お父さんは綠が學校を卒業して歸つて來たら大庭園を築くつもりだ其の時は此の大松、二百年以上も年を經

た松は庭の主人公だからと不賛成でありました。次第に論が盛になりまして母さんはまた新しき動議を出されましたそれはお爺さんの案の訂正説であります大松を賣つて其金は妾の嫁入仕度金の附加金とする事でありました茲に三つの動議が有ます妾はお母さんの説に賛成しましたが姉さんは(許嫁の姉)お父さんの説に賛成しなさつて議論四分五裂で遂に將來小野家の相續者たる兄さんの判斷に任せる事になりました……

(許)これは面白し、ありさうなことなり、人々の性格もよく顯はれたり。

(又曰)余は双手を揭げて父君の説に賛成す。

秀逸

○旅中より母の許へ

福岡　植田星花

無情なる汽笛の一聲に御なさけあつき御膝下を離れ參らせしはいまだ昨日の如く覺え申候へども、最早二十日餘りの朝夕を數へ申候。其後母上さまには露の御恙もおはしまさぬ由、何より〳〵うれしう存じ上げ候、此方父上樣、兄上樣を始め皆々健かに候、是れのみは御心安めて給はれ、さて去月二十六日おなつかしき母上樣の御見送りにて小倉を發し、同日午後一時門司より汽船に乘りて尾の道に向ひ其夜は此に一泊し、翌日又々汽車に打乘り申候、やがて須磨の浦わに月をめで逗子の濱邊に櫻貝を拾ひ、あくまで山海の風光に親しみつゝ遂に當地に着し候ひぬ、げにや花の都は今こそ眞に花の都にて、花が人か、人が花かの上野向島の賑には、さすが腕自慢の兄樣も思はず繪筆投げすてしにはそゞろに微笑の禁じがたく候ひしよ。

私事何分初旅の事とて何かとめづらしうのみ感ぜられ候へども、只母さまの笑顏仰げぬのみ、返す〳〵も遺憾に覺え候。さて歸鄉の程はまだ定かならねども大よそ來月の末かと存じ候、其の折りには再び名所古蹟をたづねまた、珍らしき土產齎して懷しき〳〵御笑顏に接すべく、且は太郎作爺が例の驚き顏も見たくそれのみそれのみたのしみ居り候まゝ憚ながら、母上さまにも喜んで御待ち下され度候。此の可愛き人形は道ちやんに私より、此の銚子縮及び友禪の半衿は兼てより母さまの御所望なれば父上樣と兄上樣の御心づくしに候へば、何とぞ御笑納下され度候。さて又乳母よりの事づけ物さはに候へども云はぬが花、鬼が出るか蛇が出るか何れ歸宅の時にとわざ〳〵申し殘し候故、左樣思召下され度、尚々寢覺め寒けき春の曉に心して御身厭ひ遊ばされ候やう、末筆ながら隱宅のお祖父さまお祖母樣によろしく御傳聲下さるべく〳〵も願ひ上げ

候。先は右までてあら／＼かしこ。

（評）まことに品高く趣多き消息文なり。

○若菜を贈る

紫菫女史

朝な／＼さしのぼる日影は、うら／＼とのどかになりもて行けど、そよ吹く風の、いまだ袖寒うはべれば、室咲きならぬ、梅のさかりはいつしかと待たれ侍る、されどあなた樣には鶯のお手がひもあれば、とくより樂しき春のみ心もて、すぐさせ給ふらんと、いとゆかしうなん、池水のぬるみにもえ出る青柳の、糸に心をひかれて、友どち三人四人、袖うち揃へて、朝霞と共にうら／＼と野遊びに出て立ちて、枯れにし芝生のまにまにもえ出る若菜を摘みもて、來しものなればかばかりに侍れど、春の野のしるしにと捧げまゐらす、いかで鶯の飼ひゐの、かたはしにもせさせ給はゞ、摘み殘されて、たけはてなんよりも、さぞかし喜ばしう思ふらんと、一言そへ參らすになんかしこ。

（評）優にやさしき玉章かな。

○故郷の友へ

陸前 高橋花子

家にあつた時は如何なに窮窟な處だらうどんなに四角ばつた處だらうと思うて居ましたが來て見ると反對であります御母樣はたつ時になんでも人の心はゆるされないものだお前はいつも家にゐた氣になつてはもつての外といはれましたが決してさうではございません、先輩は私等を丁度妹の樣に何事もよい道にみちびくのであります決して苦しくも窮窟でも御座いませんからお安心して下さい偖入學以來日はまだ淺いのですからこれぞと思ふ事もありませんがまづ山根からこゝに來ては第一目に新らしいのは陸奥灣なのですまた岩木山や八甲田山を窓からのぞき見る事が出來ます起きるにも勉强するにも時間がきまり放課後でなければ外出は出來ませんので不規則に育つた私などは初二三日は少少くるしく感じましたが今では却て規律の中に興味があります先生方も御熱心にわれ等をお導き下され學課のすゝみもよろしうございますテニスはもとから好きなので每日やつて居ります先は近況おしらせまで、かしこ。

（評）簡にしてよく意を盡せり。

○友に答ふ

石川 濟田芳子

此度御問合せの目的の件は人間の運命とも申すべき者かと存候其決定如何によりては人間ともなり人間ともなり得ぬことにて候故一朝一夕おいそらと定め得べき者には候はず意志の弱き頃には朝に溫ためて夕に冷すのたぐひ即己れの心よりあみ出したるにあらずして人の說く所すゝむる所に從うて右にもゆきたくなり左に

も行きたくなり申すべく候。
中途にて變ずるは一生の過ちに御座候恰も暗夜ともし火無きが如く東西を失ふべく候暗夜なれば夜のあくることも候へども其まよひさめて明かき光を見るも時はや後の祭りとなりて如何に悔るともせん方なく大なる世の笑者となるのみならず堂々たる五尺の體も此廣き世界に置き所もなく遂には父母兄弟の名をも損じ可申候斯かるためし世に少からず候以上述べたる如く實に人間にとりては運命に御座候故輕々しく決し輕々しく行うべきものにはこれなく候間一度定めては堅きこと石の如く動かざること山の如く一直線に其目的點に達することと人間らしく候。
就ては其重大なることを如何にして決し得べきものか人にも問ふべきものか親の意に從ふべきものか宜敷親にもたづね友にも問へされど私は彼れをやれ此をよせなど丶指命もいたし兼候とも角も、
己れの嗜好學科　身體の適否　學資金の有無
以上の三は目的を決定するに付或先生より聞き得たる大要點に候まゝ御參考にまで申上候。

（評）よく要領を得たり。
（又曰）何々をやれと指示せざる大によし。

○おし花に添へて友に

死怨女

何となう心淋しき行春の朧月夜にて候ひしか、小さき園に下り立ちて今を盛りの彼の櫻の花蔭よりそと大空を仰ぎ見候時、短かき命の運命に候か、風なきもあはれなる此の一瓣の、朧なる月の光りにヒラ〱と宛然心あるもの丶如くに散り來り候ものから、兄と三人花は盛りの此の櫻の下にて興じ候ひし宵の、心憎くも幻の如くに思ひ浮べられて、今更乍ら胸さしせまり、暫時は果敢なき涙にもくれ候ひぬ。さるにても兄が思出の種なりし彼の宵はまこと今宵のごと朧にかすむ春の夜にて候ひしものを、若しや兄の靈の凝りてには…と、思へばいとゞありし昔の面影の可懐しく、せめてものの心やりにと今はなか〱に仇なる形見の詩集に挾み置き候ひしが、日數經るまゝに色も香も大方は褪せ果て候ひし儚なさに、堪へ難く哀れを覺え候まゝ、兄が今はのやせたる手を取りて熱き涙をそゝぎ給へる御情の程に甘えて、せめてもの御慰めに微笑まんとて、今宵月なき闇を洩れ來る春雨のしとやかなる囁にむせび乍ら死怨女より。

（評）趣向舊けれど棄て難き詩美なり。

○都の友に

千葉　秋葉英子

柳櫻をこきまぜし都の空の春景色、今や眞盛りのよしいかばかり貴兄樣の詩眼に映ずるならんと、察し上げ奉り候。過日は、各所の名所畫圖及リボンなど澤山御

惠贈くだされ有がたく、身はさながら柳暗花明の境を逍遙して、流鶯の樂韻を聞くが如き心地致し候。思ひ回らせば、乙巳の秋、金風瑟々たる鹿の子の原に、君と袂別の憂に泣きしより、はや、一とせ餘りに相成り候。熟々、流光飛陽の匆々たると、悠々碌々爲すなかりしを、顧みては、只々胸は廻燈籠の如く回り合ふ事のみ多くて涙のもとゝ相成り候。

當地も此の頃はやうやく春に相成り、向山の積雪消えはてゝ、狩野川岸の梅花も今はまさかりにて瓢を片手に一日の清遊をなすものもすくなからず、城山の櫻花も、今二旬を出でずして、笑みをもらすに至るべく候ふ。折りふしの花につけ月につけ、風の夕、雨の晨、忍ばるゝは貴兄樣の御事のみにて、雲山杳々たる西の空を仰いでは、都の空や彼方、彼の星の下あたりや神田と、慕はしさの情堪へざりしも幾度に候らひしか。あながち我が身の幸なきを云ふにはあらねど妾も今より五とせも前の事ならば優に都にて戀しき貴兄樣と御一所に學の道にいそしみて明かしはべらむものをと、獨り袖しぼる事も度々にて候。今は愁に、學問せし身のうら恥かしく、耒耜採る道も心の儘ならず、兎角人の批判を免れず候。さいふものの妾も女子と生れしからにはせめては、言の葉の一節をだに殘さばやと、この頃は耕しのいとま／＼には熱心に詞の林を彷徨いたし居り候。妾の如き、薄學不才のものゝいかでか、自然の高妙を諧ひ、田園の清趣を描き、微を闡き、幽を鈎し得べきやと御笑ひくだされ候はむ。

藁屋根は低う霞みて鹿の子原
　風あたゝかに桃のはな散る

此の歌は過る日鹿の子原にて開墾の時の口ずさみにて候。先はこれにて筆ををさめ申候。只々貴兄樣の一日も早く夏の御休みに歸省し給はん事をこよなき樂みとして指をり數へ居り候、かしこ。

（評）情ある文なり。



晴　（賞外）　陸奥　中島すみれ

○繪葉書だより

下總　靄浦女史

其一

愛子樣、此繪は能條の落花の處よ、そら七年前、皆なで、お花見した所、私が池のお話をして先生に賞められてさ、高橋樣の處でお中食の割子を開いて、本當に愉快でしたわね、其高橋樣處の、御次男と貴方が結婚して遠い臺灣へおいてなんて全て夢の樣ですわね。

其二

愛子樣、此繪は私の家の後園の梅林なのよ、何時てしたつけ貴方と二人て生梅を食べて私の父に小言を受けましたけね。

其三

愛子樣、此繪は寒天寺山の開墾地の麥生よ、私共が通學時代皆なて茸狩した處でしよう今は一面畑になつてね、世のうつり變りを示し顏なのよ。

（評）「なのよ」をやめて眞面目に書かれたし。

○旅より都の友に

周防　小澤ちゑ子

今宵は定めし雨にやならんと曇りたる空を見て、少々早く候へど、住家なる家に宿かり申候。

田園生活幾度か人の口の葉に昇り候が、まこと、田舍の景色は、美しく候愛しく候、朝た露の草路を踏み分けて、冷き風に身を消め、或は小川のほとりに魚を釣り、或は綠の木影に歌を誦し、畫の暑さも知らず顏なるは多く候。

かくて夕暮、雨の空蠶色美しう彩どりし頃、其日の勞をば風呂に流して、糊濃き浴衣を着け夕涼みにと立出て候へば、螢追ふ子も數多く候よ。初めての旅に、都に居りし時田舍は如何なるものかと存じ候が、さるにても斯程樂しきものとは、夢さら思はず候ひし。

雨の日、風の日、曇れる日さへ、其趣は中々に候ことよ。殊に人の心の眞なること、七つ八つの小供すらも、くはしく道を敎へくるゝ親切、人情風俗、自ら高く候。

さるにても、友の君の連ならざるは、物足らず覺え候かしこ。

○米國なる兄上へ

乃　信　子

兄樣はいつもながらの御元氣にて、緒々御勉强のよし御めでたう御座います、こなたも皆無事でお父樣は毎日御出勤ほんとに恐れ入ります、例

の草立時には是非お病み遊ばすお母樣も今年はまめて被在しやいますて私はどんなに嬉しいか知れませんわ、武雄坊も學校から歸りますとすぐ村の小兒と一所に耳のまればかり、私は裁ち縫ふ事許てすが、たて食ふ蟲も物ずきとやらで、たまには雜誌の投稿も書いて見ますが……それから平三爺もたつしやて御座います、いつも兄樣の御噂のみ致しまして、五年たゝれば歸らんから、無事ての……と仰せられた御言葉を繰りかへし繰りかへし、先日の御手紙讀んで聞かせましたら老いの眼に涙を滋へながら、御目にかゝる事が出來るだらうかつて、ほんとにかあいさうてすわ……此の花は去年まで兄樣が可愛がつてゐらした庭の櫻なんてす、今年はひとり淋しさうに見えましたのでせめては只一片なりともと思ひまして……左樣なら。

○病中東都に遊學せる弟へ

岡山　永原多計子

最愛なる我弟よ、日は一日と長閑くなりて、庭の梅の花は夕の嵐て殆んど散り失せて、殘んの月は無限の情の溢れて、淋しき影をとゞめ居申候、丁度花盛りてあつた頃は二三の鶯が樂しく枝間を飛んてゐたのに、今は花の散り果てゝ名殘惜しげに啼いてたゞ見る目も哀れに候よ、世の人は此の春を蝶よ花よと樂しく過さんものを、妾は病の身とて散りし花に戀ふる鶯ならで、何一つとして樂しき事もなく、まして、御兩親樣へも孝行のなりかれ、誠に此世に居てものゝ用にも立つまじき身となりぬ、千悲の中に一樂は御前樣の業成り學卒へて、錦衣歸鄕の秋を待つのみなれば願はくは勉學第一と常に心をもちゐられん事を……惡しき友と交りて、吉原の花に醉ひ、洲崎の月にたはむるゝ樣の事ありては、前途も如何と思はれて御兩親樣も御心を碎かるゝ譯なれば、御身體大切に一層の勉强願はしく存候、かしこ。

○潮干狩に友を誘ふ

周防　紫　雲　英

たれこめて春のゆくへ知らぬは心なきわざと存じ候かれてより櫻狩せばやと思ひをり候ひしかどさはる事ありて今日まで意をはたさず候ひきさるほどに梢はいつしか若葉としげり行き候まゝ汐干狩にと迫かへ候つきては何日といはんより汐時もよければ今日こそと思ひ立ち候君にはいかがや御つどひだになくばとく〳〵いらせ給へこなたに割子はとゝのへて

候花ならぬも時うつりては與ふすきものに候妾は御かへしよりも御頭なこそ待て。

○都なる姉の許へ

岩代　はな子

姉様此間は改良服をほんとにありがとーよ姿質に嬉しくつてよ美代ちやんはれすぐとおべゝをぬいて「着たいよう」つていふから私は着せてやるとそれは〳〵よろこんで家中をはれまはるんですのそして礁やが「𥸮ちやん其おべゝは誰からお貰ひになりました」と聞いたら大そうおこつてれ「こいはおべゝぢやないカイリヨーフクだ」つて皆んなが大笑ひをしたのよそして此度の日曜にはれ母様のお植ゑなすつたつゝじの花が咲きましたから其のお花をもつて兄様と姿と美代ちやんと三人で御墓參りに行くのよ其時は兄様が寫眞器を持ていらつしやるのそして姿と美代ちやんは姉様からいたゞいた改良服を着て父様に買つていたゞいた靴をはいて兄様のおみやにいたゞいた帽子をかぶつて行くのよそして母様の御墓の側に立つて兄様に寫してもらふのよだから出來ればすぐ姉様に送つて上げますから樂しみにして待つて居て頂戴。てはこれでお別れにいたしませうさよなら。

○父を失ひし故郷の友へ

熊本　すみれ

春立つ睦月に、野は若草に綠しきまうし候、風の名殘猶はげしけれど、淡雪いまだ融けやられど、散り溢る白梅の我がふるさとは、今こそ美しき春間の頃と覺えまゐらせ候。御庭の紅梅に春雨ふる朝、朧月夜を雁金さびしう鳴き渡る夕など、嘸かし御許様には亡き御父君のおもかげ戀うて人知れず秋うるほし給ふ事もや候はんと思ひいたれば女々しくも妾が頰にも淚こぼるゝ宵もあり候。

げに木靜かならむと欲すれど風やまず、子親を發はんと欲すれど親またずとの昔の葉に萬斛の淚こぼせし古しへの孝子の嘆きを今に御許様が見給はんとは、神ならぬ身の誰とて知り申す可き。

げに世は運命に候ふ哉、あゝげに世は運命に候ふ哉。

静岡　淺井蝶子

○妹に送る

お手紙拜見しました。

民さん！、僕はうれしい！。お前が嫁つて。僕は手を拍つて悅びますよ。賛成しますよ。早く嫁つて初孫の顔でもお父さんにお見せ申して安心なさる様にして下さいね。しかし民さん！。他へ嫁つたからつて、一人わびしく眼病に苦んで居なさるタヾ――一人――のお老父さんをみ捨てゝはなりませんよ。どうぞ……どうぞ僕が成功する迄、心を變へずに見守つて上げて頂戴れ……一生のお願ひだかられ――民さん！

それからね民さん！。他のお嫁さんとなつた上は、固く節操を守り、其夫たる人には、どこ迄も滿身の愛を獻げて、決して女子性格の光ともいふべき節操と愛情とを捨てゝはなりませんよ。殊に女子は世評に惑ひ、虛勢に心醉し、目前の榮利に迷ひ、節操を破り愛をすて易い者でありますから、常に理想を立てゝ、其思想を統一し、頭腦を冷靜に保ち、愛情を濃やかにして、妻たる務をつくさんければなりませんよ。まだお話し申し上げたい事は、たくさんございますがいづれ――民さん！。さよなら。

○別れし友の許へ

豐後　幽溪

美しかりし庭の櫻も、花は跡なく散り果てゝ、木には青葉をのみとゞむる頃と相成り申し候折から其後は如何に過ごさせ給ひ候てか、妾事御別れ申しゝ其日より御身が惠み給ひたるうるはしの御うつし為日毎に拜し參らせては御なつかしさやるせなく、思はず聲かけ候へども如何てか一言の御答へさへも給はるすべの候ふべき、忘れんとして忘れ得ず、君の此地に居ましゝ程は同じ室にて起伏を共にし、嬉しき事のある毎に悲しき事にあふにつけ、互につゝむ事もなく、思ふ心を打ち明けて、春磯邊に貝拾ひ、秋は野山に散歩して、姉よ妹よと呼びつ呼ばれつ手を携へ、たとへ幾年ふるとても、はた幾千里隔つとも、心ばかりは變らじと互にちかひし事も夢の如、其後のたよりも絕えなんとす妾は君が別れの御言葉を、固く守りて得動かじ、浮世の常とは申し乍ら、如何なる神にておはすべき我等が中を別ちしはと思ひ出でゝは人知れず、袂ぬらしゝ事も幾何ぞや、身は海山遠く離れ候へども心は常に從ひ行き候まゝ、あはれと覺し給はゞ野邊のちかひ忘れな給ひそ百千の思ひをたゞ一筆に、祈るは君が後日の成功と御身まさきくませとのみに候ゐなかしこ。

○兄様の書翰（入營中なる）

武藏　登代子

艶ちやん、僕も近頃は、軍隊生活になれて來て、此の様な、愉快な事は無いよ、其れに、騎馬の好いのに當つて、本當に嬉しい、馬の名はれ、春駒と云ふので實に可愛いよ、朝など僕が、蒭をやりに行くと、頭を擦りつけて、喜ぶ樣に恰ど、ジョンの樣だ。其れて走る時ても、何時も、中隊長に、賞讃されて、僕其の時の嬉しさは、何に例へて宜いか、知れ無い位だ。其外萬の事が、皆、其う云ふ様に嬉しく愉快の中に、勉勵して、居るから安心して、艶ちやんも、尙々勉强しておくれよ。いゝかえ。

聞けば、艶ちやんも、今年優一等で、三年を修業して四年の級長と成つたとお祖父様が、老の嬉し涙を流しく、云はれたが、僕も實に嬉しく思ふよ、是は其の御褒美に上げるのだ。

御祖父様も、御褒美に來月から、女子文壇と、云ふ御本を、買つて讀ませてやると、云うて居られたよ。

いゝねえ艶ちやんは、嬉しいだらう。

夫れにつけても艶ちやん、尙々油斷なく、勉强しなくてはいけないよ、僕は決して惡い事は云はぬ。

之も、唯々二人の兄妹で、妹の末、幸多かれと祈る、兄の心なのだ。

此の外、まだく話したい事は、澤山有るが、忙しくつて、寄いて居られ無いから、又此の後ち折りを見てとしよう、ては艶ちやん、左様なら。書遅くれたが、お祖父、父様初め、ジヨシや玉にも宜しく。

○秋の夜友を招く

羽後　菊池りう子

月の桂の花紅葉美はしう星姫の愛のまたゝき愛らしき君には如何にながめさせ給ふらん心なき身にも秋と申候へばそゞろに涙の露しげきをまして鈴虫の何をかこちてかふり出てゝなく聲のいとゞ哀に存ぜられ候折から友におくれし雁一ッかたぶきかゝりし月をかすめて雲井はるかに行きすぎ候ゐゝ！なつかしの露子の君よ！かゝる詩趣にとみたる夜半になつかしの君と共に手を取りて夜すがら文の花すゝきをつみとりたらんにはと只々御上の戀しう存ぜられ候淋の上風御耳にとまる夜半もましまさば松虫の待ちわびまゐらする心の程を哀と思し出て給ひて招くすゝきの露ふみわけて遙が宿をとはせ給へや、あなかしこ。

○病姉の看護しつゝ遠地の兄に

石狩　小川しらぎく

兄様！御安神下さいまし、病の床に臥ります姉様はちと御快よくお胸の痛も稍凝ぎました、今朝疾くに露の干ぬ間と綻びかけた薔薇の花を散る水仙と挿替て御目にかけましたら姉様は大そう御喜び遊して「本當に淸淸するわ」と仰なされ蒼ざめました御面に珍しくも微笑み遊しました其折は紅鮮かな花に榮えて一入悲哀な風情でありました、朝た夕べまこと身も心も捧げて御見とり致す小妹の心の中如何許り堪へ難く覺えましてせう姉様も庭の櫻笑ひ初むる頃は必と癒えて共に其大陸にうたはうと去る鄕の頃申されました御言葉も今はあだとなり心せぬ櫻花は世の春風に操へらるゝが儘に惜むとも甲斐ない花吹雪、夫れすら夢の様に過て散る花はさながら喚と憂との內をさ迷ふ姉妹のつきせぬ涙の凍つたあとゝも思はるゝ迄に庭面は眞白、此の萢のあとなく消ゆるのは何時てせう、吁兄様憐み給へ、小妹は夜毎日每人知れず御全快の折をのみ祈て居ます……神樣は此深き願は必と許し給ふとのみ信じて。

○彩子樣に

姬路　岡部婦美子

彩子さん、なつかしい、御手紙、どんなに、うれしかつたてしよう、あゝ、私はもう、うれしくて、うれしくて、何とも申されません、どうか、この御心を何時までも、何時までも、忘れずにね。

あゝ、失敗に失敗を重ねて、老さき、みじかい兩親に安心、さす事も出來ず、楷葉のかげから、姉は泣いて、見て居るてしよう。

と思ふと、もうたまらなくなつて、泣いて泣いて泣きあかす夜も、幾度かあつたのです、が彩子さん、どうか御安心遊ばして、もう何もかもおもひきつてよくあきらめて居ますから、あゝ、これも皆神様から、さづかつた各々の運命ですからね。

彩子さんこの後は仰せの如く一層仲よくして神樣からさづかつた、運命に滿足して、出來うるかぎりはたらきませう、そして理想の岸にすゝみませう。



新歌謠　編輯局選

天

呼べば此方向く花賣り娘娘貰ひたや花添へて

秋田縣仙北郡金澤町　大越みさを

千厩

地

わしの田舍にや電話はないが山と河とがたちばなし

さゆり女

[illegible]

人

枕時計に耳さし寄せりや針の命をきざむおと

越後中頸城郡寺野村　藤原黑子

奇贅

秀逸

○右手にたんぽゝ左手に菫前と後ろに蝶が舞ふ　常陸　酒葉貞子

○雪と紛ふて散る花吹雪下に常磐の活人畫　磐城　富田時子

○宇治はよいとこ京にも近く謠で夜があけ日がくれる　備前　松本歌謠子

○湯上り姿を夜風にふかせ折つた白薔薇胸に挿す　下野　新井琴子

○初手は淺黄が濃茶と成て末は手織の子持縞　常陸　酒葉常子

○嫁も貰ふて娘もくれてこゝろ長閑に春の旅　徳島　小川なみ子

○小雨降る夜の相合傘を櫻ねたむか花吹雪　上毛　眞砂壽子

○若しも此身に羽あるなればとんで行たい父の里　廣島　黛岡琢子

○晝はつゝみに菫の寫生夜は歌詠む窓の星　北總　貝塚一葉

○可愛相なは深山のさくら花は咲いても人知らぬ　失名

○　周防　小澤ちゑ子

前の小川は私のように底は見ゆるが水清ひ
○　伊勢　山田ひさ子

今日は嬉しき二人の影を映す水田に田植歌
○　小石川　野菊

月はすだれにみだれたまゝの萩の姿をうつし出す
○　能登　しらゆり

白ろい卯の花夫にすれば紅のつゝじは妻のやう
○　三重　山本富士子

兄は凱旋弟は戰死赤と白とに咲くつゝじ
○　豐後　松尾かをり

春の女神が土筆の筆て一夜染めたか花の色
○　あやめ子

娘美いのはお家のかざり牡丹芍薬庭かざり
○　丹波　奈美子

君がかざしの櫻にまとふ蝶も羨む人もある
○　滋賀　辰井琴子

京は女よ女は舞子宴席を飾へれば夜が明ける
○　芝區　岡田すい子

寝たる坊やの枕邊守るお友可愛や犬張子
○　徳島　仁木花汀

百合の雫て白粉解いて塗ける妹の愛らしさ
○　岩代　松山薔薇

馬もようこぬ此の山里を緋桃下行く自轉車隊
○　千葉　わかな子

姉は十八都で學びわたしや絲ひき學資をおくる
○　はつ子

垣の卯の花まさかりなればなけよ一聲ほとゝぎす
○　茨城　小泉はま子

蝶を追はんか追はれば摘めぬ里の川邊の白すみれ
○　駿河　古山秋月

花の吹雪に流を下る簑を着せたい筏さし
○　下總　大崎篤枝

金波銀波の夕ぐれ磯に白帆あげたる珊瑚船
○　埼玉　名なし草

紅いたすきに姉様かぶり桑をつみとるやさ少女
○　堺　竹叟文子

花や召しませ品よい花を品のよいのは女郎花
○　奈良　藤田せい子

波のひゞきに船歌消えて夕日落ち行く佐渡が島
○　秋田　富佐子

木立青空すきまもないに何所洩れ來る笛の音
○　近江　松村波子

田植するのは厭ひはせれど赤い襷に泥がつく
○　本所　登利子

遙か向方は菖蒲の畑小さい絵傘が見え隠れ
○　弘前　佐野てる子

花のいづれに我が歌やろと思ふ絶え間な蝶が來る
○　岩代　三浦たい子

絵の具揃へて向ふてみたがきまりわろさに後見る

廣津柳浪先生選

投書小說

天

○小さき懺悔

岩代須賀川本町 服部水仙

月末調を書き終へて、時計を見ればもう三時十分。其を校長の前に出して、紫風呂敷包を小脇に、袴の紐の緩みをひき〆めながら校門を出た。きのふの雨に蘇生つた樣な草々、紫床しき菫、鮮かなたんぽゝ等が今を盛りと咲競ふて居る、朝に夕に通ひ馴れた道を、今日の修身に言ひ聞かした孝子の話や、さては新しく敎へた唱歌を皆能く覺へた事などを、考へながら獨り心樂しく、微笑ましく、足を早めた。唱歌と言へばそうだ、あの何時も聲の宜い早川が今日も見えない樣だつた、昨日と一昨日と其前の日と前の日と今日で都合五日の欠席、一體如何したのだらう、二年級では一番勉强家の無邪氣な優等生の早川妙子が此麼に欠席するとは……

……若しや病氣になつたのでは無いか、それとも亦家に何か變つた事でも……寧そ今一寸寄つて見ようか知ら、いや〳〵明日他の生徒に聞いてからに仕樣などと考へながら歸り行く自分の腰に、「先生！」とばかり抱きついた者がある。

「オヤ早川さん如何してまア……」

と私は嬉しい樣な、懷かしい樣な、氣持して其房々とした髮の毛をなでながら見れば、二人は土橋の上に、土橋と共に、淺き流に其影を寫して居るのであつた。

「如何して學校休んで居らつしやるの？」と袴に埋めた其顏をのぞき込めば、「あのう……」と擧げた眞白き顏の表情に富んだパッチリとした目に、美しい露が宿つて居た。

「オヤ！如何して？」私は何となく胸騷しく覺へた。

「先生！あの家の姉ちやん……死んぢまつたの……」

ワッとばかり泣き出して落つる淚を、左の手に固く握つて居る蓮華草の束もて受けて居る。

「え姉ちやんが？……死去なつたつて？……」

「えゝそうなの家のお池には入つて……姉ちやんはお池に投身つて死、死んぢまつたの……」

またも溢るゝ淚を今度は可愛いゝ手に拂つて居る。

「えつお池には入つて……」悲慘なる其死の影には何か秘密が隱れて居るのだらうと私は思つた。年は慥今年十九と覺えて居たが……すると突然、

「先生！姉ちやんは許して下さるでせうか？……」

「え、許してつて何を……」

不思議な問に、じつと瞶れば氣の故か彼の悄々とした頰の邊りの何となくやつれた樣に思はれた。



「姉ちやんはね先生！母さんが惡るい爲めに死んぢやつたんですつて、だつて白根の兄さんが仰言つたもの……兄さんは此頃一寸も徃らつしやらなかつたんです私が母樣に此手紙を拾つたと言て父樣とこへ持つてお出でと言はれて、父樣にあげたら父樣は其時大變姉ちやんを叱りましたの不埒だつて……姉ちやんは其時そんな手紙覺えはありませんつて泣いてましたの……それから兄さんはちつともゐらつしやらないんです、姉ちやんはね、白根の兄さんは私を其麼者と思つてお出てなのだらうか情ないつて泣てばかり居ましたの、けれど姉ちやんの死んだ朝、父樣と兄樣は大そう泣いたんです光子許して呉れつてね、そして母樣を母樣を怒つてね……母樣は今永沼の祖母さんとこに居るのです、姉ちやんは手紙を書いて死んだの……先生！謝つて頂戴な、妙が惡るかつたんだからつて……ねえ妙があの手紙を父樣にあげたものだから……よ、先生謝つて頂戴！」あゝ悲慘ではないか、眞、妙子の母は光子には繼母であつた。白根の兄樣とは光子の許婚、それが光子の或浮名を聞いて、斷然結婚を辭したとの事を一寸聞いた。

「オ、謝つてあげませう、あげませうとも」

と私は妙子の手を取つて、小高き洞に、怨を飲んで身を投じた早川光子の墓を訪ふて、姉を戀ふて泣く、妙子の可憐に罪なき心を告げて、妙子の爲めには、今は實家に幽閉の罪深き繼母の科をも許されんことを希つたのである。

上乘の作、寸分の隙なし、此篇には妙子、其姉の光子、許嫁の白根、光子の繼母、父、女教師等の人物が含まれてあつて、皆それ〴〵の性格があらはされてある。妙子が手紙を見せた事から姉が身を失ふに至る動機も、能く穿たれ、女教師の餘所ながら同情するのも、短篇にしては不思議に好く出來た作である（選者評）

（地）

○世は春

京都市兩替町御池上ル
中村傳三郎樣方
松永みつる

上

「文ちやんてつち。」と槙の葉を奇麗に刈り込んだ生籬の潜門を庭園へ驅けて來たのは敏子と云つて此家の一人娘年は八つか九つの可愛らしい少女である、續いては入つて來たのは二つ程年下の顏容こそ可愛らしいが身に着てるものは劣つて見える。廣い泉水を一廻り山から導いた筧の水が落ちて小さい瀧をなす邊汀近う寄つて菫の花を一摘み水に投げ入れて、

「鯉よ鯉よ緋鯉よ——」と優しい足拍子をとつて楓の樣な掌を打つと群れ集ふて居た緋鯉の大きいのががぶと一口。

「あら浮いてよ。」

「あゝ」文ちやんも面白がつて居たが手に何もないので。紅梅の今を盛と咲亂れてるのを文ちやんは採らうとすると、

「あれ文ちやん」と敏子は振り返つて、「折つては不可わ」一寸そちらを見たばかり花に手が觸れると。

「何故折るの折るのなら折つて見。お父樣に云てあげるから」と小さき女王の見脈凄し。

「云ても構はないわ、お母樣が妾家のだつて云つたも

の」と文ちやんも退かぬ。
「嘘言々々妾家の庭園にあるんだもの、そんな事あるものか」と玉の腕を伸て突と計り、文ちやんの面は俄かに氣色ばんて來て鈴の様な眼から一雫。わつと計り泣き出したのである。

下

「又泣てる。」衣縫ふ手を措いてそと立上り走出て見れば青々と伸た麥の畦道を泣乍ら戻る文子の側に走寄て脊に手を廻して抱く様に
「どうしたの、泣ものじやありませぬ、」
「あの敏ちやんが、」
「お前がいたづらをしたのでせう、」
「あの桃の花をとらうとしたのそしたら、」と文子は幼き胸に飽迄も惡くはないと信じてるので、
「そんな事をするからてす、」
「だつて母様は妾家のだつて」と怪訝な眼を睜りつ。
思へば可憐の小女よ。いつぞや悲の物語の折十年以前文子がまだ生れぬ先父も壯健て葉山家とし云ば村ては一二の財産家と呼ばれ、其時はあの家も庭園も悉皆我家のだつたのと云つたのを幼な心に思ひ違へて居たのて、
「ですから今はもうあの敏ちやんの家のですから決して折たりなんかするのじやないのですよ分りましたかさあ泣のじや有ませぬ早く歸つてお父樣のお藥を貰ひに行くのですよ。」と前垂て泪を拭いて歸ると家內では苦し相に咳入る聲の聞えつ。
陽炎たつ野邊の彼方の街道を人力車を連ねて走るは櫻花見歸りの男女てあろう。
吁世は人の心も浮立つ春てある。

値に紅梅を折る折らぬと云ふ小供の爭ひの中にも無限の波瀾は含まれて居るので、能く之を洞觀し得た作者の功は沒すべきてない（選者評）

（入）

○梨の花

陸中國江刺郡野手崎　菊池はせ子

梨の花續く廣瀨河畔に沿ひ、心盡しの行水に終日の勞と鍬の先を洗ふ村の若衆も見えなくなつた頃人目を避ける樣にひそ〳〵と話し乍ら步いて居る男女の二人があつた男は村の庄屋の息子源吉で女は中宿の息女鶴子と云ふのてあつた。夕風そよ〳〵と吹き來つて梨の花一片二片散つて河の音滔々と何んだか物淋しい夕方て

ある。

男は後から徐つと手を懸けあまへる樣にして「鶴さんそんなに泰造が戀しいのカイ？」と妬ましげに囁やいたが返事がない、「鶴さん聞いたらうね泰造が……切つて切れぬ此樣可愛いお前との中を切つて大畑の婿になると云ふ確な話なんだよ鶴さんまだ聞かないの？」「イヽエ」「ぢや內て內所にしてるんだあんな奴と夫婦にならなくつて却て善いのよ、それよりか、ね、鶴さん……」と力任せに抱き寄せて何やら囁いだ、鶴は口惜しさうに上目遣して何か言はうとしたが咳にまぎらした、「鶴さん嬉しくなくつて僕の內には田が三町、畑が六反、して學資金が五百兩あるよ、夫婦に成つたら鶴毛のショールにダイヤの指輪、して熱海の海岸へね……」「泰造さんはあなたの樣な立派な家に生れ贅澤なお方ぢやありませんの貧しい百姓で御座いますの何んぼ馬鹿にされたつてお金に瞞される樣な生地なしの私てムいませんよ、仇厭らしいたら誰がお前さんなんぞの……誰が……」ハンケチに顏を被うたまゝすた〳〵と木下路を潜り〳〵驀に馳け去つた、源吉は取殘された如く茫然立つて居たがふと思ひ出した樣に「鶴さん鶴さん……」と叫びながら同じ道を辿り去つた、鶴は後振り返り進む途端、土塊ほろ〳〵と頽れて眞青な廣瀨川の鰐淵にざんぶと吃驚して引き上げやうとした源吉も物の拍子に……一陣の風に梨の花紛々と散つた、河の音彌增して淋しい。



當主（選外）　上野ろく子

泰造は、鶴子を誘うて相談して見やうと云ふ思案が胸一杯なので夕飯過ぎから潜然、中宿の鶴子が家へ行かうと思うて廣瀨河の土堤に沿うて步を運んだ時、不圖足に觸つたものがある、何とはなしに拾つて見れば下駄！女の下駄！あゝ見た樣な何處かて！迂路々々して水の流れを覗いて見た時、寢待の月まんまろく黑雲から現はれた。

廣瀨川の情死と云つて岩手新聞の三面記事に載せられて地方人の話しの種となつた、鶴子は心にも無い浮名を流したのである。

源吉の死を表面にあらはさず、心中の噂ある事に止めて、世の矛盾、

誤解を骨子としたのは、本作者の手腕て、女が源吉に云ふ辭は稍死すぎる、も少し情があつてもよからう（選者評）

秀逸

○看護婦

丹後　花梯女史

今回日本赤十字社京都府支部看護婦生徒募集に付佐多郡の志願者は左の如し。

高田きみ　鳥居いし　山本はな　中川きぬえ

あゝ、妾は新聞紙上て此記事、否志願者の一人高田きみを見て、深き〳〵感想は油然として腦裏に湧き、同時に熱い〳〵涙が頰に傳ふのを覺えぬのてあつた。嘗て妾が某村の小學校に教鞭をとつて居た當時に、村て名代の豪農高田某方の世話になつて居た。

主人は學務委員として村ても教育思想に富んだ人て、妾が此家へ來たのも二人の娘の訓練に就て迎へられたのてある、日をふるに從つて妾は家内の樣子に一の疑問を懷いた。それは姉妹の兩親に對する擧動と、姉妹が容貌性質に於て著しき差違否寧ろ反對なとてあつた。姉の君子は十七歲て實に田舍に不相應からぬ美人てあつたが、惜しい事には愛くるしい面に拂へど盡きぬ愁の雲が掩はれて、終初顰めた眉は開かれる時なく、溫順てそうして無口な性てあつた、妹の房子は色の小黑い丸顏てどちらかと云へばお轉婆の方てそうして三歲違ひにしては大體な娘てあつた。

日を重ねる内に兎角姉妹の仲が圓滿に行かぬので、兩者の中に立つた妾は幾度か嗟嘆の聲を洩した、或夕妾は一人裏庭にさまよふ時下男熊三の口から、計らずも日頃の疑問は解かれた。熊三は次のやうに語つた。

「今の奧樣は後妻樣て前の奧樣はそれは〳〵御器量よしのお優しい方て、旦那樣とのお仲も睦じく上の孃樣がお生れなさつてからは、一層賑はしくてお宅はいつも春のやうて御座いました。丁度孃樣が五歲の時にお可愛想に奧樣は假初の病が源て、澤山此世に思を殘してお失なりなされました、其時の旦那樣のお力落し!!それから二年目に今の奧樣が下の孃樣を連れてお越しなされました、それからと云ふものは元來溫和しい孃樣が傍の見る目もお痛はしいあのお氣苦勞」と彼は幾度か鼻をすゝつて語つた。あゝ妾は此悲しい話に思はず同情の淚にかきくれた、斯くて妾の同情心は悉く可憐の君子に注がれて可愛さは愈々強くなつた。君子

もまた妾を慕ひ又なき後援と賴み深く閉した愁の雲さへ幾分か拂はれて、晴々した顏に眞の笑さへ洩す時があつた。

あゝ秋淋しく虫鳴く夜半、君子は妾の手を固く握りしめて、「私は貴女お一人を便りにして居ます、こうして可愛がつて頂くのも何かの因緣と思ふて、例へ此土をお退きなすつても必と私を見捨てゝ下さいますな」と熱い涙を妾の手に注いだ、妾も共に涙にくれていつ迄も姉妹の樣にお互に力になろうと、誓つて彼を慰さめた。月日に關守なく早くも君子は十八の春を迎へて愈美しくなつた。然も母の愛は日に薄らいて、不運の神は飽く迄も彼を泣かしめた。

梅薫る南窓に朧月の照す夕べ、例にない君子の姿が見えぬので彼をもとめて主家の樣子を伺ふた、六疊の居間には洋燈の光あか／＼と、其所には母親の前に首をたれた君子の姿が確然と障子に寫つて居た、聞くともなく耳を傾けると、低くて强い母の聲は手に取る樣に聞へた「お前は二言目にはすぐに正夫樣て云ふが戰爭に行けばまあ命は無い者、それに何も確かな約束があるではなし、あんな甲斐性なしの貧乏少尉を待たずに、省一と一所になつておくれッ何も勞を賞めるのではないが男らしくてほんとに當世の才子だよ、きつとお前は承知して嫁つておくれだらうねッ!!」

彼は愈々うなだれて無言であつた、母親は聲を强めて又詰つた「お君ッ默つて居ては解らんよ、馬鹿々々しい母が是程賴む樣に云ふものを、お前の返事ですぐにも式を擧げさし度いのだから」彼は辛ふじて「おお母樣どうか暫時……せめて戰がすみますまで……」と云ひさしてよゝと泣き伏した。

あゝ可憐の君子彼には河井正夫と云ふ戀人があつたのである、君子は果なく冷たき戀に煩悶するのであつた、然も正夫其人は遠く滿洲の戰場に在つて幾百の勇士を卒ゐる若年士官であつた、斯くて春は愈々深く桃の花咲く頃となつて、妾は突然此地を去る事となつたので心を殘して身を切る樣な別れをした、別れて僅かに二旬を經て步兵少尉河井正夫の戰死と紙上に載せられた時、あゝ妾は彼の心中を察して泣いた、彼女の失望は如何程であつたらう。其後久しく彼女の消息を聞かぬので、度々安否を尋ねたが僅かに妹の代筆で彼女が病の重體なことを知つた。妾は明暮君子の全快を祈つて寢食を安んじなんだ、幾何もなく戰雲東に治つて平和の風の香る頃初めて、彼女から全快の報に接して妾の

夢も安らかになつた、爾來僅かに三月を經た今日、案外にも赤十字社に志願した彼女の心は果して如何てあらう。

いやみもなく、滞りもなく、一わたり整うた短篇、別に疵の無い代り、際立ちて感動を興へる處もない。併し是れ位の筆法は中の上に位するもので、有望な方てある（選者評）

○破れ蓮

名古屋　あざみ

「おや、お歸りかい」と聲可優う、明け難い戸の、ガタピシと旋て、入り來るを上り框に三分心の、赤茶けた笠を被せた洋燈片手に迎ふる女。お三輪とて、九か二十、爰ら裏店ては先づ珍とすべき、色が白ふて、黑髪に艶は無いけれど、何所か品がある。

「は、」との返辭を待ちがてに、「御苦勞だわねえ、毎日恁うして……それて今日は何うてしたよ？、矢張……」といふ間に、隅につくねた雜巾て足を拭くと、男はそこに腰かけて、

「お喜びなさいまし、實は今日、お孃樣、私若樣にお目に蒐りまして……、」

「え、あの。」云ふかと思ふと、二重瞼の愛くるしい眼を屹と見張て、男の顏。

と眩し氣に眼を落した、男の年は廿五六、其昔――まだ玆幾月前なる其家の平和てあつた頃までは、男爵幸田家のお構へ車夫を爲て居たのて、色淺黑さに、搗てて、幼少天然痘を煩つたのて、醜さ、それを眩しと反向る樣のしほらしさ。

「てお前、ようく爾う申し上てお呉たねえ。一躰何處てお目に蒐つて」

「は、每もの如にずうッと廻りましたが不可ませんのて、誠に日々面目も無いヿだが、と思ひ〱來蒐りましたが瓦町の、」

「瓦町？、瓦町の何所？」

「那れて何と申しますか、何でも御園筋から餘程參つた北側の……何ても御門の所てして、仄やり立つて其所らを御覽爲すつて被居る立派な方を偶見升と……、」

「お前、甚麽扮裝を爲て被在たの」

「甚麽ッて別にお變りもムいません如てして――一瞥私を御覽遊ばすと呀ッ金藏かつて然もさもお驚き遊ばした如てムいましたが、それからお邸の今の御樣子、大殿樣のヿから私がお供申してお孃樣は今これこれて每日々々私が若樣をお探索申して居るヿから、是非是

非お家のお爲お孃樣のお爲とお思ひ遊ばして、何う云ふ御都合かは存知ませんが、これからにも直ぐ一先づお孃樣が許へお在を、と申しますと、」

「何と仰有て？」と息を喘ませる。

「然うしますと……、實は、その若樣のお云ひ遊ばしますには、大變、今度のお邸の紛擾に就ては云へ、お孃樣から、一度は右に左く阿父樣とも呼だ爾もお年を老た大殿樣まで、と顏色變て大變お憤り遊ばしたのでムいましたが、その、此方へ歸る、と云ふに就ては、」と句を切て、如何なるべきと對手の顏色を恐る〳〵

「其……誠に那樣に迄して私を思つて下さらうとは……誠に三輪さん——お孃樣には濟ないけれど、種々其所に事情もあり、何うにも恁うにも詮方がなして、決して再婚のなどと云ふんぢやないけれど、今は此所に——その門構への家でムいます——に養子となつ了つたんだから……けども、乍不及御相談對手にやなりも爲るから……と仰有て、何だかお悲し想なお顏の色で、」

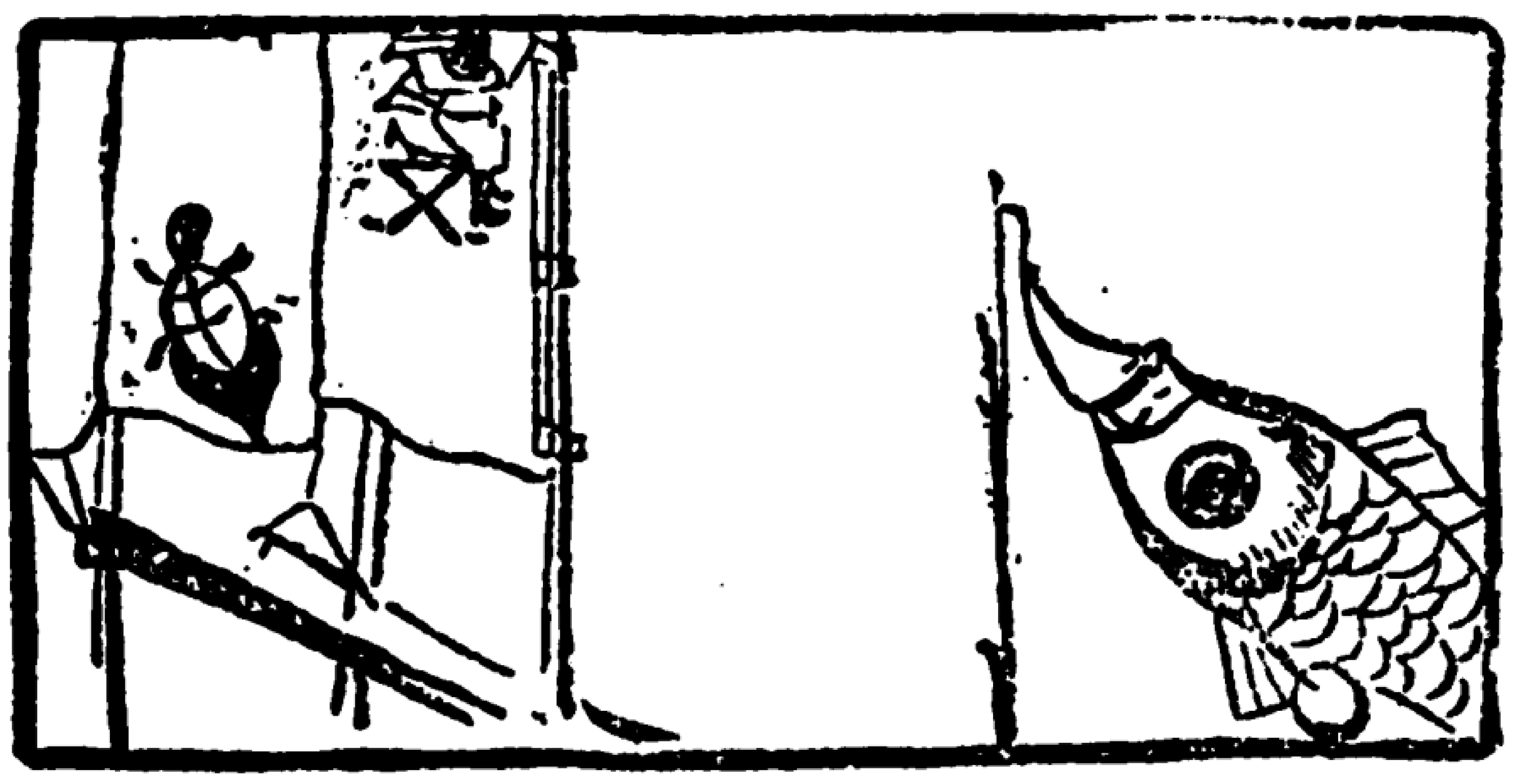
「ぢやア最う……あ、那れて儂を見捨て丶今ぢや立派な縢とした奥樣までがおありなのね、」

「いえなに」と亂る丶言葉を引取る如、「否、お前は爾はお云ひだけれども」と俛れて力なく、凝乎身動も爲なかつたが、霎時して屹と美しい眼を擧ると、「金職や、眞個にねえ、宜先あ這麽に是程迄に……殊に賴り無身だから、切てはお前、以後共に儂の力に成てお吳よ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

二三日後の或暮方、襷を掛てさも多忙氣の、お三輪が家を出る所を、見た人があつたといふ話。

一寸眼先の變つた筋で、時代のついた所謂小說らしい點は雅致にも結構にも見えて、形式的に陷つたのが弊處と言はゞ言ふべく、けれども素人放れのしたと云ふ事はたしか（選者評）


端午（選外）熊本　上羽たつ子

○歸朝の後

埼玉　荻島かすみ

《上》

桑港を船出して、多くの船客と貨物とを載せた米國船イサベラ號は、今、雲耶山耶の日本を見た、上甲板には歸朝者の群、皆歡聲をもて滿された、群を離れて一人の若者、年頃は二十四五色は淺黑いが眉のキリ

りと目の涼しい、鼠の上衣のボタン遺らず外づして、横にした胸は雪の樣なホワイトシヤツ、冷々と吹く潮風にパナマの夏帽を危く奪られやうとして、ふと面をあげた、今、入日の眩ゆいばかり燃え渡るを如何にも床しさうに見入つて、時計をパチリ、蓋の內側が、夕陽に光つて針の先は六時半。

「雪さんが待つてるだらう」と悠然椅子へ、——眼は閉じて、うつとりとした。

* * * * * * *

「芳夫さん、貴方……どうてもお出發なさるの」頰て艶な星眸は一刷毛の薄霞、颯とかゝつて朦と潤む……其時雪江はまだ十七、眞白のリボン、亂れた黑髮、一すぢ二すぢ、淚に濡れた頰にひつたりと、眞紅の唇に含まれて、

「あの五年てば、待ち遠いぢやありませんか」眤乎と雪江を打守つた芳夫の目は次第に霑んでくる。

「妾、決して、貴方のお出世を邪魔する積りはムいませんから、あのいつまでゞもお待ち申しますの、え、貴方の爲めならどんな苦勞ても」厭ひませんの決心、屹とした面に顯れた、がそれも性來の勝氣て情を抑へやう〳〵とする いぢらしさ、雪江は最う鳴咽りつゝ

「け、けれども、家のおつ、繼母樣が、繼母樣の親類へお嫁に行けつて毎日の樣に責めるんですもの、ねえ一番これが辛くて……今貴方に遠方へ行かれましては妾は……妾は最う……」と後は得いはず、犇と手帕を嚙締めるのであつた、芳夫は我知らず進み寄つて雪江の右手を堅く握り締めた。

* * *

船は早や觀音崎と直角をなしつゝある、そーだ最早五年の昔、泣いて別れた其夜の事は、雨の晨月の夕の愁思の種であつた、華やかであつた夕陽はもうすつかり薄れた——忽ち横濱入港を知らする汽笛の音。

(中)

若者の名は村上芳夫……芳夫が中學を卒業したのは二十頃であつたか、芳夫と近所の豪家佐々木の令孃雪江との戀は、その以前に成立つて居た、その戀は淸い、美しい天國の樣であつた、けれども芳夫の火の如き功名心——慈母の恩愛の淚の霑しも、雪江のいぢらしい泣顏をもふりすてゝ遂に渡米した。

或る時はふと窓によつて次第に暮れかゝる西の空を見ては淚に咽び、或る時は中途で學問を抛つて歸らうかとも思つた、かくて五年は夢の樣、首尾よく、大學も

卒て、懷しい故國へ、矢の如き歸心を抱いて立歸つたのである。

(下)

「アレ、兄樣が」

「おゝ芳夫、よくまア、歸つてお呉れだのう、お前も辛かつたらう妾の方も辛かつた」ともうほろ／＼と老の涙、多年相見なんだ母も妹も我も、いひ知れぬ感慨の涙に咽むだのである、夜の更るをも知らず盡きぬ話の末、妹のお靜が「あの、ね母樣、佐々木の雪江さんは病氣でと——と……」

「えつ」手巾握る手が怪しく慄へて甚しい驚に目を睜つた。

「あゝ、可哀さうに死亡なつての、美しい孃さんだつたが」

「はア…」と此時芳夫は長嘆息、餘りの事に忘れて居た樣な溜め涙の、溢さじとすれど、自然に溢るゝ幾雫、芳夫の胸破れむとす。

＊　＊　＊　＊　＊

五年ぶりで國に歸つた芳夫は、無上に安らかな眠の手に抱れて天國へ遊ぶ筈であつたのに、あゝ堪へ難き思ひかな、眠られぬ、情は昂ぶり、眼は冴え返つて——忽ち訣別があり／＼、——繼母にいぢめられながらじつと辛抱して居る——病氣——忽ち白いリボン、黑い髮、涙に濡れた顏をあげて「芳夫さん」と夢の樣に呼ばれて起ち上つた、何處か知らず遠い／＼所で、颯々と松吹く風か將た天の聲か、天女の箏を掻き鳴らすやうな囁き、二十日餘りの下弦の月は、今雲がかゝつて西のみ空に輝ける星の光、導き給ふ神の聖燭か、「雪江さん…」その魂かと渴仰の目にふり仰いだ芳夫は、思はず口走つたのである。

普通の洋行を材とした小說で、筋は少しも新しい處はないが、文體の秀れて居る點を以て採る、追懷の一くだりもあつてよし(選者評)

○輝く星(上)

埼玉　中村紫香子

そよ／＼と吹夕風は綠の麥靡せ、可憐の小花に眠る胡蝶の夢驚かしぬ。貴美子は藥瓶下て下駄音床しう此景色よき野道急ぎつゝあるなり。やあ今からお醫者樣へと五十位の爺頰冠取つゝ問ばはい一寸と、玉を轉ばす鶯の聲。ぢやあ大切に早く行つてお出なせい、ではご免なさいと步出後姿み送り後の若者に向ひ何ちう優しい孃樣だんべい、それをあ繼母が酷く使ふなんて誠に可憐想だと云ば其樣に酷いかね繼母が病氣だちう

じやあねいかい、うん話にやなんねえだ、それに繼母が今病氣なんて猶骨が折らあ、生母にやあ孃樣々々て居んだがあ、言ふ風に成たのを思ふと一夜位泣明すだんべいと爺は同情に堪ぬらしくそれを厭な顏一つせず今ぢやあ學校も休どうして働いてるんだと貴美子をすかしみて、その繼母をよ怨もせず朝夕神樣に病が早く癒るようにつてお參詣を缺した事あねいぜ、十七位のシヤレ度盛の娘の迚も及ぶところぢやあねいや、それがお前村一の村長の娘だぜと爺は語尾に力を入ぬ、感心だなあと若者も又貴美子を振返りみぬ。爺は煙草の烟を環に吹つゝ有しが、ふと空仰ぎ、やあお月樣が上たあ少し急ぐべえ。此話を一心に聞居たる角帽の青年手に持洋杖小脇に抱へ貴美子の跡慕ひ行やがてみえずなりぬ。月高う上りて四邊の景色書の如し。

（下）

月の光を正面に受後毛靡せて歸道の貴美子、土橋際迄來りし時垂柳の茂みより貴美さん!!と叫て出しは眉目秀てし角帽の青年とは夜目乍ら明かに認られき。一度は驚とせし貴美子、アラ秀夫樣どうして今頃と恥しげに顏赤らめぬ、僕は至急の用て今日歸つたのです、貴美さん、母樣が病氣だつてねー、何僕は前刻皆聞たから知てるよ實にお察し申すと貴美子と肩並べ一寸貴美さんに聞度のはね、此間の手紙には皆僕が手紙を呉ないつてかいてあるが僕は一月に二度は必ず上るのだよと云顏を懷げにみ上し貴美子あの其手紙をね母樣が皆取て了ふつて事が漸々分りましたの、あのお寫眞迄もよと訴ふる如くそれにね母樣の甥の春也樣つて方に嫁つて母樣が仕方のない程仰しやるの、私此間も仰しやつたから思切て私には秀夫樣ていふ許婚があるから其事だけはお言葉に從はれませんと斷りましたのと優さ眼もて盜見する愛しさ。其心永久に忘ずにね貴美さん例へ何な事で兩人の間を裂事ができようとゝ秀夫は貴美子の手を握りぬ。貴美さんと思出たる如く東京て流行のリボン買てきたよと云ばそう有難うこれ貴君に戴いたの未持て升のと菫の色褪しを示ぬ。貴美子は戀き秀夫の手の觸しものは例へ鼻かみし紙にても大切に保存し置なりき。オヤもう此處でお別ですは、又明日逢ませうねと懷げに名殘惜げに莞爾と笑む美しき顏、秀夫は今一度其顏みてと貴美一寸と呼返し例ね母樣が何と云うと逆はないでよく使はれなさい、それで前刻云た心を忘ずにね、僕の慰藉者は君の外にないのだ、來年は卒業ができるからそれ迄氣を付て病氣などに罹ら

ぬように大切にして呉なと熱心に。優しき貴美子の胸には此の言葉のいかに嬉く感じけん只涙ぐみしのみにて言葉なし。それでは氣を付てと見返り勝に別るゝ二人、やがて貴美さんとかすかに。はーいと一聲空に時鳥のなきしかと怪るゝ聲

貴美子は樂しき〱希望に胸みちて如何なる困苦にも耐んと決心しぬ。空には殊に輝く星一つ。

書きぶりも幼く、着想も單純、わざと形容を多く作つた爲に眞を害した處もある。兩人の對話は如何にも若い戀人同士の咄とは受取れた（選者評）

○春の雨　　神田　大澤隆子

『登美ちやんと合奏するのも、最う僅の間だね。』

盲目の敏雄は染々云ひながら、手さぐりに笛をとつて悄然として。

『え丶、』箏の前に坐つて、朱塗蒔繪の爪箱を開きかけた登美子は、うなづいたまゝ、いぢらしい兄の姿に、覺えずホロリとする。

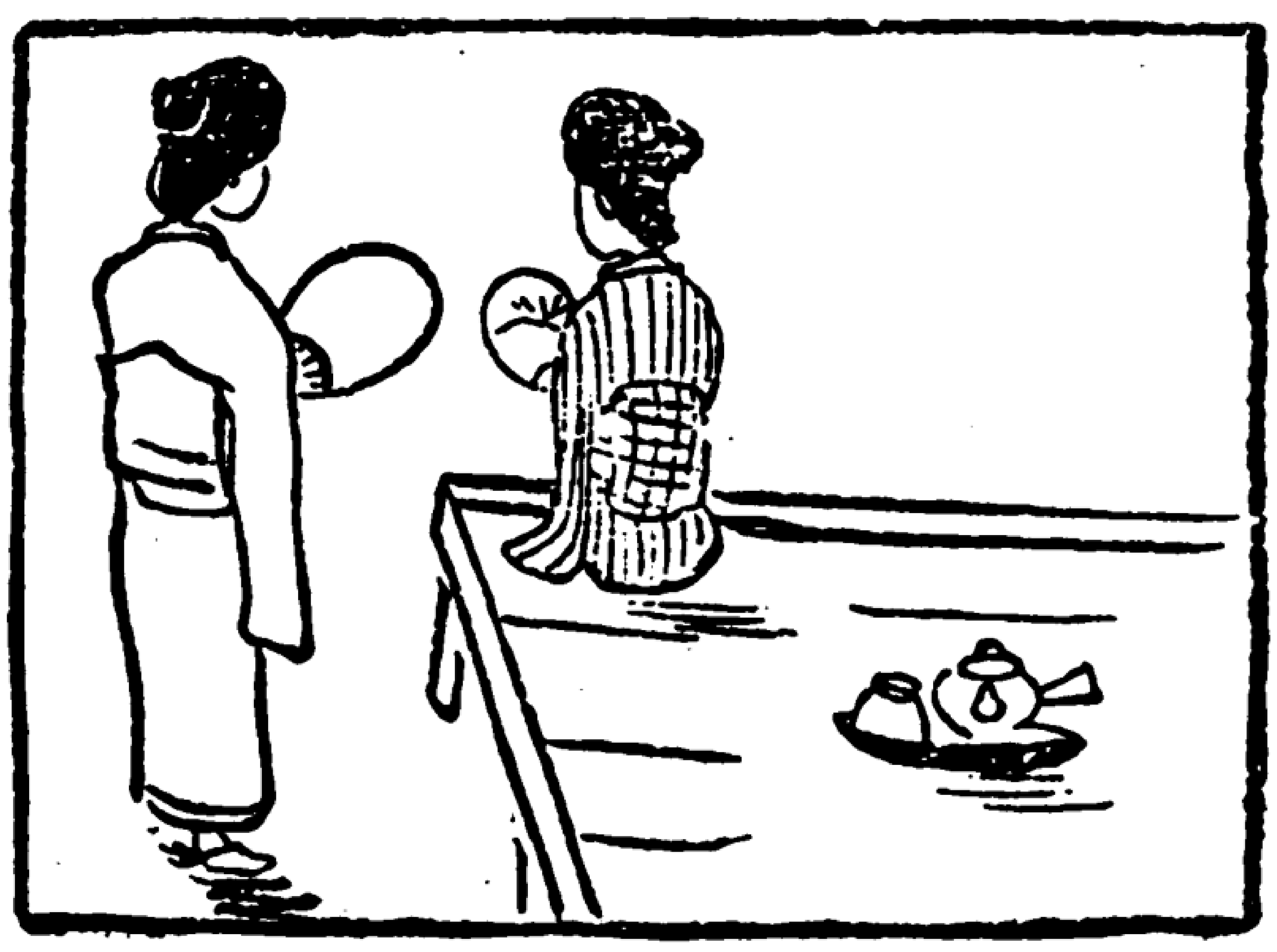
『愈々來月上旬には、茂君も歸朝るさうだから。』と耳を澄していふ。

登美子は見る人もなきに、さと面を染めて伏眼になつたが――。

例へ待ちに待つてゐた茂樣が、お歸朝り遊ばしたとてどうして御不自由勝の、兄樣お一人殘して嫁く事が出來やうぞ。私が居らねば直にもお困り遊ばすのは、知れ切つて居るのに、そんな薄情な事が出來やうか、茂樣はじめ小母樣には濟まないけれど、私は一層……一層嫁かずに、兄樣を慰藉めて上げやう、と殊勝にも思ひ定めて、『兄樣私はね、青木へは嫁りません、生涯兄樣と暮しますは。』言葉凉しく云ひ切つたもの丶、涙は頰を傳ふのである。

『…………。』

無言のまゝの敏雄は、自分の爲に妹を犠牲にするに忍びぬ。けれど南山の激戰に敵彈を受けて、負傷して以來、あやめも分かぬ、眞の盲目となつた身の悲しさには何事も人手を賴む日頃を……あゝどうしたら、どうすればいとしい妹を……と思へば、いつしか見えぬ眼にも涙うかぶ。



凉み　（選外）　岡山　岡澤たね子

暫時して敏雄は、氣を更へて、
『さあ、登美ちやん合奏しやうじやないか。』
と歌口を濕していつた。
『はい。』幽かにうなづいて、『兄樣、關の清水でも。』
潤める眼に兄を見上げつゝ、奏で初めた。
別れては行くもかへるも逢坂の……關の淸水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱の、はるけき沖はさゞ浪や……。
嚠々たる笛の音に和して妙なる爪音。
日は暮れて月なき夜の春も淋しう、しのぶに傳ふ音さびしきは春雨の降るのであらう。

別に波を出して來ないでも悲しい筋であつたが、波を出して筋は複雜しても、情は純でなく、波を出す程なら今一しほの苦悶も描いて欲しかつた(選者評)

○思はぬ罪　　福岡　加來秀野

汽車は全速力で若松より直方の方へ、此處有名なる、中間あたりの平原を北から南へと走り居る。見わたしたところで、室内には自分と芳江さんとの外に、工夫二三名が我等と反對の側に座つて、もの〳〵しくのゝしり騷で居るのと、先のステーションで乘り込んだ同窓の友の中村君とばかり。
燈火は汽車のゆるぐ度ごとに動いて居る、車窓のガラスはがた〳〵とふるつて居る人も我も一樣にゆられて居る。
おぼろ月夜の影は窓を通して、暗から暗と流れる電信柱の影をいくつとなく、面白き話しも早やつきて無言の中に云ひ知れぬ寒みが、おそふて來て、あくびが此處から其處、其處から彼處と傳染する。
「そーして君は妻君つれて何處に行つた?
「エ、芳江さんが僕の妻!?!
自分は今し空想にふけつて居る矢先に、この不意の問に驚かずには居られなかつた、一時答へにちうちよしたが、芳江さんが顏を赤らめ羞を含くんだ目で、助け求むる樣に僕の顏を伏目がちにながむるので氣のどくには思たが、一寸とごまかした。
「馬鹿なハツ〳〵芳江は僕の從妹だよ
「從妹フム……所は……
「所?君知るだろ山本君の村を
「山本君と云へば水谷かね
「中村君氣に入つたと云ふのか、氣に入つたら取持つてもよいよハツ〳〵〳〵
「芳江さん行氣は無いかねハツ〳〵〳〵

僕はからかい半分に云つた所、耳のあたり迄赤なつて益々頭下るばかり、其風情が又なく愛らしい。

「馬鹿」

中村君は、意味ありげなる笑をもらしたが、僕はかくべつ氣にも止めて話頭を轉じた、間もなく直方々々の聲が聞へたので、中村君は何だか名殘をしそうに是非休暇の中芳江さんをともない遊びに來給へ、名所も多くあるからと云ひ殘して出て行つた。

＊　＊　＊　＊　＊

其の時以來、二ケ月は無事に過ぎてしまつた、結婚の日の近より來るのを、二人して指折り數へて待つて居た十月の中頃、不意と中村君から「至急親展」狀が來た、而も六錢郵稅がはらつてある、で胸をだやかならぬまゝ一目通して僕は驚のあまり只手紙を見つむるのみであつた、あゝ中村君は病んで居るのか、芳江さんは旬日の中に丸髷を結ふ樣になつてる事を知らないで思へばあの時罪な事を云うた。

片言隻語も時には人の胸を射る鋭き矢となる、落花情あり、流水心無し、彼の爲には終生の憾み、戀は斯くの如くして何人にもはかない運命をもたらす（選者評）

○新刊紹介

▲英語獨修初步（中學英語研究會編纂）

▲新式英語獨修書（同上）

右の二書は共に最新式の英語獨修書にして法學博士和田垣謙三氏の賛助に成り初步の方は初めて英語を學ぶものゝ爲に發音法習字法の事より綴字、單語、文法の初步等叮嚀親切に獨修法を授け獨修書の方は中學程度以上の自修者の便に供したり共に製本は堅牢、解答の小册子一册宛を添へたり（定價初步六十錢獨修書一圓日本橋區本石町三丁目寶文館發兌）

▲女式半棒圖解（山邊春正著）

著者は劍道の師範にして女子の體育上半棒を使ふ事を奬勵せんが爲に本書を著はしたり余輩皆圖を以て棒の扱ひ方を示し獨習者の便に供せり女子の體育も進步したれど猶此種の日本從來の體育方も多かるべし（定價四十錢京橋區南金六町金盛堂發兌）

▲產科學論

袖珍形の書にして全文六號活字を用ゐ產科に關する細目に涉りて說明したり（定價三十錢麴町區山元町二丁目至誠館書房發兌）

▲通俗治療法（糸左近著）

女學世界衛生顧問糸左近氏が凡ての病氣に就て簡明なる治療法と養生の方法を述べたる書なり誰が讀みても能く理解し得るやうに出來たるは本書の特色にして平素より斯る書物を備き置けば一朝病氣になりても其治療法に迷はざるは勿論病氣に罹らぬ前から注意するやうになり心身の發達を助くること多大ならむ（定價二十八錢博文館發兌）

▲家庭女學講義（一、二號）

羽仁夫妻の主任せる「家庭女學講義」は「家庭の友」の少しく系統的に編輯されたるものにて讀んだ時から直ぐ實際に役に立つ記事が最も多し空論を以て埋めたる衛生向の雜誌とは全く別物なり體裁も飾らず繪もなし會費一ケ月分十錢（麴町區三番町十二、家庭女學會發兌）

新笑話

編輯局選

天

○通　信　　日本橋區楢町　竹内すみ子

男「貴孃は三ツの一番速い通信の方法を御存知てすか、女「電話に電信に……、男「成程ソレから三番目は？、女「分りません、男「婦人に話すのです。

地

○引　力　　秋田　都美山　幽香子

太郎御酒を買てかへる途中瓶を落してのこらず御酒をまけてしまつた。うちへかへつたらお母さん、マー何したの御酒は御前少し御氣を付け、ほんとうに困る子だよ。太郎平氣で、イーエお母さん僕は地球の引力をためしてみたのです。

人

○勉　強　　下野　瀧田たき子

甲「アナタ御勉强てすね」乙「勉强はしませんよ」甲「何時も本を讀て居るからさ」乙「アラ本を讀て居るのではありませんよ繪を見てるのですよ」

○流　行　　秋田　佐藤ひさ子

或學校の先生、生徒に向ひ流行とはどんな事か、と問ひました、而し誰も答へることが出來ません、依て先生が宜しい、それては お分り易くして上げましよう、流行とは何ても廣がつて行くものです、さ、お氣に付きましたか、一人の生徒直ちに、先生飴です。

○自　慢　　本鄕　朝井松子

「僕の母さんは梅が谷の樣だよ」「僕の母さんの方が未だ大きいや丸て牛の樣だよ丑の年だから」「だつて僕の母さんは象の年だぜ」

○測量家　　大和　豐田晴登

算術の敎師が生徒に向つて、こんなやさしい問題出來んのか。ジョージワシントンは お前達の年頃には立派な測量家だつた。一生徒が敎師をじつと見て。ワシントンが先生の年頃には最う大統領の位に上つて居ました。

○漢　語　　京都　永尾久子

意味のわからんのに、漢語をつかふ おばあさん其孫に向ひて曰く「坊や、これから夏になると、腐敗した物を、たべては、いけませんよ」坊「なぜ」祖母「ても腐敗した物は、皆、腐つてるとさ」

○倹約家　　奈良　八重櫻女史

（商人）どの寒喉計をお求めてす、攝氏ですか、列氏てすか、（客）二つが違ふのてすか、（商人）攝氏の方は百度て水が沸騰しますし 列氏は八十度て沸騰致します（客）そうてすかそれては 列氏の方にしませう、倹約になりますから。

○氷　屋　　德島　住友月子

子「お母さん、あまり暑いから氷を買つて頂戴」母「ナニ…… 氷買つたとて凉しくはなりませぬよ……アレ氷屋さんさへ 汗を流してゐるてはないか……」

○乞　食　　失名

母「坊やお菓子をあげるからお喰べ　坊「いやてすよ、今日學校て先生が 他人に物をもらつてたべる者は乞食ばかりてすつて。」

○かぶりもの　　近江　原野笹子

主人「長吉 餘程暑くなつたから 此間の小使て帽子を買つてお被り　長吉「あれは最早此間芋を買つてカブりました。

○立　話　　下野　新井琴子

『チョイト花子さん、今日演說したのは 〇〇學士てすつてれ、一寸ハンサムだわ、日本の 女子は運動が足りないから 躰格の美がないつて。あの人の理想の人は什麼な 方てせう、妾、長刀はやるし、テニスもするし、 なんだか氣耻しいれ』『それになんてすわ、文藝の 趣味がないつて云つてましたわ、妾あの人が撰者になつてる 雜誌て當撰して、寫眞まて送つたのよ、まあ 什麼しませう』

○核を殘して　　岡山　小倉遊喜野

太郎の母、太郎に丸藥を飲ましめんと力むれども太郎いや〳〵を云ふて何分にも それを飲まざりければ母は一工夫をめぐらし 梨の實の皮をむき核をとり其中に丸藥を入れ 太郎にあたへて去りぬ太郎喜びて之を食ひけるが二三分 過ぎて後母は再び太郎の傍に來り太郎やお前梨を 食べましたかあゝおッ母さん僕はれ核をとつて 皆たべつちまつたよ。

編輯局選

はがき文

特別第二賞

○夜の停車場

奈良成徳
井樽畔　白藤女史

轟々たる響に、終列車は着きぬ、俥に乗る者、歩行く者、人様々の世の姿を、西に東に運び去れば、勤務の終りを告ぐる汽笛斷續して、さしも喧騒を極めし停車場も軈て濃かなる平和の眠りに入らんとす。

はがき文の評はいつも、所謂作物の批評品隲を避けて成るべく其作の意味を面白からしめるやうにして居ますが、特に此「夜の停車場」に限り、一言選者の考を述べたいと思ひます。言ふ迄もなく此作は今回集つたハガキ文中の首位ですが、別に文字の優れて居る譯でもなく、只着想が能く時代の文藝思想に觸れて居ると云ふ事が、選者をして感服せしめたのです、或は作者自身も無意識に感じた儘を作つたかも知れません、それは玆に問ふ必要がない。停車場、汽車、電話などは勿論、凡て文明と云ふものと、藝術と云ふものとは一見相反して居るやうに考へられますが、將來の藝術は純技工派と純理想派の二つに分れ、理想派の側には必ず生活とか活動とか文明とか時代の感化を蒙られればならなくなります。さうなれば汽車も詩材でせうし、電話も詩材でせう、又形に現はれない處の自然淘汰とか生物進化とか生存競爭とか言ふやうな事も大いなる詩材となつて現はれませう、此「夜の停車場」は誠に寥々たる短文ではありますが、現代文藝の傾向に觸れた作として一言讀者諸彦に御注意申すだけの價値はあるのです。(編輯生)

特別第三賞

○水車

徳島常三島　坂野白露

兄さんが朝疾くから水を踏んでをられるから今朝こそは私がお手傳ひしやうと思つて、兄様ちつと代りませうと、水車の上にあがると水車は止まつてしまひ水は池の中へザー／＼と落ちた。

流水無情。

天

○春の窓

京都市兩替町御池上ル中村傳三郎様方　松永みつる

妾は紵機の手を措て窓を開た、陽炎立つ菜花の末に蒼穹高く夢の如に聳てゐるのが比叡山、習々と野を吹て來る和風は窓近う咲亂れてゐる櫻の葩を織かけた布の上に。妾は此儘織込たい。

錦小路か綾小路か。

地

○帆立貝

大分縣直入郡豐岡村字平　甲斐ふい子

紫の潮湲う湛へて、春の女神が垂れさせ給へる美しの霞の幕に包まれたる眞帆片帆さへ、幽かに見ゆる春の海邊に、陸の花信を龍宮へ傳ふる文使か、帆立貝のズラリと帆立てならべたる、いと詩趣あり。

龍宮城外の春潮。

人

○蠶

武藏　山口すみ子

お蠶が八十八夜に、發生しましたので、私も、毎日白い手拭を姉樣かむりに、赤いたすきをかけ、お尻を端折り、はだしになつて、畑に桑つみに、ゆきますので、此頃は大變丈夫になり、母樣にも、ほめられます。

蠶飼ふ女の子、活潑す。

秀逸

○私の下駄

牛込　梶川德子

私の下駄は三十錢で母樣に買て貰ひました、夫れが書の展覽會を見るごとに、下足料として五厘又は一錢を取られて、今日では最早や五十錢の價がある、塵積りて山となるとは此事か。

細心周到、家婦たるべし。

○ひよこ

大阪　うしほ子

鷄の極小さいひよこを五匹、此の頃飼ふて居ますが、その仲のよい事、寢るのも一所、起る時も一所、遊ぶのも一所、見る人見る人皆褒めます。私もそれ見て私等も仲よくしやうと思つた。

あなたも五人兄弟？。

○他人交らず

山陽社宅　柳田清子

妾の家には、九人の兄弟と、父と、家内十人暮してす、只今は、兄二人は、家に居せんから、八人で下女は、おきません、家の事、一切は、女四人で、皆引受けて、納めてますの、下女なんかいらないと思ひます。

入りませんとも。

○姑

播磨　にしき

東どなりのお岩さんは家へ來るといつもむづかしい人だと姑の影口、西隣の浪さんはいつもよいおつかさんですとほめ言葉、けれどほんとうは東隣のおばさんの方がよつぽど事がわかつて居ります。

西隣りの嫁に與みす。

○弟の徒ら　秋田　黒丸登美子

大切に植ゑた朝顔の芽を、皆拔かれた事と。美しき縞機立しを、横からプツ／＼と切られた事と、財布をレース糸にて漸く組み、出來上らうとした時、煑物が涌き出た爲め馳け出た内に、解かれた時。

鏡臺の用心。

○お祭　能代町　富山美枝子

四月十六日、今日は此町の日吉神社のお祭、妾と弟の光ちやんと二人はお母さんの代りに店の賣方をしました、日暮迄の賣高は一圓九十六錢ありました。

賣物が聞きたい。

○矛盾　長野　豐田露枝

法事の酒宴の活惚踊りに、茶の間の民權論、お三の化粧に、奥さんのたすきがけ、椅子へ腰掛けて食ふ日本料理に、箸で食ふ西洋料理、一寸おかしな銀座通りの茅葺屋根に、村學校の西洋造り、笑つた鍾馗に怒つた大黒様も又妙よ。

なか／＼お口がわるい。



韓國細流川洗濯　（與田惠子君寄贈）

○五月雨の賜　伊勢ひさ子

五月雨の降り續く時は、氣が欝いで何をするのも厭になりますが、妾は此の時にいつも聖書を繙くのです。で妾はいつの間にか此の世に悲しい、辛い事が無くなりました。此れは五月雨の賜であります。

夕暮は讃美歌。

○小役人　廣島　箕岡すゝき

毎年菜の花がさく頃に、妾の内に小役人が宿られますが、今年に限つて宿られませぬ。あゝ去年今宵妾に嫁よと云はれたのを不承知だと云ふたのを怒れたのです。

昔の小説ならばいざ知らず、愚なる哉田舎の官吏。

○心の持様　北豐島　高橋一二三子

妾、花チヤンのリボンを見て、欲くつて耐らぬので、一里餘りの山路を辿つて、買に行つたの、普通は怖くつて行かれぬのが、平氣が行つて來られたのよ、だから妾感心して、何でも心の持様だと思ひました。

リボンの幽靈なら怖くない。

○大事なもの　京都　文世女史

私は、學課の成績よりも、品行が大事。身を飾るよりも、修養が大事。言ふよりは、行ふが大事と思ふて居ます。

然り。

○栗の木　伊賀　上野みつ子

妾の裏庭に、一本の栗の木があります。妾の小さい時分お母様に叱られて泣いたのもこゝ、叔母様に戴いた草双紙を見たのもこゝ、夏の夕暮蝉の聲を聞ながら、青空を仰いで湯浴したのも、こゝであります。

桃栗三年柿八年、人は美しき涙となる。

○妾と鷄　磐城　佐久間ちよ子

私は田舍豆腐屋の娘ですが、兄弟も親しき友もありませんの、女子文壇を除くの外友とすべきは一匹の雄鷄のみ。

願はくば豆腐料理の御馳走にあづからむ。

○監獄の墻壁　富山　春波女史

一日浪花の逍遙に何時しか嚴めしき煉瓦墻壁の下に出てぬ、是なん某監獄の後なる所有逆境は經つれども、未だ此墻のみは越えざりき、小休なき心の岐路に若一歩を誤らばと思へば斯程の鐵壁も薄紙一重の心地して覺えず戰慄しぬ。

佛覺一紙。

○春いろ〳〵　三河　澤田つま子

春の日は暖く、春の雲は優しく、春の雨はしなやかに春の風は柔し、春咲く花のすべて美しく色彩に富み、春行く川の靜にゆるみたる、而して之を司る春の女神は、霞の衣引きはへて、永しへに平和を示す。

春風二十四番の慇を盡くす。

○女學生に望む　王子　秋津すみれ

妾しは高等女學校卒業生とか、何々學校の生徒と云て入らしやると大變立派に聞へ升が、能くつてよ、そうだわ、いけないわと、云ふ御語はあまり高尚の御語と思ひませんよ、妾しは第一に改良したいと思升失禮。

荒馬物語出づるも所以なきにあらず。

○雨の一日　横濱　山口なを子

今日も朝からの雨、母様と私はお裁縫に、妹達は、「之はほんのおしるしてすが」などゝ飯事に餘念なくお書齋ては兄様が何とか云ふ詩を、眠むそうにうなつていらつしやる。

此雨は春。

○渡津のうらみ　北筑　樋口邦子

郷の父病い危篤の知らせに驚き急ぎ渡津に至れば、舟は岸を離るゝ數間、呼べど返さず、二十分の後漸く向岸に着いた、今日に限りて歩も捗らず、辛くも家につ

けば早や事切、あゝ彼の舟に乗り後れなかつたならば。
取り返しのつかぬ二十分。

○筍に添へて　奈良　島田しげ子

是れは次郎がけさうらの藪で見付出し伯母様に差上るつて大さわぎをして掘つたのですから新らしい内に召上つて下さい根が欠けていますのは伯母様がお歯がわるいから次郎が氣をきかしたのでしやう。
衣を脱がせば肌、玉の如し。

○貧しき身　因幡　みどり子

流行の經木眞田を組んで儲けた金で、日頃の念願であつた父様のお墓の毀れた水溜を、やう／＼四五日前に新しく仕替へて一安神した。こんどは母様の入歯をなさるお金をどうしても貯へたいものだ。
リボン買はん簪欲しと云ふ年頃に。

○ふね　大阪　六車よしを

軍艦、或は火車船、短艇、帆船、屋形舟なんどゝ。其數形様々あなるが中に、最も我が詩趣に富めりと思ふなる船は、容易くうなゐが手にも造り得られて時悪くば、蛙の荒れにも沈み果てなん優しき笹舟。
アケノソホフ子は萬葉、龍頭鷁首は平家。

○燕と雀　府　島山茶

燕は家の中に巣を作り、雀は軒下に作りて居ます、燕が來るのは可愛けれど、雀はあまりさわぐから憎らしい、燕の子を猫がとらうとする時には、猫を叱るけれど、雀の子は捕られてもそんなに思ひません。
燕は才氣あり雀は野卑なり。

○難有い事　下野　淺野梅子

都會に居つては御存じあるまい、農の五月の多忙さを、家の父さんや母さんは、好なお酒もあがらずに、汗水を流して大立廻、日々の疲勞も、普通大抵ぢやあなからうに、＝他處の見る目も可羨い、下宿屋生活の身の難有さ。
金は郵便局の窓にあるものと思ひ。

○羊の子　熊本　湖畔

柔なみづ〳〵した若葉の森に紫や藍の隈が出來て靜に朝の氣が搖いだ時始めて羊の子が生れたのではあるまいかと思はれます。
詩より來れる着想。

○夏の樂み　德島　木月玉諸

青簾をくゞり來る風を受けつゝ讀書するのと、木影に身を寄せて音樂に樂み、夕方堤上に扇子片手に散歩するのと、炎天さつと夕立の來るのと、それと、麥刈すみし頃、靜かなる我家の夕景色を見るのと、五ッよ。
まだあるでせう。

◯雨　埼玉　名なし草

垣の外を通る田五平爺に、此樣に毎日雨では困るね、つて言葉を掛けましたら、お前樣馬鹿なこといはつしやるな澤山ふらねえて稻が植え付かるべーかよ、つてとなられました。

之には一言もない。

◯音　岩城　服部貞子

勇ましきはラッパの音、お可笑しきは飴賣りの太皷の音、悲しきは夜半の汽笛、憎らしきは高く鼻をかむ音、怨めしきは日曜の雨の音、そして一番嬉しきは、ドサリ！と小包を置く音！。

追加、床しいのは襟にさはる衣の音、いやなのは鋸の目を立てる音。

◯夜　前橋　穗積まき子

私は此家に嫁ぎましてから晝は色々用事をなし、夜に入りて、日々の小遣をつけ、明日の事を、豫め定め、それから姑母さんのお肩を揉み、すむと四疊半の夫の室に參りまして色々話をしながら伏りますお恥しいが夫は優しいのよ。

スキートホーム。

◯母の愛情　伊勢　さかえ

私は一番末子です母は五十の坂を二つも三つも越えてゐるんです母がどこか少し病ひともうあれも牛や馬に踏まれないから死んでもいゝけれどせめてもう五六年はといつても言はれますよ。

末の子ほど可愛い。

◯農家の五月　下野　田舍少女

日は失せても夕餉の烟は昇り初めない。家にある子供は皆母君の歸りを待詫びて居る、門に立つて泣く子を賺す子守は泪浮べて寂しい野路を出迎ひに行く、吁、親達は愛兒を忘れて未だ野に畠に汗を流して居る。

五月の汗、六月の實り。

◯丁字と水仙　下谷　入江かつ子

春の始よき芳薰ずる丁字の花と、春雨うちけぶる頃咲き出づる水仙との白きは品よくて愛らしく、良家の理想高き少女にも似たれど、丁字の紅と水仙の黄とは何れも賤しげにて下町の理想低き娘にもたぐへつべし。

水仙は冬の方潔し。

◯早く歸りたい　梅　馨女

私は一昨年樂しい思して遊學に參りましたが此頃は、なぜ來たのであらうか早く卒業して母樣や弟や妹と又一所に樂しく暮したい、母樣には嘸御待てあらう弟や妹は嘸大きくなつて居てあらう、あゝ早く歸りたい。

歸りたくないやうになると既に誤れり。

◯四季　備後　平田加津子

四季を假に色に別つと春は赤、夏は白、秋はオレンヂ、冬は灰色、又女に譬へて見ると、春はあどけない少女、夏は清楚の新夫人、秋は愛嬌なき、面長の女、冬は情の強い老婦人。
すると今は新夫人。

○好きな物　　尾張　井口登代子

友の手紙、雁がみ、女子文壇、繪葉書、冬の月、琴の大内山と千鳥の曲、月夜の海岸、笛の音、新體詩、洮がみにローズのかほり、すみれの花、寫眞、まがきにさける白菊。

○妾の望み　　宮城　雛菊子

他日成長してから日本で指心り數へられる程でなくつともいゝから、かなりの小說家になりたい、それには今から文章でも作つて女子文壇や何かに投書でもしたら、よさそうなものたが、そのくせ文章が大へた。

○りんご　　丹波　西村梅子

六年前に北海道の伯父樣より林檎苗を貰て手傳て前の畑に植證しに枝のみ繁て少しもならんので此年ならなんだら堀起して仕舞と思つて居つた歸て見たら二つ花が咲て蕾が一つ出來て居りましたが、母樣は一昨年の春逝かれました。

○戀しい　　小石川　松田せい子

濵子夏子金色夜叉己が罪などの演劇、水族館動物園パノラマ向島の櫻、妾これらは見なくともちつとも戀しくはないのよ。只妾が見たくつて戀しいのは自分が小學校兒童てゐた六歲當時の妾と故鄕の兩親のお顏‥‥。

○厭な時　　宮城　梅櫻女史

想應の力も無くて禮品よ褒美よと戴く時、人の讒言を聞く時、無作法で御轉婆な人と一緒に歩く時、垢い座敷に座る時、用ばかり言付けられて書を讀む暇の無い時。

○妾の樂み　　大阪　西端芳枝

日曜の日、朝早うから、親友と、野遊に行つて妾の最も好きな、四季の月、近江八景、花鳥唱歌等を心のすむまで大きい聲を張り上げて、歌うのです、そして、机に、もたれたら女子文壇や、故鄕の友の寫眞や玉章を眺めるのが。

○髮かたち　　山口　河津才子

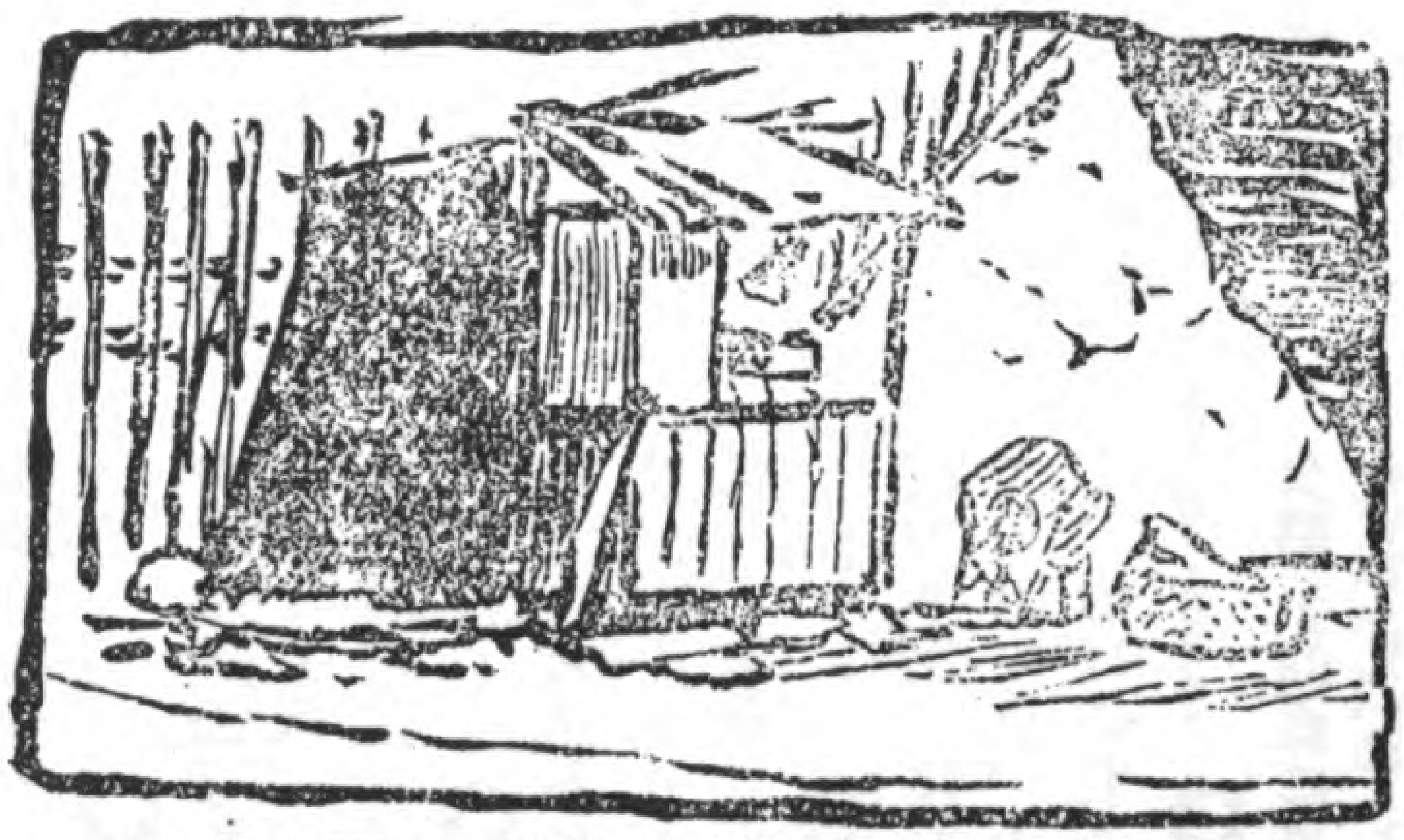
百日紅は少女の熱烈なる情燃ゆるが如き花なり、演劇に百日鬘冠りて扮せるは、何れ惡者の標目なれど、百姓のチョン髷は可愛らしきものなり。

○短袖　　岩代　根本松江

通學の頭と異て、臺所のお役目が忙はしい樣に、なりましたから、今年は、袷の袖を二寸程短く縫ひました、初めは、間が惡く思ひましたが、只今では却て便利なのを喜んて居ります。

○母の心　　長野　飯塚ぎん子

此頃久しぶりて母さまからのおたより、新調の單衣一枚に書面をそへて、そしてかずかずのお言葉のうちに「怠けるな、人におくれるな、からだをいとつて」とかいてあつた。



今川燒（選外）　仙臺　本郷もと子

○心配　　京都　植木きく子

此家へ嫁つてから今日て丁度五日慈な今度の母上やいつも笑まるゝやさしい夫がいろいろといたわつてくださるけど氣にかゝる事は病める故山の母上のこと御まんまかしぐ此の二つ。

○病める母　　播磨　植木初江

三月二日朝母樣人事不省の急病て、お醫師へ走る、電報て兄姉弟は歸る、も妾は懸しいのと心配で十日程は晝夜なく看護した甲斐か、氏神樣へ村の衆が千度參りのお蔭か、嬉しいことには此頃は容體が餘程よろしい。

〇妾の望み　信子

私は 人の弟に一人の妹があります長弟は無論山舍の家の相續人次弟は東京へ三弟は横濱へ妹は空氣の良い海岸の方へ夫て自分は時々あちこちを廻つて見たいの是が妾の現在の望みよ。

〇水鏡　北總　浮雲

蠶室に許り居ては餘り暑いのでふらりと井戸端に來た。何氣無く手水鉢の中を見ると嫌な圓顏が歴々と水中に。まあ此髮の赤い事恰て金色だ何故鬘には白粉や油が澁なゐだらう、をや時計が三つなつたもう給桑時間。

〇ゆかりの櫻　鳥取　上山千重子

今は昔亡き祖父樣が長防戰爭の時緋縅の鎧に固めて、いてと栗毛に新鞍置きつゝ、初陣の門出榮あれと祈つて、箙にかざしたゆかりの櫻、今も尚昔の春を其儘の美しさ、噫うらぶれの身に變らぬは此花のみ。

〇針の運び　越後　春野スミレ子

靜さん、あなた一向針が進まんじやありませんか、はつと氣がついて見れば、まだ袖がつかなかつた、だうしたのであらうと、我ながらあきれた、あゝ自分が投書したのが出るてあらうかと、そればつかり考へて。

〇お嫁さん　宇都宮　星野仙子

六才の弟に何でも他家樣から頂く時は決して貰うなどと云つてはいけないと敎へました一日兄の友人が來て武チヤンも大きく成るとお嫁さん貰うのだれと申ますと武チヤンここぞとウウン僕はお嫁さん頂だくのネ姉樣。

〇里の乙女　金澤　山田政子

胡蝶の夢に一日は終へて花に暮れ行く夕まぐれ、落葉が丘の麓、清き小川の邊の、落花を雪と踏み散らしつゝ、家路を指して、野良歸る、里の乙女のあいらしさエデンの花もこれかとよ。

〇妾が書齋　伊豫　ゑき女

高燥なる十疊の二階障子の側には本箱を置き上の壁には春の水彩畫柱には操樣と雪樣の御寫眞がかゝつて居る其前の机の上にはまだ封きらぬ一封の手紙と一枚の新聞紙毬形の筆洗には白椿の花が一輪さゝれて居る。

〇衝突　靜岡　高見百合子

節句の日、學校から歸つて姉樣の急な用事で、自轉車で氣賀まで行く途中、濱松の文房具賣る靑巖堂の店前で便利屋に無造作につきあたつた。

〇春夏の送迎　上毛　眞砂壽子

鯉幟五月の天の勇ましき端午の節句の今日若葉繁れる庭のお池の邊にて春姫樣の送別會と夏姫樣の歡迎會がありました、會せし人々は蝶子さん菫子さん百合子さん夏子さん露子さんで、餘興には鶯の暮春の歌と蛙の輕業がありました。

〇我が職務　東京　山田末枝

今しも顏面蒼白呼吸靜なる眞痲醉の下に醫師の切落せる其片足、あゝ病は癒ても永へに生もつかぬ不具者とはなりぬ、青春の血潮漲れる其人の心根想ひ遣りてはせきあへぬ兩頰の涙、之も我務と思へば是非もなし。

〇光　備後　白百合

太陽の光りと名譽の光り、月の光りと學問の光り、星の光りと正直の光り、神の光りと信用の光り、霹靂の光りと金錢の光り、ダイヤモンドの光りと忍耐の光り、其からランプの光りと八の字髭の光り。

〇春の朝　兵庫　佐藤惠子

霞める迄に晴たる、春空の靑き雲は、流るゝ河の水、溜る沼の水に映じて、野の草、山の木共に遠く、はては彼方の見分ぬまでに連なりて麗しく、旭は帶たる草の露に映じて、きら〳〵と光れり。

〇巖上　下野　新井寧子

夕陽を的面に受けて、巖の上に涙を拂ひつゝ緑波遠く行く白帆の影を眺めては又しても泣く一の佳人。涙は巖を嚙まむと逆卷けど人は更に動かず。磯寺の晩鐘濤聲に和して風は強く、夕燒雲は焔の如く赤し。

〇天命　越後　佐藤たき子

岩は斷ち山は塞ひて走る、鐵車の道にも菫は美しう、淋びしき野邊に、春を忘れず優しうも咲いて居る。尺にも滿たぬ松すらも、窮屈なる鉢に植ゑられながら、尚ほ、幾年も常盤の名を辱しめぬのである。

〇苺　三田　秋山欽子

朝起きると顔も洗はずに蕃畑へ蕃を見に行きます露を帶びた綠の葉隱れに赤いのが二つ三つ、青いのが五つ六つ、これが揃つて赤くなる頃、兄樣が米國から。

○養蠶の手傳

阿波　内田作惠

妾の御母さんは養蠶が大い好きです、妾は毎日學校から歸れば桑の葉を摘みに行くと御母さんはよく手傳つて吳れるから蠶か繭をしたら褒美に美くしい衣服をこしらへて下さると毎日摘に行く樂しさ。

○初雷

伊勢　田中芙蓉

あのれ姉樣、故鄕では四月の始め頃雷が鳴つてよ、噫の樣だわれ、今迄御日樣が暖かく照つていらしたのに俄に黑雲が來て薄暗うなつたの、そして雨が降つてゴロゴロ云つてれ、氣味の惡るい風がひいやりと。

○同情

美作　岡本しげの

夫に死なれて、未亡人が、お氣の毒そうに、二十八才の今日、十五六の私達と、同じ樣に學校通い、聞けば勉强して身を立てるお心とか、其を心無き人々は、やゝもすればそしり罵、私は一人涙が出る。

○田舍娘

若狹　長谷川英尾

こゝは村中で金滿家の庭前、まあきれいな花が咲いてゐる、あら障子があいた、お孃樣だ、チルにしごきのしだらない寐衣姿、島田髷も横になつてゐる花を摘んでは捨て摘んでは捨て葉も取つて居られる、あら鼻をかんでよ。

○兄樣の澁い目

神田　菊野花子

私は四時に起きます、朝のお仕度が全く出來て、夫から前夜の勉强に勞れて寢込んで居なさる兄樣を起します、三度目位には起られますが、赫とさす旭に澁い目をなさるその可笑さと云つたら毎朝ですよ。



博覧會（選外）　大坂　敏子

○姉樣と蝶

下總　藤崎美奈子

お前、蝶を捕へてはいけないよ、蝶にも姉樣があります、お前は姉樣が、强い者に捕へられて行つて家へ來ない樣に成つても善いの、と小さい時に姉樣に云はれた事が有つたが、もう姉樣は此世に居ないのよ。

○姉の手紙

高尾山　信子

「美代ちやん今日衣服と共によき風を贈り申候」と書いた手紙と小包とが姉の處から着いた「よき風」とは何だろうと急ぎ開き見れば「あらまあーいやだ團扇」よ。

○次の室

岐阜　川村つま子

深夜只獨縫針片手に孤燈を眺めて悲しき思に更くる時次の間に臥し玉へる父君の、日毎の勞働にいたく衰へ玉ひてよくも眠られざるか、時々いと苦しげに『アーアー』との太息……あゝ夫れを聞く妾が辛さ。

○月夜

神奈川　吉井咸子

まあいゝお月夜、前の田にはお月樣がゆらゆらと山下の小川はチロヨ／＼と、横濱沖の燈はきら／＼と塵に染まぬ山里の夜景、あゝこんな清き夜に妹があつたら。

○悲しい

小石川　佐川貞子

久しぶりて故鄕へ歸つてみれば兄は曹長に昇進つて凱旋し、弟は中學の入學試驗に選抜になり去年まで蕾ももたなかつた椿まで奇麗に花が三つ咲いて居るに妾はなぜ何時になつても皆樣のやうに立派になれないでせう。

○誌上の梅子さん

信濃　君子

今日は日曜のため散歩に行ふと如月頃給葉書交換で親しくなつた誌友の梅子さんを訪れたの梅子さんは中々出て來ないので妾三十分も待ちて居

りますとハイカラな男子がきまり悪そうに私が誌上の梅子てと。

○悲しみ

陸中　若生なか子

此春一緒に女學校を卒業した、秀子樣は、間もなく某少尉と華燭の典をあげられ明日松島に新婚旅行なさるッて、乳母が話、妾も武夫樣が凱旋遊したら、日光が能と思ッて居たのに、あゝ悲しい滿洲の原。

○私と小鳥

磐城　横山とめ

私は小鳥を飼つてをりますが、慈愛深い母樣の去の年歸らぬ旅に身を寄せられてから、私は淋しくて悲しくて泣いて其日を送つて居りましたが、鳥にも親はあるであらうと、一層小鳥の身の上なしのばれて。

○妾の寫眞

武州　木村八重子

「お母さん、此人形の樣ないとし姿の寫眞は誰のですか」と、妾は年頃七才位と覺しき少女の名を問ふた、するとお母さん頬笑つゝ「それはお前が帶解時代の姿さ」といはれて、妾は喫驚今の姿を歎じた。

○早いやうて遲いもの

古河　小堀とし子

びつこの驢足、お三どんの仕事、兄さんの朝起、授業時間、女の歩行、面白い時間。

○自然の音樂

小田原　綠子

谷間を流るゝいさゝ河の妙なる調べ、夕風の汀にそよぐ蘆のさゝやき、岸邊を洗ふ浪の音、さわ／＼微妙の樂を奏する松の嵐、あゝ我はこの絕ゆる事なき自然の音樂を愛す。

○春の野邊

長門　國子

佐保姬は霞の裳裾輕やうに靜々と天下り給ひぬ、花の香送る蘭風にふと誘はれて、菜にほふ野にさまよへば乙女のリボンそよ風に吹かれて、紅白の蝶舞ふがごとくたづさへし愛らしの手籠は摘草もて滿されぬ。

○空　想

佐賀　東島タカ

貴族の令孃になつて、英語學校に入り、優等で卒業し英國の音樂學校に入り世界第一の音樂家となり、世界の音樂家を、我家に集めて、每日每日雄壯なる音樂を吹奏して、たのしくたのしく、日を送りたい。

○一刻千金

福岡　古川春子

蘇東坡曰く、春宵一刻價千金と、福澤翁曰く、商機一刻價千金と、彼は美的情想の爲に惜み此は實利的感想の爲に惜む、嗚呼妾も又日はん讀書一刻價千金。

○美

神奈川　ゆたか

大石小石の出入して、綠の水を滿え、金魚の群が、唐辛の浮いて居る樣な小池も、小供の揚げる石鹸玉も美に違いない、けれ共聖堂て、御說敎を聞いて居る時の私の心には、とても及びませぬ。

○不幸の子供

川越　山田松子

世の中て、親に逝かれ、兄弟に死なれた子程、不幸な子供はないと思ひます、私の家の近所に、そうゆう子が一人居ります、私は、其子の事を思ふといつても袖をぬらします、私は其子を妹の樣にして居ます。

○田舍の春

栗山川畔　右屋ぬま子

霜枯の木は再び青芽を吹き枯草も青葉を生じ、野邊にはすみれたんぽゝの花、名も知らぬ色々の草花咲き亂れ、花には色々の小蝶狂ひ舞ひ、青空には雲雀鳴き如何にも田舍の春は樂しく候。

○我　家

千葉　大木いも子

妾の家内は親子三人てありまして每夜一つ火鉢を取り圍み餘念なく勉强いたすので師は每月一日に京橋區の大鋸町を發足し妾がお父さんに差上げてもらつた僅か壹錢の旅費で二三日頃に到着する女子文壇てあります。

○近日の嬉しき事

澁谷　秀子

妾は故鄕を出てから今年て七年目、二三日前妹から手紙が來た實に嬉しくつて幾度も々々讀み返した處は近日中に兄弟皆が寫眞を撮つて差上ますといふ處。

○よいきもち

肥前　貫美子

床の活花をさしかへたる洗ひ髮を梳る心地上氣せし顏にサトあたる冷風手枕のうたゝね朝またきの逍遙月圓なる夜潮充滿る磯邊に望みたる珠に爐の音なんどの綴うきこえ來らんには……。

誌友倶樂部

○好きな人嫌ひな人（課題）

○　芝　芝野水江

恰悧ぶらぬ夫人、質朴な學生、もつとずつと好きな人は兩親初め兄、姉、妹、導き下さる記者樣、嫌な人は、頭のヒカ〱光かつたハイカラ學生、お嫁に行つたらどうだ、なんて、おつしやる横町の歯のぬけたばあさん。

○　小石川　佐川貞子

眞白い手拭を頂いて野に春草を刈る少女、一心に畑打つ農夫、吾が學校の先生等はなんとなく好きて、氣取て歩く學生連男の美はしき裝ひ、見識ぶる人などは大嫌ひてす。

○　麻布　八重子

好きなのは小波の叔父樣切りよ、何故だか知らないけれ共、寫眞てお目にかゝつただけなのに私は言つて了ふ事よ、私が十一の時に叔父樣の眞似をしてお可笑なお伽噺を作つた事を。私達姉妹は大好きな人と言つたらきつと小波の叔父樣！と叫ぶのよ。年よりませた口をきく人と、邪推深い人は大嫌い。

○　大坂　白梅女

私の嫌な人はすぐ怒る人、芝居ずきの人、衣服や流行品をすく人、それから約束を守らない人てあります　好きな人は無邪氣な方であります。

○　靜岡　提坂つるよ子

毎日々々丁寧親切に色々の本を敎へてくれる學校の先生樣と父母と常々私を愛してくれる大兄さんと私の作文を女子文壇にのせてくださる記者先生に本誌愛讀者の諸孃さま是が一番私の好きな人なのよ。

○　越後　北村やよひ子

妾大好きは御維新前ならば賤しい妾共なぞお側へも行けなかつた門閥家のお孃樣ですが總ての事が遜讓的て同情心が厚くつて涙が多い今は親身の姉妹も及ばぬ程お親しい方、大嫌は村てハイカラ孃樣と云へば知らぬものないお二人傲慢てお轉婆て法螺吹て紅、白粉や香水に憂き身を窶して是れても模範とならるゝ御身とは、情ないわ。

○　芝區　芳蘭

私の好きな人は、第一品行のよい、同情心のある人、顔は鬼のやうても、心の優さしい親切な方、そして少し位お轉婆でも活潑てはき〱した方、嫌ひな人は、病人、盗人、ハイカラさん其他、私の氣に入らぬ人は、みんな大嫌ひ。

○　上毛　世久美代子

私の好な人は平常はやさしくをとなしくつていかれば男子も及ばない程て同情深く其上人をしてけいぼさせる樣なふうさいを備へた人てす嫌の人はよくの深い人、物を聞ても答へて下さらない人、うそを云ふ人、人をうたがふ人、少さい人をばかにする人、不親切の人、いやにけんだかの人、家の富貴を自まんする人等。

○　奈良　しらふぢ

臺所へ毎朝御用をきゝに來て妾を横目で見て黃色い聲を出す八百屋の若い者も嫌やなら頭を光らす若造眼鏡を掛ける女學生もいや男だてら指環をはめる人は尙更大嫌い。好な人は前垂れ掛けの御店者御孃さんと云ふ人より、とうはん、と云ふ出入の人。

○　浦賀　小永井みれ子

あの私の好きな人は我知識を人にほこらず現す時には人を蕩かし顔面は愛嬌を以て充たされ餘り氣取らず信用の多き人こそ私の好よ反對で嫌ひな人は我身になき事をあるが如くに語り人々を欺き信用少なくていはゆるハイカラ式の人で大阪言葉を使ふ人は私の大禁物

○　名古屋　林田糸子

妾の大好きな人はハイカラでなくて活潑そして物事にあきらめのよい口數のあまりきかない人が大好顔なんか何でもよいわ嫌いの人はオシヤベリでケチ〱で人の前で言葉を口ぎたなく使ふ人。

○　兵庫　愛子

妾の好な人と思ふのは、淡白した見へたむきの人か生意氣てなくて活潑な人、面白い話の上手な人、文學の趣味ある人等は實に好、否敬慕すべき人て、之に反して白粉を濃く付ける人嫌に高慢ぶる人、又自分の足らはぬを棚上げにして他人の秀でたるを嫉む人、亦人の顔をジロ〱見る人等は、最も忌むべき嫌な人てす。

○　能登　千田星子

妾は別に人に好き嫌ひは無けれど人の作物を剽窃したり是を亦公衆に吹聴したり又無暗に流行に衒ふてハイカラ氣取るお方は嫌ひで面白く評を附けて下さる選者繪葉書の交換して下さる諸

姉未來に妾の身を委ぬる御方は大好きだわ して鳩山春子さんは妾の理想の女傑ですよ。

○　東　京　高　山　水

私の一番好きな人はよく親切にして人をあなどらず又交際の趣味ある人嫌な人は己の私慾の僞め人の惡口いひ又人を蔑視する人が大嫌ひ。

○　石　川　中　泉　緑

私の親友海老本寿久井様の様な方が大好てす物事に綿密で優しいが決してぼんやりてはない遊ぶ時は活潑に運動なさるそしてどんなお嫌ひの人にもやさしくおつき合なされます、顔容もおとなしそーていつも快活てあり升私は日々目に見えぬ御恩を被つてゐます自慢したり先生に甘へたりする人、蛇よりも嫌ひ。

○　岩　代　よ　れ　子

妾の好きな人は心のサツパリした活潑なそして數多の中ては滑稽な事言ツてゝも二人位ゐになると悲しい御話ごとし又友情の唳い人好きよ嫌いなのは邪推深い心のねち〳〵した少しの事でも氣に掛けて大きくし又男の顔等見ると急に言葉を優くしたりいやに愛嬌振りまいたりする人妾大嫌ひ。

○　美　濃　竹　雨　女　史

折角の御望れ故秘さず包まず申しませう、妾は活潑で深切な御人が好きなのよ、手紙など何回差し上げても御返事も下さらない御斷りもなくて取り捨てにされる人、散歩途中障子などの隙間から小言云ふ人は嫌ひです。

○　山　口　村　田　節　子

言語明白にして虚飾家でなく、磊落なるうちに嚴格あり、無邪氣なる中に犯すべからざる氣品をそなへ才ばしりたる容貌に、文學趣味ありて、淡白なる人こそ、最も好きな人です、是に反して浮薄にして、俗臭紛々、上目遣いに足の先より顔の頂まで、冷笑の氣味を以て人を見るもの、また常に、衣服お化粧に、日もなを足らざるが如き人など、一番私嫌ひと思ひます。

○　德　島　齋　藤　菊　子

質朴で禮儀の正しい、言葉遣の和らかな、クリスチヤン的の愛を以て、交際する人が私し好きよ、虚儀虚禮で、虚飾を好んで、虚言をなす、高聲で話しをする、イツ遊びに來ても尻の長い、ソシテ話しの始から終まて、自慢で持ち切てる人私し大嫌ひよ。

○　東　京　吉　江　子

私の一番好な人は今年七才になる榮ちやんよ赤いリボンを着けてヅツクを持て毎朝私といつしよに學校へ行くのよ、嫌ひな人は、□つても學校て自慢をするみれ子さんと季さんに一番嫌ひ嫉妬心が深いのよ。

○　芝　小宮　きみ子

妾は農家の娘で未だ好き嫌ひなぞと御恥かしいようてすが折角の御望れなれば一言申上げて置きます、て好きな人と云ふてもヂエントルマンてはありません先づ容貌は普通で舉動を愼み精神は剛毅にして普通學を修め盛衰替らず違約せず萬事ひかへめにして常識に富み信用厚きお方、妾の嫌ひな人は澤山ありますが第一無學文盲鐵面皮人面獸心山師詐欺のような私慾を貪る人は妾大嫌ひよ。

○　お　ぼ　ろ

わたし車ひきが一番きらひよ、後から來てホイホイといくら氣がきいて居ても御免々々位でしよう、わたしあんな時よくあはてゝいかないのですよ、そしてあの好きな人は薙刀の仕合の時熱心に手を打つてほめて下さつた方と、テニスの上手な方。

○　東　京　と　き　子

兩親の嫌ひな方は御坐いますまゐ私などは最も好きてす それから三つ位から七才までの小兒、改良服にとき色のリボンなどつけて幼稚園に通ふ幼女などは愛らしいことね、嫌ひな人てすか、頭をぬれ燕の樣に光らせ香水などプン〳〵さしてるハイカラ學生は まあ好きませんね。

○　堺　白　桃　子

私本林樣程嫌な人はなくてよ、近眼て女を見てはあまつたるい、目つきをなさるのてすものー、そうして好きなのは、活潑てすこしも嫌味のない、淡泊て其上同情に富んて入らしやる方てす。

○　出　雲　白　菊　子

私の好きな人は、第一身體がごく壯健て、心のごくまつすぐな、學問があつて優しい心切な、同情心のあるお方が大好きて御ざいます、嫌ひな人は右に反對した人はみんな大々嫌ひて御ざいます。

○　熊　本　立田　もみぢ

もう十年位前から唯一の友としていた人より好きな人は有りません、それは第一學問がお上手なのと容貌がきれいて三月三日には床の上にきれいな人形と一所にならべたいよーてす。人のわる口を云つたり書物をさいたりする人より嫌ひな人は有りません今からみなさんと御一所にこんな嫌ひなをはいたしますまい。

○ 濱田 きみ子

表面は柔順に内心は快活に、餘りおしやれなしない、一度交れば變る事なく、猥りに人の悪口を吐かぬ謙遜な、正直な、涙のある猜み心のない、目の涼しいやせた、少しはハイカラな方が好きです。多辯な粗暴な、新者好きの同情のない、人を見下す、口意地の悪い、文士氣取つた、顔色の青い、詩文を剽竊する人大嫌ひ。

○ 埼玉 くに子

親切な記者さん、變りなく交際して下さる人、三つ四つの小兒、氣前よき女、生意氣でない女學生、沈勇な人、愚痴をこぼさぬ方とは大好きな人てす、大酒する人、理窟ずきの人、氣取る女、厚化粧する方、人の嫉りみする方、とは妾大嫌ひです。

○ 下總 秀嶺女史

妾の好きな人は第一正直で脳にして愼み深ひ人、又嫌ひな人は不正直て人にへつらい人を卑下しあつちへぺつたりこつちへぺつたり碌に知らぬことを知つた顔に話す人以上の人てす容貌の美醜には左程重きを置きません。

○ 福岡 高山きち子

私の嫌ひな人はお酒飲よ、何故かと云へば第一身體を害し醉ふ時は人の嫌ひな事を云ひ喧嘩をしますから自然信用を失ひ學問何程有ても職務につく事が出來なくなります、最も好きな人は父母の外に私如き淺學なる者もかゝる美文詩歌等を容易に讀み得るやうに記載し給ふ記者樣と愛讀のお姉樣方が一番好きてす。

○ 澁谷 白衣女

野卑てなく高ぶらない活潑で心の優しひ人が妾の大好き、自慢する人不親切な人いやにお世辭を言ふ人と多言の人は妾の大嫌。

○ 北海道 松井長子

私の好きな人は相當な學問が有つて而も快活で品格のあるお方、嫌ひな人は、不活潑て且つ言行の一致しない方、この言行の一致しない人位大嫌ひな方はない。

○ 大阪 高山米子

妾は親友のさよ子さんが一番好きよ、何故つて云へば活潑て溫和てそれに同情の深い、妾の樣な我まゝなものでも、眞實の姝の樣に良くいたはつて下さるのですもの……嫌ひな人つて別にお友達には有りませんけど、あまり當世流のハイカラ的な方は、路てあつても何だかいやな心地がいたします。

○ 磐城 佐久間ちよ子

妾の好む人は多數の人に指ざゝれる人、又嫌の は多くの人に指ざゝれる人、實はれゑ其加減の眞中におわす人こそ大好。

○ 松山 しげ子

溫厚にして着實遜讓にして勤勉なる人を好み、輕薄にして諂諛遊惰にして懒慢なる人を嫌ふ。

○ 下總 翡翠

私は英雄てはナポレオンが好きてすお友達では千夏子さんが一番好きよ、親切で正直なのてすもの、私し男の癖に香水をつけたり、髮をわけたりする人大嫌ひ。

○ 大阪 好子

妾の好きな人と申すのは、流行のハイカラでなく、身躰の立派な、色の白くない、心中かゞみの如く、言葉も多言でなく、行の正しい方て、そして大變親切な方こそ、妾の好きな人なのて御座います、それかと申して、あまり親切すぎて僕婢の如きは、嫌いて御座います、やはり、男子は男子らしく活潑てある方が好きてす。

○ 夏草

好きな人、男女に限らず言語動作共に快活にして嫌味なく同情の深い學生氣の失せぬ人、嫌ひな人、無暗におせじを云ふ人、男子のくせにコスメチツク等で髮をきれいに分けていやに氣取る人、藝妓のくせにエビ茶袴をつけて女學生氣取て大道を濶歩する人以上。

○ 靜岡 福井貞水子

私が好きな御方は木、女子文壇記者樣、それから嫌ひな人は生意氣なハイカラ又大切な御方は澤山あるが「政治的時事論」になるから爰に書く必要はない。

○ 陸前 秀月子

私の好きな人は幸子樣よ、氣性の優しい同情心に富んてゐる上に人の品評つたら少しもなさらない謙遜深い床しい方よ。嫌なのは武一樣、ろくに學問も無くせにいやに氣取つて許り居るんだもの、私顔を見ると胸が悪くなることよ。

○ 羽後 泣蓮

妾は世の塵にしまない清い〳〵青年少女て質は憂欝な方を好みますそしてこく〳〵涙もろく血は全身をおどつて居る樣な男なら容貌はりゝしく萬事沈みがちなる女ならば丸顔のくつきりしたのが……それから交際家だとかつて人の前をかざる浮氣な人程嫌ひなのはありません現世のゼントルマン中にも少くはないかと思ひます。

○ 埼玉 柴田妙花

私すきな人は私を可愛がつて下さる方で文學的の思想のある方、かほは色の白い口元のかはゆい眼のぱつちりした方よ、嫌いな人は、私をにくんでいじめる方、私のかんがへと反對な人、かほは眼のこはい人。

○　香川　合田　まが子

妾の好きな人は性質極めて嚴正にして品行正しく不義者に對して一歩も藉さない丁度己が罪の隆弘さんの樣な人。女は人に接すると極めて溫和にして內に凛として犯すべからざる氣象を養ふもの、嫌ひな人は金力或は己れの位置を利用して弱く正しい者を踏み付けて憚らない人女はおしやべりの方。

○　久留米　きよの

日頃大好きの人は何事もかげ言しないて直接に私の缺所を云ふて下さるお裏の伯母樣見たいな親切なる人……見るもいやな人は男子てありながら頭髮にはコスメチツクをぬたくり香ひぷんぷんとさせてるハイカラ男。

○　濵田三明　糸子

いつもだまつてる人、しりめて見る人、不活潑て女の樣な人横柄な人、わけなしに高笑ひし鼻ひげの少ない人等は嫌てす、運動好きな、物事に熱心な、あはれみの深い、詩的な、快活な、目の細い、肥へた人が一番好きてす。

○　前橋　穗積　まき子

私は女はたいてひ好きてす只出過ぎた人は嫌ひてす男て好きな人は男らしい人て親切の愛情のある人嫌ひの人は他家へ行きて長居する人や情のありすぎる人、女の顏を見てにこ〳〵する人殊に書生などて人の前て戀愛論を云ふ人は大嫌てす。

○　大和　坂上　みどり

性質より云へば、悒鬱な人は大嫌ひ、運動家て活潑な人が好き、形より云へば、圓面の、愛嬌のある人は大好きて、やせた、いつも、こわい顏をした人は大嫌。

○　豐後國　渓

私は怜悧て學科は中以上に出來溫順て自慢せずそして云ふべき時には活潑に云ひ衣服など極く質素な人が一番好き。嫌なのはハイカラて時なしにしやべり不作法て敎室て先生から問はれた時にぐず〳〵して云はない人。

○　羽後　前田　久子

好きな人は、妾の父母、兄弟、姉妹、を始として本社の記者樣及び、全國中の本誌御愛讀の諸嬢樣てす、嫌ひな人は人にして五常の道を知らざる人、即ち禽獸心な人てす。

○　香川　松永　茂子

好きな人。菅公の樣に文武兩道に達せられ、且つ無實の罪を蒙るとも敢て君をお怨み申さぬといふ樣な極潔白な人、嫌ひな人、時平の樣に己れの力定らずして人の人望あるをねたんて無實の罪に落す樣な所謂カンニングの人てす。

○　長門　大賀　とも子

あの方は御人善だと思へばその人は好きな方てあの方は御人惡だと思へば嫌な御方なのてしよう？さすれば妾は好きな人も嫌ひな人も女子文壇の記者先生てす。

○　越後　上野　志摩子

容貌臈々しく、美辭に富み、淸潔を重じ、尋常の服裝をなし、毅然たる事山の如き人大好なり、漢語を使ひ、風雅な服裝を好み、愛情に乏しく、無暗に憤慨し、物品を粗末にし、食事の惡口を云ひ、高慢にして多辯なる人大嫌ひなり。

○　埼玉　別所　苑子

妾はやさしい人文學趣味音樂の嗜好ある御方世の波に寄辺もない多感の人身を殺しても仁をなさる樣な御方即多情の人が大好よ富家のせちがらい浮世の樣もしらない方は妾ほんとうにいやだわ！。

○　越後　水野　りそ子

學者ぶる金持ぶる才子ぶる等ぶる人は嫌ひて之と反對にぶらぬ人は好きてあります言ひ換へれば何事も控へ目の人は好きよ。

○　福岡　織田　靜子

當世五人男の川上三吉、倉橋幸藏、黑田健次、上田力、のやうなお人が妾大好き、容貌は面大きく目ぱつちりと色は黑くても飽までもあかぬけたる髯はカイザル式、色の青白い脊の少さいやせてぐづ〳〵して女見たやうな人は大嫌、女ても活潑て脊の高い面の下ふくれて目のぱつちりした人が好き。

○　岩代　みどり子

男ては餘り丁寧なる人、男らしくない不活潑なる人何や彼と妻君にのみこき使はれて居る人、女ては出來不出來のある人萬一他人の前に出ては優しき女性を外面にのみ現はせる人わざとらしくて、人と交つて御きげんとる人。

○　念珠關　豐子

容貌の美しいのてもなく、又姿の淸らかな人てもなく、たゞ言行の溫順にして、常識の備へた人て、同情心にとみ、理想の高き人てす、之に

反對の人は嫌ひな人です。

○　磐城　あやめ

人樣に好き嫌ひを云ふてはあまり失禮ですが、第一容貌としては御選者の、巖谷小波樣のような御方が大好、心は誰れとも云はれませんがまあ私の樣な人、そして嫌な人はありません。

○　京都　岩淵國子

世の中に心正直にして、擧動活潑なる人を最も好む。我が最も忌み嫌ふは不正直にして約束を違ふ人。

○新課題

▲詩文を作る時（七月五日〆切）

皆さんが物を作る時の樣子を承はりたいのです。

▲眠る時（八月五日〆切）

▲少し變つた題ですが是も諸孃の平生を互に知り易からしめん爲に出したものです▲即眠る時とは眠る前の皆さんの模樣です▲即ち一例を擧げて申しますと、眠る時には祈禱をするとか、父母に挨拶するとか、火を消すとか、明るくするとか、何んなねまきを着るとか、南向にねるとか、或る事を考へるとか、諸孃が毎日同じやうな事をして眠られるのだが、それでも書いて集めて見ると、屹度人に依つて異つた事があらうと思ひます、要するに就眠前後の事なら何を書いても宜しい、皆さんのありのまゝに書いて下さい、つまらぬ事でもかまいません▲凡て七行以內、半紙に書く事、題を書添へる事。

○諸孃と記者

○記者樣へ一寸伺ひます、妾の寫眞を上げますから誌友おもかげに出して下さいませんか、（羽前鶴岡町佐藤芳子）（記者曰、何うぞお送り下さい必ず出します御入用なら用濟み次第御返しいたします）○記者樣皆樣當地は梅は今は七重八重にさきそめました櫻もよー〲咲きましたよ美しい事御遊びに御出て下さい名所こせきを御案內致します其時は大きなかごを負ふてきて下ださいな色々の摘草も致しますよ（北海道の錦子）（記者曰、記者は此の樣な御案內を受ける事を最も忝く思ひます御親切は叅りましたも同樣です）○記者樣私が交際欄に名を出してから方方より御手紙が參り嬉しく思ひますけれど男子の方から來ていくらお斷りをしても隱して參るには困ります何うしたら好いでせうか記者樣お力をかして頂戴（すみれ子）（記者曰、男子の分は一切返事を出さないことゝ御決心なさつたら格別お困りではありますまい）○女子文壇へ繪ハガキ交換申込むのはハガキでもよろしいか（甲田かつ子）（記者曰、お尋ねの件繪ハガキ交換はハガキでもよろしいが文章や其外の投書は半紙に願ひます）○私は無學無才で投書は出來ませんが御誌を一生の友として諸姉樣の御作を拜見し又記者樣を先生とおもひ何事もお尋ね申します故お答へ下さいまし（橫濱千代子）（記者曰、承知いたしました、何でもお尋ねなさい、私共の存じて居る事なら お答へいたします）○記者樣、文は心に浮んだまゝ目についたまゝ何を作つてもよいのでしやうか、まるつきりうその事もあるしつけたり澤山で仰山になる事もありますがいゝでしやうか、そして二人仲間に一ヶ月づゝ次ぎ〲に取つて居るものは投書出來ないのでしやうか、私そふだとお詫びをしなければならないから、つまらぬやうですが、氣になつてなりませんから、御知らせを願ひます、そして〆切り十五日より遲れると少し文がよくも沒書でしやうか、一つの文に二三ヶ月もかゝつてやつと出來て、淸書するに又一ヶ月もかゝりそふてすから〆切後つひたのは翌々月にもしよかつたら出して戴かれますまゐかつまらぬ事に、貴重の時間や紙を、費させ申してすみよせんが何卒お敎へて下さい願ひます（たき子）（記者曰、文は何を作つても宜しい、うそもまことをもこきまぜて柳は綠花は紅ゐ、それから二人仲間にお取りになつても投書は御自由、それから十五日より後れても沒書になりません但し出るのがおくれます仰の通り翌々月になります、それから未だ氣になる事があつたら遠慮なくおつしやい）○記者樣妾は初號よりの愛讀者ですが毎號諸姉の涙ある文を見ては泣きます。又如何に女子文壇が隆盛となつて行くかを見るのを喜びます。（和泉堺市浜江子）（記者曰、泣く方もあり笑ふ方もあり勵む方もあり欣ぶ方もあり人さまざまな處が我文壇の範圍の廣い點でせう）○記者樣に御伺ひ申ます私は今まで市の書店から買つて居りましたが之れから直接に御願したいと存じますが宛名は何と書けばよいかはゞかりながら此欄で御敎へ下さい（朝子）（記者曰、東

京京橋區大鋸町十一番地女子文壇社と書いて下されば郵便でも何でも來ます)○記者樣もう今頃のは沒書となるて御座いませうかそれとも寛大なる御處置を以て次へまわして頂けませうか。(琴子)(記者曰、勿論沒書はいたしません、次の締切に加へて選者の方へ廻します)○記者樣に御伺ひ致しますが一口噺は字數に限りがありますか一寸御敎示下さい(山薩鵡子)(記者曰、字數に制限はありませんけれど大抵四五行以內です、長いのは取りません)○記者樣に御伺ひ申し升、私は月に一度は必ず投稿して居りましたが時々載つて居り升ので其れに力を得、續いて投書して居るのですが、誌友倶樂部は二三ヶ月後に載つて居り升がどうしててせう?開封せずに出すから自然後れるのでせうか(まつえ)(記者曰、誌友倶樂部はいつも投書がたまつて居りますから後れるのは、あなた一人てはありません、併し此頃は頁數も多く此れに割いて居ますから後れるやうな塲合は少くなりませう)○記者先生投書は各種に亘りて一つづゝより多く出してはいけないのてすか七月の紙上てお敎へ下さい(上州月見草)(記者曰、仰の通り)○記者樣私はれ短歌が一等好なのよはがき文も好きてすが文壇に出しても一度も出ませんのよですから此頃は一寸も手をつけませんけれども短歌は出した甲斐があつて當選の榮を得ましたこれも皆記者樣の御かげと感謝いたします(白ばら子)(記者曰、はがき文も作つてさへ居られゝば必ず出る時が來ます)

○繪葉書交換

○誌友の諸孃樣美はしい繪はがき御送り下さいましてありがたふ御とこしへに繪葉書や玉章の御交換を願ひます(大阪市東區上本町二丁目五六印藤政子)○鹿兒島市仲町谷村書店方帖佐よし子(舶來繪はがきの交換をしましよう)○(東京下谷區西町三番地ホの十九號服部春子)拾錢以上の舶來繪葉書、字句簡短て御送りの方へは今度の紀念切手、紀念スタンプを押した奇麗な繪葉書をお返しゝます○手許に日光名所繪葉書が三四十枚ありますから、寫眞とても繪葉書とでも交換を願ます(下野喜連川下町齋藤とよ子)○美人の繪葉書を二十許りもつてゐますから御望の御方は繪葉書て先着の御方より順によいのをあげます(豐浦郡長府村山中敬子)○何卒繪葉書の御交換や御文通御願ひ申します何卒御心おきなくね(神戸市北長狹通四丁目百四十一番地岡田美子)○繪葉書を御交換下さらなくつて、即日御返禮致しますよ(伊豫國宇摩郡別子銅山森田豐)○妾は和製舶來共澤山用意してありますから御心安うどし／＼御送り下さい先着十五名へは妾の寫眞をも差上ます(金澤市石浦町近田亘子)○繪葉書交換を願ひました處、あちらからもこちらからも澤山送つて下さいまして難有存じます、尙どし／＼送つて下さい、先着十名に觀兵式紀念切手貼用スタンプ付、五十名に鐵道五千哩紀念スタンプ付、五十名に、海軍紀念スタンプ付を送ります(名古屋笹島町四鈴木方刑部たけ子)○諸姉樣よ妾は臺灣總督府發行始政十年紀念繪葉書二組六枚澤山持居りますから內外製ブロマイト。羽根及光砂細工繪葉書と交換して下さい(臺灣臺北市北門外街二ノ四五號田房子)○大阪西區薩摩堀裏町四番邸石上秋子)

○誌友の御姉上樣繪葉書の交換御願よ(神戸市多聞通貳丁目三十一笠井秋子)○本誌愛讀者諸孃樣どうぞ御手紙なり繪ハガキなりの御交換を願ひます(新潟市寄合町四番地鈴木富美子)○諸姉上樣妾は鐵道五千哩祝賀會紀念のスタンプ付きの上等繪端書をもつて居ます御望の御方は上等繪端書て申込て下さい先着五十名限り御返事致します(名古屋市前之町十五都筑方藤江光子)○女學世界と文藝倶樂部の不用のがありますから栞か寫眞かどちらでもよろしい交換して下さい(筑前若松本町古賀茂子)○私は(京都市小川二條上る安田初)と申者てすから繪葉書交換ドシドシ願ます○私は誠に片田舍の者でありますが此後は皆樣と繪葉書の御交換を願ひます(岡山縣兒島郡小田村字下小川三二七藤家元子)○繪葉書の御交換を願ひますよ、肉筆ても、石版でも、木版でも宜しいことよ、コロタイプは御免被下ませ(府下大島町龜井戶九八八鵜澤白葦)○宮城縣岩ヶ崎町、佐々木貞代 皆樣!御交願を願舛、栞、繪葉書も御送り下さい、書籍雜誌を差上ます○五千哩紀念消印ある繪葉書を持つて居りますから二十名限り本年發行の雜誌か栞か編物を送つて下さい必ず直ちに御送りします(名古屋市水主町八角堂境內 山田松太郎樣方辰田はな子)○誌友諸孃よ妾は、鎌倉風景寫眞を持つて居ります お望みの方二十名へ差し上げます故美しい繪葉書て御申込あれ。(神奈川縣小田原幸貳丁目石井千枝)○一筆示し參せ候さてとや御社發行の女子文壇上において葉書交換いたしたく候まゝ何卒文だん上に妾の姓名を御記載下され度願上候(芝區愛宕町一ノ二村越方郡山

みつ子）○親愛なる諸嬢君よ繪葉書寫眞及び文通して下さい（大阪瓦屋町三番丁四二阪井由方北川靜子）○愛讀者の皆樣へ繪葉書交換を御願ひ申ます 但し俳句一句づゝ美はしい上等の繪葉書へ趣味失はざる 樣封筒にて御送り下され度殘逸の方五名にかぎり來月の女子文壇を差上ます（大和高田町樫根こう）○皆樣繪はがきどうも有がとう今度は銚子名所繪はがきて返禮致しますから相變らず、（下總匝瑳椎名内中町千本松せい子）○岩代福島町萬世町六宗川榮子諸孃樣繪葉書や寫眞を頂戴れ必ず相當の御返禮はします○繪葉書御送り被下し御方には先着六名を限り女學世界をお送り致します（岡山市東中島町小倉龜藏方小倉直喜子）○觀兵式紀念切手に紀念スタンプを捺印した戰役紀念葉書がありますがそれを進呈しますから博文館の美文辭藻をお讓り下さる方はありませんてせうか（大阪市西區立賣堀北通五〇九高濱のぶを）○誌友の姉樣繪葉書の交換を願ひます陸海軍觀兵式紀念分其外數種あり先着より順次に呈送します（山口縣大島郡油田村桑原眞子）○甲府市白木町廿三番地輿水淑子、皆樣私にも繪葉書交換を願ます○皆樣繪ハがきの交換をして下さいませんか私は伊勢名所繪ハがキを三拾枚計り持つて居ますから其れを皆樣に差上げます又先着五名に限り古切手を一枚づゝ差上げます（三重縣津市元築造十二番屋敷德田榮子）○皆樣の内押花御のぞみの方は繪葉書と交換して下さいませ又繪葉書交換も致しませう（神戸諏訪山大島ちさ子）○諸姉樣よ外國古郵券御持合ならば參拾枚宛御惠み下さい御返禮には總督府發行始政十年紀念葉書にて致し升又交換も致しませう妾よりは三割宛增して御返し致升（臺北城内撫臺街一丁目五四松元清子）○靜岡縣の愛讀者諸君よ妾は肉筆がれ…：一等すきてすから何卒肉筆を下さいれ（靜岡縣志太郡朝比奈村字新船山下芳枝子）○愛讀者諸姉上よ私は本日からなつかしき故鄉及び愛讀諸姉を見捨てゝ遠き米國へ渡航するのです上陸の曉は、夫、丈太郎を内助するのです、夫れ故只たのしきは懸しき故鄉からの音信のみてすから妾の身の上を思ひやりてエハがキの御交換をれがひたうございます、妾は米製のを送ります（和歌山貴志佐子）○山口縣佐波郡中關村久村幸子、自筆の繪葉書なり（和製のてもよし）御交換を願います尚雜誌の交換を願ます○繪ハがキ編物の交換の交際を願ひます（富山市西四十物町二十一乾みづゑ）○皆樣美くしい繪ハがキ度々ありがたう御座い升此度都合に依り御交換申す事が出來なくなりました不惡思召て下さい（本鄉弓町女子美術學校内阿部ひて子）○御見すてなく澤山な方から繪ハがキや新聞や寫眞等を送つて頂いてありがたう何分澤山てすから返事が多少おくれますけれど不惡思召て下さい（淡路津名郡物部村九五其浉たけ子）○私は永く朝鮮に居住したものです何卒繪ハがキや御手紙の交換を願ひます（山口町道場門前神田樣方村谷しげ子）○政府發行三回紀念繪葉書の内戰地に於ける紀元節の部一組三枚御所持の御方は妾の同第四回の内交通の部奉天の部二組六枚表鐵道五千哩裏觀兵式紀念スタンプ付と交換しますから御送り下さいませ（名古屋市大船町間島せん子）○繪葉書お寫眞の交換を願ひます水淸きあはぢの繪葉書て御返じ致します（淡路國津名郡志萬議村伊藤綾子）○誌友のみなさま私も繪葉書交換希望者てすどうぞ御仲間入りを願ひます（京橋區竹川町一番地志葉田優子）○（千葉縣長生郡新治村桂小川國子）繪葉書交換を乞ふ寫眞を下さる人には手前の寫眞て返し○外國の切手やいろいろと珍らしいもの御送り下さいますればエハがキ澤山差上ます（福島市仲の二花野芳江）○神戸市兵庫水木通三丁目一ノ三十五春田愛子（自筆繪葉書の御交換を願ひます）○繪葉書交換熱望、お返しは屹度しますわ（東京下谷區西町一七伊藤庄次郎方渡邊馨子）○繪葉書交換を望む（美濃國安八郡馬瀨木村花香）○島根縣松江市北田四八寺本芳野子（敬愛なる諸孃樣よ何卒繪葉書の交換を願ひます）○未使用て萬國郵便聯合二十五年紀念葉書に紀念捺印あるもの滿洲軍凱旋紀念捺印あるもの今回の招魂祭の紀念捺印ある繪葉書お持ちの諸孃は文字書ずに袋入として送つて頂戴、お禮としては無花果其他新刊の小說詩集等すぐお送り申します又上等繪葉書交換してれ（新潟市寄合町十番戸岩瀨まさ子）○下野芳賀郡眞岡町上高間木印東方水越美津（皆樣編物繪端書寫眞を送つて頂戴御禮致しますよ）○上等繪葉書の交換をれがひますなるたけ和歌や俳句な御かき入下さい美くしいのを下さいました先着者十五名へは紅葉山人の小說や其他種々の本を御送りします（横濱市元町三丁目一一七安藤なか子）○美い繪葉書か寫給下さつた方に左記一部宛中學文藝入學生文壇五櫻冠三秀才文壇手風琴獨習一冊て別に今泉土佐日記講義己が罪實國奴を差上升（羽前西置賜郡小國町小林みわ子）

○誌友の皆樣上等繪葉書の交換を願ひます 但し永久に交際致して下さい（信濃上伊那郡伊那町古町中島いちゑ）○諸孃樣此後何卒御交際をして下さい 尙又繪葉書の御交換を願ひますきつと御返事を差上まする（神戸市兵庫三川口町一丁目百九十番長谷作松方長谷とく子）○秋田縣角間川町黑丸登美子、短詩和歌俳句記載の事（寫眞も送つて下さい）○（愛知縣額田郡下山村中伊織澤麻斯子）美麗なる繪葉書の交換や文通を望みます ○下總印旛郡臼井町角來雛坂直太郎方さく子（文通もねがひます、（雅號はよして頂戴）○誌友の皆樣方よ諸國の神社佛閣の有名なるもの丶印をはがき繪葉書に配置よく捺したものを交換して下さい 又美しい暗中光を放つ樣な美術的の趣味ある 繪葉書の交換も御願申ます（岡山市南方三一三中野波子）○大阪市東區淡路町四丁目中村方東柳子（お姉樣繪はがき交換して下さい珍無類のをね）○福岡縣京都郡延永村藤本ちよ子（賤の女てす以後宜敷く肉筆繪葉書交換ら願ひます）○どなたでもよう御座んすから成丈手跡の美しい方と繪葉書なり葉書なりの交換がしたう御座ます 御同好の方もおありでしたら下名へ（四谷區永住町一岡部なか子）○能登中島村室木方千田星子（新詩歌俳句記載先着十五名へ高價西洋繪葉書を呈す）○繪葉書交換を願ひます、必ず〳〵御返事をあげますよ（茨城縣高濱町東大橋　小泉はま子）○皆さん妾にもどうぞ繪葉書交換の仲間入りをさして下さい必ず御返事申上ます 先着者五名へ雑誌を差上申ます（北總船穂村松崎酒井富美江子）○諸姉樣妾も本年から愛讀者となりましたから 宜敷御交際を願ひます 又繪葉書交換して下さい（韓國京城本町三丁目林しま子）○舶來繪葉書百三十種有望交換望交際と三字丈け（紀伊日高郡藤田村吉田阪本春松方佐代子）○皆樣妾兼や繪葉書交換を願ひます、御送り下すつた お方には下手てすが直樣送ります（下野芳賀郡淸原村上籠谷入山口榮韻子）○千葉縣山武郡二川村鈴木園子、色々の繪葉書の交換を望む但し 詩歌俳句記載の事返書必ず差上候 ○繪葉書や地方新聞の交換を願ふ（靜岡縣志太郡六合村細島提坂林藏方 みどり子）○文壇の諸 姉何卒妾に詩歌記入の葉書を給はれよ 拙なからそれに題する畫を認め御禮申ます（美作國中鐵誕生寺驛南向陽堂內杉本天巖）○私は水彩畫を少しづ丶勉强して居りますが何分にも碧く出來ません 諸姉樣方御自筆の繪はがきを交換を願ます（神奈川縣足柄上郡曾我村下大井高橋德次郎方下澤利子）○諸孃樣私は大へん繪葉書や編物が好きてあります 送つて下さる方には出雲名所葉書にて一々御禮致し升（松江市松江分五六ノ四寶豆記道子）○繪葉書の交換を御願致します必ず 御返禮申します先は一寸（大阪商品陳列所にて盛子）○茨城縣新治郡新治尋常小學校內岩田きよ子（繪葉書の交換を望む）○諸孃樣私は片田舍の不束な一人の愛讀者てすが文、案、エハガキ、寫眞等御交換して下さいませんか（兵庫縣丹波國多紀郡住山村三四番藤原かれ子）○妾は東郡菜高等女學校の生徒てありました時分から非常に繪葉書道樂となつて目下舶來及和製の上等數百枚を座右にして居りますから どうぞ交換を願ひます（神奈川縣高座郡海老名村今泉橋場菊江）○皆樣上等の繪葉書及び革財布葉書を御送り下さいませ 御返には着順に番號を附し妾の年數に相當の人には「女子女禮式大全價九十錢大判五九二頁」一部を送呈しそれより前後へ「家政學大判四三〇頁」「衛生食物調理法」を送呈し其他の人と云へ共必ず御返禮は致しますから是非共御願申ます上等物をねえ（尾州中島郡起町芳村幽翠子）○京都六角川原町西南側四川方まつしは（繪葉書交換切に望む和歌俳句記載を悅ぶ）○親密の御交際を願ひ申ます又繪葉書の交換もお願ひします（伊勢飯南郡宮前堀田浪子）○諸孃よ繪葉書て詩歌文章によつて皆樣の喜樂憂悶をお分ちくださいな妾は誠實の交際を望むものてすの（新潟市寄合町岩瀬さはの）○皆樣私は片山里に月日を送るもの何か繪葉書の交換願ひますお返しはゆめ〳〵わすれませぬ（美濃今尾町三田村芳美）○妹と思はれ何卒繪葉書詩歌の御交換御賴みます（能登輪島字河井新保安太郎方新保雪子）○繪葉書の交換を願ひます 先着の方三名には紀念葉書を差上げます（岐阜縣大垣西荒川和田進子）○皆樣繪はがきの交換を願ひます 時節柄でもあり私の一番すきな藤やすみれの 繪なら猶結構それに歌一首書いて下されば猶々結構てす御禮には先着、一、二、摘み細工の飾りつき寫眞はさみ、三、四、五、肉筆繪 はがきに、しをり、をつけて、さし上ます 其外の方には朝顏大輪の押し花をさし上ます（茨城縣潮來町磯山方野菊子）○繪葉書の交換をねがひます 私は百五十枚仕度がして あります（靜岡縣小笠郡南山村高橋松下葉仙子）○私は上方のものですが 去る年に上京致しまして只今では文壇の愛讀者の一人となりましたお 何卒今後

は繪はがきの御交換なしてくださりませ（東京市牛込區若松町一四四號井方甲川照子）○美しい繪葉書五葉以上同封にして御送り下さい妾の及ぶ限り面白いもので御禮致します（千葉縣山武郡土氣本郷町大和田大塚よし子）○皆様繪葉書送り被下まして有難う皆御返事差上ましたが又被下ませ（品川新宿五五鈴木方小林のぶ子）○盛に繪葉書寫眞交換なしてくださいませよろしく九重十重にもふしてたのみいたします（安藝國高田郡甲立村德永浪女）

○寫眞編物交換

○山口縣玖珂郡米川村石本浦子、皆様繪葉書で御交際を必らず美しいので御返し致します寫眞御送りの方へは妾の寫眞をそへ八枚組の袋入元祿美人繪葉書で廿七名迄は御返事致します○押花のお望人が一時に夥しくも百二十四名餘でした何程澤山あつてもそんなには送られませぬ故中で美麗なる繪はがき下さつた九十名だけには呈しました御返答の洩れた方は御一報下さい（讃岐吉田芳江）○諸孃君よ御寫眞や御手紙の交際を願ひます繪葉書や押花のめづらしいのがありますからおのぞみの方に差上げます（石見那賀郡濱田町松原山東由起子）○これまで數回皆さんのお望みに應じ寫眞や繪葉書の交換をしましたが今度は妾の方からお寫眞か栞か望みます返禮には先着十名へ妾の醜ひ寫眞次着二十名へ繪葉書何れも地方新聞を添へて上げます（埼玉縣南埼玉郡栢間村熊井千代吉方一少女）○栞繪葉書寫眞の交換をなして下さい妾は編物澤山ありますからほしいと思ふ方は繪はがきて住所姓名くわしく書いて送くつて下さい（千葉縣東葛飾郡行德町一丁目澤崎徙吉方なな子）○東都明舟町一九中西内椎野菜四つ五から十二三までの孃さんや坊ちやんの寫眞いたゞきたいことよお禮はカードですることよ○皆様最近の御寫眞を送つて下さい私も誓つて御返し致します妾へ住所氏名をお忘れないやうに（岐阜今小町渡邊露子）○誌友の皆さんのお中でお寫眞送て下さる方はありませんかお禮はすぐしきす（常陸國高濱町東大橋酒葉常子）○寫眞の交換を乞ふ私の寫眞は十枚だけあります（靜岡縣小笠郡南山村高橋松下菜仙子）○皆さん大層暑くなつてきました どうか手紙、栞、寫眞の交換を願ます、英文手紙の交換最も好みます（京都市中長者町油小路東入ろ高田愛子）○諸孃さま何とぞ寫眞御惠み下さいなおよばずながら妾のも御送付いたしますよ（近江國志賀郡阪本町字阪本井神金子方さと子）○誌友姉様何卒シナリを送つて下さい其返禮には繪端書のいゝのから順々に先着者十名の方に差上げます（佐賀市水ヶ江町好生館前成富方大坪乃信）○愛讀諸孃様何卒お寫眞を送つて下さいな御返禮には妾の寫眞一葉に觀兵式の紀念繪葉書五枚を添へて送ります（芝區新錢座町八番地岩佐方にて小宮きみ子）○茨城縣新治郡高濱町東大橋川並はな子（お寫眞を送つて下さいお返事は屹度）○御寫眞及び編物栞等御持ちの方は御惠み下さいませんか先着十名に限り女子文かくしろへ畫はがき寫眞畫報少女界其の他の雜誌を呈す（千葉縣印旛郡宗像村岩戸豐田ちか子）○皆様どうか繪葉書や美き玉章又は寫眞を御送附下さいまし寫眞先着孃に繪葉書一組差し上げます（豐前中津殿町逸見輝子）○寫眞及び玉章の交換をおねがひします私も不手ながら差上ます（陸中水澤横町後藤はつの）○誌友諸姉よ皆さんの内で造花及び編物の交換なして下さる方はありませんか私もいつも喜んで御返し申ますから（山形縣西田川郡念珠關村大川豐子）

○圖書換讀

○みな様、私、クリミヤ戰爭で名高い赤十字社なこしらへなすつた、ナイチンゲール孃の歌と海の歌を持つて居ります、節はどんなのでも出來ます、御存じのない方は美しいゑはがきて御申越下さい、先着二十名には唱歌、後の十名の御方には相當のゑはがきて御返事申します、（播磨加東郡河合村字西村一番地堀井つる子）○每日水彩畫など机上に澤山下手ですが書て有ますれば大に交換をしてくださいな（茨城縣筑波郡北條町峯澤彩洋）○諸姉様私の所に左の不用書がありますから何かと交換をして下さいな「家庭小說寶の鍵、奇女無錢旅行、奇人の寃法、新空中旅行、明治女訓要撮、日本の家庭一卷一號」（栃木縣足利町緑丁近藤寅次郎方菊香）○本誌愛讀者の皆様の中に戀の那破翁か亦那破翁艷書集と云ふ御本御持ちの方は相當代價て御ゆづりなり他本と交換なりして下さい私御禮として別に甲種紀念葉書一枚差上ます（本郷向ヶ岡藤波艷子）○皆さんの内て、新曲熊野、廣瀬中佐、大海原、太田道灌、僧月照、古今琵琶歌集、其の外の唱歌及琴歌御持合せの方が有りましたらお惠み下さい、私は肉筆の繪畫其の他相當のお禮を致します、尙ほ、音樂新報（何號にてもよろしい）と女子文壇三號（第一卷）お惠み下さいませんか 誌代相當の御禮は致します（岐阜縣惠那郡下原田村

永井方渡邊雨葉）○本誌二卷の中に御入用な號がありましたら差上げます　端葉書にて御返事を（靜岡縣庵原郡蒲原町石谷千代子）○女子文壇第一卷五號より第二卷七號迄不用に成つて居りますから　お望みの方は『一枚六錢』以上の繪葉書にて御申越し遊ばせ、先着て美しいのには、私の七分身の『寫眞』も添へます。（北海道亀田郡七重小學校内松井長子）○皆樣の中に音樂好きの方澤山居らつしやるてせう私も下手の横好きとやらて、ほんとうに好なのよ、色々面白いのが御ありてしたら御知らせ下さいましな、私も知つて居る限りは寫して御送り致し升（栃木縣宇都宮市二條町三十七番邸横山きつ子）○皆樣繪葉書の御交換を願ひます　尙御寫眞、編物、極上等繪葉書等を下さつた御方には其御惠みの品に應じて思出の記、桐一葉、黃菊白菊、自然と人生、新小說、武士道之女性、時文斷片、江山烟雲、其他女學世界などを夫々進呈いたしますよ又皆樣の中て不如歸之歌御所持の方は右の書の中御のぞみのものと御交換を願ひます（福岡縣浮羽郡市杵校内紫雲子）○手許に魔風戀風、不如歸、小公子、紅葉全集六、萩の家遺稿、花紅葉、母のみやげ、等不用の書澤山あり藤村詩集、二十五絃、不如歸の歌、戀ごろ袋、舞姫、テニソンの詩、等と交換して下さいませ、又上等エハがきて申込の方には他の小說を送ります、（大分縣東國東郡宮田來町一井みちゑ）○皆樣私は廬洋柳浪先生御作の二筋道の後編を持て居りますから　皆樣の中て小說伯爵夫人おもちの方は交換を願ひたいのてす（橫濱市元濱町四百四十三鈴木和吉方春野すみれ子）○土佐の御方て東京の新聞と土陽又は新土佐新聞と御交換して戴下ます御方が有ればどうか下の處へ（東京市本鄉區西片町二十一番地富岡初子樣方森木宛）○私の手許に女學世界、女鑑、ムラサキ、文藝界不用になつて居りますから御望みの御方は寫眞又は美しい繪端書にて御申し越しなさい、くじ引にて十五名だけ差し上げます（福島縣磐城國矢吹町渡邊正子）○みな樣のうちて蕪村、其角、千代、ばせを等の名高い人の句集御持の方はどうぞ四五日お貸し下さいましな（本鄉千駄木林町百四十五織田澄子）○記者樣誠に申上かれますが私は此度晉公唱歌と十二ヶ月唱歌を書いてのぞみの方に差上ぐる事を御願ひましたところ男の方から來て誠にこまります女の方ならどなたてもよろこんて御交換申上ます（弘前の人）○皆樣の中て小說伯爵夫人、谷間の姬百合、露子夫人、金色夜叉の歌、女夫波の歌おの持御方は私の許にある女學世界卅五年より今月迄のと婦人畵報四冊明治の令孃小說病戀愛徒然草及び講義にせ紫前編此の中て何れとても御交換願ます（茨城縣筑波郡北條町小林學校内赤澤せい子）○私の處に郁文舍發行の日本歷史辭典、東洋歷史辭典及び弘文館發行の改正高等國文一卷より五卷まて（以上總て破損、汚穢せず）ありますが皆樣の中に郁文館發行の作文新辭林、作文辭書、數學辭書を御持ちの方は何れなりとも交換して下さいませんか、切に願ひます、（信濃下水内郡飯山町、岡登かれ子）○皆樣私方に小說小猫魔風戀風の後編げんせ相あじろぎ休一和尙昔の面白きもの四五冊と文藝倶樂部第八卷十三號十卷八號十卷十號勝いくさ　女學世界二卷二號同じく五號三卷七號五卷十一號とが不用になつて居ますから料理本あみものひじつき等と交換して下さい（山口縣豐浦郡長府村印内山中敬子）○靑春、伯爵夫人、吉丁字、眞人の自白、町の仙女、水[illegible]色、新妻君、仇と仇、男女と天才、湘烟日記、草枕、母の紀念、慰問袋、洋行土產の中いづれにても送つて下すつた方には御禮として當地特有名產若狹塗、瑪瑙細工、當地名所繪端書一組を呈す、殊に數種御送本下さつた方に美術七寶燒花瓶を差上げます、（若狹熊川局區假屋栖三郎太夫内かな子）○諸孃樣の御許に乳姉妹貴女の栞、食道樂、金色夜叉のうち何れにてもお持の方は御かし下さい御禮はいたします（上毛新田本町富天子）○皆樣の中に濱子、澄子、やどり木、いさ川、伯爵夫人、はやり唄、仇と仇、母の心、己が罪、密航婦、（以上小說）千山萬水、不如歸、一簑一笠、天然と人、思出の記、懸賞文集、新體音節等の中て一冊ても御送附下さいます方には靑春の怨、乳兄弟全、小華族、男氣、妾の半生涯、魔風戀風全、幻影、（以上小說）舞姫、七ツ星、春鳥集、片破月、金帆、女學世界（五冊）の中て御氣に召したのを直ぐ御返送致します。（羽後酒田町濱畠七入渡部美屋子）○姉樣方ほとゝぎすと申す雜誌お送り下さい一冊十錢宛て妾が買ひます餘り汚れていないのを（松山市みなと町一丁目川元方時子）○誌友諸姉樣に御ねがひ致します「風がみ」か「不如歸」の歌を御不用てしたら小說「ホト、ギス」と御交換下さいませんか若し二冊一所てしたら妾の寫眞と美麗な繪ハがきて御禮いたします（名古屋清水町五ノ二九七林田糸子）○友人洋行餞別としてスタンプ附の紀念繪

葉書四葉、銀鈴、一葉全集、天地有情、伶人、相思怨桐一葉蔵きたれば 紀念の爲溫順なる淑女に差上たし奕しい 繪葉會に歌俳を書きて申込の御方樣に即時郵送します、(東京下谷區西町一七伊藤庄次郎方渡邊馨子) ○誌友諸姉樣の內で言海お讓り下さる方ありましたら 何卒下名へ、妾の手許に已が罪、不如歸の歌、料理書、其の他不用になりて居りますから御交換を願ひます (美濃國大垣郵便局區內牧村木村あさ子)○諸孃樣の內、左の樂譜お持ちの方は お手數ながらうつして御送り下さいませ御願ひいたします 離小島、須磨、喇叭卒、天女天降りの曲、外に高尙な新しい曲、御存じの方はお敎へ下さいましな (大坂空堀町江口方白百合) ○皆樣、誠に、申兼ますが、どなた樣か、世界一週唱歌(タイムス、ドックを舟出して)と云ふのと、「アルマントン沈沒」の唱歌(岸打波の音高く)と、云ふの御持ちの方が、御ざいますれば、何卒、御めぐみ下さいますか、御敎へ下さいましな、御願ひ申上ます、 御禮には、女學世界、(古て失禮ですが)と、下手な栞と御贈り致します (河內國枚方町陰山白ばら)○新聞の切拔てすが (琵琶歌) (眞淸水) (再生緣)(人ごゝろ) (女夫雛)雜誌では(女學世界)(女鑑)(少女界)などありますが(伯爵夫人)(靑春)(魔風戀風)(妾の半生涯)(乳姉妹)(一葉全集)(平家物語)(太平記)(文藝俱樂部)などゝ交換して下さいませんか、(伊勢宇治山田浦口濱士きみ子)○諸姉樣の內て有明の『春鳥集』御持ちなら妾の曉翠の『曉鐘』藤園の『凌霄花』二册と交換して下さい 下記の處に御知らせ下さると送ります。先頃大島小學校の佐久良子さんに 銀鈴と天地有情と送ったら 返って來ました如何したのでせう皆さんの內で右二册と夜雨の『花守』と交換して下さい (羽後酒田在鶴渡川原村長泥町一二三阿部花子) ○皆樣の內て鷲堂先生のお手本御不用の方ご座い升たら 花紅葉か文章形容辭典とそれから萩野の日本歷史要解嵩山堂發行日本名所圖繪一圓五十錢同英和對譯日本昔噺不用てすが長澤の數學辭書か小說と交換して下さいませんか(羽前西置賜郡小國町小林みわ子)○諸姉の中で一月以後の白百合(但三月を除く)か或は一月以後の新潮御不用の御方は白百合なれば 四册、新潮なれば五册以上御送り下さい 詩集銀鈴、小詩國、まひろ野、歷遊の四册を必ず差上ます (越後高田上職人、二五、長崎とし子)○皆さん、妾のところに詩人と戀、 沙上放語、 藻鹽木、 テニソン詩集、自然と人生、 曉鐘等文學雜書澤山あり、今般徹底整理の爲め、 繪葉書て申込の諸孃二十名限抽籤により差上たし、(能登中島村室木方千田昆子) ○諸姉の中に幽靈塔(前後編)靑春(秋冬)やどり木、天うつ波、未だ見ぬ親、火の柱、萬朝小說傑作集、鐵新曲浦島を御持の方は私の良人の自白少女と山水新家庭千陸先生の 中宮帖などの中御好みのと交換して下さいませんか (京都柳馬場二條上ル高井方安倍純子) ○言海散文韻文美文辭藝普通術語辭彙 「郁文舍發行の會玉篇大全國語漢文中辭林、 作文辭書世界歷史辭典數學辭書理科典。」女子作文作歌辭典。 烏水文集。等御不用の方はドーゾ御惠送遊ばして 頂戴な御返禮には私自作の肘突亦は 康熙字典日本辭林故事熟語字典 白玉姬出版花の詩藤村詩集舞姬春鳥集廿五絃 小說魔風戀風夏子靑春の中て御申し越のを御返送致します (近江甲賀郡櫟葉木村醫師徹次郎方小川ふみ子)

○諸孃の交際

○諸孃樣したしく 御交際下されまして難有存ますよ然しれえあまり 澤山御送り下されまして中にも御返事を洩らした 諸姉樣も御座りませうからどうか本日より 御申越被下ませ早速に御返事を送りますよ(姬路市外玉牛村菅野ふさ子)○虎の門女學館の方と芝の 東京高等女學校の方々の中にて御校內の模樣御知らせ下され度うお願ひ致します 御禮には美しき繪葉書を差上げます(本鄕區新花町三十四番地山藤方春通)○皆樣私は小學校を卒へた斗りの 田舍者てすが、栞、手紙繪葉書の御交換をお願ひ致します、 屹度御返事は致します。(宮城縣栗原郡岩崎町、佐々木貞代)○末ながく御交際を願ます (鹿兒島郡伊敷村下伊敷入舟四千四百二十二番戶吉田あい子) ○御交際下さい 又玉章繪はがきの交換をれがひます(伊勢津市イヨ町三松とみ子)○誠に不束者てすが以後末長く御交際を願ひます (岩代郡山本町一丁目鈴木絹子) ○私は田舍のつまらないものて御座ますが何卒愛讀者の一人として御交際を乞ふ(鹿兒島郡伊敷村下伊敷三一九河野きい子)○愛讀者の一人に加はり度く存じますから以後は宜敷御交際を御願ひ申します (鹿兒島市荒田町百○三番戶谷山ひて子) ○妾の宅れ郡山の商町と申所へ轉宅いたしましたから 玉章なりはがきはどうか此所へ御送り下さいよ (大和郡山商町森本峰子) ○美濃國安八郡牧村字馬瀨木村花香 (書道硏究の爲め手跡の美はしき方と繪葉書や書狀の交換を望み升、 失禮乍ら拙き方には御

返事致しませんから悪しからず）○妾も愛讀者の一人となりましたから以後よろしく御交際を願ます（秋田縣仙北郡大曲町寺町山本龜吉方小西みつ子）○妾も今後より女子文壇の愛讀者となりましたから皆さん以後は宜しう御交際をして下さる樣御願申上げます（秋田縣仙北郡大曲町寺町山本龜吉方江間信枝）○富山市の小林よしえ樣あなた孝女白菊の歌御存じの由何卒お敎へ下さいまし お禮として西洋朝顏の押花お送りいたします（紀伊箕島町田中文子）○姉上生存中は一方ならぬ御世話樣に成りました今度姉に代つて愛讀者になりました姉の名を附けて紫花と申します何卒末長く御願ひまうします（群馬縣利根郡糸之瀬村字貝野瀬橋場 津久井梅吉方 紫花子）

○剽窃詩文の注意

例の如く左に一括して剽窃詩文を列擧す

○第八號の分

▲彦根、林玉子。　三十五年一月の「女學世界」には信州金鵄新子「夜半のおもひ」として、本年一月の「綿ネル新報」三十三頁には村橋靖子「思ひ根」として、「青年議會」八ノ一には彦根林磬舟「思ひ出」として、本年一月の「中學文壇」には上總森止順月「心の苦」として出でたる文と同一なり 剽窃には相違なきも初めの出處は分明ならず。

▲秋田、松田せい子。　叙事文秀逸秋田松田せい子の「ふしぎ」は「中學文壇」の十七號三十九頁松本翠溪のふしぎ、短篇小說避暑之友（博文館發兌）の内の漁村の年玉と何れも同一なり剽窃なるべし。

▲青森、加藤美枝。　新體詩特別三賞青森縣加藤美枝の「放ち鳥」は「秀才文壇」四ノ九山住白虹君の作を剽窃せしものか、本誌三號にも一度剽窃されたるものにて「青年議會」や「中學世界」五ノ五等にも出でたり。

▲秋田、平田波子。　新體詩秀逸秋田平田波子の「花賣女」は「女子之友」六十九號才媛詞藻天賞水原ふみ子君の作を剽窃せしものとす。

▲駿河、秋子。　和歌秀逸駿河秋子の「少女子――」の歌は表紙に虎の畫のありし頃の「少年世界」にて賞を得しものを剽窃したり。

▲石川、千重子。　俳句欄石川千重子の「[illegible]の香――」の句は「中學文林」二號天と同一なり剽窃。

▲北品川、橘しん子。　同じく橘しん子の「一春雨に――」の句は俳句雜話「風交集」よりの剽窃なり。

▲豐前、中村直子。　四十九頁にある圖畫賞外豐前中村直子の「大祭日」は少年世界九ノ一、二十九頁玉雄女史畫お正月の剽窃とす。

○第七號の分

▲香川、松永茂子。　新體詩天賞香川縣松永茂子の「磯べに立ちて」は三十六年の「女學世界」二百五頁名古屋與島ひて子君の「磯の海」を燒き直したるものなり。

▲上總、靜枝。　新體詩人賞上總靜枝の「戀」は選者の警告通り果して剽窃なり「文藝界」第一號にある武島羽衣氏の作を盗めるものとす。

▲陸中、菊池はせ子。　新體詩秀逸菊池はせ子の「春のうた」は「花がたみ」三頁河合葉舟君作の「春姫」より剽窃せしもの。

○第六號の分

▲茨城、小松つぎ子。　新體詩天賞茨城縣高濱町小松つぎ子の「姫胡蝶」は本年二月頃の「萬朝報」一等登選田中靜潮君の作を剽窃せしものなり。

▲陸中、菊池はせ子。　和歌天賞陸中菊地はせ子の「うつくしき――」の歌は三十九年四月「萬朝報」當選下谷外河花舟君の作を剽窃せしもの。

▲岡山、古賀柳川。　圖畫賞外岡山縣古賀柳川女の古寺は「女學世界」六卷三號より剽窃せしもの。

其他猶ほ取調中のもの二三あり憎むべきしれ者よ再び汝の筆を我誌上に振ふ事は許されじ、扨て右の注意を賜はりたる江湖の本誌愛讀者は左の如し。

○水戶、芳江女史○高知、とし子○千駄ヶ谷村、梅子○廣島縣、三邑あゆ子○千葉縣、オリーブ生○能登、白百合○越後、岩本○肥後、えい子○北總、ＩＫ生○羽後、古道ちゆう○滋賀、辰非琴子○福島、花野芳江子○橫濱、落花一片○馨子○船穗村、平川よし子○山陰、すみれ○長崎、無名氏○豐後、安田初子○十勝、すみれ女史○下總、はな子○ロクブ○筑後、貞子○外數名。

ting the sunrise."

Then parted the curtain of purple flowers covering the vines, and on the edge of the lake appeared Valmiki. Seeing the embodied lotus, he ceased playing, the pearly shells slipped slowly from his hands, his arms drooped by his side, and he stood speechless, as if great Krishna had transformed him into a tree.

"Awake, Valmiki, and speak."

And Valmiki spoke: "I am so—" This was the only word he remembered and the only word he could utter.

The face of Krishna suddenly brightened.

"Wondrous maiden, I have found in the world the place worthy of thee; dwell in the heart of the poet.

The will of divinity impelled the maiden to the heart of the poet. Radiant as a summer day, quist as a wave of the Ganges, the maiden was entering into her appointed dwelling-place; but suddenly, her face paled, and as a chelling wind a great fear enveloped her, and the god wondered. (to be continued)

を歡迎して居るのだ」と。

稍ありて蔦を覆へる紫色の花簇は左右に分かれて，池の汀に詩人が屹立して居るのが見えた。人化したる蓮花を見るや，彼の奏樂は忽ち止み，眞珠絃は手より辷り落ち，彼の腕は脇に垂れて，恰も自身がクリシナ大神に木か何かに化せられし如く無言て，身動もせず立つて居る。

「目覺めよ，バーミキ，醒めて談れ」。

其處て，詩人は，「拙者は實に一一」と，より外一言も云ひ得なかつたし，又其外は何も彼の念頭に浮ばなかつたのである。俄に神の顔色活氣づきて，

「珍らしき處女よ，我は今御身に相應(フサヘ)しき住家を此の世に見出した．即ち此詩人の心中だ．其處に住むがよからう」。

至尊の御下命默し難く，遂に處女は詩人の心へと歩を進めた．夏の日の麗なる如く，ガンヂス河の波音無きが如，蓮花孃は定められし住家へ這入らんとせし其刹那，花の顔青ざめ來り，恐怖は身を刺す寒風の如く少女の身を取り圍んだので神は不思議に思召した。

（つゞく）

Where gentle breezes come,
Far, far away from busy strife
Is my sweet mountain
home.
(Unknown author)

遠くはなれ
靜風かよへる
我の山家。

P. S.

The writer, in translating each piece of the poems selected for the magazine, has tried to give the literal meaning at the expense of the poetic value, but in the "My Mountain Home," she was obliged to translate it very freely as she tried to set the words for the tune.

附　言.

本雜誌に毎回掲載する英詩を和譯するに當りては，記者は常に，優美なる詩的價値を失ふも，先づ文義直譯的を旨として，其詩文の意義を讀者に與へんを勉めたれど，今回の「我の山家」は，音律に符合せしめんが爲，意譯せざるべからざるに至れり。

A Lotus Maiden

Part II.

Slowly the dawn commenced to spread its light in the eastern heavens, the golden glow covered the lake, palms, and bamboo groves. The choir of birds burst forth with their morning song, the rosy stork, the blue crane, the swan on the waters, the peacocks and pheasants in the woods, and, as if in accompaniment, there came the sound of strings fastened to pearly shells and the words of human song.

Krishna awoke from his deep thought and said:

"It is the poet Vālmike, gree-

蓮花處女

其　二.

漸く曙光東天に映じ初め，椶櫚(シュロ)の森や竹林が黃金色に浴せんとする時に，水上の丹鶴，青鷺，白鳥，或は林中の孔雀，雉等の合唱が興ると，恰も其調子を取るが如くに，眞珠貝に糸つけし樂器の音が人の唱聲と共に聞こえた。

クレシナ神は己が深き默想より醒めて云はるゝには，

「あれは詩人バーミキが日の出

(1) My home is by the mountain side
Where gentle breezes come,
Far, far away from busy strife.
In my sweet mountain home,
I love to hear at close of day,
The brooklet's gentle hum,
And see it slowly wend its way,
By my green mountain home.

(1) 憂きことしげきを
遠くはなれ
そよ風通へる
我の山家.
黄昏小川の
調べききつ,
静けき流を
見る樂しさ。

(2) 'Tis sweet to hear the merry song,
When gentle Spring has come,
Of birds that sing in joyous throngs
Around my mountain home.
I love the bright and gorgeous flowers
Which in the valleys floom,
But sweeter far are those that grow
Around my mountain home.
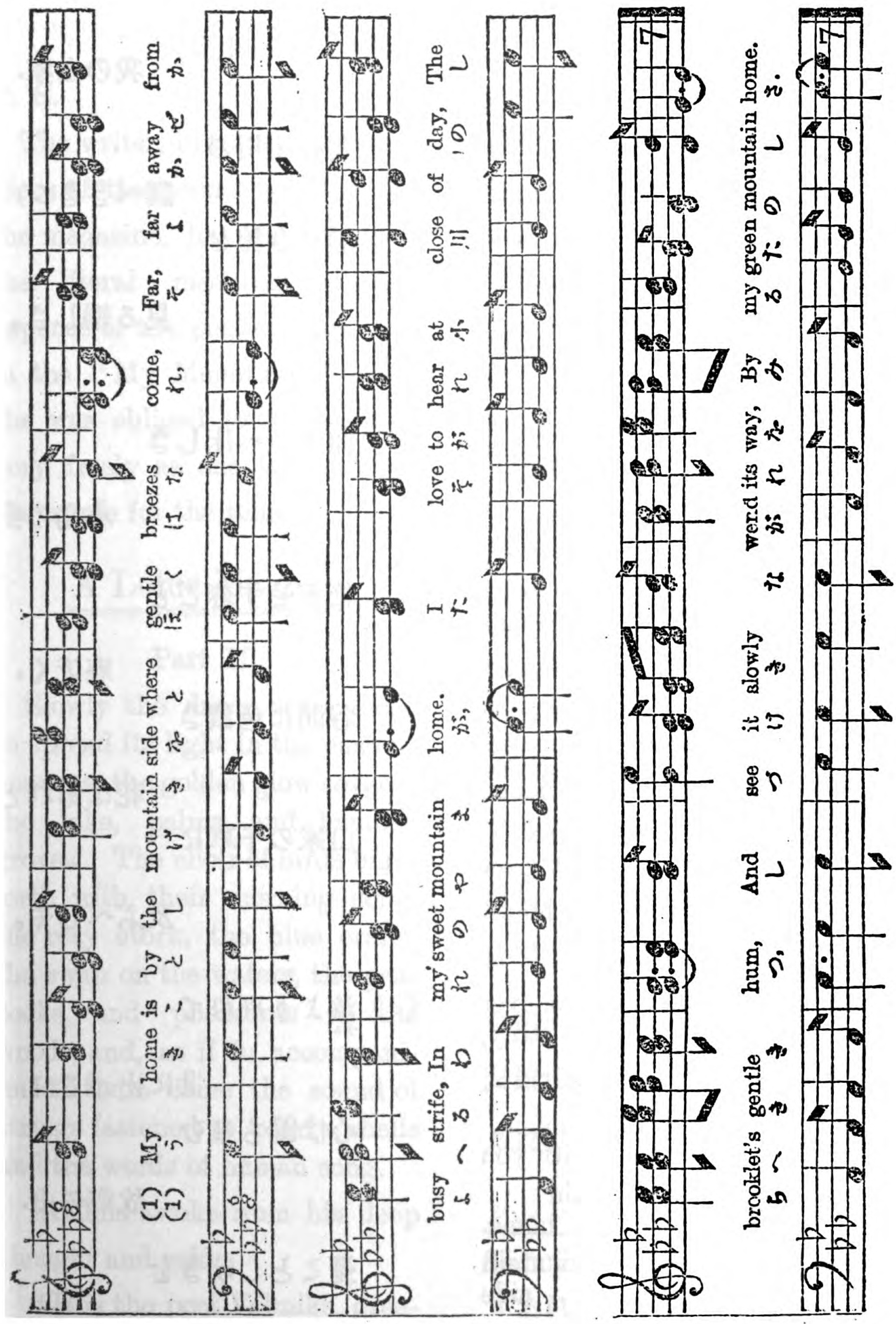
(2) 聞くさへ床しき
小鳥の聲
絶えせず春ごと
庵近く.
谷間に色濃き
花はあれど
山家の千草に
及ぶべしや。

(3) And, should I from thee ever stray,
Midst other scenes to roam,
My thoughts would wander back with you
To my green mountain home.
My home is by the mountain side

(3) 汝(ナレ)より別れて
世に出づる日,
心は踊らなむ
故郷の山.
憂ことしげきを

女子文壇 第二巻　**英 文**　津田梅子閲 河井道子述

My Mountain Home. (我 山 家)



女子文學獨習の最良手引書

東宮侍講 本居豊頴先生題詠
學習院女子部長 下田歌子先生題歌

獨習良師 女子文學全書

文學博士 小杉榲邨先生序
國文學專攻 小森松風先生著

全部拾二卷
(總ふりかな付)
紙數二千七百頁餘
(毎卷讀切洋裝)

毎月壹冊つゞ出版して一ヶ年間に全部完結の豫定 ◎一冊菊判二百卌頁

正價 壹冊金參拾錢◎三冊前金八拾五錢◎六冊前金壹圓六拾錢外郵稅一冊四錢◎全部拾二冊前金に限り特別金參圓郵稅不要(郵券代用壹割增)

全部目次

編輯の都合により多少順序に變更あるべし

女子文學全書第壹編

美文作法

附錄 古今名家美文範

文章の作法を懇切に説明指導せられたるものなれば明治の女學生に取りては、實に坐右の寶典なり

六月二十五日發行

▲全一冊讀切洋裝大判二百三十頁
▲正價金參拾錢郵稅四錢

本書は小森先生が現今の女子の文學趣味を鼓吹せんの考にて女子師範、高等女學校其他各種の女學校に於て最も困難を感ずる

發行所 東京市京橋區大鋸町 電話本局六百七番 女子文壇社

◎東京市內特約賣捌(東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、前川文榮閣、良明堂、勉强堂)

「朝晴」批評一班

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小説美文 朝晴

新刊

全一冊新式製本本綴洋裝 密畫入頗優雅
（正價四十五錢郵税四錢）
女子文壇愛讀者に限り
特別賣價四拾錢 郵税不要

▲「萬朝報」曰く　どれも是れも極めて温雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

▲「都新聞」曰く　いづれも短篇の小説ながら、著者が所謂寂寞の歴史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

▲「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小説で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したものです。

▲「わかくさ」曰く　いづれも取り〴〵にやさしく、美はしく書きなされて、心地好き作のみなり。

▲「女子文藝」曰く　綠蔭讀書の好資料として諸孃に勸めたきは、此書なり。收むる處の十四篇の小説、悉く艷麗、絢爛にして、温情、穩健の趣あり。

▲「新古文林」曰く　長篇短篇とも、取り〴〵に面白く、おつとりとした上品な處が此著者の特質であらう、すら〳〵とした書きぶり、一息に終まで讀み了はらせて了う。

▲「ハガキ文學」曰く　若き作者の情熱は、溢れてこの絢爛艷麗の文字とはなりにけむ。綠蔭の愛讀書としてこの可憐なる小册子を勸む。

▲「帝國文學」曰く　近來の小品文に付き纏ふ厭味の無いのは可い。

▲「婦人世界」曰く　いづれも美しき美文小説を集めたるものなり。

▲「女の友」曰く　なんとなく可憐な讀みもので、印刷も中々奇麗に、紙質も上等、何から何まで申分がない。

▲「繪畫研究叢誌」曰く　西の國の詩卷を見るらむ心地す。

▲「母の會雜誌」曰く　挿畫はお孃さん達が繪畫を學ぶのにも、よいお手本となります。

發兌元　東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社　◎東京堂其他女子文壇賣捌店にて取次販賣せり

河井醉茗君著　山中古洞君畫

（表紙意匠及アート紙原色密刷口繪入）

詩と美文 玉蟲

新刊

全一冊新式製本總クロース金箔、色箔入頗優雅

（正價金六拾錢、郵税六錢）

▲女子文壇愛讀者に限り

特別賣價五十錢　郵税不要

『玉むし』評判記

▲『日本』曰く。醉茗は新體詩人として名あれども亦其文章溫藉にして雋味あり和氣あり而して詩趣あり其妙多く其詩に遜らざるなり（中略）明治女子の文章を作る參考書としては舊式ならずさればとて浮薄衒飾の分子を含まず最も恰好なる文範たるに庶幾からん

▲『萬朝』曰く。女子習文の爲にとて自作より女子又は家庭を材とせるものを採取せりといふ著者の小品文は其の新體詩と共に溫優掬すべきものあり

▲『國民新聞』曰く。溫雅にして清麗なる筆致は卷中に溢れて謹厚なる著者其人を目前に見る如き心地する節も尠からず覺ゆるなり

▲『都新聞』曰く。クラシックなるありロマンチックなるあり叙情あり叙事あり神秘的なるもの教訓的なるもの神話童話寫生文日記文形はそれ〴〵異れども純潔溫雅なる氏の特色は何れの篇にも現はれ趣き洵に深し

▲『女學世界』曰く。篇中朝餐晩餐の一節並に愛子の死などいふ處を讀んでは成程と思はず卷を措いて感服しました醉茗君は誠に眞情の人である眞情を流露して文をつくる何人か感ぜざるものあらんやで彼の形容澤山な文字や細工を專一とする文章家の迚も眞似る事は出來ない處である婦人や家庭の趣味を養ふには誠に此上もない好著作である

▲『明星』曰く。醉茗氏の文は疎々として雛菊の香を嗅ぐ如く輕浮の氣なきを喜ぶ

▲『婦人世界』曰く。何れも婦人のために書いたものですから綺麗なものばかり體裁もなか〳〵凝つたものです

▲『婦女新聞』曰く。所々奇警なる觀察を寫してある自然界の何物をか解せんとする所眞に味深し

▲『新公論』曰く。近時この種の出版多しと雖、本書の如く清新なるものは罕なり駿城、濱名湖物語の如きは鏡花の小説にありさうなる結構なるも鏡花の小説よりは遙かに詩的文字に富みたり予は今日より愛讀の書一冊を加へたるを欣ぶ

▲『秀才文壇』曰く。今の女學生諸君が危險なる戀愛小説などを排して斯かる趣味あり實益ある書物に親まれなば其資する所尠からざるべし

▲『文章世界』曰く。女子座右の伴侶としてこれに過ぎたるものはあらざるべし

發兌元　東京市京橋區大鋸町十二　女子文壇社

◉大賣捌東京堂外女子文壇賣捌店にて取次販賣せり

報知新聞記者　中村木公君著

實地精查 女子遊學便覽

▲最新刊……子女を持てる父兄並に女學生諸君必讀の一大要書（此書を讀みたる人は着實に成功するを得べし）

本書概目《總ふりかな付》☞

第壹篇　女子と學問◎女子の本分○男女と本分○女子と家庭○女子敎育の目的◎女子の獨立○獨立の傾向○眞の獨立○不具の獨立◎女子の學問○學問の必要○學問の目的○不具の學問◎女子の職業○職業の種類○職業の必要○職業の撰擇

第貳篇　東京遊學案內◎女子高等敎育（四校）◎高等女學校程度（二十一校）◎音樂體操學校（五校）◎技藝學校（六校）◎女醫學校（三校）

第參篇　東京遊學の危險◎女學生と東京◎誘惑の有樣○恐るべき東京○暗殺の强迫狀○艶書の媒介は同窓會○秘密探偵的の文遣ひ○人力車でお通ひ○同情に惑はさる○華美が隋落の種○境遇に附込む誘惑◎隋落の有樣○隋落の手始め○隋落生間の交際○隋落せる甲女學生の實歷談○隋落せる乙女學生○寫眞師の話○女髮結の話○男女混合の學校○姙婦預所◎學校の撰擇○學校營業○詐僞學校○學校の口錢○學校の隋落○東京の敎員○東京と地方との學校の優劣○女學校の濫設○惡女學校の內幕○東京の惡女學校と地方の學生◎高等敎育と技藝敎育○高等敎育の現狀○技藝敎育の現狀

第四篇　職業案內◎職業撰擇の心得◎學校敎師○小學敎師○中等敎員○音樂敎師○裁縫敎師○體操敎師○保姆◎專門的職業○女醫○看護婦○產婆○官衙事務員○銀行會社事務員○寫眞師○新聞記者○速記者○料理人○女學校出身者の俸給◎內職的職業○造花○裁縫○編物○刺繡等

全一册洋裝　正價三拾錢　郵稅不要

▲目下印刷中（七月下旬發賣）此書を讀まば著者が如何に苦心精查せしかを推知すべし

發兌元　東京市京橋區大鋸町　電話本局六〇七番　女子文壇社

郵便振替貯金（口座一七一二九番）

市內特約賣捌所○東京堂、北隆館、東海堂、前川文榮閣、上田屋、良明堂

廣告料は發行部數に比較せば最廉無比（有効確實）

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○敍事文（各半紙廿四字詰三十行以内）
○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）
○短篇小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新體詩（半紙十句以内）
○和歌（半紙一首）　○新歌謠（上全）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）
○新俳句（端書又は半紙一句）
○新笑話（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）
▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事
但着色無用日本紙の薄きもの

賞與品

○論文○抒情文○敍事文○消息文○小説○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし
▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢
一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）
○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し
▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）
一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽賞狀を添へ贈呈すべし
【投稿〆切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿(同封)取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

◎四十年一月發行第三卷分より賞與法改正いたします……詳細は來る十月發行の分に於て發表すべし

【最寄書店になくば直接發行所へ総て郵送無料なり】

定價

女子文壇（毎號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一冊（大判百冊頁）	前金拾錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢
十二冊（一年分増刊共）	前金壹圓八錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢

郵税無料

定期増刊　二月十五日、五月十五日、八月十五日、十一月十五日發行

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番であります
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法此法により前金拂込には「拂込用紙」が入ります是は本社へ端書にて前以て申越下されば何枚でも郵呈す○詳細は用紙の裏面に詳しく記しあります

廣告料金

改正

特等	一等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

〆切毎月十五日也

【備考】特等場所は表紙四の面なり○壹等場所は色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込む紙面なり▲廣告面一行は五號活字廿四字詰、半頁は（一段）廿二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年六月廿八日印刷
明治三十九年七月一日發行

無比廉價 金拾錢

不許複載

（二卷第九號）

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市日本橋區呉服町六番地　北隆館
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



最廉無比
定價金拾錢
郵稅壹錢

（東京秀英舍印刷）